



松江市文化財調査報告書 第103集

文化財愛護  
シンボルマーク

# 渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書

・渋ヶ谷1号窯

・渋ヶ谷遺跡

・措松遺跡

・深田遺跡

・勝負谷遺跡

・渋ヶ谷2号窯

・渋ヶ谷古墳

2006年3月

松江市教育委員会  
財団法人 松江市教育文化振興事業団

# 渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書

・渋ヶ谷1号窯

・渋ヶ谷遺跡

・措松遺跡

・深田遺跡

・勝負谷遺跡

・渋ヶ谷2号窯

・渋ヶ谷古墳

2006年3月

松江市教育委員会  
財団法人 松江市教育文化振興事業団

## 例　　言

1. 本書は松江市教育委員会が平成2年度（渋ヶ谷古墳）、平成4年度（渋ヶ谷2号窓）に、財團法人松江市教育文化振興事業団が平成5年度（深田遺跡・勝負谷遺跡）、平成13～16年度（指松遺跡）、平成16年度（渋ヶ谷1号窓・渋ヶ谷遺跡）に実施した「渋ヶ谷遺跡群発掘調査」報告書である。
2. 本発掘調査は松江市、松江市土地開発公社からの依頼を受け、実施したものである。
3. 調査組織は下記のとおりである。

平成2年度　渋ヶ谷古墳発掘調査

依頼者　松江市都市整備部計画課  
事務局　松江市教育委員会 教育長　諏訪秀富  
社会教育課課長　杉原精訓  
文化財係係長　岡崎雄二郎  
調査者　松江市教育委員会 社会教育課文化財係  
調査担当者 主事 昌子寛光

平成4年度　渋ヶ谷遺跡発掘調査（試掘：渋ヶ谷2号窓）

依頼者　松江市都市整備部街路公園課  
事務局　松江市教育委員会 教育長　諏訪秀富  
文化財課課長　中西宏次  
文化財係係長　岡崎雄二郎  
調査者　松江市教育委員会 社会教育課文化財係  
調査担当者 主事 昌子寛光  
調査員主事 金山正樹  
嘱託員 富田茂雄  
田根裕美子  
臨時職員 坂本泰敏

平成5年度　渋ヶ谷遺跡他発掘調査（深田遺跡・勝負谷遺跡）

依頼者　松江市都市整備部街路公園課  
事務局　松江市教育委員会 教育長　諏訪秀富  
生涯学習部長　中西宏次  
文化財課課長　村松菜  
文化財係係長　岡崎雄二郎  
実施者　財團法人松江市教育文化振興事業団  
理事長　吉岡俊雄  
事務局長　日高稔夫  
調査係長　中尾秀信

調査者	調査員 濑古 謙子
	臨時職員 坂本 泰敏
平成13～15年度 淀ヶ谷遺跡群発掘調査（指松遺跡）	
依頼者	松江市土地開発公社
事務局	松江市教育委員会 教育長 山本 弘正 副教育長 友森 勉（～平成14年3月31日） ＊ 中島 秀夫（平成14年4月1日～） 文化財課課長 岡崎 雄二郎 調査係係長 飯塚 康行
実施者	財團法人松江市教育文化振興事業団 理事長 松浦 正敬 専務理事 米田 嘉雄（～平成14年3月31日） 田中 寿美夫（平成15年4月1日～） 常務理事 福井 勝美（～平成14年3月31日） 事務局長 古岡 正夫（～平成15年3月31日） (埋蔵文化財課 課長兼務) 長野 正夫（平成16年4月1日～）
調査者	調査係長 濑古 謙子（平成13年・14年度） 調査員 石川 崇（平成15年度） 調査補助員 廣江 光洋 野津 里佳（平成14年10月1日～） 福田 晴（平成14年10月1日～ 平成15年1月） 金坂 有史（平成15年10月1日～）
平成16年度	淀ヶ谷遺跡群発掘調査（淀ヶ谷1号窯・淀ヶ谷遺跡・指松遺跡）
依頼者	松江市土地開発公社
事務局	松江市教育委員会 教育長 山本 弘正 副教育長 清水 伸夫 文化財課課長 岡崎 雄二郎 調査係係長 飯塚 康行
実施者	財團法人松江市教育文化振興事業団 理事長 松浦 正敬 専務理事 田中 寿美夫 事務局長 長野 正夫 (埋蔵文化財課 課長兼務) 調査係長 濑古 謙子

調査者 調査員 江川幸子(渋ヶ谷1号窯・渋ヶ谷遺跡)  
石川 崇(渋ヶ谷遺跡・揩松遺跡)  
調査補助員 陶山 隆(渋ヶ谷1号窯・渋ヶ谷遺跡)  
金坂有史(渋ヶ谷遺跡・揩松遺跡)

平成17年度 渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書作成

依頼者 松江市土地開発公社

事務局 松江市教育委員会 教育長 福島律子  
副教育長 清水伸夫  
文化財課課長 岡崎雄二郎  
文化財係係長 飯塚康行

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団  
理事長 松浦正敬  
専務理事長 野正夫  
事務局長 松浦克司

(埋蔵文化財課 課長兼務)  
調査係長 潤古諒子

調査者 調査員 石川 崇  
調査補助員 秦 愛子

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

(敬称略)

近江俊秀(奈良県立橿原考古学研究所)、中村唯史(島根県立三瓶自然館)、木本雅康(長崎外国語大学)、勝部昭(前島根県教育庁教育次長)、椿真治(島根県埋蔵文化財調査センター)、丹羽野裕(同)、東森晋(同)

5. 本書の作成には下記の者が携わった。

(遺物実測) 江川・石川・秦・廣江・野津里佳・野津哲志

(浮遊物) 江川・秦

(拓本) 坂本玲子・松尾澄美・飯野正子

6. 本書に掲載した写真は石川が撮影した。

7. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

8. 分析はそれぞれ放射性炭素年代測定・樹種同定一パレオ・ラボ、地磁気年代一法吉データに依頼して、原稿をいただいた。

9. 本書の執筆は江川、石川、秦が行い、編集は石川が各自と協議の上行った。

## 目 次

I 調査に至る経緯と経過及びその概略.....	1
II 周辺の歴史的環境.....	3
III 調査報告.....	11
1. 渋ヶ谷1号窯.....	11
2. 渋ヶ谷遺跡.....	21
3. 挂松遺跡.....	98
4. 勝負谷遺跡.....	138
5. 深田遺跡.....	154
6. 渋ヶ谷2号窯.....	160
7. 渋ヶ谷古墳.....	164
8. まとめ.....	168
9. 分析.....	174
・渋ヶ谷1号窯出土の炭化材の放射性炭素年代測定	
・渋ヶ谷1号窯構築材の樹種同定	
・渋ヶ谷1号窯の地磁気年代	
IV 写真図版	



第1図 島根県地図

## 挿図目次

- 第1図 島根県地図  
第2図 渋ヶ谷遺跡群位置図  
第3図 各遺跡位置図及びトレンチ設定期  
第4図 周辺の遺跡位置図  
**渋ヶ谷遺跡全体**  
第5図 溝を前地形測量図  
第6図 潛在系発掘及び地形測量図  
第7図 92年度試掘時に出土器実測図  
**渋ヶ谷1号窯**  
第8図 1号窯平面図及び縦方向上層断面図  
第9図 縦方向上層断面図  
第10図 構造材残存状況  
第11図 構造材実測図  
第12図 天井窓穴実測図  
第13図 窓口付近出土土器実測図  
第14図 SX-01半断面、遺物出土状況及び縦方向土層断面図  
第15図 SX-01出土器実測図（1）  
第16図 SX-01出土器実測図（2）  
**渋ヶ谷遺跡**  
第17図 SB-01実測図  
第18図 SB-01内溝に遺物出土状況実測図  
第19図 SB-01出土土器実測図  
第20図 SB-02実測図  
第21図 SB-03実測図  
第22図 SK-01及び周辺遺構実測図  
第23図 SB-04、加工段1実測図  
第24図 SD-01周辺遺構実測図  
第25図 加工段2・3・SD-02・03実測図  
第26図 加工段2に伴う上層（SK 03・04）  
第27図 SX-02、SD-04実測図  
第28図 SB-05実測図  
第29図 SB-05出土土器実測図  
第30図 SI-01実測図  
第31図 SI-01遺物出土状況実測図  
第32図 SI-01出土上器実測図（1）  
第33図 SI-01出土土器実測図（2）  
第34図 SI-01出土上器実測図（3）  
第35図 SI-01周辺出土土器実測図  
第36図 SI-05実測図及び遺物出土状況実測図  
第37図 SD-05出土土器実測図  
第38図 SI-07実測図及び遺物出土状況実測図  
第39図 SX-03、SD-08・09実測図  
第40図 SX-03周辺出土土器実測図  
第41図 SK-05実測図  
第42図 SK-06実測図  
第43図 SK-07実測図  
第44図 SI-12・13、SK-08実測図  
第45図 SD-10・11実測図  
第46図 SI-11上層断面図  
第47図 SD-11内遺物出土状況実測図（1）  
第48図 SD-11内遺物出土状況実測図（2）  
第49図 SD-11出土土器実測図  
第50図 SD-11～13周辺出土土器実測図（1）  
第51図 SD-11～13周辺出土土器実測図（2）  
第52図 加工段4実測図  
第53図 SK-09実測図  
第54図 加工段5出土土器実測図  
第55図 加工段5出土土器実測図  
第56図 SB-06実測図  
第57図 SX-04実測図  
第58図 SB-06出土土器実測図（1）  
第59図 SB-06出土土器実測図（2）  
第60図 SX-05実測図  
第61図 SX-05出土土器実測図  
第62図 SB-07・08実測図  
第63図 SK-10実測図  
第64図 SB-07・08周辺上層部出土土器実測図（1）  
第65図 SB-07・08周辺上層部出土土器実測図（2）  
第66図 SK-11実測図  
第67図 SK-11出土土器実測図  
第68図 SK-12実測図  
第69図 SK-12出土土器実測図  
第70図 SH-09実測図  
第71図 谷状地形出土土器実測図（1）  
第72図 谷状地形出土土器実測図（2）  
第73図 谷状地形出土土器実測図（3）  
第74図 谷状地形出土石器実測図（1）  
第75図 谷状地形出土石器実測図（2）  
第76図 丘陵頂部平坦面遺構配置図  
第77図 SK-13実測図  
第78図 SK-15実測図  
第79図 丘陵頂部平坦面出土土器実測図  
第80図 SB-10、加工段7実測図  
第81図 SI-02実測図  
第82図 SF-02出土石器実測図  
第83図 SB-11実測図  
第84図 SB-11出土石器実測図  
第85図 SB-11出土土器実測図  
第86図 SD-16～18実測図  
第87図 SD-16出土上器実測図  
第88図 西側緩斜面出土石器実測図  
第89図 西側緩斜面出土土器実測図（1）  
第90図 西側緩斜面出土土器実測図（2）  
第91図 SB-12・13実測図  
第92図 SB-12実測図  
第93図 SB-12柱穴上層断面図  
第94図 SB-12柱穴エレベーション図  
第95図 SB-13実測図  
第96図 SB-13柱穴上層断面図  
第97図 SB-13柱穴エレベーション図  
第98図 SB-12出土土器実測図（1）  
第99図 SB-12出土上器実測図（2）  
第100図 SB-13出土土器実測図  
第101図 SB-13出土土器実測図  
第102図 SB-13ビット内出土土器実測図  
第103図 SI-19・20、SX-05・06実測図  
第104図 平坦面出土土器実測図  
第105図 加工段8実測図  
第106図 加工段9実測図  
第107図 SK-16実測図

- 第108回 小丘陵東側斜面トレンチ上層断面図  
 第109回 小丘陵東側斜面旧表土内出土土器実測図  
 第110回 小丘陵東側斜面出土土器実測図（1）  
 第111回 小丘陵東側斜面出土土器実測図（2）  
 第112回 小丘陵東側斜面出土土器実測図（3）  
 第113回 小丘陵北側斜面出土土器実測図  
 第114回 SD-21実測図  
 第115回 SD-21出土土器実測図  
 第116回 加工段10実測図  
 第117回 SX-14実測図  
 第118回 SK-17、周辺ピット群実測図  
 第119回 北平坦面出土石器実測図  
 第120回 北平坦面出土鉄製品実測図  
 第121回 北平坦面出土土器実測図  
 第122回 道跡内出土地不規石器実測図  
**椎松遺跡**  
 第123回 調査前地形測量図及びトレンチ設定図  
 第124回 調査成果図及び地形測量図  
 第125回 SD-01実測図  
 第126回 SX-01実測図  
 第127回 SD-02・03実測図  
 第128回 SD-04～06実測図  
 第129回 SD-04尾辺斜面出土土器実測図（1）  
 第130回 SD-04尾辺斜面出土土器実測図（2）  
 第131回 SD-04尾辺斜面出土遺物実測図（3）  
 第132回 SD-04尾辺斜面出土土器実測図（4）  
 第133回 SD-04尾辺斜面山土石器実測図  
 第134回 SD-07～11実測図  
 第135回 SD-09付近出土土器実測図  
 第136回 SK-01実測図  
 第137回 SK-02実測図  
 第138回 SD-12実測図  
 第139回 SD-12出土土器実測図  
 第140回 SD-13実測図  
 第141回 SD-14実測図  
 第142回 SD-14出土土器実測図  
 第143回 SD-15実測図  
 第144回 SD-16・17実測図  
 第145回 SD-18・19実測図  
 第146回 SD-20・21実測図  
 第147回 SD-21下層、SD-21'実測図  
 第148回 SD-20出土土器実測図  
 第149回 SD-22実測図  
 第150回 SD-23実測図  
 第151回 SD-24実測図  
 第152回 SD-24出土土器実測図  
 第153回 占道1出土土器実測図  
 第154回 SD-25実測図  
 第155回 SK-03実測図  
 第156回 SK-04実測図  
 第157回 SK-05実測図  
 第158回 SD-26J・津美測図（左）  
 第159回 SD-26J・津美測図（右）  
 第160回 SD-26トレンチ平面図  
 第161回 SD-26出土土器実測図  
 第162回 SD-26周辺出土土器実測図（1）  
 第163回 SD-26周辺出土遺物実測図（2）

- 第164回 SD-06実測図  
 第165回 SK-07実測図  
 第166回 SK-08実測図  
 第167回 SK-09実測図  
 第168回 SD-27実測図  
 第169回 SD-28実測図  
 第170回 SD-29実測図  
 第171回 SD-30実測図  
 第172回 SD-31・32実測図  
 第173回 SX-02実測図  
 第174回 SD-33実測図  
 第175回 SD-34・35、SX-03実測図  
 第176回 SD-36実測図  
 第177回 南側斜面出土土器実測図  
 第178回 出土鉄貨幣影図  
**勝負谷遺跡**  
 第179回 調査前地形測量図及び成果図  
 第180回 SD-01出土土器実測図  
 第181回 積石塚、さいの神実測図  
 第182回 積石塚出土状況実測図  
 第183回 積石塚、SD-01土層断面図  
 第184回 積石塚出土土器実測図  
 第185回 さいの神実測図  
 第186回 さいの神、SD-01土層断面図  
 第187回 さいの神出土遺物実測図（1）  
 第188回 さいの神出土遺物実測図（2）  
 第189回 さいの神出土遺物実測図（3）  
 第190回 さいの神出土遺物実測図（4）  
 第191回 さいの神出土銅貨幣影図（1）  
 第192回 さいの神出土銅貨幣影図（2）  
 第193回 さいの神出土銅貨幣影図（3）  
 第194回 さいの神出土石碑拓影図  
 第195回 道標外出土銅貨幣影図  
**深田遺跡**  
 第196回 調査前地形測量図及び成果図  
 第197回 空状遺構実測図  
 第198回 SD-02～04実測図  
 第199回 SD-02出土土器実測図  
 第200回 SD-05・円形土壙列実測図  
 第201回 円形土壙列出土土器実測図  
 第202回 SD-06実測図  
 第203回 SD-06出土土器実測図  
 第204回 小ピット群実測図  
**波ヶ谷2号窯**  
 第205回 2号窯灰原遺物出土地点及び上層断面図  
 第206回 灰原出土土器実測図  
**波ヶ谷古墳**  
 第207回 調査前地形測量図  
 第208回 調査成果図  
 第209回 1号墳実測図  
 第210回 SK-01実測図  
 第211回 波ヶ谷古墳出土土器実測図  
 第212回 波ヶ谷古墳出土土器実測図  
**まとめ**  
 第213回 松本古墳群出土道路遺構図  
 第214回 松本古墳群・涉ヶ谷遺跡群・山雲田序跡位置図

# 図版目次

## 浅ヶ谷遺跡

図版1 調査前全景（西側から）	SB-11壁側被熱状況
調査前全景（南東側から）	SB-11完掘状況（上）
図版2 1号窓検出状況	SB-11遺物出土状況（左）
被熱帯検出状況	SD-16～18（右から）
炭化構造物検出状況	SX-05
還元体除去後の炭化構造物	SK-10完掘状況
1号窓横上層断面	SK-02完掘状況
坑窓検出及び断割状況	SK-17完掘状況
図版3 1号窓完掘状況	SK-17炭焼帯状況
断割後全景	SB-12遺物出土状況①
図版4 SX-01遺物出土状況	SB-12遺物出土状況②
SX-01（左）、1号窓（右）完掘状況	図版24 SB-12完掘状況
図版5 SB-01内溝中遺物出土状況	SB-13完掘状況
SB-01完掘状況	図版25 SD-21完掘状況
図版6 SB-02完掘状況	加工段10完掘状況
SB-03完掘状況	SB-14完掘状況
図版7 加工段1遺物出土状況	図版26 遺跡全貌①
SB-04、加工段1完掘状況	遺跡全貌②
図版8 加工段2・SK-02・03完掘状況	指松遺跡
SB-05完掘状況	図版27 調査前全貌（西側から）
図版9 SI-01遺物出土状況	遺跡全貌①
SI-01完掘状況	図版28 SD-01完掘状況
図版10 SD-05遺物出土状況①	SX-01完掘状況
SD-05遺物出土状況②	SD-02完掘状況
SD-05完掘状況	SD-04（i）・05（左）完掘状況
図版11 SK-03完掘状況	SD-07～10完掘状況
SK-04完掘状況	SD-11完掘状況
SK-05完掘状況	図版29 SK-01完掘状況
SX-02内溝完掘状況	SK-02完掘状況
SK-06完掘状況	SD-12完掘状況
SK-07完掘状況	SD-13完掘状況
図版12 SD-11完掘状況	SD-14内石核出土状況
SD-12完掘状況	SD-14内ピット内石核出土状況
SD-13完掘状況	図版30 SD-15上層石核出土状況①（西側から）
図版13 加工段4完掘状況	SD-15上層石核出土状況②（東側から）
加工段5完掘状況	SD-15下層石核出土状況①（西側から）
SD-06完掘状況	SD-15下層石核出土状況②（東側から）
図版14 SX-05遺物出土状況①	SD-15上層完掘状況
SX-05遺物出土状況②	SD-15下層完掘状況
SX-05完掘状況	図版31 SD-16土層断面①
図版15 SH-07（裏）・08（手前）完掘状況	SD-16土層断面②
SB-09完掘状況	SD-16完掘状況
図版16 SK-11遺物出土状況	SD-18・19土層断面
SK-11完掘状況	SD-18・19完掘状況①
図版17 SK-12遺物出土状況①	SD-18・19完掘状況②
SK-12遺物出土状況②	図版32 SD-20内ピット上層断面
SK-12完掘状況	SD-20内ピット内石核出土状況
図版18 SD-14・15完掘状況	SD-20完掘状況
SX-06完掘状況	図版33 SD-21下層心核出土状況
図版19 加工段6完掘状況	SD-21上層完掘状況
SH-10、加工段7（右側）完掘状況	SD-21下層完掘状況
図版20 SI-02内土壤内遺物出土状況	図版34 SD-22・23（中央やや右下）完掘状況
SI-02内土壤内完掘状況	SD-22完掘状況
SI-02完掘状況	図版35 SD-24（右）・25（左）完掘状況
図版21 SB-11炭化物検出状況	SD-24完掘状況
	図版36 SK-03完掘状況

	SK-04炭被出状況	渋ヶ谷古墳
	SK-04完掘状況	國版57 突起前全景
	SK-05石上状況	西側周濠上層断面
	SK-05石被出状況	國版58 墳丘全景
	SK-05完掘状況	墳丘完掘状況
国版37	SD-26下層完掘状況①	國版59 墳丘上ビット群完掘状況
	SD-26下層完掘状況②	主体部完掘状況
国版38	SD-26上層断面①	國版60 SK-01遺物出土状況①
	SD-26上層断面②	SK-01遺物出土状況②
	SD-26土層断面③	SK-01完掘状況
国版39	SK-06完掘状況	(渋ヶ谷1号窯・渋ヶ谷遺跡)
	SK-07完掘状況	国版61 92年度試掘時出土土器
	SK-08完掘状況	国版62 1号窯天井塗
	SK-09完掘状況	焚口付近出土器
国版40	SD-27完掘状況	国版63 SX-01出土土器(1)
	SD-28完掘状況	国版64 SX-01出土土器(2)
国版41	SD-29完掘状況	国版65 SX-01出土土器(3)
国版42	SX-02上層完掘状況①(東側から)	SB-01出土土器
	SX-02下層完掘状況①(東側から)	SB-02出土土器
	SD-35完掘状況	国版66 SI-01出土土器(1)
	SX-03完掘状況	国版67 SI-01出土土器(2)
国版43	SD-33北側完掘状況	SI-01周辺七石器
	SD-33南側完掘状況	国版68 SD-05出土土器
	SD-33全景完掘状況	SX-03周辺出土土器
国版44	SD-34完掘状況	SD-11N出土土器
	SD-36完掘状況	SD-11~13周辺出土土器
	遺跡西側完掘状況③	国版69 加工段5出土土器
		SB-06出土土器
		SX-05出土土器
勝負谷遺跡	積石塚洞前全景	国版70 SB-07~08周辺上層部出土土器
	積石塚上層断面①	国版71 SK-11出土土器
	積石塚上層断面②	SK-12B出土土器
国版46	さいの神検出状況①	国版72 谷地形出土土器(1)
	さいの神検出状況②	国版73 谷地形出土土器(2)
	さいの神検出状況③	谷地形出土石器
国版47	SD-01上層断面	国版74 丘陵頂部平坦面出土土器
	SD-01完掘状況	SI-02出土石器
国版48	遺跡完掘状況①(西側から)	SB-11出土石器
	遺跡完掘状況②(東側から)	SB-11出土土器
		SB-16出土土器
深田遺跡	国版49 兩面削全景	国版75 西梯級斜面出土土器
	古墳撲定地調査前全景	西梯級斜面出土石器
国版50	SD-01完掘状況	国版76 SB-12出土土器
	室状通槽完掘状況	国版77 SB-13出土土器
国版51	窓状通槽上層断面	平坦面ビット内出土土器
	SD-02完掘状況	平坦面出土土器
	SD-02 槽中ビット完掘状況	小丘陵東側斜面調査土内出土土器
国版52	SD-02全景完掘状況	国版78 小丘陵東側斜面出土土器(1)
	SD-04完掘状況	国版79 小丘陵東側斜面出土土器(2)
国版53	SD-05・円形土範列完掘状況	国版80 小丘陵北側斜面出土土器
	小ビット群完掘状況	SD-21出土土器
国版54	遺跡完掘状況①(北西側から)	国版81 北平坦西山出土土器
	遺跡完掘状況②(東側から)	北平坦西山土器製品
		北平坦西山土器
渋ヶ谷2号窯	国版55 トレンチ内灰原検出状況①	出土不明石器
	トレンチ内灰原検出状況②	
国版56	遺物出土状況①	
	遺物出土状況②	
	遺物出土状況③	
	遺物出土状況④	

### (指松遺跡)

- 図版82 SD-04周辺斜面出土土器（1）  
図版83 SD-04周辺斜面出土遺物（2）  
SD-04周辺斜面出土石器  
SD-09付近出土土器  
SD-12出土土器  
SD-14出土土器  
図版84 SD-20出土土器  
SD-24出土土器  
古道1出土土器  
SD-26出土土器  
図版85 SD-26付近出土土器  
SD-26付近出土遺物  
南側斜面出土石器

### (勝負谷遺跡)

- SD-01出土土器  
図版86 さいの神出土土器（1）  
図版87 さいの神出土土器（2）  
図版88 さいの神出土土製品  
図版89 さいの神出土土錢貨（1）  
図版90 さいの神出土土錢貨（2）  
図版91 道標外出土錢貨

### (深田遺跡)

- SD-02出土土器  
SD-05出土土器  
SD-06出土土器

### (渋ヶ谷2号窯)

- 図版92 灰原出土土器

### (渋ヶ谷古墳)

- 図版93 渋ヶ谷古墳出土土器  
渋ヶ谷古墳出土鐵器



第2図 渋ヶ谷遺跡群位置図

## I. 調査に至る経緯と経過及びその概略

昭和63年度に松江市教育委員会施設課が松江市立湖南中学校の大規模化に伴い、(仮称) 南新設中学校新設事業の候補地として本地域を上げた。周知の遺跡はなかったが、周辺の遺跡や予定地内の地形的条件から、遺跡の存在の可能性が高いと思われた。施設課から依頼を受けた松江市教育委員会社会教育課が、遺跡の有無と範囲確認のための調査を行った。北西—南東方向に伸びる3つの丘陵を、便宜的に東側から「第1丘陵」「第2丘陵」「第3丘陵」と呼称し、それぞれにトレンチ調査を行った。調査の結果、多量の遺物と遺構が確認され、この結果を踏まえて協議が行われた。調査の広範囲・長期化が予想されることから、緊急を要するこの事業は予定地を変更して計画されることとなった。

平成2年度には松江市都市整備部計画課が本地域で公園計画を策定し、事前の発掘調査を社会教育課に依頼した。協議の結果、範囲が広大で全域の調査に3ヶ年を要することから、2年度は「渋ヶ谷古墳」の全面調査と「渋ヶ谷遺跡」の範囲確認調査を行った。調査の結果「渋ヶ谷古墳」は6世紀前半の方墳、「渋ヶ谷遺跡」からスラッガ片を伴う土壙が検出され、より詳細な調査が必要となった。

平成4年度に新たに県立水泳プール等の移転計画で緊急調査が必要となり、過去に調査されていない所を中心に行った。その結果第1丘陵は、全域で遺物・遺構が確認され、第2丘陵は新たに西側斜



第3図 各遺跡位置図及びトレンチ設定図

面の突端部近くで6世紀初頭～前半の須恵器窯跡「渋ヶ谷2号窯」が確認された。

平成5年度は第3丘陵の東側一「深田遺跡」、西側一「勝負谷遺跡」の本調査が行われ、その結果分布調査での古墳推定地に古墳はなく、代わりに道路遺構と思われる溝状遺構が検出された。

平成13～15年度は第3丘陵の「指松遺跡」の調査が行われ、その結果谷筋や斜面から、やはり溝状遺構が検出された。20数本確認でき、その他大規模なもの、底面に土壌を伴うものなど様々であった。

平成16年度は「渋ヶ谷遺跡」の全面調査と「指松遺跡」の追跡調査を行い、6世紀前半頃の須恵器窯跡「渋ヶ谷1号窯」や6世紀前半～7世紀初頭の遺構が検出された。「指松遺跡」は調査区を西側に拡大し、「波板凹凸面」と呼ばれる道路遺構の一種である、溝状遺構も検出された。

平成17年度はこれらの各遺跡についての発掘調査報告書の作成を行った。

## 調査の経過

### (仮称) 南新設中学校新設予定地内第1次(試掘) 調査

S63. 4. 25～ 第1丘陵—4世紀後半～7世紀の遺物が出土。窯体状塊を伴う生産跡遺構を検出。

S63. 6. 22 第2丘陵—須恵器・土師器が出土。丘陵頂部に古墳を確認。

第3丘陵—尾根に並行する岩盤加工の溝状遺構を検出。

### 公園計画に伴う事前の発掘調査(第2丘陵)

H2. 8. 6～ 渋ヶ谷古墳—供獻。6世紀初頭の須恵器・刀子1・鐵鏃10点。(1辺8mの方墳)

H2. 11. 27 渋ヶ谷遺跡—8世紀後半～末の須恵器・鐵淬と思われるスラッガ片を伴う土壌を検出。

### 県立プール移転等に伴う事前の発掘調査

第1丘陵—西側斜面を調査。6世紀後半代中心の遺物が出土。遺構も確認。

H4. 5. 18～ 第2丘陵—東側斜面を調査。6世紀後半代中心の遺物が出土。遺構も確認。

H4. 9. 2 西側斜面を調査。6世紀初頭～前半の須恵器窯跡、焚口部と灰原の一部を調査。

第3丘陵—尾根に並行する岩盤加工の溝状遺構を検出。

### 公園計画に伴う事前の発掘調査(本調査: 第3丘陵)

H5. 10. 7～ 公園計画に伴う事前の発掘調査(本調査: 第3丘陵)

H5. 12. 8 深田遺跡 奈良～平安時代の須恵器を作う溝状遺構や円形土壙列、“こ炭焼”土壙を検出。

H5. 12. 9～ 勝負谷遺跡 “さいの神”積石塚や溝状遺構を検出。近乍まで使用か。溝状遺構は同様に

H6. 2. 14 道路遺構と考えられる。

### 公園計画に伴う事前の発掘調査(本調査: 第3丘陵)

H13. 10. 3～ 指松遺跡—北側斜面にトレンチを設定し調査: 大規模な溝状遺構(“大溝”)や多くの溝状遺構を検出。近世道も確認。

H14. 2. 13 H14. 4. 9～ 指松遺跡—前年度より更に東側にトレンチを設定: 溝状遺構を検出。遺構に伴わないが、斜面から須恵器・土師器・石鏃・瓦鑄製のさじが出土。

H14. 6. 21 H15. 4. 10～ 指松遺跡—調査区北側、溜池近くの古墳推定地を調査: 主体部や盛土など古墳に関係する遺構は検出されず。ピットを数個検出。

H15. 5. 30 H15. 10. 15～ 指松遺跡—小丘陵の北側斜面のトレンチ調査: 遺構・遺物なし。

H16. 3. 26 兵庫部・谷部の全面調査: 20数本の溝状遺構を検出。大半が道路遺構。“こ炭焼”の土壙なども検出。

### 公園計画に伴う事前の発掘調査(本調査: 第2丘陵)

H16. 4. 20～ 渋ヶ谷1号窯—全面調査: 6世紀前半の須恵器窯跡。

H16. 10. 13 渋ヶ谷遺跡 全面調査: 6世紀前半～7世紀初頭の住居址や加工段を確認。

H16. 10. 21～ 公園計画に伴う事前の発掘調査(本調査: 第3丘陵)

H17. 3. 18 指松遺跡—全面調査: 大溝の追跡調査。“波板凹凸面”を持つ遺構の検出。

## II 周辺の歴史的環境

渋ヶ谷遺跡群は、松江市上乃木に所在する総合運動公園隣接地内の3つの低丘陵上に位置している。本遺跡群周辺には発掘調査により、数多くの遺跡が発見されている。

《旧石器・縄文時代》 この時期の遺跡は、弥生・古墳時代と比較すると少数であるが、廻田遺跡（2）から玉製ナイフ形石器、福富Ⅰ遺跡（3）からは黒曜石製尖頭器が出土している。

《弥生時代》 欠田遺跡（4）は前～後期の遺跡で、大型蛤刃石斧、大型石包丁、石鎌などの石器類、その他土器も多数出土している。田和山遺跡（8）は前期末～中期後半まで営まれた環濠遺跡で、三重の環濠を有し、その山頂部には掘立柱建物跡1棟、掘立柱柱跡1棟、構列と思われる柱穴が多数検出された。環濠内からは様々な遺物が出土しており、つぶて石、壺・甕・高坏などの弥生土器、土師器、環状石斧、銅劍型石劍片、サスカイト・黒曜石製の多数の石鎌である。当時の状況を考察していく上で、乃木・乃白地域のみならず、更に広範囲での弥生時代を知る極めて重要な遺跡である。友川遺跡（9）は墳丘墓6基、土壙墓26基、四隅突出型墳丘墓1基が検出された中～後期の遺跡である。土壙墓より勾玉・管下などの玉類、石鎌（サスカイト・黒曜石製）が出土している。墳丘墓と土壙墓の墓域は明確に分けられており、墳丘を持つことの意味を示していると言える。四隅突出型墳丘墓はその土壙墓の上に築造されていた。雲垣遺跡（7）も中～後期の遺跡で、川下駄を主とした木製品が多数出土しており、また特筆すべき遺物として木鎌が出土している。後期の遺跡では、共に竪穴式住居跡を検出している福富Ⅰ遺跡（3）、廻田遺跡（2）がある。廻田遺跡では住居拡張の痕跡が見られる。

《古墳時代》 袋尻遺跡群（16）の4、7、8号墳は前期古墳であり、その内4、8号墳からは合わせ口土器棺が出土している。大角山古墳群（18）は方墳・円墳7基からなる古墳群で、その内でも1号墳は全長61.4mを測り、造り出しを有する前方後円墳である。墳裾より円筒埴輪の破片が出土している。二名留古墳群（29）は中期後葉～後期中葉の占墳群で、方墳2基、円墳1基からなる。いずれも来待石製の箱式石棺である。川和山1号墳（32）は全長20mの前方後円墳で、後期のものである。内部主体は横穴式石室で、直刀、短刀、鉤鉈、鐵鎌、ガラス小玉、須恵器などが出土している。松本古墳群（20）からは後期の横穴墓が3基検出されている。他に、丘陵を切り通して築造した道路遺構が検出され、この道路遺構は全長38mを測る。「出雲国風土記」に記載のある古代山陰道「正西北」の推定ルートを通っており、文献を検証する上での好資料と思われる。乃木・乃白地域では横穴式石室の分布は比較的少なく、代わりに横穴墓が多く見られる。奥山遺跡（12）、袋尻横穴墓群（16）、松本横穴墓群（21）、弥陀原横穴墓群（23）、背沢谷横穴墓群（33）などがあり、いずれも6世紀後半～7世紀初頭に築造された。大角山遺跡（17）は竪穴式住居跡5棟が検出された中期の集落跡である。この5棟より、碧玉製勾玉、管玉製木製品、瑪瑙製勾玉木製品、内磨砥石などが出土している。玉生窯遺跡は他にも存在し、乃白下作遺跡（11）、福富Ⅱ遺跡（15）がそれに当たる。

《歴史時代》 松本修法塚跡（25）は方墳状土壙と五輪塔を検出し、中世末～近世初頭の遺跡と考え

られる。布志名才の神道跡（27）では、才の神造構と思われる石積基壇直下より、道路状造構が検出している。これは本遺跡内の勝負谷遺跡でも同様の状況を確認している。また本遺跡群では拵造跡をはじめ、道路状造構と思われる遺構を検出している。前述した松本古墳群（20）を加え、3遺跡に共通する、古代山陰道推定ルートと道路状造構、そして才の神造構との関連性も考慮すべきである。

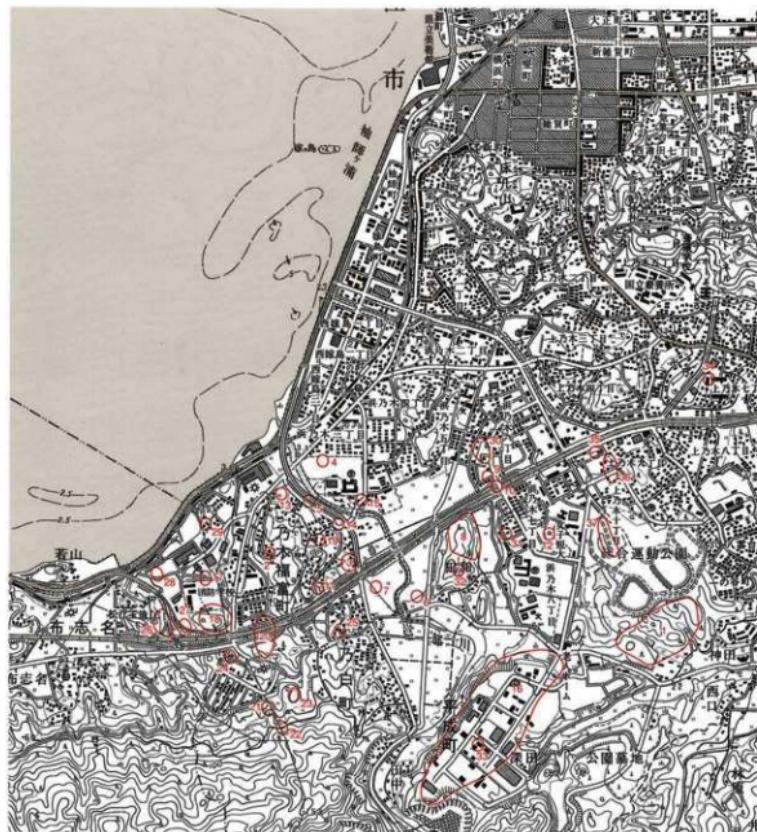
（秦 愛子）

#### 【参考文献】

- 加藤義成校注「出雲國風土記」昭光社（1965）  
 『松江市文化財調査報告書第46集 松江市遺跡地図』松江市教育委員会（1991）  
 『向荒神古墳発掘調査報告書』松江市教育委員会（1992）  
 『普沢谷横穴群』財団法人松江市教育文化振興事業団（1994）  
 『二名留遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団（1995）  
 『松本古墳群 大角山古墳群』建設者松江国造工事事業所 美根県教育委員会（1997）  
 『布志名才谷』遺跡 布志名才谷II遺跡 布志名才の神道跡 建設者松江国造工事事業所 美根県教育委員会（1997）  
 『袋丘遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団（1998）  
 『秀坂遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団（2001）  
 『奥山古墳群発掘調査報告書』松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団（2001）  
 『増補改訂 美根縣遺跡地図』(出雲・隱岐編) 美根縣教育委員会（2003）  
 『埋蔵文化財課年報』財団法人松江市教育文化振興事業団（2005）

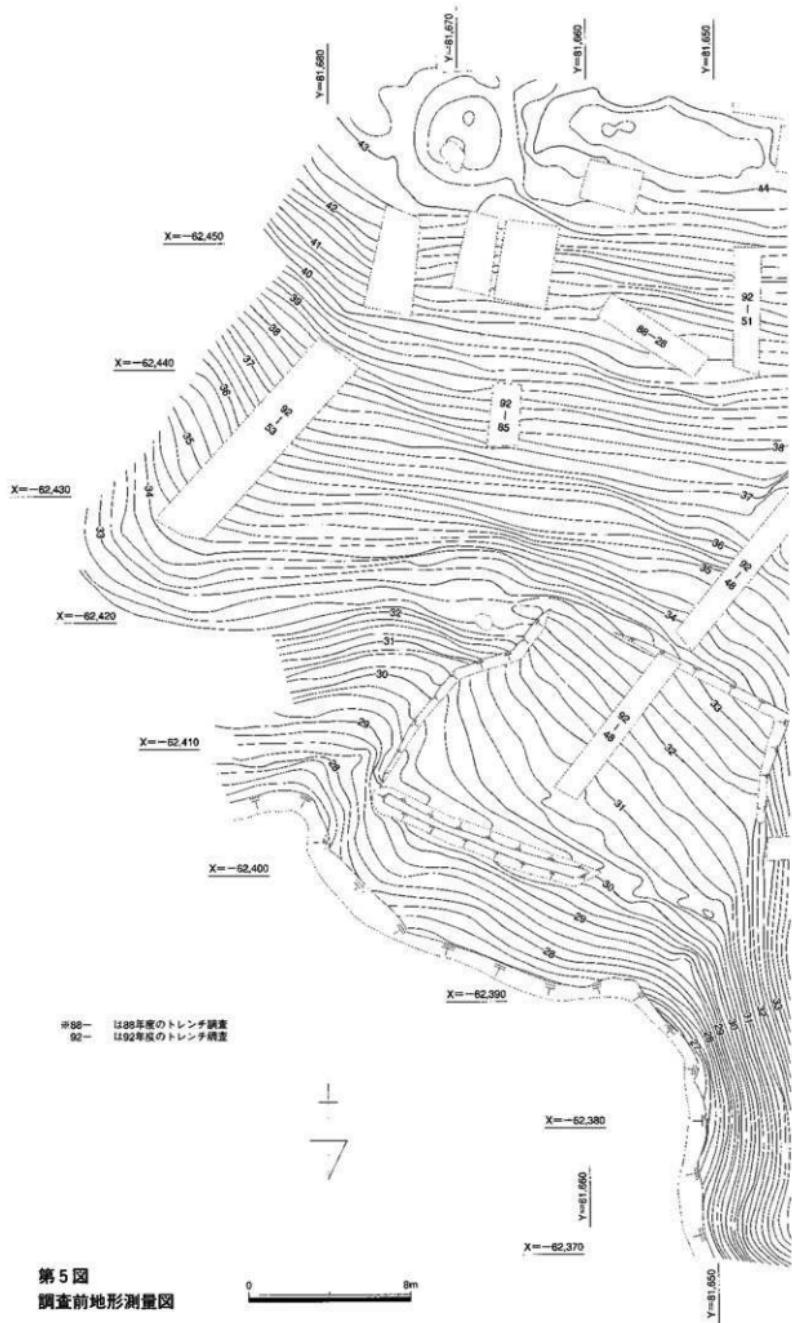
番号	名 称	所 在 地	種 別	概 要
1	洗ヶ谷遺跡群	松江市上乃木	住居跡、窓跡地	掘立柱建物跡、竪穴式住居跡、須恵器窓跡、漆状遺物、土器型、須恵器
2	瀬田遺跡	松江市乃木福富町	住居跡	大型式住居跡1棟、先牛十器、ナイフ形石器
3	福富I遺跡	松江市乃木福富町	集落跡	竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、土壌、瓦作工芸跡、先牛十器、尖頭器
4	久穴遺跡	松江市乃木福富町	散布地	先牛十器、土器器、石臼、瓦製石器、石球
5	門田遺跡	松江市乃木福富町	散布地	焼灰遺跡、土壤、弥生土器、分流域型土器
6	葉隠前遺跡	松江市乃木町	散布地	先牛十器、土器器、須恵器
7	雲城遺跡	松江市乃木町	散布地	木桶、山下取、弥生土器
8	田和山遺跡	松江市乃木町	櫻塚遺跡	二重櫻塚、掘立柱建物跡、櫻列、住居跡、弥生土器、陶製石器、焼成石器、石器
9	友田遺跡	松江市乃木町	塗堀	堆丘墓6基、十脚26基、西隅出土埴輪立幕1基、弥生土器、菅玉、勾玉、石器
10	南友田遺跡	松江市乃木町	散布地	弥生土器、石包丁、砾石、須恵器
11	乃白工作遺跡	松江市乃木町	工作跡	砾石
12	奥山遺跡	松江市浜乃木	横穴墓	横穴式3穴、太刀、鉄釘
13	神立遺跡	松江市乃木福富町	散布地	弥生土器
14	蓮華湖遺跡	松江市乃木福富町	散布地	石臼、叫き石
15	福富II遺跡	松江市乃木福富町	作跡地跡	石斧
16	袋丘遺跡群	松江市大蔵町	集落跡、古墳地	古墳5基、横穴墓3穴、古墓、掘立柱建物跡、先牛十器、土器器、須恵器
17	大角山遺跡	松江市乃木福富町	集落跡	堅穴式住居跡2棟、瓦作工芸跡3棟、土壤、土器製品、土師器
18	大角山古墳群	松江市乃木福富町	古墳	前方後円墳1基、円墳6基、方墳、埴輪、土師器
19	彌形古墳群	松江市乃木福富町	古墳	古墳3基、横穴式古墳
20	松本古墳群	松江市乃木福富町	横穴墓、道路遺跡	横穴墓、道路遺跡、横穴墓2穴、土壤、須恵器、土師器
21	松本横穴群	松江市乃木町	横穴墓	横穴墓10穴
22	界屋口古墳	松江市乃木町	古墳	横穴式石室
23	弥陀原横穴群	松江市乃木町	横穴墓	横穴式3穴、須恵器、土師器、石棺、小刀、铁刀、人骨
24	すべりだこ古墳群	松江市乃木町	古墳	石碑式建物跡、土器3基
25	松本修法塚跡	松江市乃木町	修法塚跡	修法塚、五輪塔
26	布志名才谷II遺跡	松江市玉湯町	古墳地	古墳4基、須恵器8基
27	布志名才の神道跡	松江市玉湯町	石積墓地	石積墓地、古錢、漆状遺物
28	布志名才谷I遺跡	松江市玉湯町	古墳、墓跡	古墳4基、須恵器2基
29	二名留山古墳群	松江市乃木福富町	古墳	方墳2基、円墳1基、須恵器、刀子、短刀、子持勾玉、Uカ、土師器、須恵器
30	向庵古墳群	松江市上乃木	古墳	方墳2基、円墳2基、須恵器、弥生土器、鉄劍、鉄劍
31	後友田古墳	松江市上乃木	古墳	円墳1基、須恵器、土師器
32	田和山I古墳	松江市乃木町	古墳	前方後円墳、横穴式古墳、鐵製品、須恵器、ガラス小玉
33	普沢谷横穴群	松江市乃木町	横穴	横穴墓12穴、須恵器、土師器、鐵製品、人骨
34	向瓦古墳	松江市上乃木	古墳	方墳、須恵器、古錢、和鏡
35	乃木I子塚古墳	松江市上乃木	古墳	前方後方墳、須恵器
36	長谷古墳群	松江市上乃木	古墳	方墳18基、鐵刀、鐵劍、勾玉、ガラス小玉、土師器、須恵器
37	奥山古墳群	松江市上乃木	古墳	古墳5基、須恵器、瓦制、鐵劍、刀子

表1 洗ヶ谷遺跡群と周辺の遺跡一覧表

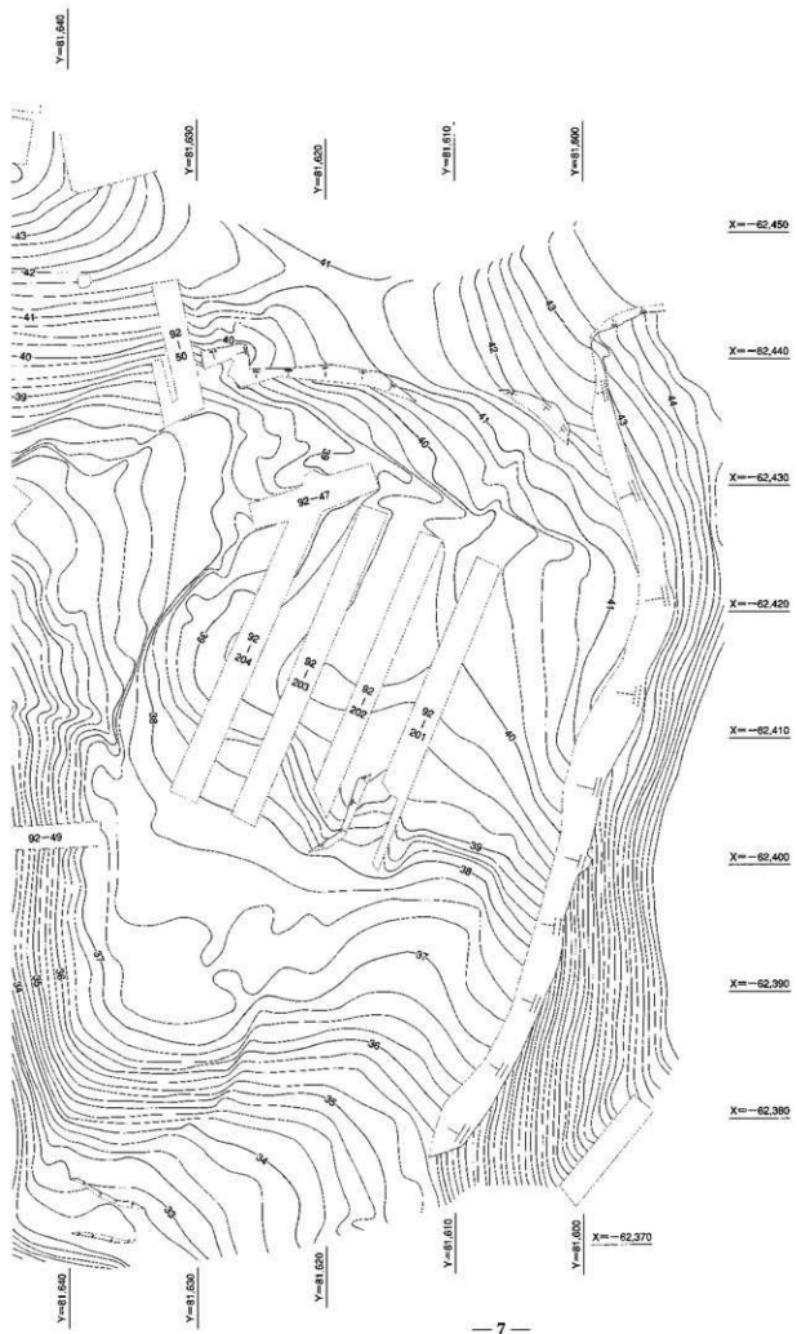


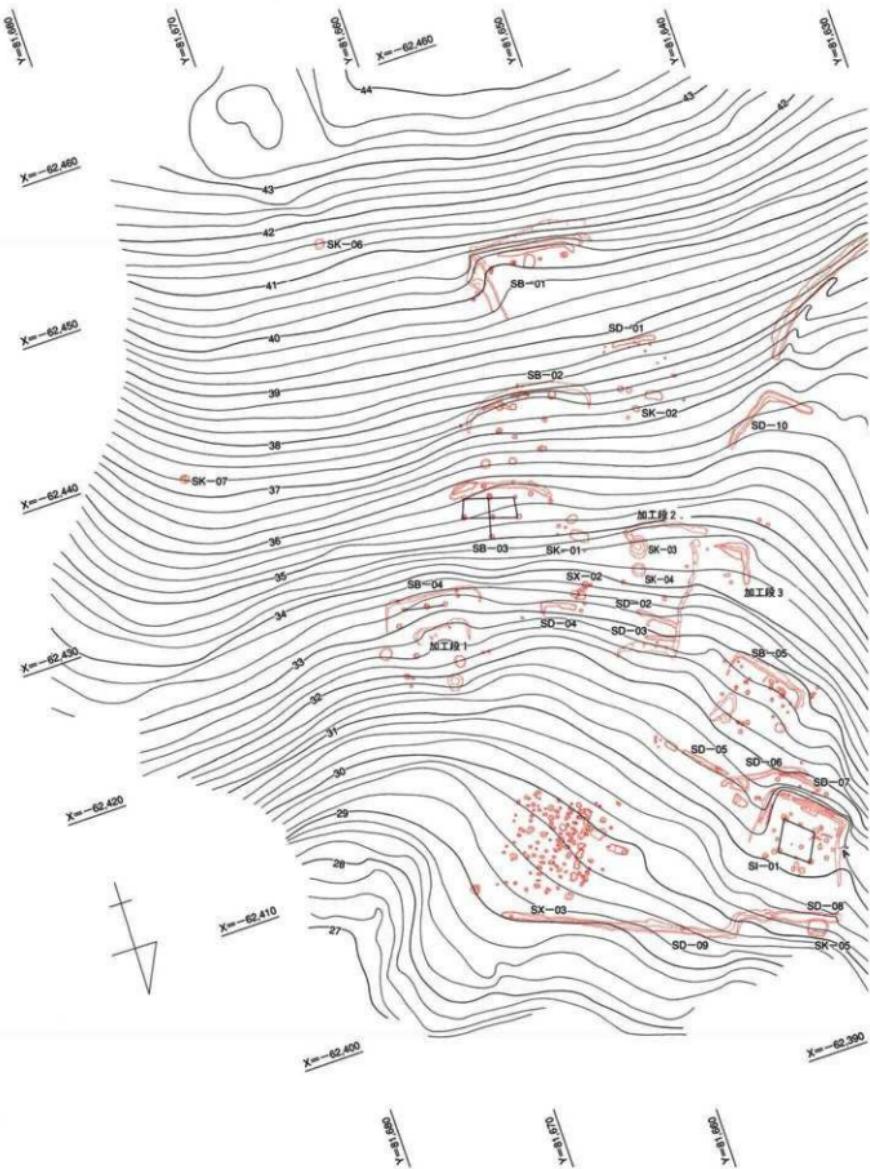
第4図 周辺の遺跡位置図

- |          |           |             |            |
|----------|-----------|-------------|------------|
| 1 洪ヶ谷遺跡群 | 11 乃白玉作遺跡 | 21 松本横穴群    | 31 後友田古墳   |
| 2 週田遺跡   | 12 奥山遺跡   | 22 岩屋口古墳    | 32 田和山1号墳  |
| 3 福富Ⅰ遺跡  | 13 神立遺跡   | 23 弥陀原横穴群   | 33 菅沢谷横穴群  |
| 4 欠田遺跡   | 14 蓮華垣遺跡  | 24 すべりざこ古墳群 | 34 向荒神古墳   |
| 5 門田遺跡   | 15 福富Ⅱ遺跡  | 25 松本修法壇跡   | 35 乃木二子塚古墳 |
| 6 薬師前遺跡  | 16 袋尻遺跡群  | 26 布志名大谷Ⅰ遺跡 | 36 長砂古墳群   |
| 7 雲垣遺跡   | 17 大角山遺跡  | 27 布志名才の神遺跡 | 37 奥山古墳群   |
| 8 田和山遺跡  | 18 大角山古墳群 | 28 布志名大谷Ⅱ遺跡 |            |
| 9 友田遺跡   | 19 屋形古墳群  | 29 二名留古墳群   |            |
| 10 南友田遺跡 | 20 松本古墳群  | 30 向原古墳群    |            |

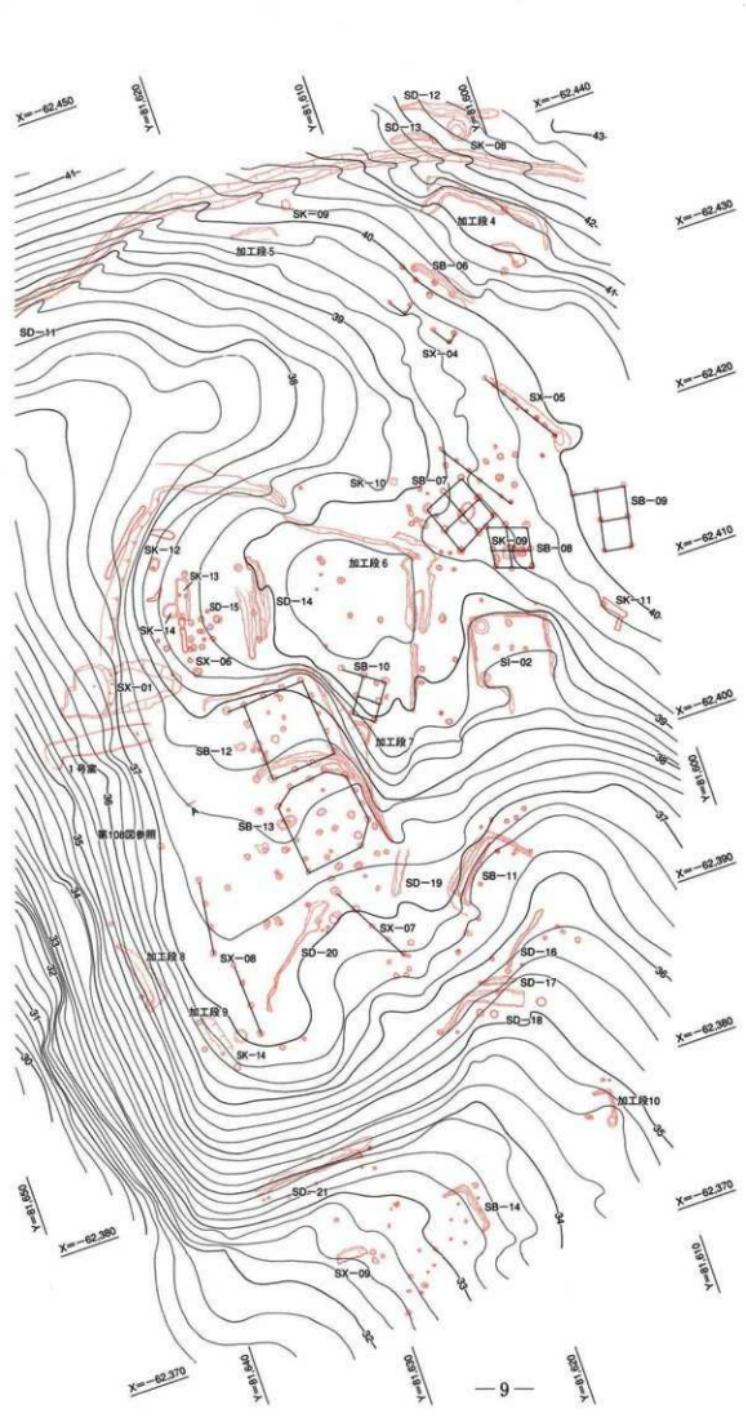


**第5図**  
**調査前地形測量図**





第6図  
調査成果図及び地形測量図



渋ヶ谷遺跡・1号窯は、第2丘陵のほぼ中央部の東側斜面に位置する。第2丘陵では昭和63年度(88年度)、平成4年度(92年度)の範囲確認調査において、突端部付近の東側斜面に「渋ヶ谷遺跡」、頂上部に「渋ヶ谷古墳」、西側斜面に「渋ヶ谷2号窯」が確認されていた。渋ヶ谷遺跡はトレンチ調査の段階で、6世紀後半頃の遺物とそれに伴う住居址と思われる遺構の一部などが検出された。2号窯は焚口と灰原の一部が調査され、6世紀前半の須恵器窯と確認された。渋ヶ谷古墳は平成2年度(90年度)に本調査が行われ、1辺が8mの方墳で、主体部には鉄器のみが埋葬され、直上に6世紀初頭の須恵器の壊蓋が供献されたものであった。

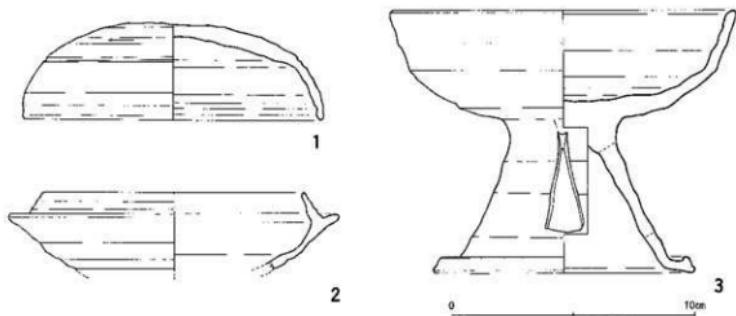
渋ヶ谷遺跡1号窯が位置する地形は、南北に伸びる小丘陵と北向き斜面からなる。1号窯は小丘陵の東側斜面にあり、北向き斜面の南側、頂部に渋ヶ谷古墳が位置する。本遺跡は東西約100×南北約90m、面積9,000m<sup>2</sup>の範囲で、約6ヶ月間にわたって調査を行った。北側は第1丘陵の間を走る谷になつておらず、近所の方のお話によると、北向き斜面の下側のやや平坦な所で畑やたばこなどを作っていたことや、谷は田んぼで絶えず西の上方から水が流れているというお話を伺った。

小丘陵は南北50×東西35m、比高差約2mを測る平坦面と西側に緩斜面を持つ。北向き斜面は南北50×東西40m、比高差14mを測り、一部には緩斜面があるが、おそらくここが畑であったと思われる。過去の調査では、小丘陵の平坦面や北向き斜面に10数本のトレンチが設定されていた。

第7図は過去の調査(平成4年度:92年度)において出土した遺物の一部である。

1は92-49トレンチから出土した須恵器の壊蓋で、天井部に簡略化された回転ヘラ割りが見られる。口径は12.0cm、器高は3.95cmを測り、6世紀後半のものと考えられる。2は92-49トレンチから出土した須恵器の壊身口縁部片である。92-49トレンチは小丘陵の東側斜面に設定されたもので、後述する東側斜面からも同様の遺物が出土している。3は92-202トレンチから出土した須恵器の高壊で、脚部には1段三角形の2方向透かしが施され、6世紀後半のものと思われる。

92-202トレンチは小丘陵の平坦面に設定されたトレンチの一つで、これ以外にも多くの土師器・須恵器が出土している。本書では小丘陵東側斜面から検出された調査の過程や内容から、1号窯・SX-01について分けて書いてある。



第7図 92年度試掘時出土土器実測図

### III 調査報告

#### 1. 渋ヶ谷1号窯

##### 〈立地〉

西区平坦面から東区谷部にかけての傾斜地に位置している。標高は35.50m～37.70mを測る。

西区平坦面は後世に削平された人工平坦面で、元来は小高い山が存在していたと思われる。窯が構築・操業された時期は、その小山が存在していた時期であり、焼成部の上方は西区の平坦面削平時に削られて原形をとどめていなかった。そして窯の上方は、西区平坦面削平時に出土した大量の土砂の一部で覆われていた。

窯の北方は西から東に開く狭い谷地形になっているが、少なくとも4～8月の調査中に谷から風が吹き上がってくるような状況ではなかった。平常時は風当たりが弱い場所である。

##### 〈層序〉

上記した通り、窯は古墳時代後期の遺物片を多量に含む盛土層の下に位置し、一部は盛土層上面から掘り込まれた土壤で失われていた。また、窯の地下部は基本的に地山面を掘り下げて整形していくが、一部については堆積土上面からの掘り込みが見られた。

##### 〈遺構〉

半地下式窯窯で（第8図）、主軸は等高線にほぼ直交し、その方向はN-75°-Wであった。検出できた窯の規模は、全長7.3m、床面最大幅1.6m、床面傾斜角度は14°5'～16°を測り、平面形は焚口を除けば細長いU字状をしていた。床面は滑らかで段状の加工は見られなかった。

燃焼部上方付近を除いては残存状況が非常に良好な窯で、床面からほぼ垂直に立ち上がる壁面は最高約0.5mが残存し、その中には崩落した天井部がいっぱいに埋まっていた（第9図）。

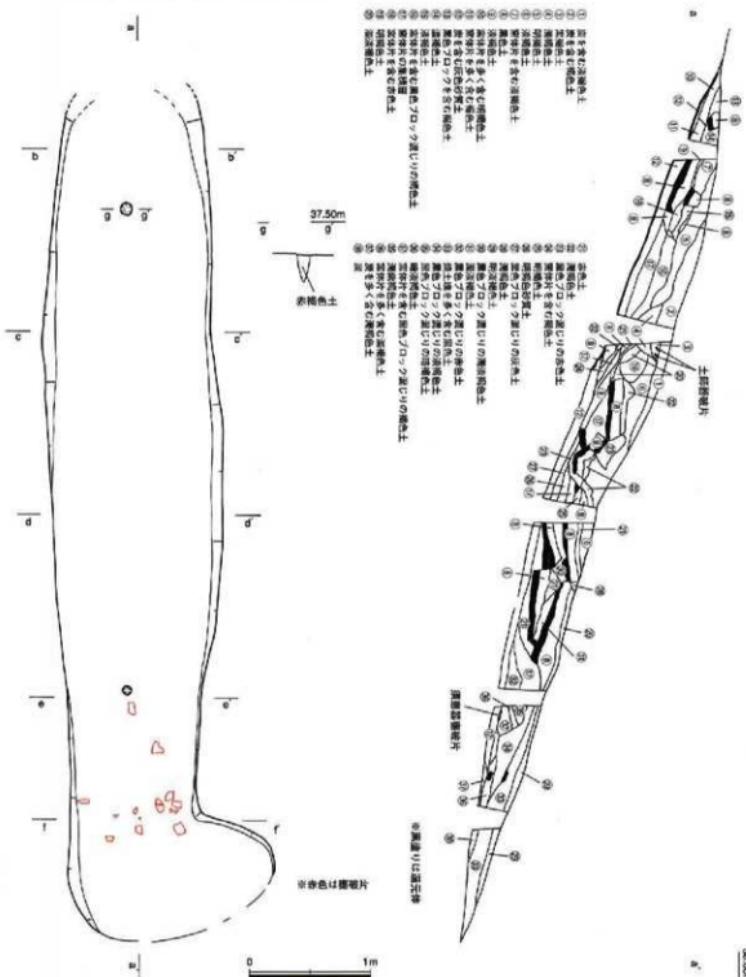
部分別に見ていくと、焚口は赤い酸化上がりに約60cm張り出した平面楕円形を呈し、主軸方向の長さ1.0m、最大幅1.6mを測る。燃焼部は、焼成部との境界は明瞭ではないが、やや横幅が増す焚口から長軸方向1.0mほどの間と思われる。幅は1.1m前後を測る。残存する焼成部は、長軸方向5.3m、最大幅は約1.3mを測る。

窯を構築する際の遺構としては、焚口端部から2.05mの主軸上に直径8cmのピット、そこから奥に3.95mの主軸上に直径10cm、深さ25cmのピットを検出した。ピットの断面は底部の先端がいずれも逆円錐形を呈しており、先端を杭状に加工した丸材を打ち込んで柱とした状況が窺われた。この主軸上の柱2本に縦板を渡して左右からのアーチ状の材の支え、窯の骨組みを作ったのであろう。アーチ状の材の痕跡は、一部の壁面で検出することができた（第10図）。被熱帶は還元部の外側に黒色土、赤色土と変化していたが、黒色土をよく観察すると、細かい有機質の単位が非常に高い密度で違っている状況が確認され、この中の一部に炭化した丸材（第11図）を見出すことができるのである。丸材の直径は2～5cmが多く、一部板材のような痕跡も見られた。還元部を取り除いてみると、炭化した丸材は先端が削られており、壁面に対して17°の傾斜で地山に刺し込まれていた。丸材の1点を樹種

同定したところブナ科アカガシ亜属であった。

ところで、炭化材および炭化材として遺存できなかった有機質の単位すべてが天井のアーチを構成する材であったとすると、互いに隙間なく密着するようにアーチ材が組まれていた様子が復元される。窯の中に落ち込んだ天井窓体(第12図)を観察すると、還元体表面の断面がまさに連続アーチ状となつており、窯構築材の骨組みをより明確にすることができた。

最後に断ち割りを行ったが、窯壁の修復の痕跡は見出せなかつた。



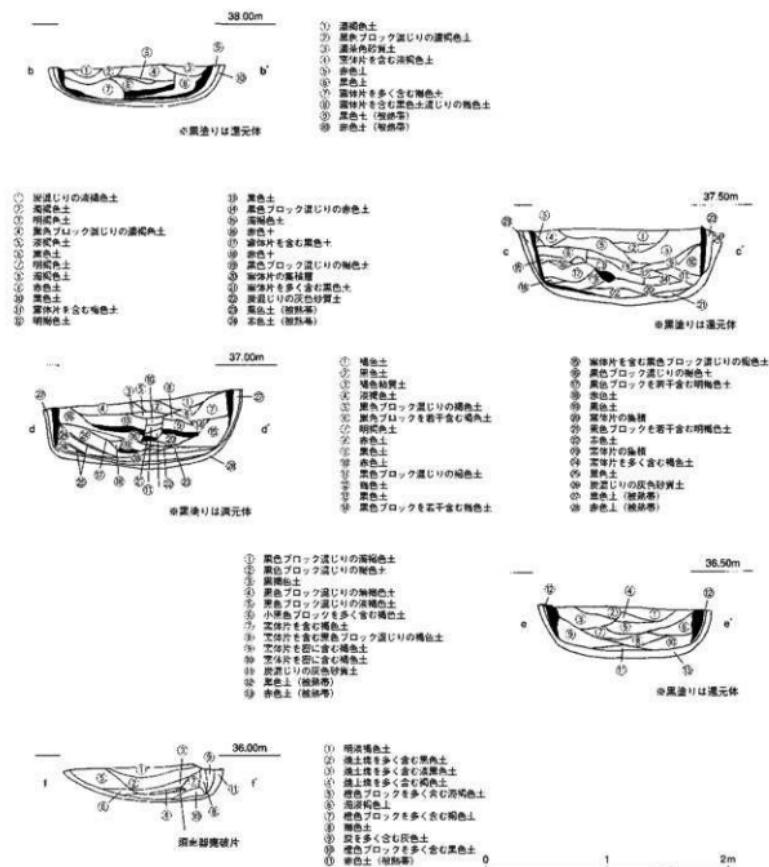
第8図 1号窯平面図及び縦方向土層断面図

## 《遺物》

燃焼部付近から、壺の破片がややまとまって出土した（第13図）。焼き締まった破片と生焼けの破片の2種類があったが、いずれもその数は多くなかった。焼成部から1点のみ壺破片が出土した。

## 《付属施設》

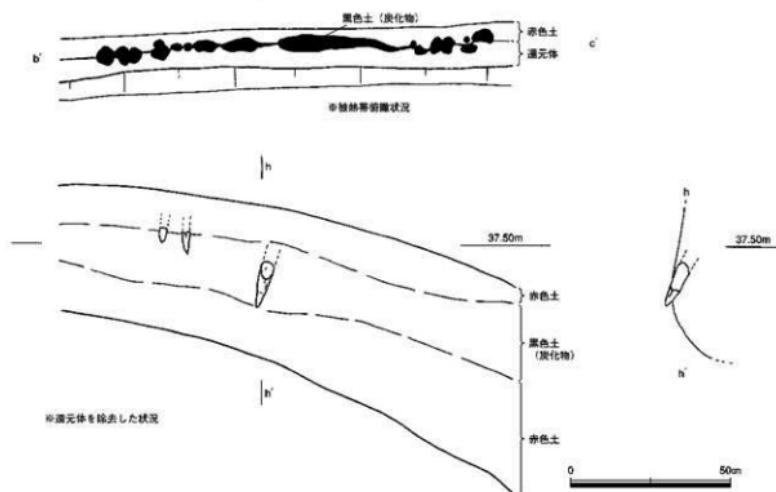
積極的根拠はないが、この窯の1m南方で窯と主軸を平行させているSX-01（第14図）が付属施設である可能性が高い。SX-01は平面プランを検出した時に位置関係や形状から2号窯かと疑ったが、やや形状がいびつで熱を受けた痕跡は見られなかった。しかし、掘り込まれた床面の傾斜角度は1号窯とほぼ合致することから、当初はここに窯地下部を掘り始めたが、何らかの理由により途中で



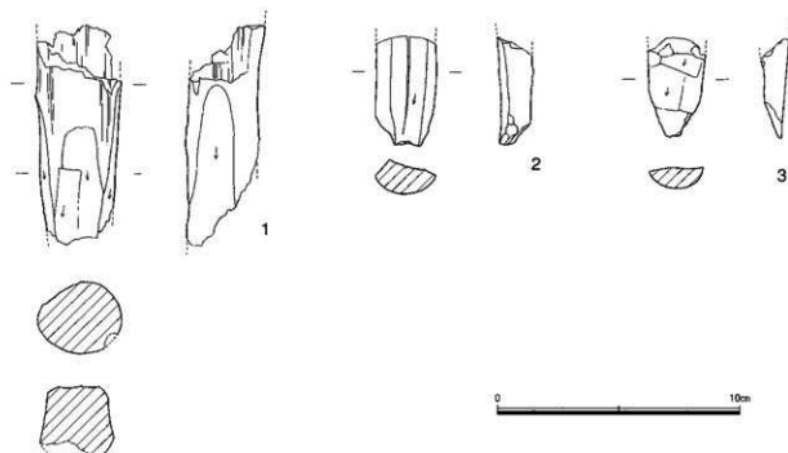
第9図 横方向土層断面図

放置されたものではないだろうか。下方がやや広がり平坦面となっているのは、1号窯操業時に薪置き場等の施設として利用されていたことが大いに考えられる。SX-01の埋土中からは、床面からやや浮いたレベルで、6世紀前半～半ば頃の須恵器片や土師器片が多量に出土した（第15・16図）。大きく歪んだ總破片（第15・18図）の出土は1号窯との関連性を感じさせるものである。

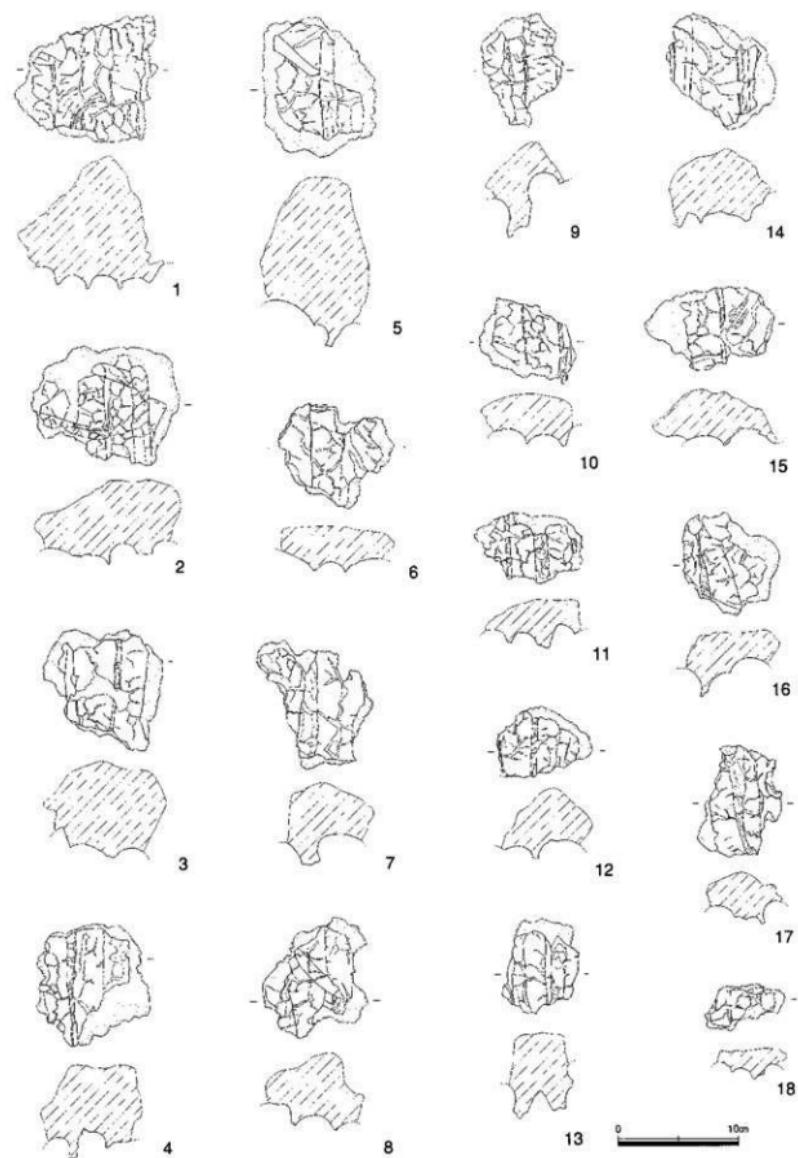
その他、窯の上屋に関連するような遺構は全く検出できなかった。



第10図 構築材残存状況



第11図 構築材実測図



第12図 天井窯体実測図

### 〈灰原〉

検出されなかった。後世の盛土を取り除くと、焚き口から一筋に下がる薄い炭の痕跡は検出したが、焼き損じ等の土器片は伴っていなかった。この窯窓で操業が行われた回数は少なかったと思われる。

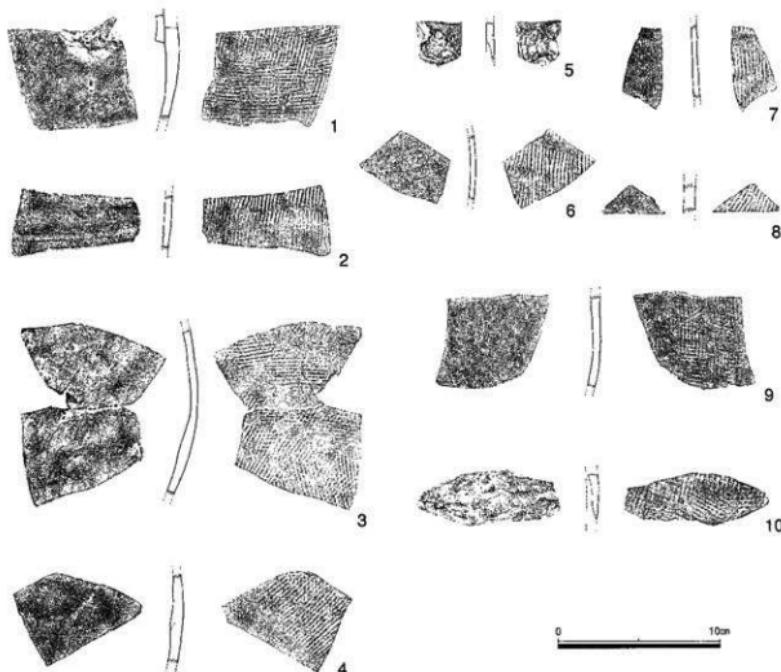
### 〈時期〉

窓内から出土した須恵器の壺破片は、裏面の當て具痕がナデ消された比較的古いタイプのものであった。しかし、最も年代の指標となる蓋坏類が出土していないため、考古学的に詳細な時期考査をすることができなかった。

そこで、C14年代測定と熱残留磁気年代測定の、2種類の科学的手法を用いた年代測定を実施することにした。その結果、C14年代測定では窯構築材を試料として分析を依頼したところAD480~540年、熱残留磁気年代測定では、床面から42試料を採って分析を依頼したところAD515±20年という数値を得た。いずれも6世紀初頭を中心とする年代で、窓内から出土した壺片の年代とのくい違いはみられなかった。

### 〈小結〉

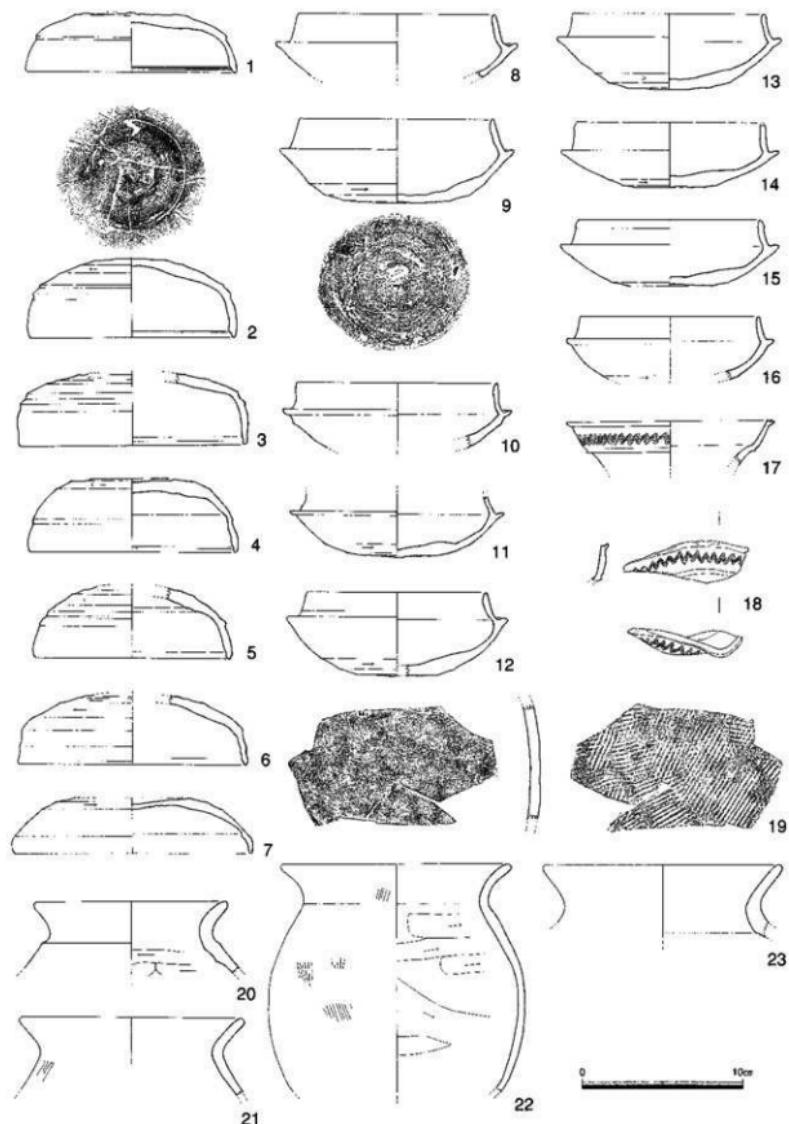
渋ヶ谷1号窯は比較的残存状況が良好な半地下式窯窓であった。この窓は内外共にほとんど遺物を



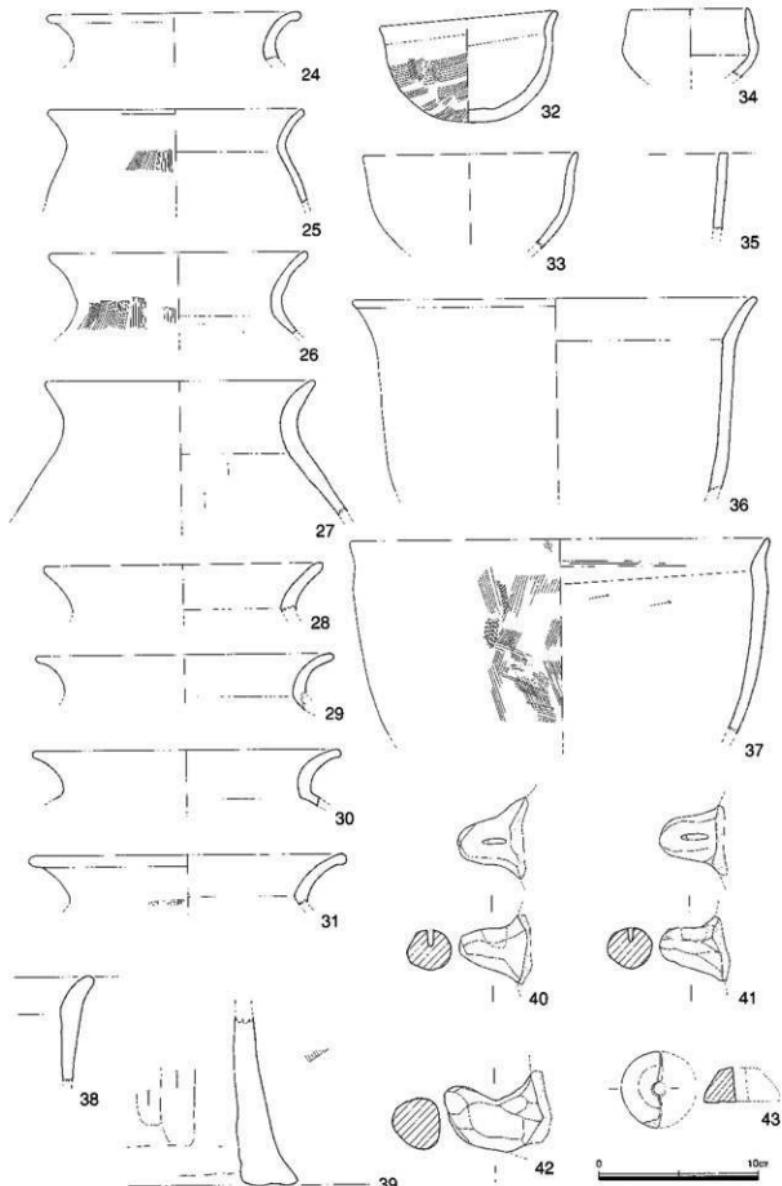
第13図 焚口付近出土土器実測図



第14図 SX-01 平面図、遺物出土状況及び縦方向土層断面図



第15図 SX-01出土土器実測図(1)



第16図 SX-01 出土土器実測図 (2)

伴わなかったため、構築・操業時期は科学的分析に頼るしかなく、その結果は6世紀初頭と判明した。灰原が検出できなかったのは、広い調査区内で焼き損じ等の須恵器がほとんど出土しなかったことと、窯壁の修復痕がなかったことから、窯の稼動回数が少なかったことが考えられる。窯に伴う須恵器は甕の破片しか出土せず、窯形態と須恵器編年を結びつけることができなかつたことは何とも残念なことである。

しかし、窖窯の構築状況を知る上では絶好の窯であった。窯体内ピットを検出したほか炭化構築材の一部が遺存し、構築材の痕跡が天井窯体に明瞭に残されていた。

遺構から窯の構築過程を復元すると、まず窖窯の床面傾斜に近い傾斜地を選定し、窯の形状に合わせて地下部を掘る。次に、窯の中軸線上に直径8~10cmの先端杭状の柱を、約4m間隔で2本打ち込んでその上に縦板を渡して主軸とする。そして、丸材や板材などの先端に杭状または切り落とし加工を施し、窯左右の地山肩部に刺し込んでアーチ状にして主軸に渡す。場所によっては床面にも刺し込んでいる。刺し込む間隔は互いが密着する程の間隔で、隙間を設けようとした形跡は見られない。その後、外貼粘土・内貼粘土を施し（内部天井には施さない）乾燥させ、保護土を盛って空焚きするといったところであろうか。

この窯の構築状況の中で特徴的なことは、左右に渡る構築材の密度が非常に高いということであろう。堅固な骨組みを作ることにより、天井の重い粘土に耐えうる構造を目指したものと思われる。このような類例は今のところ見つかっていない<sup>(1)</sup>が、それは須恵器窯の調査例が少ないためと思われるので、今後の調査に注視していきたい。

渋ヶ谷1号窯は、大井地区に須恵器窯が集中する以前に大庭町で操業された、数少ない須恵器窯の1つである。以前の試掘調査で、同丘陵の端部付近で5世紀末の須恵器窯跡が発見されており、この丘陵にはほぼ同時期に少なくとも2基の窯が構築・操業されていたようである。

（江川 幸子）

注(1) 望月精二氏のご教示による。

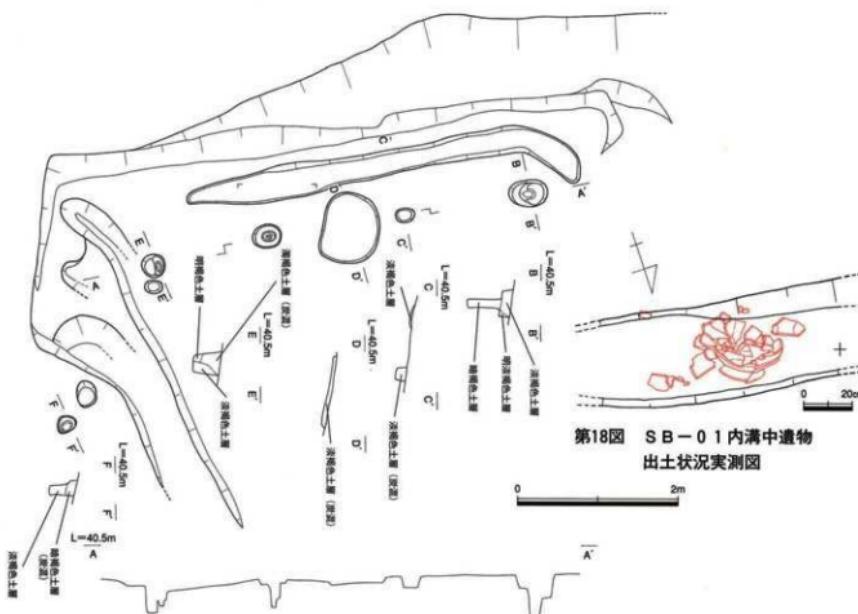
## 2. 渋ヶ谷遺跡

本遺跡は北向き斜面と南北に伸びる小丘陵、それに伴う斜面（急斜面もある）に大きく分けられる。まず北向き斜面は、東側にある比高差14mの起伏の少ない斜面と、その斜面と小丘陵の間にある谷状地形部分（以下“谷部”という）に分けられる。東側の斜面は、非常に風化しやすいシルト質の地山で、土質はもろく、遺構の遺存状況は決して良くなかったが、調査の結果、掘立柱建物跡4棟、加工段状造構2、溝状造構4条、土壙4基、不明遺構2を確認した。

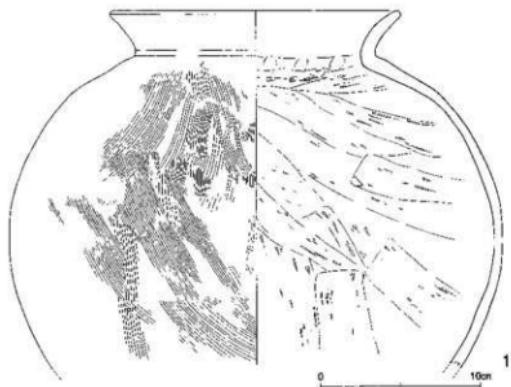
谷部は比較的緩やかな斜面で、土砂や水が集まり地形になっている。また前述したように畑として使用されていた所は平坦な形状をなす。この谷部からは掘立柱建物跡1棟、竪穴式住居跡1棟、溝状造構3条、土壙1基、不明遺構1が確認された。

### ○SB-01（第17図、図版5）

北向き斜面の中では最も高所で、南東側から検出された掘立柱建物跡である。斜面を □ 状に約8mにわたって掘削・加工し、その時に生じた掘削土を反対側に盛って平坦面を広くしたと考えられる。地形の等高線標高41mラインに沿うように作られたこの造構は、幅8.4m、奥行き6.1m、壁の高さは



第17図 SB-01 実測図



第19図 SB-01出土土器実測図

13~101cmを測り、南側の壁際より18cm北側の位置から、長さ4.88m、幅は上端30~44cm、下端22~35cm、深さ0.5~9cmを測る側溝が掘られていた。形状は側壁に並行するように走り、西端で北西方に向にやや向きを変えている。東側にも同様に側溝らしきものがあるが、全体を検出するには至らなかった。南東隅にその痕跡の一部を留めているが、消失してしまったかどうかは不明である。

柱穴の桁行側は3間を数え、ピット間の距離は東から150cm・

170cm・155cmを測り、ピットは径24~36cm、深さは13~52cmを測る。ほぼ等間隔に直線に並んで検出された。中には柱跡を思わせるようなピットもあり、側壁一側溝一柱穴のラインがほぼ並行になることなどから、掘立柱建物跡と判断した。D-D'の土壤状の遺構は、浅いため土壤ではなく、自然の堆みに炭混じりの淡褐色土が入り込んだと思われる。

残念ながら梁桁側の柱穴は検出できなかった。柱穴より北へは床面が徐々に下がっている。盛土部分が崩落した際に柱穴も消失してしまった可能性が考えられる。

南側側溝の東側から、土師器の甕が1個体出土した(第18・19図 図版65)。底部はないものの約2/3程度残存している。これ以外にも土師器や須恵器が出土しているが、いずれも細片で國化には至らなかった。須恵器の細片の特徴から6世紀前半頃の遺構と考えられる。

#### 土師器：甕(第19-1図、図版65)

側溝から出土したもので、口縁～下胴部にかけて残存する。口径は18.2cm、残存高22.3cmを測る。口縁部はやや外反気味に開き、端部はわずかに先細る。肩部は大きく張り出し、胴部へと続球状を呈する。口縁部外面はナデ、胴部外面はハケ口、内面はヘラ削りで調整されている。焼成は良好で内外面共に暗橙色を呈する。

#### ○SB-02(第20図、図版6)

SB-01の北側下方約9mの地点から検出された掘立柱建物跡で、01と同様に、等高線標高38mラインに沿って、斜面を掘削・加工して作られた遺構である。SB-02は、地山に沿って約8mの緩い弧を描くように造成され、壁の高さは50~62cmを測る。01で検出されたような側溝は見当たらなかった。また壁際には溝状遺構の痕跡かと思われる部分があるが、確証は得られなかった。

側壁より北へ2m地点から柱穴らしきピットが検出された。ピットは不整形で、径30~40cm、深さ

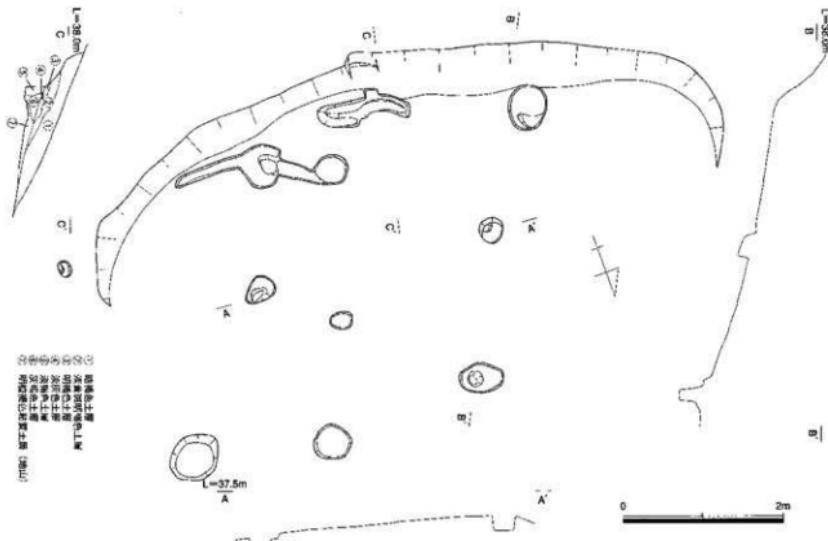
は11~12cmを測る。桁行側はほぼ側壁のラインと並行しているが、その他のピットとの規則性は見出せなかった。B-B'ラインをピット列と仮定して考慮したが、C-C'ラインとは直交せず、やや東寄りで鋭角気味になっている。またそれ以外に梁行側のピットが検出されるものの、規則性は見られなかった。

床面は、壁から北へ40cm付近までが、高低差40cmであるのに対して、それよりも外側は2mで70cm程度下がる。このことから、平坦な床面が流れ落ちたことが想定できる。この遺構からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期など詳細については不明である。

#### ○SB-03 (第21図、図版6)

SB-02の北側下方約5m地点から検出された掘立柱建物跡である。SB-01・02と同様に、斜面を削削・加工して作られたものだが、01・02と異なり地山を削平して作った側壁は見当たらず、代わりに側溝が掘られていた。側溝は等高線標高36mラインに沿って掘られており、長さ6.46m、上端幅42~87cm、下端幅18~83cm、深さ1~22cmを測り、平面形はやや弧を描くような形状を呈する。

検出された柱穴から2間×1間の建物が復元可能であることがわかった。まず桁行側は、一部が側溝と重複するものの2間を数え、1列目はピット間の距離157cm~170cm、深さは東側から38~43cm、27~34cm、24~30cmを測る。2列目はピット間の距離185cm~170cm、深さは東側から35~41cm、20~28cm、26~36cmを測る。



第20図 SB-02実測図

梁行側は1間を数え、ピット間の距離は東側から120cm-125cm 125cmを測り、ほぼ等間隔に配置されている。中央2列目のピットから北へ125cmの地点でもピットが検出されたが、それに対応する左右(東西)のピットは見当たらなかった。

床面は北に向かって徐々に下がっていき、1mで20cmずつがる。元々下がっていたのか、それとも床面の一部が流れ落ちたのかは不明である。

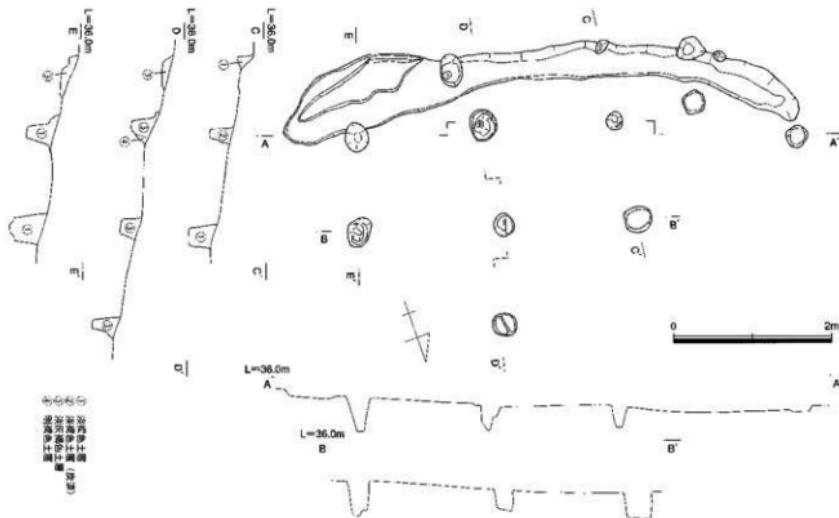
現況では2間×1間の建物の推定復元が可能である。ピットの検出状況から2間×2間、もしくは4間×2間の建物の想定ができるが、調査段階では確認は得られなかつた。

この遺構からは遺物が出土しなかつたため、遺構の時期など詳細については不明である。

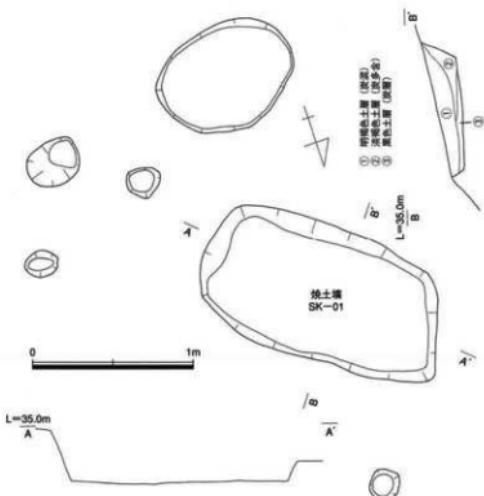
SB-01・02・03は階段状で、かつほほ直線状の並びを呈する。しかし等間隔ではなく、各々が関連性を持つ、或いは時期的な相違が見られるなどの様々な疑問点は解明するには至らなかつた。

#### ○SK-01(第22図)

SB-03の西側下、加工段2との間から検出された土壙である。長軸は東西方向で上端155cm、下端139cm、短軸は南北方向で上端84cm、下端70cm、深さ5~35cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。埋土は全て炭を含む層であり、最下層は炭層からなる黒色土であった。土壙の上端縁辺には焼土や火を受けた痕跡が見られることから、“こ炭焼”的土壙と思われる。埋土からは遺物が出土しなかつたため遺構の時期に関しては不明である。

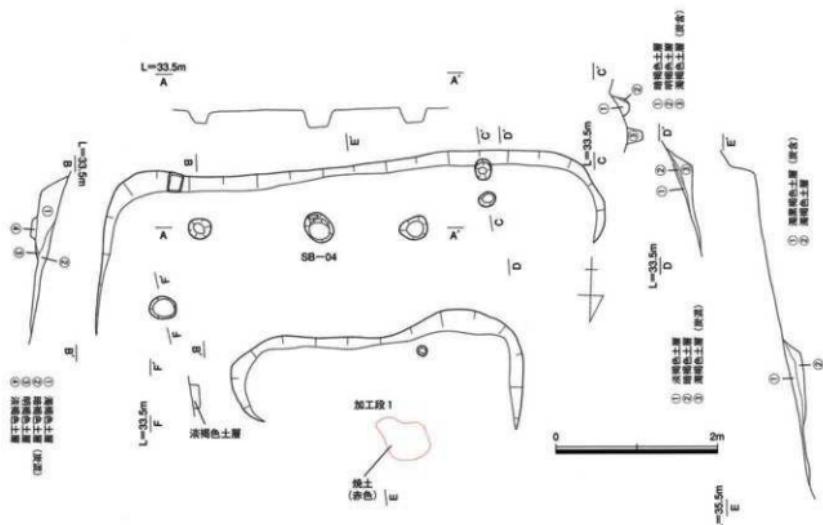


第21図 SB-03実測図



第22図 SK-01 及び周辺遺構実測図

言えない。ピット径37cm、深さは13cm-26cm-19cmを測る。床面は北に向かって下がり、加工段1までの高低差は約20cmを測る。側壁から北へ120cm、ほぼ中央から約50cm四方の範囲で焼土が検出された。

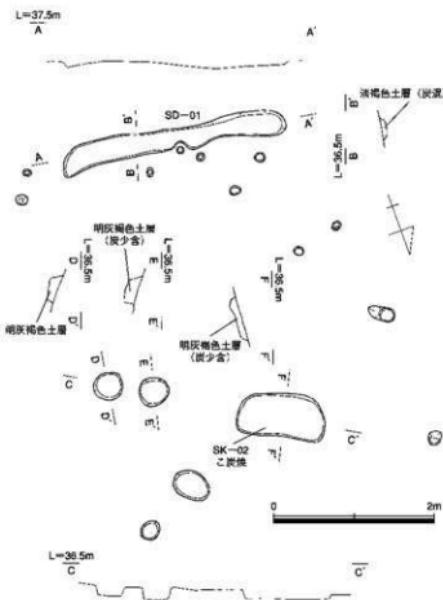


第23図 SB-04、加工段1 実測図

### ○ SB-04、加工段1 (第23図、図版7)

SB-04は、SB-03の北東下約6.5m地点から検出された掘立柱建物跡・加工段状遺構である。両方共等高線に沿って斜面を掘削・加工しており、04は標高34mラインに、加工段1は標高33mのラインにそれぞれ作られている。

04は02と同様で側溝を持たず、地山を約6mにわたって □状に加工している。側壁の高さは27~36cmを測り、側壁から北へ60cmの位置から、側壁とほぼ並行するようにピットが3つ検出された。ピット間の距離は東から150cm-120cmで、等間隔とは



第24図 SD-01周辺遺構実測図

### ○SD-01、SK-02 (第24図)

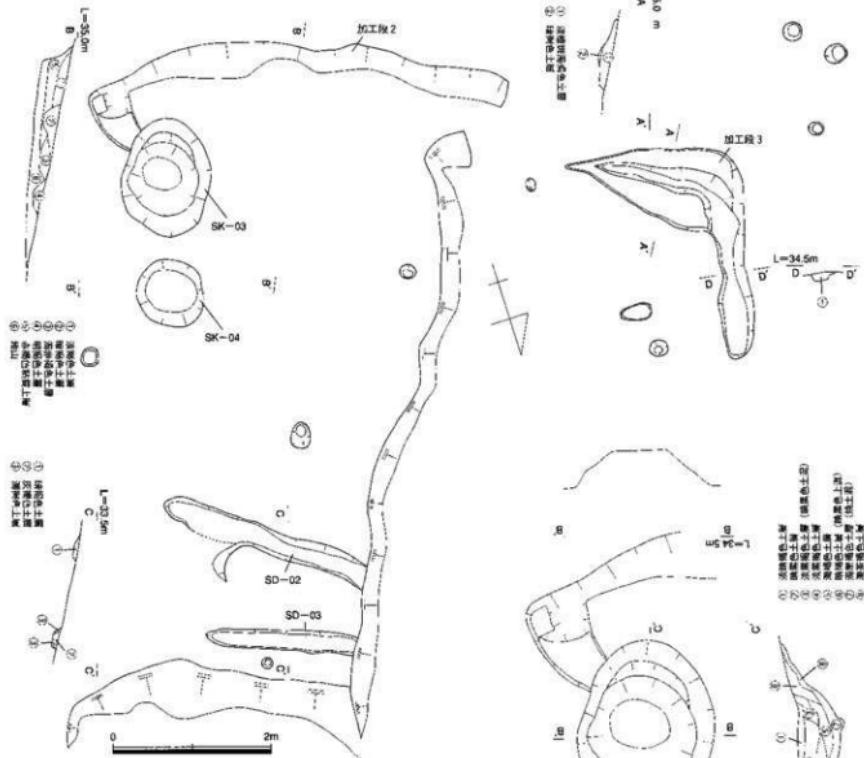
SB-02・SK-01の西南上方から検出された溝状遺構で、等高線に沿って作られたものである。規模長さ283cm、上端幅16~32cm、下端幅14~26cm、深さ2~13cmを測り、平面形はほぼ直線形を呈する。7穴のピットが共伴するように検出され、うち3穴が溝から20cm付近にあり、SD-01に並行するように検出された。ピットは3穴とも直径10~15cm、深さは8~30cmとやや小さく、ピット間の距離は東側から165cm・140cmと等間隔ではなかった。以上のことから、掘立柱建物の柱穴跡と想定するにはやや困難であると考える。埋土は少量の炭を含んだ淡褐色土のみで、遺物は出土しなかった。そのため遺構の時期など、詳細については不明である。

SK-02はSD-01の北側下から検出された土壤で、規模は長軸が東西方向上端110cm、下端105cm、短軸が南北方向上端55cm、下端49cm、深さ5~10cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。埋土は少量の炭を含んだ明灰褐色土のみで遺物は出土しなかったため、遺構の時期など詳細については不明である。SK-01のように最下層に炭層が見られないため、“こ炭焼”的土壤とは断定し難いが、焼土などが検出されていることから、その可能性も考えられる。

SK-02から東へ約1m地点から検出されたピットは2穴並ぶように検出された。規模は2穴とも直径が35cm、深さは東側が20cm、西側が25cmを測る。埋土は共に炭を含んだ明灰褐色土のみで、埋土から遺物が出土しなかったため、時期などを含めての詳細については不明である。

加工段1はSB-04から北の下方に作られたもので、“入れ子”のような形で検出された。幅約3mにわたって地山をT字状に加工し、側壁の高さは18~21cmを測る。柱穴らしきピットは検出されなかつた。床面は北へ2m付近まで高低差20cmを測る。側壁から北へ120cm、ほぼ中央から約50cm四方の範囲で焼土が検出された。

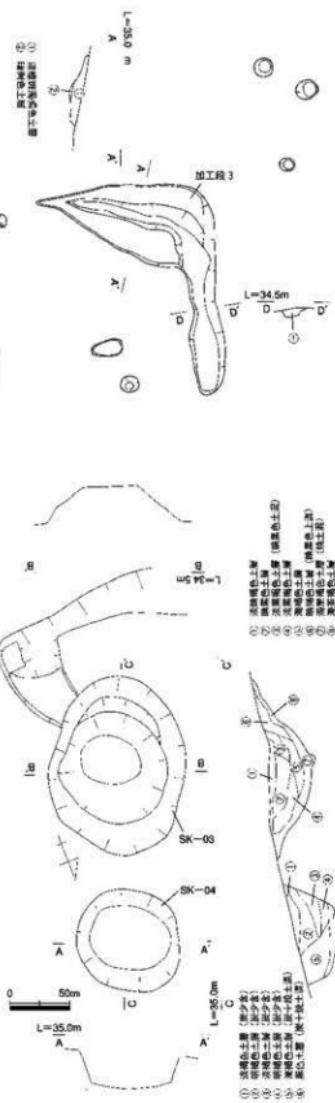
土層断面からは双方の時間的前後関係を明確にできなかつたが、加工段1からは土師器の細片のみが出土し、SB-04からは土師器の細片や6世紀後半頃と思われる須恵器の細片が出土していることから、加工段1の方が古いと考えられる。遺物に関しては、いずれも細片のため図化には至らなかつた。



第25図 加工段2・3、SD-02・03実測図

### ○加工段2・3、SD-02・03 (第25図、図版8)

加工段2・3はSB-03の西側4.5m地点から検出された加工段状造構で、加工段2は標高33mラインに沿っており、斜面を「フ」状に5.5mにわたって加工している。加工段3も同様のラインに沿い、斜面を「フ」状に2.4mにわたって加工している。側壁の高さは加工段2が23~48cm、加工段3が2~25cmを測る。加工段3には溝が伴っており、規模は長さ3.5m、上端幅20~41cm、下端幅8~37cm、深さは0.5~17cmを測り、平面形は加工段3と同様



第26図 加工段2に伴う土壤  
(SK-03・04)

に「J」状を呈する。

加工段からはいくつかのピットが検出されたがいずれも小規模で、規則性も見られなかった。これらの遺構からは土師器の細片が数点、床面からやや浮いた状態で出土したが、取り上げ時に崩れてしまうほど風化しており、取上・図化には至らなかったため、遺構の時期に関しては不明である。

付随するようにSK-03・04が検出されたが、これらについては後述する。柱穴などのその他の遺構が検出できず遺物も時期を判断できるようなものが出土しなかったため、遺構の時期や用途など詳細について不明である。

SD-02・03は加工段2・3の北側下約6m付近から等高線に沿って作られた溝状遺構である。双方とも崩落によるものか、西側が削平されており正確な規模は不明だが、02は長さ2.7m以上、上端幅32~40cm、下端幅14~34cm、深さ1~9cmを測る。同様に03は02の北側下85cm付近から選出されたもので、長さは1.9m以上、上端幅22~24cm、下端幅17~18cm、深さ3~9cmを測る。いずれも平面形は直線状を呈する。埋土は02は暗褐色土のみで、03は灰褐色土と濁褐色土の2層であった。埋土や床面から遺物は出土せず、土層断面からも時期的な前後関係や時期の断定はできなかった。

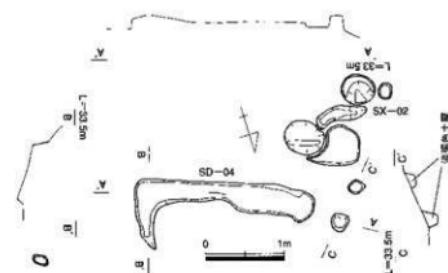
加工段2・3の間からSD-02・03の北側下にかけて“崩落”を思わせるような「J」状の落ち込みが確認され、南北8m、東西4m、高低差30~50cmを測るものだった。そのために加工段2・3の床面が下がり、SD-02・03の西端が消失したと思われる。ゆえにSD-02・03の正確な規模は把握できず、また加工段2・3が本来1つの加工段であった可能性も考えられる。

#### ○ SK-03・04 (第26図、図版11)

SK-03・04は加工段2に付随もしくは重複するように作られた土壙である。03は上端径東西122cm、南北147cm、下端径東西50cm、南北40cm、深さ24~43cmを測り、平面形は不整円形を呈する。一方04は上端径84cm、下端径52cm、深さ19~38cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。

03は最下層が焼土を含んだ濁黒褐色土、04は最下層が炭と焼土を含んだ濁褐~黒色土が堆積していた。また上端縁辺には火を受けたような痕跡が残っていたことから“こ炭焼”に使用された土壙と思われる。

埋土から遺物が出土しなかったため、時期について、また03・04の前後関係についても土層断面からは判断しかねたが、02が加工段2の床面よりも上層から掘り込まれていることから、加工段2よりも新しい遺構だと思われる。



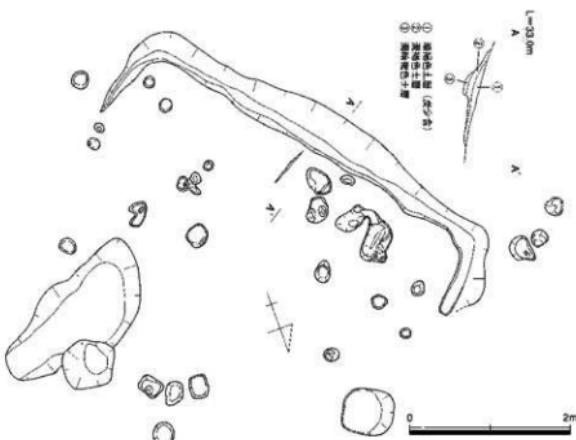
第27図 SX-02、SD-04実測図

○ S X - 0 2 、 S D -

0 4 (第27図、図版11)

SX - 02 、 SD - 04 は SB -  
01 、 加工段 1 と SD - 02 ·  
03 との間から検出された土  
壙群と溝状遺構である。

SD - 04 の全長は 3.1m 、上  
端幅 16 ~ 45cm 、下端幅 7 ~  
35cm 、深さ 1 ~ 12cm を測り、  
平面形は  $\text{U}$  状を呈する。西  
側から東側へ直線状を呈す  
るが、東端で北向きへ直角  
に方向を変える。埋土は淡  
褐色土のみで、遺物は出土



第28図 SB - 0 5 実測図

せず、時期など詳細については不明である。

SX - 02 は、SD - 04 に付随するように南西 50cm 地点から検出され、いずれもピットの規模や形状等に規則性は見られなかつた。埋土も炭を含んだ濁褐色土もしくは暗褐色土 1 層のみで、遺物も出土せず時期など詳細については不明である。

○ S B - 0 5 (第28図、図版 8 )

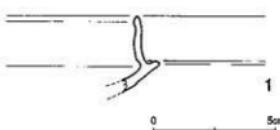
谷部から検出された掘立柱建物跡で、SD - 02 · 03 の西約 3.7m 地点に位置する。等高線に沿って標高 33m 付近の斜面を、5.3m にわたって  $\text{U}$  状に掘削・加工している。SB - 01 と同様に側壁・側溝を持つ形だが、壁と溝が一体化したものである。側壁の高さは 20 ~ 39cm を測り、側溝は壁に沿って  $\text{U}$  状に作られ、全長は約 6.5m 、下端幅 5 ~ 10cm 、深さ 1 ~ 5cm を測る。

溝に囲まれた内側からは大小のいくつかのピットが検出された。規模や形状、配置などに規則性は見出せなかつた。溝に囲まれた内側は比較的平坦で、溝よりも北東 5m 付近までは高低差 5cm 程度だが、それより外側は約 1.5m で 20 ~ 30cm 下がる。床面が流れ落ちた可能性が考えられる。

遺物は床面から出土しなかつた。埋土から須恵器・土師器が若干出土したが、網片・小片であったため時期の特定には至らず、谷状の地形により上方から流れ落ち、埋土となったと考えられる。

須恵器：坏身 (第29図-1、図版65)

口縁部網片である。内外面共に回転ナデで調整されている。立ち上がりはやや長く、垂直気味だがわずかに湾曲し、端部は先細る。



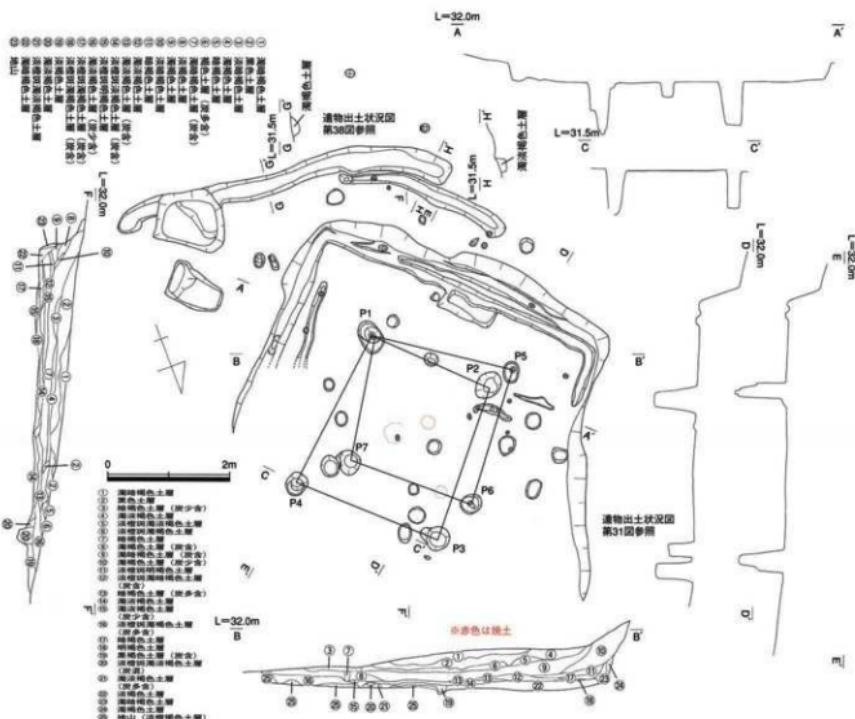
第29図 SB - 0 5 出土土器実測図

○S I - 01 (第30・31図、図版9)

SI-01はSB-05の北西下から検出された竪穴式住居跡で、標高32m付近の斜面を5.5mにわたって掘削・加工したものである。東側・南側・西側の3方に側壁を持ち、その壁に沿うように溝が掘られている。北側からは壁・溝は検出されなかった。規模は東西長5.3m、南北長が東側で3.7m、西側で4.3mを測り、側壁の高さは南側で65~70cmを測る。

側溝は壁に沿って掘られているため「匁」状を呈する。全長約8.2m、下端幅10~40cm、深さは3~7cmを測る。埋土は炭を含んだ濁褐色土1層のみで、遺物は出土しなかった。溝は東西両側で、壁の途中で消失している。また西側溝の東20cmの位置から、同様の溝状遺構が並行するように検出されたが、前後関係等は不明である。

内部は2種類の4本柱の建物が想定できた。まず1つ目は南から時計回りにP1~P4とした。P1は上端が長方形に近い梢円形を呈し、長軸は南北55cm、短軸は東西で35cm、下端径5cm、深さ85cmを測り、埋土は炭を多く含んだ暗褐色土が堆積していた。P2は上端径40~47cm、下端径35cm、深さ7cmを測り、平面形は不整円形を呈し、埋土は炭を含んだ暗褐色土の下に明橙褐・濁褐色土などが堆積し



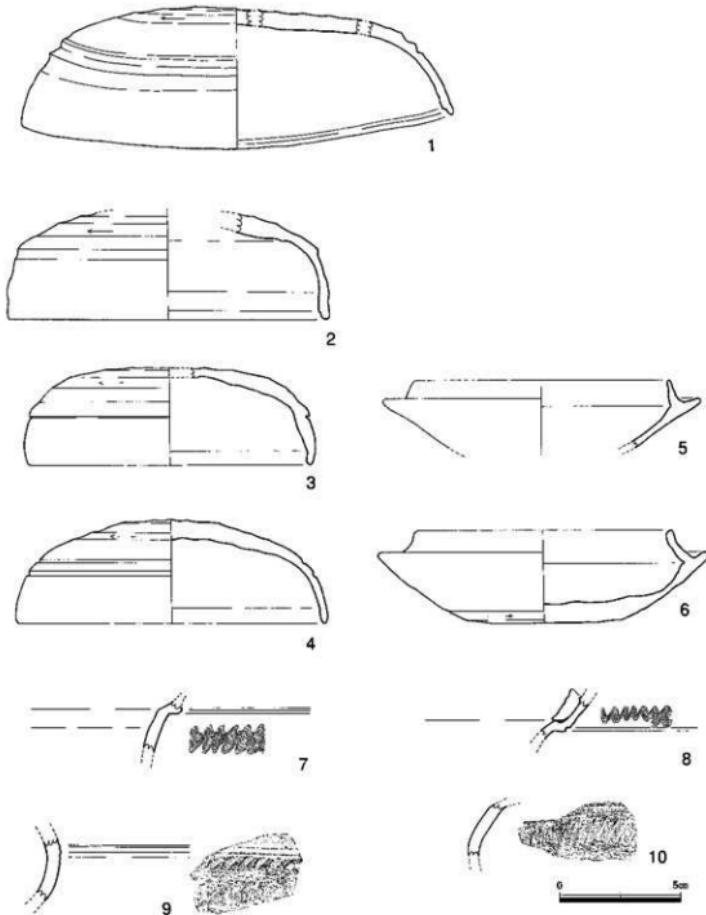
第30図 SI-01実測図



第31図 S 1 - 0 1 遺物出土状況実測図

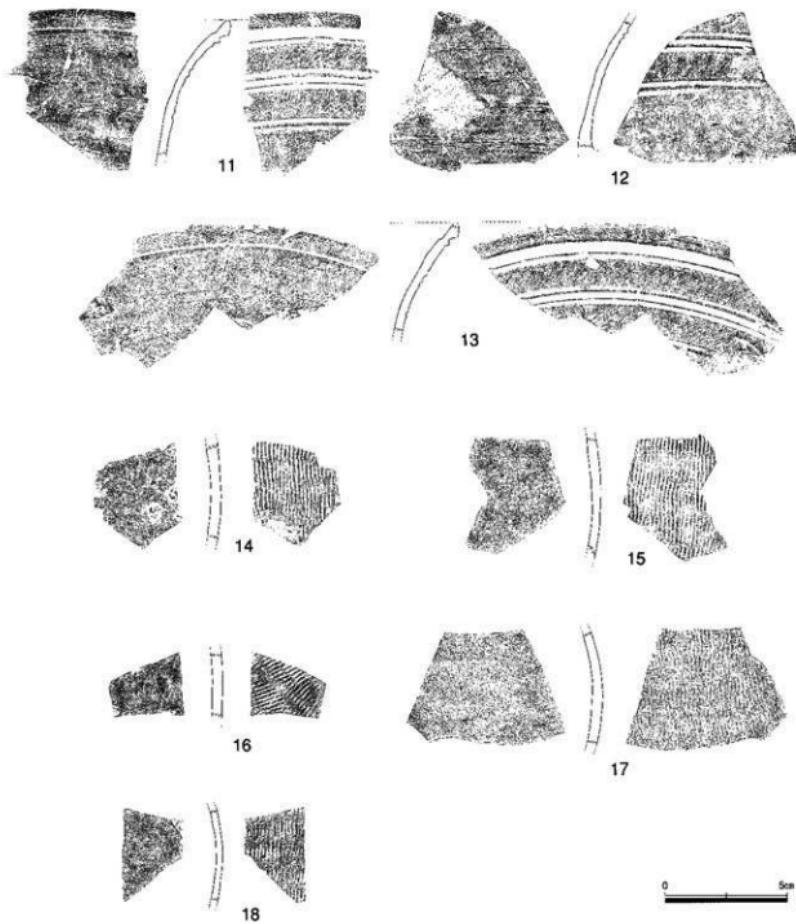
ていた。P3は上端径35~40cm、下端径17cm、深さ65~70cmを測り、平面形は楕円形を呈し、埋土は炭を含んだ淡橙斑濁暗褐色土が堆積していた。P4は上端径40cm、下端径35cm、深さ49cmを測り、平面形はほぼ円形を呈し、埋土は大部分が炭を含んだ濁褐色土で、一部に濁褐色土が堆積していた。各柱穴間の距離はP1-P2:210cm、P2-P3:250cm、P3-P4:250cm、P4-P1:250cmを測り、P1-P2間以外は等間隔であった。

2つ目は、P1を基準に時計回りでP1-P7~P9とした。P5は平面形が楕円形を呈し、上端径25~35cmを測る。底部は2段になっており、最深部は径15cmの円形を呈し、柱痕の可能性もある。深さは37~46cmを測る。埋土は炭を含んだ暗褐色土の下に明模様・濁褐色土などが堆積していた。P6は上端径35cmを測り、下端は2段になっており、形状は楕円形（径：7~15cm）を呈する。深さは32cmを測る。P8は上端径30~35cm、下端径22cm、深さは19~22cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。埋土は炭を含んだ淡褐色土の下に、白斑濁明褐色土が堆積し、淡褐色土から上師器の細片が出土している。各柱穴間の距離はP1-P5:237cm、P5-P6:237cm、P6-P7:240cm、P7-P1:240cmを測り、ほぼ等間隔であった。



第32図 S I - 01 出土土器実測図 (1)

これらが建替えによるものなのかどうかは確認できなかった。埋土は床面に近くなればなるほど炭を含んだ層が多くなり、また床面から7ヶ所の焼土跡が確認された。うち3ヶ所の焼土跡は、平面形がほぼ円形を呈しており、遺構内で移動式の竈が出土していることから移動式竈の使用痕跡と考えられ、非常に興味深い。遺構の時期としては6世紀前半頃の須恵器が出土しているが、床面近くから6世紀後半頃の須恵器も出土している。そのため確定するのは難しいが、小丘陵東側斜面に設定したトレンチ（第108図）掘削の結果、小丘陵の平坦面造成時と思われる土砂が流入していることが判明し、

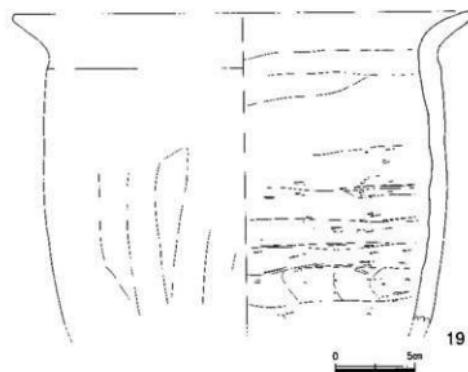


第33図 S I - 0 1 出土土器実測図 (2)

6世紀前半の竪穴式住居跡である可能性が高い。

須恵器：蓋（第32-1～4図、図版66）

1は焼き歪みが激しく全体的に楕円形を呈するため、口径は15.4～18.0cmを測る。口縁端部内面に明瞭な段が見られ、肩部は幅広の凹線状の稜が強調されている。天井部に丁寧な回転ヘラ削りが見られ、6世紀前半～中葉のものと思われる。2は推定口径13.4cmを測り、口縁部はほぼ垂直に下り、端



第34図 S I - 01 出土土器実測図（3）

部にかけて肥厚する。肩部はナデ調整によって稜が強調され、天井部に回転ヘラ削りが見られる。6世紀後半のものと思われる。3は推定口径11.7cmを測り、口縁部は内湾し、端部は先細る。肩部は肥厚し、明瞭な沈線状の稜が見られる。天井部は欠損しているが、残存部から回転ヘラ削り後に回転ナデで調整していることがわかり、6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。4は推定口径13.0cmを測り、技法的には3と同じであるが、全体的に薄手で、わずかに扁平な形状をなす。

#### 須恵器：坏身（第32-5・6図、図版66）

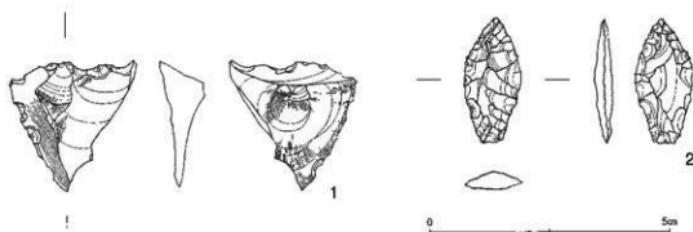
5は口・受部径が推定10.7・13.2cmを測る口縁部片で、内外面共に回転ナデで調整されている。立ち上がりは低く、受部は長いが、両方共に直線的である。6は口・受部径が推定10.8・13.8cmを測り、全体的に扁平な形状を呈する。立ち上がりはやや強く内傾し、受部は斜め上方に突出する。底部外面はヘラ切り後、雑な回転ヘラ削りが施されている。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。

#### 須恵器：鰐（第32-7～10図、図版66）

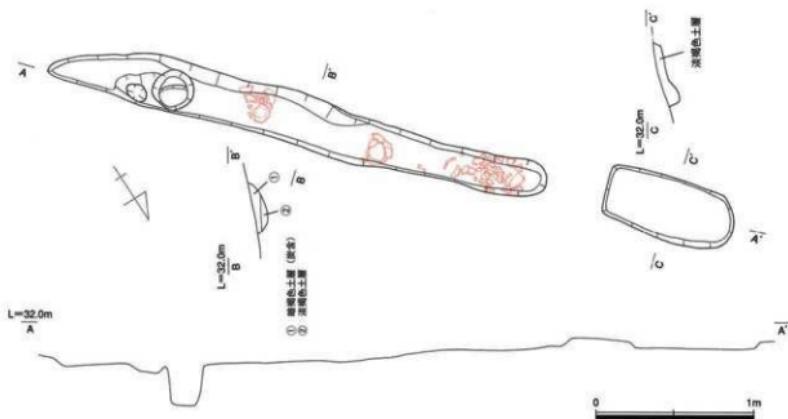
7・8・10は頸部の破片で、頸部によく見られる細かい波状文が施されている。9は胴部の破片であり、明瞭な凹線2条の直下に連続刺突文が施されている。8は焼成時に窯内部で着色したものと思われる。

#### 須恵器：甕（第33-11～18図、図版67）

11～13は口縁部片、14～18は胴部片である。口縁部片は残存部分で2段の波状文・凹線が施される。胴部片は、外面は平行叩き文、内面は同心円当て具痕をナデ消す調整をしている。



第35図 S I - 01周辺出土石器実測図



第36図 SD-05 実測図及び遺物出土状況実測図

#### 土師器：瓶（第34-19図、図版67）

推定口径29cmを測り、口縁～下胴部まで残存する破片である。口縁部は横ナデ、胴部は内外面共にヘラ削りで調整されており、焼成はやや不良で外面に煤が付着している。

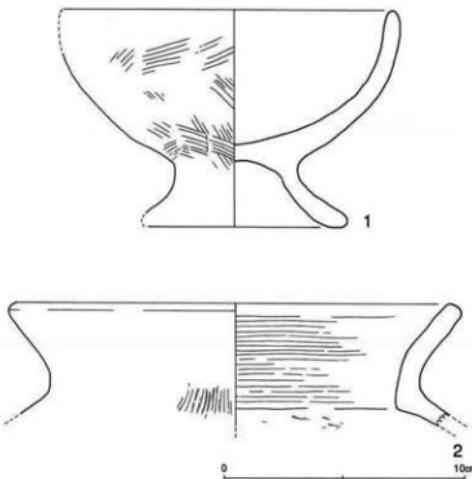
#### 石器：（第35-1・2図、図版67）

SI-01周辺の上層から出土したもので、1は黒曜石の剥片、2は玉髓製の凸基Ⅱ式の石鏃である。

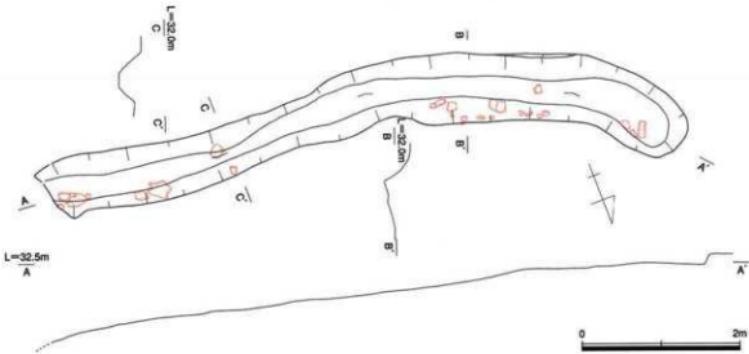
SD-05～07はSI-01南側上方から検出された溝状遺構である。

#### ○SD-05（第36図、図版10）

SI-01の南側上方約3m、SB-05北東下6.8m地点から検出されたものである。途中で途切れるものの全長は約4.4m、上端幅30～40cm、下端幅18～34cm、深さ3～8cmを測り、平面形はほぼ直線状を呈する。埋土は炭を含んだ濁暗褐色土が堆積し、その中から土師器が出土したが、時期を特定するには至らなかった。そのほかSB-05、



第37図 SD-05 出土土器実測図



第38図 SD-07 実測図及び遺物出土状況実測図

SI-01との関連など詳細についても不明である。

**土師器：低脚壺（第37-1図、図版68）**

推定口径14.0cm、器高5.2cmを測る低脚壺である。全体的に厚手で、壺部は深めで端部は丸くおさめ、脚部は「ハ」字状に大きく開く。壺部外面にはハケ目が部分的に見られ、それ以外はナデで調整されている。

**土師器：甌（第37-2図、図版68）**

推定口径18.8cmを測る口縁部片である。やや直線的に開き、端部は肥厚する。内面に横ハケ目が見られる。

○SD-06・07（第38図）

SI-01の60cm南側上方から検出され、SD-06はやや蛇行するものの全長約5.7m、上端幅20~47cm、下端幅16~20cm、深さ3~13cmを測り、東端付近の一部が土壤によって削平されている。埋土は炭を含んだ暗褐色土で、その中から土師器が出土したが、時期の特定には至らなかった。SD-07は06のすぐ北側の西端近くから検出され、06同様にやや蛇行する。全長は約2.85m、上端幅15~29cm、下端幅10~15cm、深さ2~16cmを測る。埋土は淡褐色土の上に暗褐色土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。06・07共にSI-01に付随するとも考えられるが、双方の時期差等を含めて詳細については不明である。

SX-03、SD-08・09、SK-05が検出された付近は、谷部でも比較的緩斜面で、土砂が斜面上から流れ落ちてきて堆積したものと考えられる。

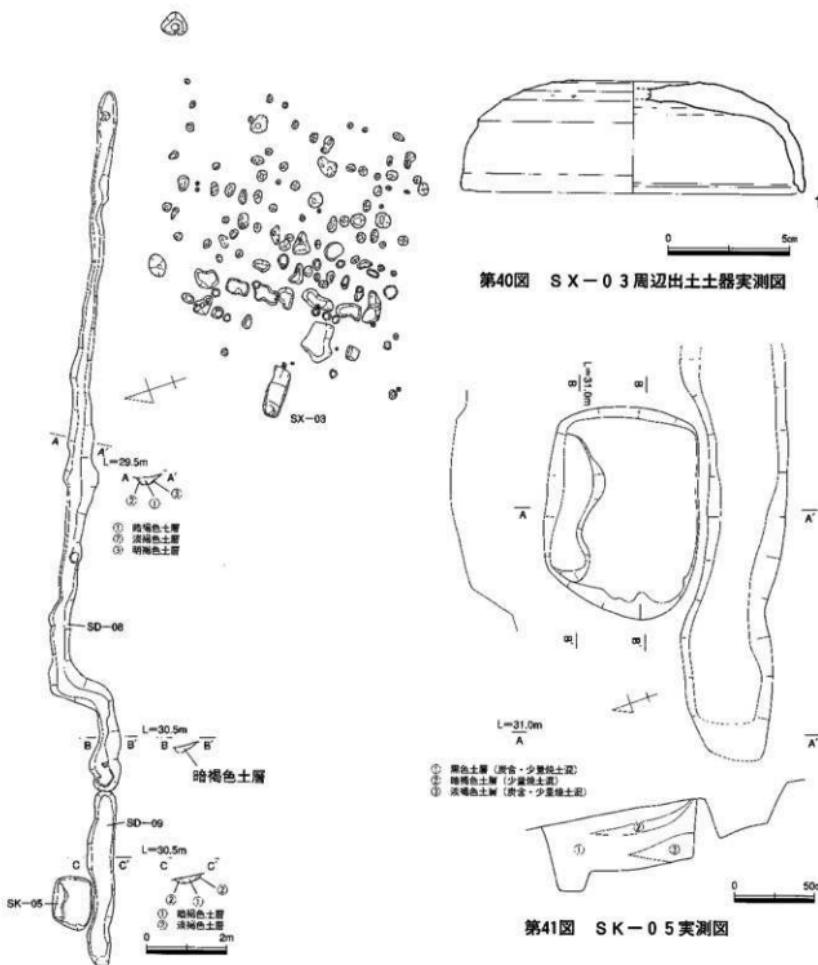
○SX-03、SD-08・09、SK-05（第39・41図）

SX-03では数多くのビットが乱雑に検出された。規模や形状等に規則性や統一性がなく、生活の

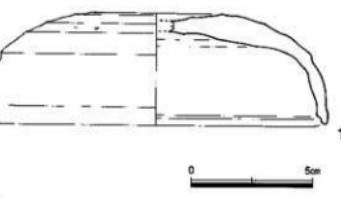
痕跡を示すようなその他の遺構も検出されなかった。

SD-08・09はおそらく1条の溝であったと思われるが、現況では08は全長約18.4m、上端幅30～75cm、下端幅10～32cm、深さ1～29cmを測り、平面形は途中で屈曲するもののそれ以外はほぼ直線状を呈する。09は全長約4m、上端幅45～65cm、下端幅29～46cm、深さ5～22cmを測り、平面形はほぼ直線状を呈する。

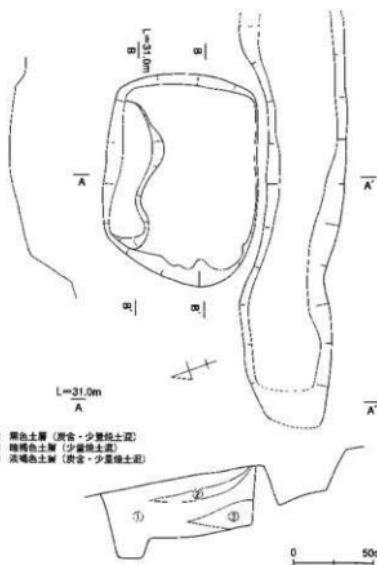
SK-05はSD-09の西端付近から検出された土壙で、上端が長軸東西方向130cm、短軸南北方向90



第39図 SX-03、SD-08・09実測図



第40図 SX-03周辺出土土器実測図



第41図 SK-05実測図

cm、下端が長軸東西方向90cm、短軸南北方向83cm、深さ25~32cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。埋土は炭や焼土を少し含んだ層であった。これらの遺構は、おそらく戦前~戦後に使用された畑の痕跡と思われる。08・09は畑の仕切りのための溝と考えられ、溝の北側から遺構は検出されなかつた。

#### 須恵器：蓋（第40-1図、図版68）

SX-03の上層から出土したが、遺構とは関係なく、斜面上方から流れ落ちて入り込んだものと思われる。推定口径14.2cmを測り、口縁端部内面には明瞭な段がつけられ、肩部にはナデによる稜の強調が見られる。天井部は回転ヘラ削りで仕上げている。口縁部外面のやや上には、回転ナデ調整の前に回転ヘラ削りを施したのか、石動痕が見られる。

SK-06・07は調査区の東端、やや離れた位置から検出された土壌である。

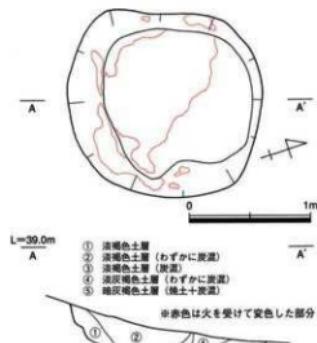
#### ○ SK-06（第42図、図版11）

SB-01から東10m、標高43.5m付近の斜面に作られた焼土壌である。上端径75~80cm、下端径55~60cm、深さは6~22cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。北側は流れ落ちたのか浅くなっている。埋土は焼土や炭を含んだ層が大部分で、特に最下層の暗灰褐色土には多く含まれていた。埋土から遺物が出土しなかったため、時期の特定には至らなかった。

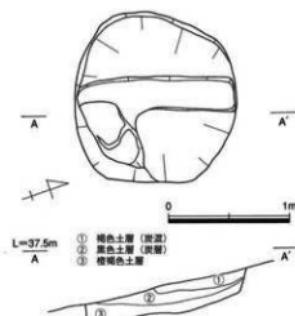
#### ○ SK-07（第43図）

SK-06から北側下17m、標高37m付近の斜面に作られた焼土壌である。上端径は65~70cm、平面形はほぼ円形を呈するが、下端は形状が異なり、長軸が南北方向65cm、短軸が東西方向15cmを測り、平面形は長方形を呈する。深さは8~27cmを測るが、北側は流れ落ちたと思われ、浅くなっている。最下層には炭が含まれていなかったが、第2層が炭層の黒色土であり、上端縁辺にも焼土痕が残っていた。埋土からは遺物は出土しなかったため、時期の特定には至らなかった。双方とも検出状況や堆積土層から“こ炭焼”に使われた土壌と思われる。

SB-01~04はほぼ南北方向に所在し、北側に開くよう作られていたが、谷部のSB-05やSI-01は、南西~北



第42図 SK-06 実測図



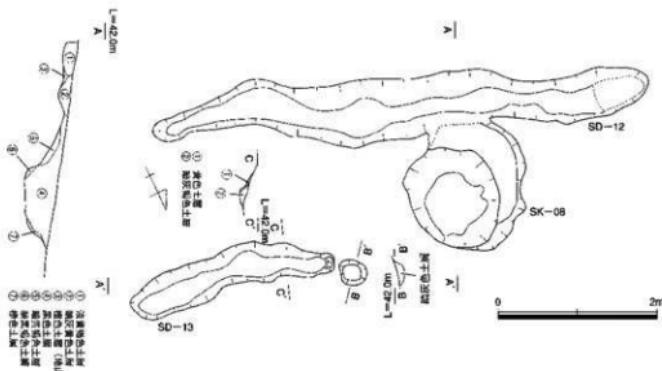
第43図 SK-07 実測図

東方向に見られ、北東側に開くように作られていた。これは地形の流れがそれまでは東西方向に流れていたのが、SB-05の東側で変化し、また傾斜も緩くなるため、地形に合わせて造構が作られていることがわかる。

渋ヶ谷古墳へと続く東西の伸びる尾根と南北に伸びる小丘陵との間に谷状地形があり、この谷状地形は谷部のSB-05、SI-01の方へと流れていく。小丘陵は東西約30m、南北約46m、高低差約4mを測る平坦面を持ち、この平坦面は92年度調査で5本のトレンチを設定し、調査が行われた。小丘陵の西側には緩斜面、小丘陵北側下には南北約5.8m、東西約15.5m、高低差1m未満の平坦面、小丘陵の東側・北側の斜面があり、それぞれに造構が検出され、遺物が出土した。

#### ○SD-12・13、SK-08（第44図、図版12）

SD-12は最南端かつ高所部分から検出された溝状造構で、標高43mの等高線に沿うように東西方向に掘られている。全長は6.25m、上端幅25~80cm、下端幅20~49cm、深さ2~25cmを測り、平面形はやや蛇行するものの直線状を呈する。埋土は暗灰黄色土のみが堆積していたが、遺物は出土しなかった。

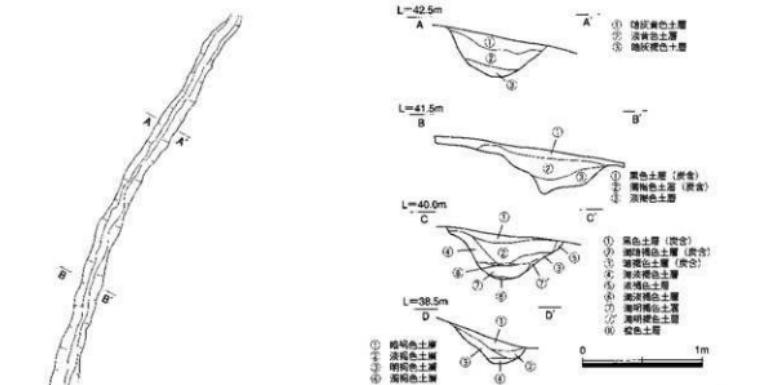


第44図 SD-12・13、SK-08実測図

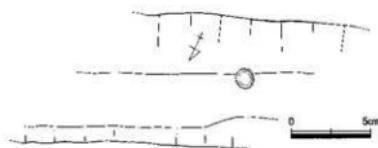
SD-13は12の北側1.5m付近から検出された溝状造構で、等高線に沿うように東西方向に掘られている。全長は2.6m、上端幅30~50cm、下端幅14~30cm、深さ2~20cmを測り、平面形はやや蛇行するものの、ほぼ直線状を呈する。埋土は暗灰褐色土が大半であったが、遺物は出土しなかった。

SK-08はSD-12の北側に接するように検出された土壙で、平面形は不整円形を呈し、上端径160cm、下端径66~75cm、深さ21~50cmを測る。南北側に幅約20~40cmを測る三日月状の平坦面の段を持つ。埋土は黒色土が大半で、炭や焼土が少量ながらも含まれていたが、遺物は出土しなかった。

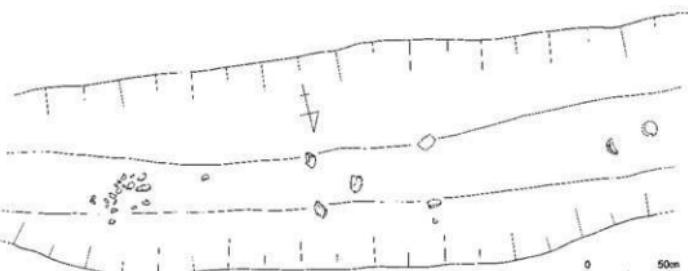
SD-12とSK-08との前後関係についてだが、双方とも遺物が出土しなかったため、明確な確証は得られなかった。土層断面からSD-12の埋土（暗灰黄色土）がSK-08の埋土（黒色土）を切り込んでいるため、SD-12の方が新しいと思われる。SD-13との関連や前後関係については双方とも不明



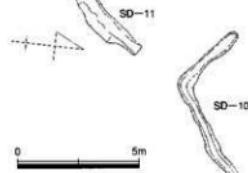
第46図 SD-11 土層断面図



第47図 SD-11 内遺物出土状況実測図（1）



第48図 SD-11 内遺物出土状況実測図（2）



第45図 SD-10 + 11 実測図

である。

#### ○SD-10・11 (第45図、図版12)

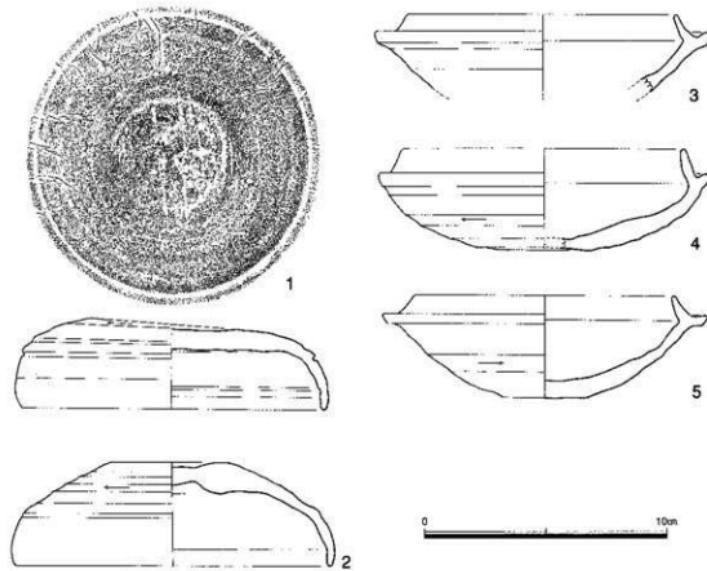
SD-11はSK-08の北側0.7m付近から、東西に伸びる尾根と南北に伸びる小丘陵の間を縫うように、そして小丘陵の南側から東側を囲うように弧を描いて検出された溝状遺構である。全長は63.5m以上を測る。これは調査区西側の外にも伸びているため正確な規模は把握できなかった。上端幅80~150cm、下端幅7~45cm、深さは12~47cmを測り、溝の底部の形状は大部分は丸底だが、一部にはV字に近い形状をなす部分もある。埋土は一様ではなく、炭を含む層も見られた。埠土からは須恵器の蓋や壺、土師器などが出上し、出土遺物の特徴から7世紀以降に埋没したものと思われる。

SD-10は11の北側下2.9m付近から検出された溝状遺構で、平面形は「状を呈し、全長は約7m、上端幅35~65cm、下端幅20~35cm、深さ1~13cmを測る。遺物は出土しなかった。

前述したようにSD-11は小丘陵を囲むように位置し、まるで“環壕”的な印象を受ける。溝の内側（北側）には遺構が集中して検出され、逆に南側ではあまり検出されなかった（南側は調査範囲が狭い）。今後の検討課題の一つである。

#### 須恵器：蓋（第49-1・2、図版68）

1は口径12.6cmを測り、天井部は潰れたように平らになっている。口縁端部内面のやや上方に沈線



第49図 SD-11出土土器実測図

が1条巡らされ、肩部外面には沈線状の段が2条施されている。天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整されており、ヘラ記号「=」が見られる。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。2は推定口径13.2cmを測り、口縁端部はわずかに内傾し、先細る。肩部はやや丸く張るが、なだらかに下りる。天井部はやや雑な回転ヘラ削りで仕上げ6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。

**須恵器：坏身**（図版49-3～5、図版68）

3は口・受部径が推定11.2・14.0cmを測る口縁部片で、立ち上がりは低く強めに内傾する。4は口・受部径が推定11.6・13.2cmを測り、全体的に厚手である。立ち上がりは直線的でわずかに内傾し、受部は短く丸くおさめる。坏部は扁平気味だが丸味を持ち、明瞭な回転ヘラ削りが見られる。5は口・受部径が推定10.7・13.5cmを測る。立ち上がりは短く先細り、受部は水平気味に突出する。坏部はあまり張らず、やや広い回転ヘラ削りで仕上げている。

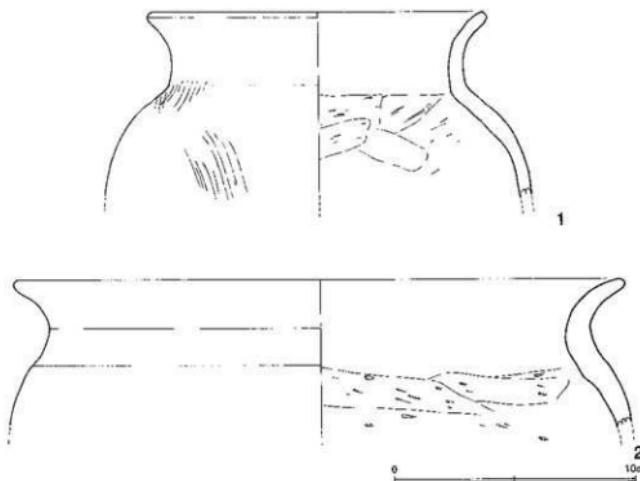
以下はSD-11～13周辺で出土した遺物で、遺構に伴わないものである。

**土師器：甕**（第50-1・2図、図版68）

1は推定口径14.2cmを測る。口縁～肩部の破片で、口縁部は外湾して聞く。肩部外面は部分的なハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。2は推定口径25.4cmを測り、口縁部は大きく外反する。口径の復元により、甕の可能性も考えられる。

**土師器：甕**（第51-3～5図、図版68）

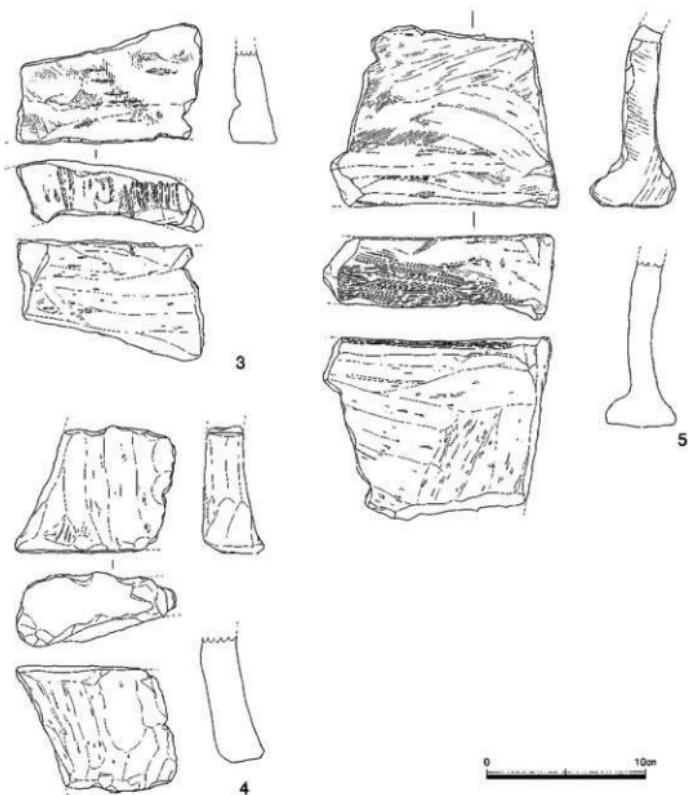
いずれも底部片で、外面には部分的なハケ目とナデによる調整、内面にはヘラ削りが見られる。



第50図 SD-11～13周辺出土土器実測図（1）

○加工段4（第52図、図版13）

調査区の南西隅から検出された加工段状遺構で、標高42m付近の斜面、粘土質の橙褐色土を約8.7mにわたって □ 状に掘削・加工したものである。側壁の高さは38~60cmを測り、その側壁に沿って側溝が掘られている。下端幅37~58cm、深さ2~13cmを測るが、西側側壁には溝がなく、東側隅も一部抜けたようになっている。内側からは柱穴や焼土のような生活の痕跡を示す遺構は検出されなかつた。北西隅から検出された土壤のようなものも非常に浅いことから、耕地と思われる。側溝から1m付近までは高低差約10cm未溝の平坦面だが、それ以降になると徐々に床面が下がることから、床面が流れ落ちた可能性が考えられる。側溝の埋土第2層淡黄褐色土や第3層暗灰黄色土から土器部や須恵器の細片が出土したが、図化には至らなかつた。しかし須恵器の細片の特徴等から6世紀末遺構の遺構ではないかと思われる。



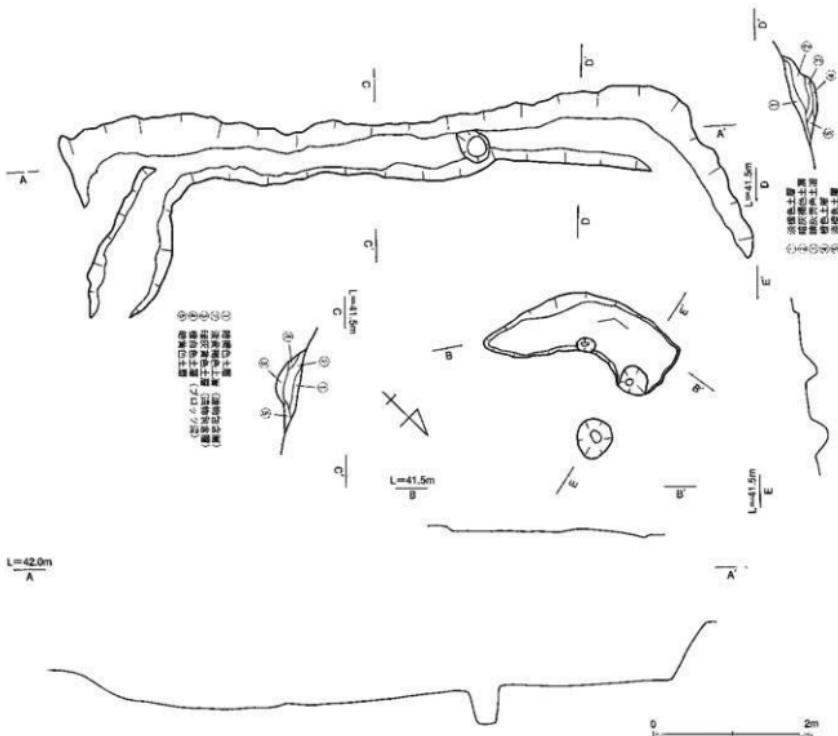
第51図 SD-11~13周辺出土土器実測図(2)

○SK-09 (第53図)

加工段4・5の間から検出された土壙で、規模は上端径長軸東西方向75cm、短軸南北方向52cm、下端径長軸東西方向63cm、短軸南北方向43cm、深さ4～7cmを測り、平面形は橢円形を呈する。北側が浅くなっているのはおそらく流れ落ちてしまったものと思われる。埋土は炭や焼土を含む層が見られ、上端縁辺にも火を受けた痕跡が残ることから“こ炭焼”の土壙と思われるが、遺物が出土しなかったため、時期の特定には至らなかった。

○加工段5 (第54図、図版13)

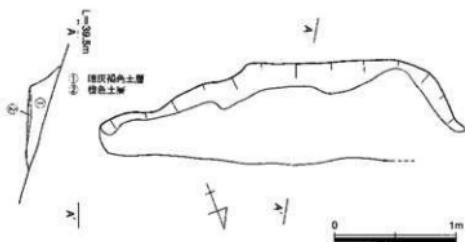
加工段4の東10m地点から検出された加工段状遺構である。標高39m付近の斜面をU状に約3mにわたって掘削・加工したのである。側壁の高さは8～27cmを測る。側壁から50cmの部分までは高低差5cm未溝の床面だが、それ以降になると徐々に床面が下がる。柱穴や焼土などほかの遺構は検出されなかった。側壁際の中央から土師器の壺が約半個体出土したが、時期の特定には至らなかった。



第52図 加工段4実測図



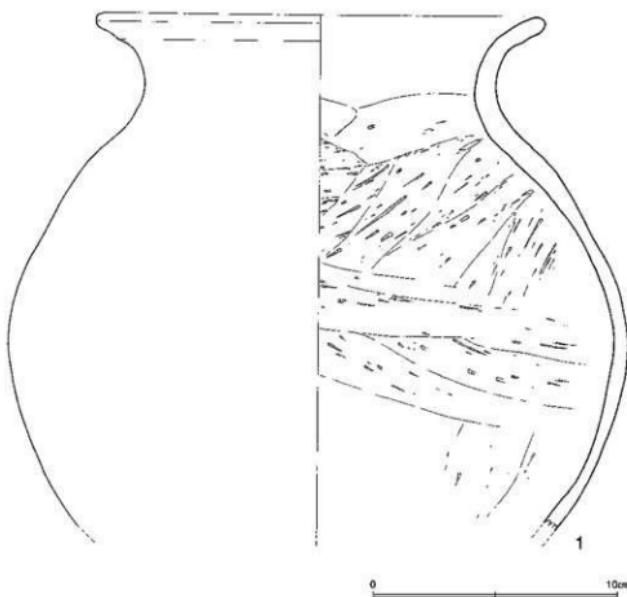
第53図 SK-09 実測図



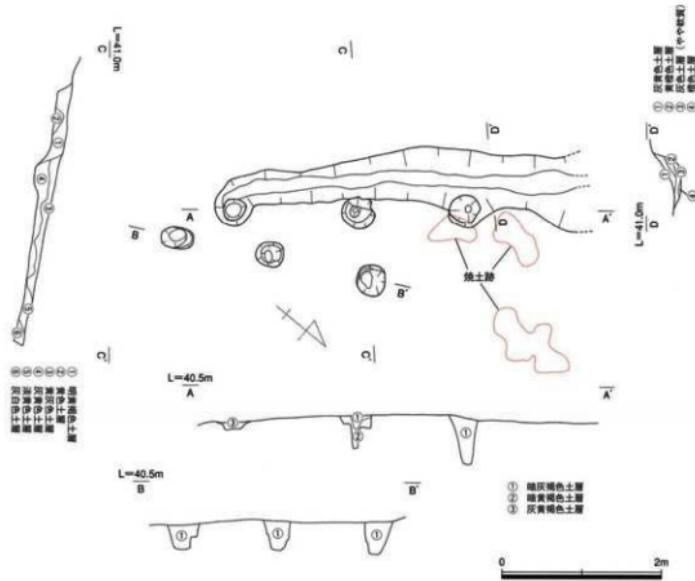
第54図 加工段5 実測図

### 土師器：甕（第55-1図、図版69）

推定口径21.8cmを測る口縁～下胴部の破片で、口縁部は非常に滑らかに湾曲し、大きく開いて端部は丸く肥厚する。肩部は張らず、中胴部で丸く張る。胴部外面にハケ目は見られず、内面はハラ削り



第55図 加工段5 出土土器実測図



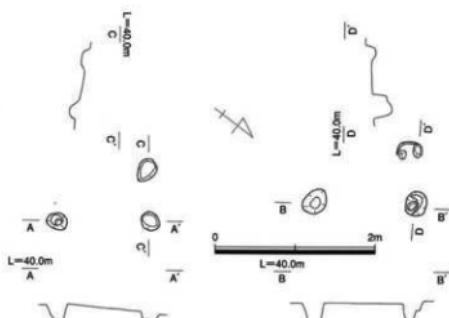
第56図 SB-06 実測図

で調整されている。

#### ○SB-06 (第56図、図版13)

加工段4の北東下5.3m地点から検出された掘立柱建物跡である。検出された周辺の地形は比較的平坦である。地山を掘削・加工しているが、側壁を持たず、溝によって区切るSB-03と同じタイプである。溝は西端をトレチで削平したために正確な規模が把握できなかったが、残存長4.5m、上端幅43~70cm、下端幅13~30cm、深さ6~11cmを測り、平面形は直線状を呈する。埋土は灰黄色土で遺物は出土しなかった。

柱穴と思われるピットは計6穴検出され、その配置から2種類考えられる。A-A'の柱穴は溝と並行し、上端径



第57図 SX-04 実測図

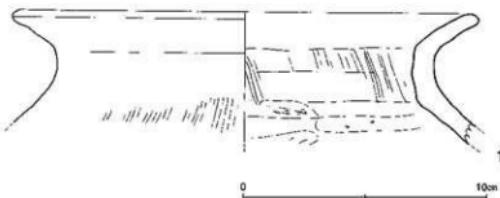
30~40cm、下端径8~20cm、深さは10~56cm、柱穴間の距離は東から150cm・143cmを測る。B-B'間の柱穴はA-A'よりも北寄りにラインを取り、上端径35~40cm、下端径10~20cm、深さ30~40cmを測る。A-A'とB-B'の関連性については判断できなかったが、いずれも桁行き側の柱穴しか検出されず、梁行き側の柱穴は確認できなかった。

床面から焼土が確認されたが、上層は伴っていなかった。床面は比較的広く、溝1.5m付近までは高低差10cm程度だが、それ以降は徐々に床面が下がる。床面からは遺物は出土しなかった。埋土からは須恵器・土師器の壺片や甕片が出土したが、時期の特定には至らなかった。

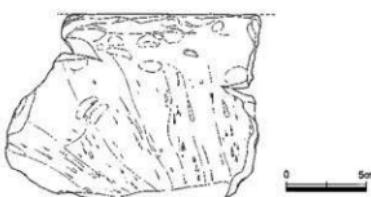
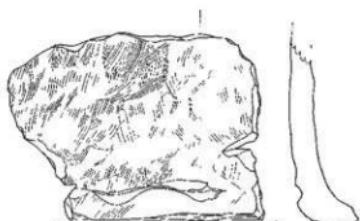
#### ○ SX-04 (第57図)

SB-06の北側下2m地点  
から検出されたピットで、J  
状に2ヶ所並んで配置されて  
いた。06の床面から1段下  
がった位置から検出されたた  
め、06とは関連がないと思わ  
れる。東側のピットは上端径  
20~30cm、下端径7~25cm、  
深さ6~20cm、ピット間の距  
離はA-A':115cm、B-B':65cmを測り、ほ  
ぼ垂直に交わる。西側のピットは上端径20~30  
cm、下端径10~15cm、深さ7~30cm、ピット間  
の距離はC-C':120cm、D-D':75cmを測る。

遺物は出土せず、時期や用途など詳細について  
は不明である。



第58図 SB-06 出土土器実測図(1)



第58図 SB-06 出土土器実測図(2)

#### 土師器：甕 (第58-1、図版69)

1は推定口径19.2cmを測る口縁～肩部の破片  
である。口縁部は垂直に立ち、端部付近で外側  
に屈曲し、肩部はなだらかに下りる。肩部外面  
は部分的なハケ目、内面はヘラ削りで調整され  
ている。

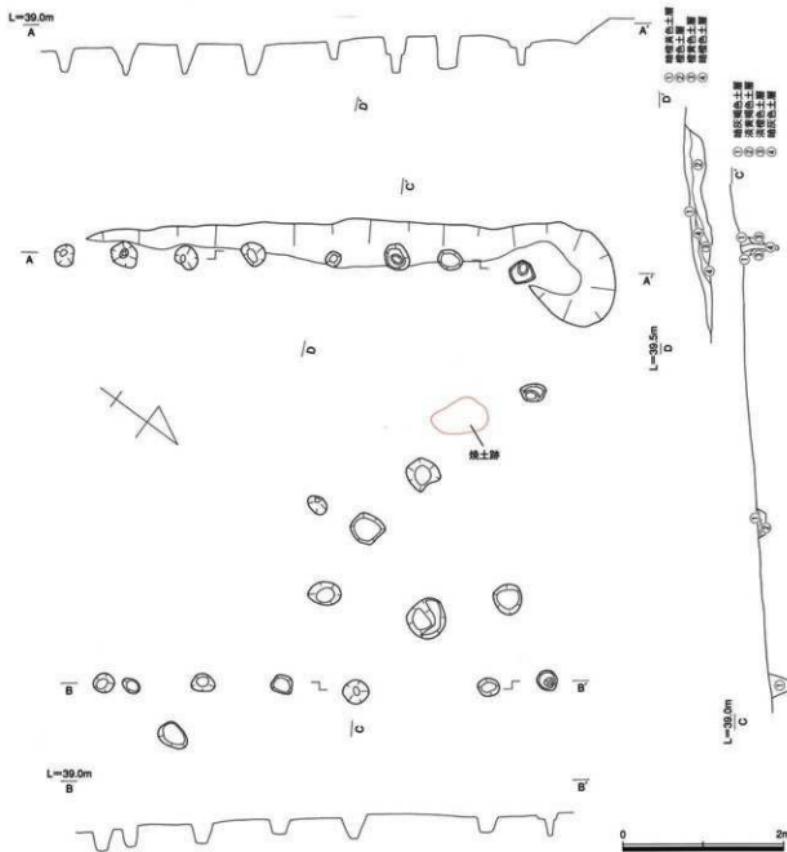
#### 土師器：甕 (第59-2図、図版69)

2は底部片で、接地面に深い溝が刻まれてい  
る。外面は斜めハケ目・ナデ、内面はヘラ削  
り・指頭圧痕で調整されている。

○SX-05 (第60図、図版14)

SB-06、SX-04の北側6m地点から検出された遺構である。比較的平坦な地形に位置する。この遺構は南側に壁を作り、壁際に8穴のピットがほぼ1列に並び、等間隔(75~100cm)に配置されていた。それに対応するように北側5.3mの位置に7穴のピットが1列に並んで検出されたが、等間隔ではなかった。この南北のピット間は高低差5cm程度の平坦面になっている。この平坦面からはいくつかのピット焼土が検出された。

当初は住居址・掘立柱建物跡と考えていたが、各ピットの規模は小さく、梁桁側の柱穴も検出されず、北側のピット列とするならば距離が離れ過ぎている。そのため、対をなすピット列と想定したが、



第60図 SX-05 実測図

どのような目的・用途があったかは不明である。また今回は双方の間に関連性があると考えたが、確証は得られていない。

遺物は南側の壁際から、須恵器の坏身や土師器の小壺などが出土した。出土した須恵器の特徴から6世紀後葉の造構ではないかと思われる。

#### 土師器：壺（第61-1・2図、図版69）

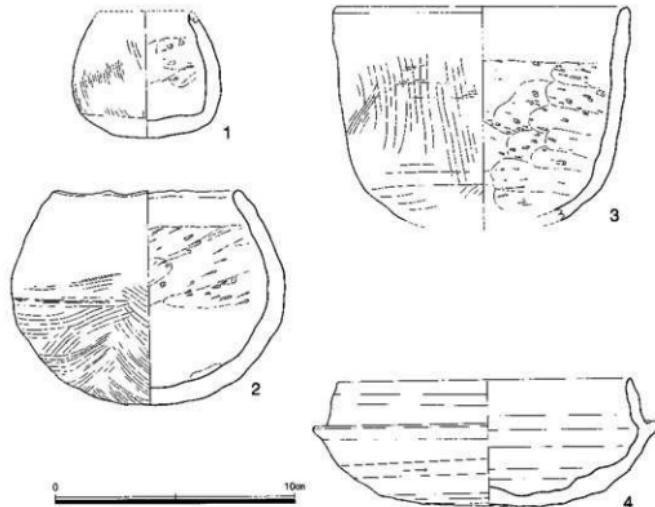
1は小型無頸壺で、口縁部が欠損しているもののほぼ完形である。口径は推定4.0cm、器高5.1cmを測る。胴部外面は部分的に縦ハケ目とナデ、内面はヘラ削りで調整されている。2は無頸壺で、口径は7.8cm、器高は8.8cmを測る。球状を呈し、口縁部は大きく内消する。胴部外面は多方向にナデとハケ目、内面は胴部にヘラ削り、口縁・底部はヘラ削り後にナデ消されている。

#### 土師器：塊（第61-3図、図版69）

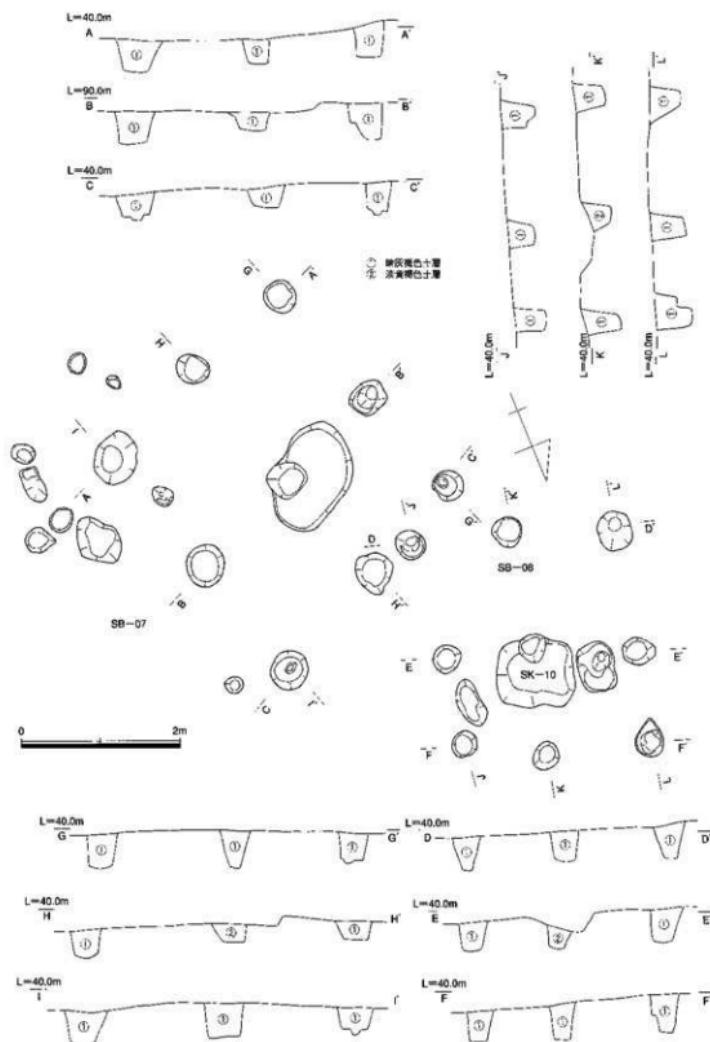
口径は推定12.4cmを測り、形状はやや綿長である。口縁部は外傾気味に開き、胴部は直線的に下りる。口縁部外面はナデ、胴部外面にハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。

#### 須恵器：坏身（第61-4図、図版69）

口・受部径は12.3・14.5cmを測る。立ち上がりは長く、端部は段がないもの先細って尖る。坏部は内消し、丁寧な回転ヘラ削りで仕上げている。焼成がやや不良なため、軟質で磨耗しており判別しにくくなっている。技法的特徴から、6世紀後葉のものと思われる。



第61図 SX-05出土土器実測図



第62図 SB-07・08実測図

### S B - 0 7 · 0 8

(第62図、図版16)

SX-05の北東隣にほぼ接するように検出された、2間×2間の総柱の掘立柱建物跡2棟である。07・08のピット計測値は表1のとおりである。07の規模は東西295～305×南北312～344cmを測る。中心軸は東へ約20度ずれている。ピットの配列はあまりずれず1列に整然と並んでいる。

ピットの間隔は東西間がほぼ等間隔(±15cm)であるのに対して南北間は±38cmとややばらつきがある。柱穴間の距離も西側が短いのに対し東側が長く、平面形も台形状を呈する。

08は規模が東西232～257×南北260～283cmを測り、中心軸は西に約12度にずれる。ピットの配列は南北から2・3列目の中心ピットがややずれているものの、1列に並んでいる。ピットの間隔は東西間が±32cm、南北間は±40cmと等間隔とは言えない。また2～3列目が、1～2列目に比べて間隔が短い。ややいびつであり、平面形は北側が短く、台形状を呈する。

床面から遺物は出土しなかったものの、土層からは須恵器や土師器が出土した。それらの遺物から、6世紀後半もしくはそれ以前の遺構ではないかと考える。

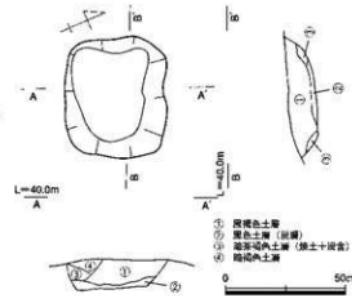
### ○SK-10 (第63図)

SB-08の中央ピットに重複するように検出された土壙である。平面形は隅丸長方形で、規模は上端が長軸東西方向95cm、短軸南北方向72cm、下端が長軸東西方向72cm、短軸60cm、深さ9～17cmを測る。土層断面から、最下層は炭層である黒色土で、左右両側にも焼土・炭を含んだ暗茶褐色土が確認されたことから、“こ炭焼”の土壙と思われる。遺物が出土しなかったため時期の特定には至らなかったが、検出面がSB-08の中央ピットよりも上層であったことから、08よりも新しいと考えられる。

	形 状	上端径	下端径	深	さ	距 離
A①	不整円形	60	40	30		155
A②	不整円形	38	26	32		145
A③	方 形	40	29	44	計 295	
B①	円 形	50	35	22		135
B②	隅丸長方形	45	32	29		150
B③	隅丸長方形	45	15	46	計 305	
C①	円 形	50	10	29		160
C②	円 形	45	32	19		140
C③	円 形	32	8	38	計 300	
G①	方形に近い	40	38	44		170
G②	隅丸長方形	40	15	16		142
G③	円 形	40	10	28	計 312	
H①	不整円形	40	25	32		180
H②	隅丸長方形	46	27	20		152
H③	円 形	46	30	19	計 332	
I①	不整円形	55	30	36		178
I②	円 形	50	39	22		164
I③	円 形	45	6	39	計 342	

	形 状	上端径	下端径	深	さ	距 離
D①	円 形	36	15	43		125
D②	円 形	36	27	33		132
D③	円 形	42	17	36	計 257	
E①	円 形	33	23	32		110
E②	不整円形	35	21	36		132
E③	円 形	41	26	36	計 242	
F①	円 形	30	21	37		100
F②	円 形	32	19	48		132
F③	不整円形	35	19	48	計 242	
J①	円 形	37	10	43		150
J②	円 形	34	23	32		110
J③	円 形	31	25	37	計 260	
K①	不整円形	38	30	33		146
K②	円 形	35	20	36		137
K③	円 形	35	20	36	計 283	
L①	円 形	50	17	36		160
L②	円 形	37	23	48		112
L③	不整円形	48	26	48	計 273	

表2 SB-07・08ピット計測表



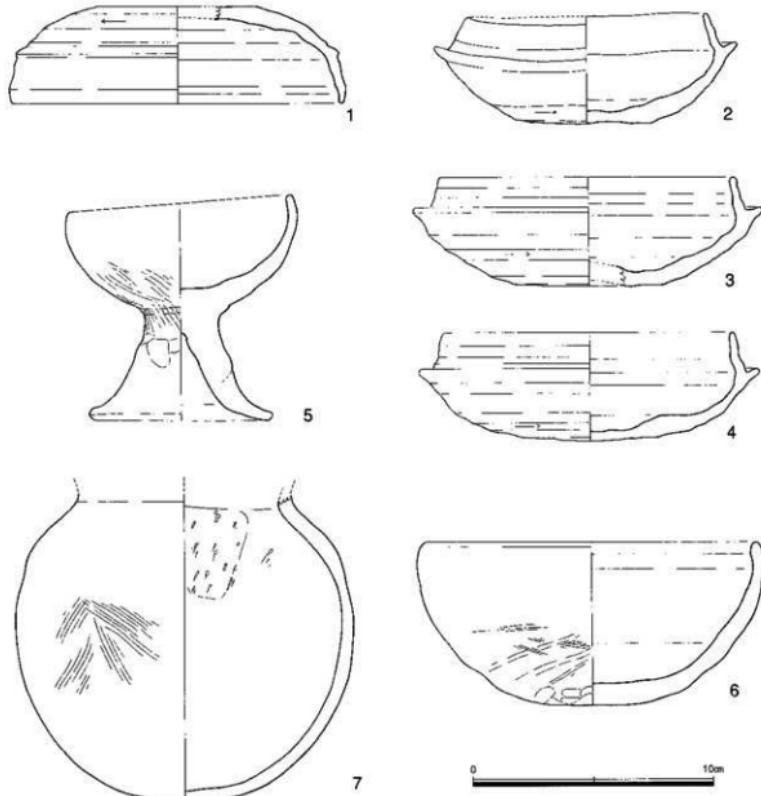
第63図 SK-10 実測図

須恵器：蓋（第64-1図、図版70）

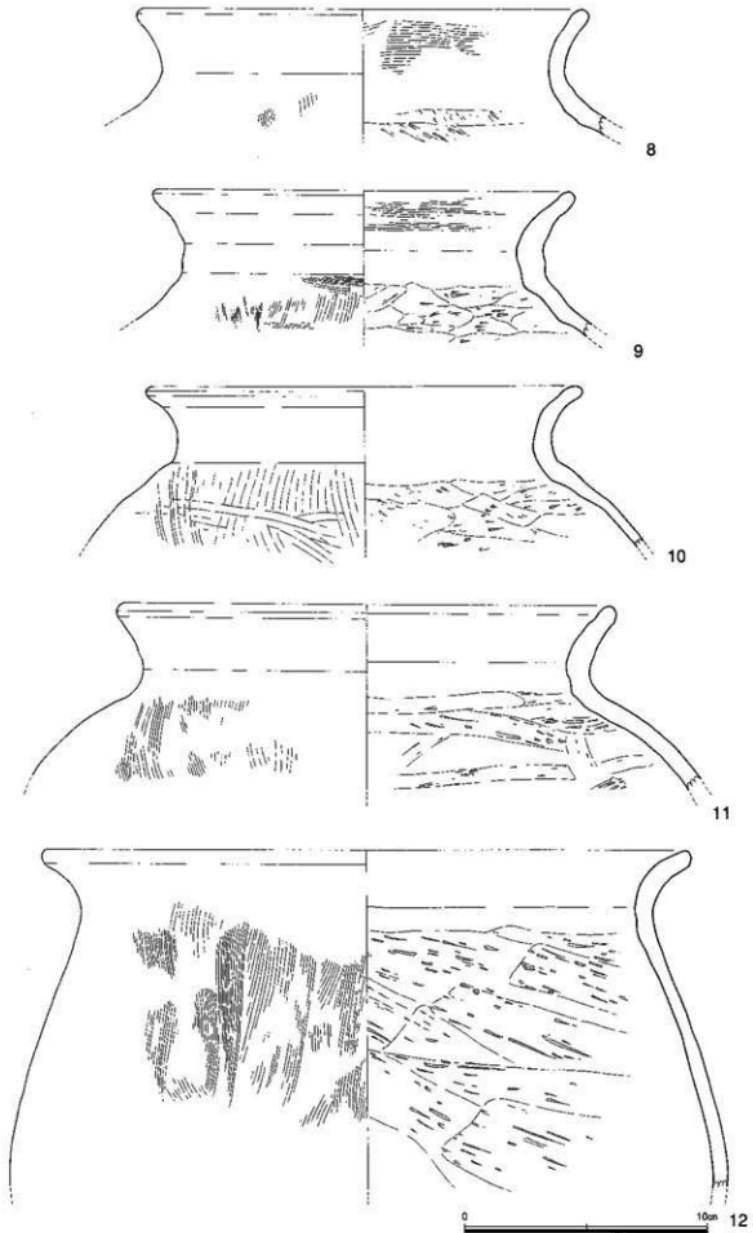
推定口径13.8cmを測り、口縁部は垂直気味に下り、端部は先細りわずかに内傾する。肩部は張り、鈍い沈線によって後が強調されている。天井部は水平で、回転ヘラ削りで仕上げている。焼成はあまり良くなくやや軟質で、6世紀後葉のものと思われる。

須恵器：坏身（第64-2～4図、図版70）

2は口・受部径9.9・12.6cmを測る。焼き歪みが激しく、立ち上がりは直線的に内傾し、受部は斜め上方に突出する。坏部は深く内湾し、底部は平底でやや雑な回転ヘラ削りで仕上げている。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。3は口・受部径が推定12.4・14.6cmを測る。焼き歪みが見られ、立ち上がりは直線的でやや内傾し、受部は水平気味に突出する。坏部は張らず、底部は平底でやや雑な回転ヘラ削りが見られる。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。4は口・受部径が推定12.1・14.2cmを測る。立ち上がりは長くほぼ垂直で、受部は短い。坏部は扁平気味だが内湾し、回転ヘラ削



第64図 SB-0708周辺上層部出土土器実測図(1)



第65図 SB-07・08周辺上層部出土土器実測図(2)

りで仕上げている。器壁は薄手である。焼成はあまり良くなく、乳白色でやや軟質である。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。

#### 土師器：高环（第64-5図、図版70）

口径9.2cm、器高9.3cmを測る。坏部は深く内湾する“塊形”を呈し、口縁部はわずかに内傾する。脚部は厚手で、端部は大きく反り接地する。坏部外面はナデ・ハケ目、脚部との継目にはハケ目で調整され、脚部には部分的に削りのような痕跡が見られる。

#### 土師器：壺（第64-6図、図版70）

推定口径14.2cm、器高は6.7cmを測る。全体的に球状をなし、口縁端部はわずかに内傾する。調整は内面及び外面口縁部付近はナデ、胴部外面は部分的なハケ目、底部はヘラミガキで調整されている。

#### 土師器：壺・甕類（第64-7図、図版70）

口縁部を欠いている。残存高12.7cmを測り、やや小型である。胴部外面は部分的なハケ目・ナデ、内面はヘラ削り後ナデで調整されている。

#### 土師器：甕（第65-8～12図、図版70）

8は推定口径18.8cmを測る口縁部小片である。口縁部は短く緩やかに外に開き、端部は丸く肥厚する。口縁部内面に横ハケ目が見られる。9は推定口径17.6cmを測る口縁～頸部にかけての小片である。口縁部は短くやや直線的に外に開き、端部は丸く肥厚する。頸部から胴部に向かって緩やかに外に広がっていく。口縁部内面に横ハケ目、頸部外面に縦ハケ目、内面にヘラ削りが見られる。10は推定口径18.2cmを測る、口縁～肩部にかけての小片である。口縁部は湾曲して外に開き、端部は丸く仕上げる。肩部外面はハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。11は推定口径20.8cmを測る、口縁～肩部にかけての破片である。口縁部は短く肥厚し、直線的に外傾して端部は丸くおさめる。肩部から張り出す。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。12は推定口径27.0cmを測る、口縁～中胴部にかけての破片である。口縁部は短く肥厚し、大きく屈曲する。頸部から胴部に向かってわずかに膨らむものの直線的に下りる。調整は口縁部内外面にナデ、胴部外面は縦ハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。



第66図 SK-11 実測図

#### ○SK-11（第66図、図版16）

SB-07・08の南側3m地点から検出された土器で、平面形は不整円形を呈する。上端径95～112cm、下端径30～45cm、深さ44～49cmを測る。埋土には若干の炭が含まれるもの、焼土等は検出されなかった。遺物は②～④層まで出土したが、第67図に示したものは全て④層（暗灰褐色土）から出土したものである。土器のみの出土のため、時期の特定には至らなかった。

#### 土師器：壺（第67-1～3図、図版71）

1は推定口径12.4cmを測り、口縁端部は大きく内湾する。全体的にナデ調整だが、口縁部外面や下方で

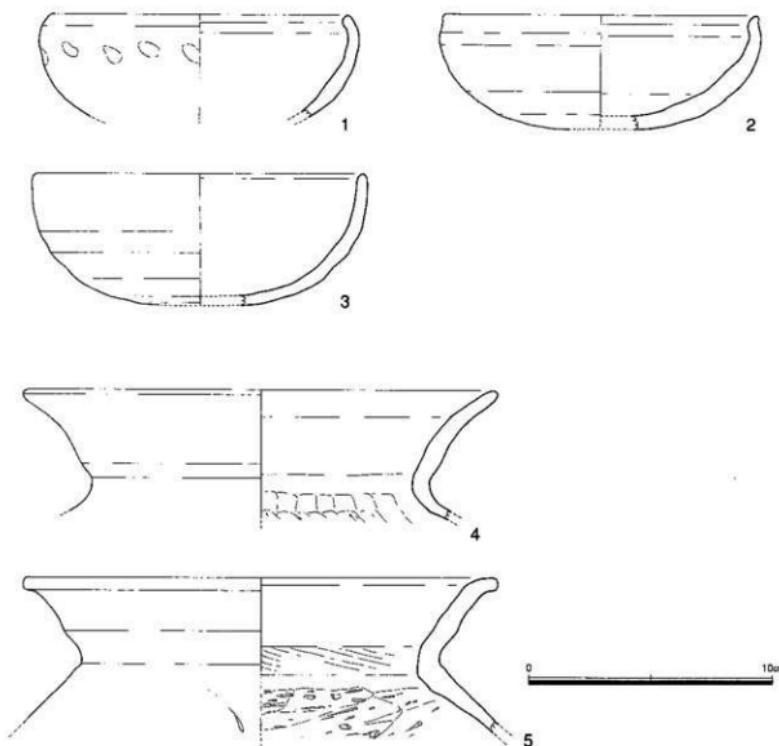
指頭圧痕が約1cm間隔で見られる。2は推定口径13.0cmを測り、口縁部はくびれ、端部はわずかに外傾し、先細りする。胴部は内済気味で、底部は丸底である。3は推定口径13.7cmを測り、口縁部は単純に丸く仕上げておおり、全体的に薄手である。1～3の中で最も大型である。

土器器：甕（第67-4・5図、図版71）

4は推定口径19.6cmを測る口縁部小片である。口縁部は外に大きく開き、端部はやや細くなるものの丸く仕上げている。頸部は鋭く屈曲している。口縁部内外面共にナデ、頸部内面はハラ削りで調整されている。5は推定口径19.6cmを測る、口縁～肩部にかけての破片である。口縁部は外側に大きく開き、端部は更に水平に伸びる。頸部は鋭く屈曲し、各部位の境目が明瞭である。頸部内面はハケ凹、胴部はハラ削りで調整されている。

○SK-12（第68図、図版17）

SB-09の北側3.8mの位置から検出された土器で、平面形は隅丸長方形、断面形は方形に近い逆台形を呈する。北側が南側に比べて幅狭くなっている。上端は長軸南北方向176cm、短軸東西方向48cm、



第67図 SK-11出土土器実測図

下端は長軸南北方向168cm、短軸東西方向40cm、深さ28cmを測る。

検出された地点は比較的平坦な所で、本遺跡群内でも高い所に位置する。調査前に地形は段状地形で畑か何かに使用されていたような地形であった。検出時には盛土のような痕跡は見当たらず、削平されてしまっていたのか、それとも調査時の重機による表土掘削で削平してしまったかはわからないが、周辺を見てもそのような痕跡は見当たらなかった。

北側に長さ136×36cmの長方形の土壌のようなものによって一部削平されているが、この土壌のようなものとは関係がないものと思われる。埋土には炭を含んだ層が見られるが、遺物は出土せず、用途や時期に関しては不明であるが、SK-12よりも新しいものである。

東南隅から須恵器が出土した。まず検出面からは輪状つまみを持つ蓋が、その直下から底部に静止糸切り痕を持つ高台付坏が出土した。双方とも真逆に、蓋はつまみを下に、坏は高台を上に向けて出土した。これらの遺物はセット関係にあったと思われる。埋土からその他の遺物は出土せず、床面からも出土しなかった。

SK-12は盛土を伴わない木棺直葬の墓壙ではないかと思われる。副葬品は出土しなかったが、出土した須恵器は墓壙上に供献されたもので、木棺が腐朽・消滅してしまった際に土中に入り込んだものと考えられる。出土した須恵器の特徴から8世紀代の遺構と思われる。

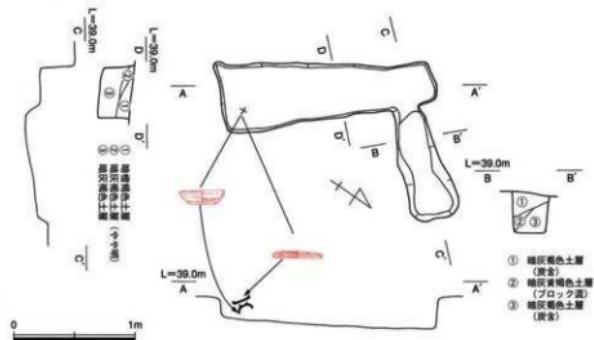
本遺跡内の遺構は6～7世紀代の遺構が中心であるのに対し、SK-12は8世紀代の遺構であり、これ以外には同時期の遺構は検出できなかった。何らかの形で本遺跡はこの時期まで存続していたと考えられる。

#### 須恵器：蓋（第69-1図、図版71）

口径16.0cmを測る輪状つまみの蓋である。口縁部は垂直に屈曲し、端部はわずかに外傾する。天井部は平坦面を持ち、静止糸切り後に回転ヘラ削りで調整されており、その後に輪状つまみを貼り付けている。8世紀代のものと思われる。

#### 須恵器：高台付坏（第69-2図、図版71）

口径14.5cm、底径9.5cm、器高4.4cmを測る高台付坏である。口縁部は張らずに立ち上がり、端部は先細り丸くおさめる。底部は静止糸切り後に高台を貼り付けている。高台は垂直に付き、接地面を持

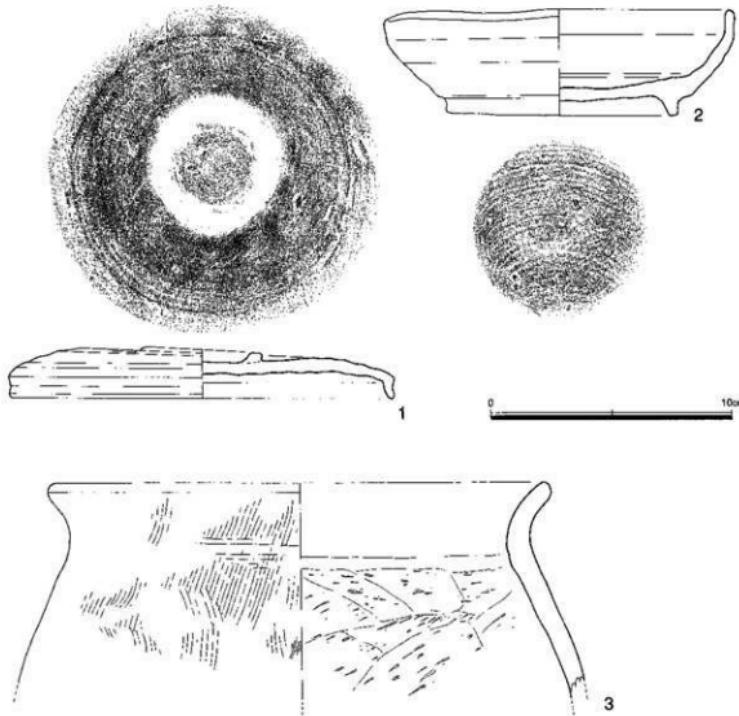


第68図 SK-12 実測図

つ。8世紀代のものと思われる。

**土師器：甕**（第69-3図、図版71）

推定口径21.0cmを測る甕の口縁～肩部にかけての破片である。口縁部は短く、緩やかに外反しながら開く。肩部は張らずに、やや直線的に下りる口縁～肩部外面は継ハケ目、肩部内面はヘラ削りで調整されている。



第69図 SK-12出土土器実測図

○SB-09 (第70図、図版16)

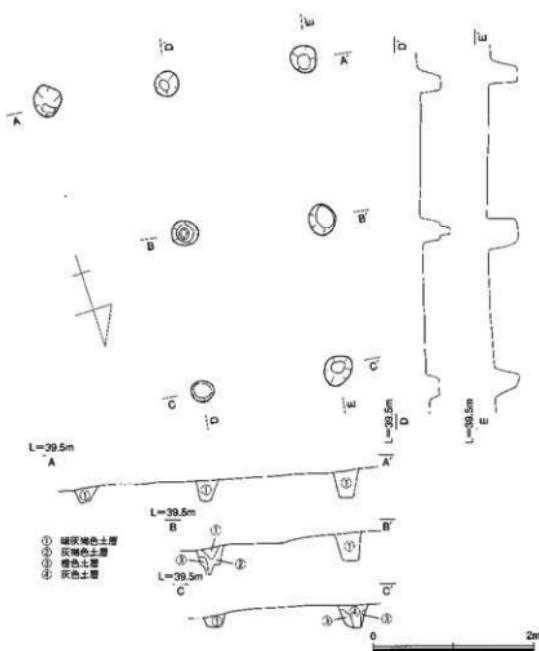
SB-08の西側4.5m地点から検出された掘立柱建物跡である。規模は東西325×南北374cmの中に計7穴の柱穴らしきピットを確認した。各ピットの計測値は下記の通りである。梁行きが桁行きに比べてやや短く、最東側は1穴しか検出できなかったが、他の2穴があった可能性もある。床面は西側から東側に向けて徐々に下がっていく。遺物は出土せず、時期の特定はできなかった。

	形 状	上端径	下端径	深 さ	距 離
A①	円 形	30	12	15	150
A②	円 形	30	15	25	175
A③	円 形	30	15	30	計 325
B①	円 形	33	8	24	175
B②	円 形	35	22	36	
C①	円 形	27	20	9	175
C②	円 形	35	10	28	

	形 状	上端径	下端径	深 さ	距 離
D①	円 形	30	15	25	185
D②	円 形	33	8	24	195
D③	円 形	27	20	9	計 380
E①	円 形	30	15	30	187
E②	円 形	35	22	36	185
E③	円 形	35	10	28	計 372

\*単位はcm

表3 SB-09ピット計測表

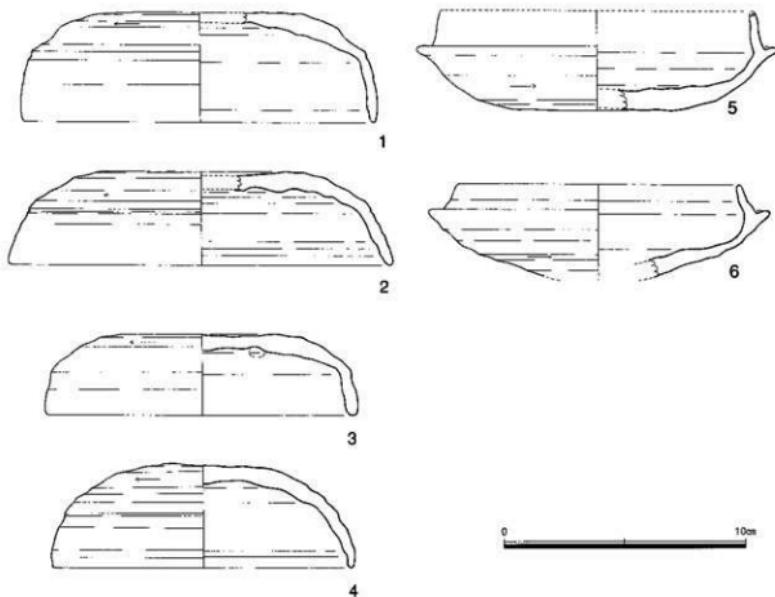


第70図 SB-09実測図

ここでの谷状地形とは、南側の東西に伸びる尾根と北側の南北に伸びる小丘陵との間にできた凹状地形のことである。ここからは須恵器や土師器など多くの遺物が出土した。しかし遺構は確認されず、南北両側上方から土砂と共に流れ落ちて入り込んだと思われる。この地点ではかなりの土砂が堆積しており、現地形ではそのような窪地は確認できなかった。ここでそれらの一部を取り上げ図化した。

須恵器：蓋（第71-1～4図、図版72）

1は推定口径14.6cmを測る。天井部は平坦で肩は張り出し、口縁部に向けて垂直に下がる。回転ヘラ削りは天井部から肩部にかけて比較的丁寧に施され、肩部はナデによって稜が強調されている。口縁部内面は端部や上方に形骸化した沈線が見られ、わずかな段になっている。6世紀後葉のものと思われる。2は推定口径16.0cmを測る。天井部は水平で、肩はやや張り出している。口縁部に向けて外に開きながら下りる。天井部は比較的丁寧な回転ヘラ削りが見られ、肩部はナデによって稜が強調されている。口縁部内面は端部や上方に形骸化した沈線が見られ、口唇部は丸く仕上げている。6世紀後葉のものと思われる。3は口径13.0cmを測る。天井部は水平で肩は張り出し、口縁部に向けて垂直に下がる。天井部はやや雑な回転ヘラ削りで、肩部はナデによって稜が強調されているものの形骸化している。口縁部内面の端部上方には沈線がなく、口唇部は丸く肥厚している。天井部外面には、ヘラ起こし痕、内面には指頭圧痕が残っている。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。4は口径12.4cmを測る。天井部はやや丸くドーム型をしている。肩はあまり張り出さずに、口縁部に向けて緩やかにカーブしながら下りる。天井部の回転ヘラ削りはやや雑で、その後にナデ調整が行われ、肩部は沈線によって稜を強調しようとしているが、形骸化している。口縁部内面の端部や上方に沈線を1条巡らし、口唇部は先細りする。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。



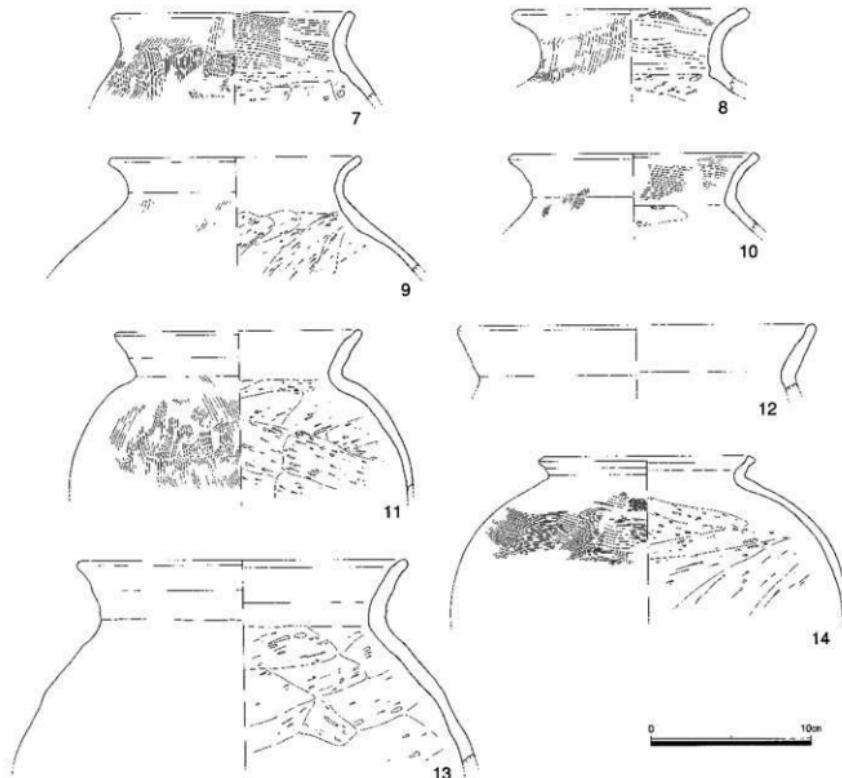
第71図 谷状地形出土土器実測図（1）

**須恵器：壺身（第71-5・6図、図版72）**

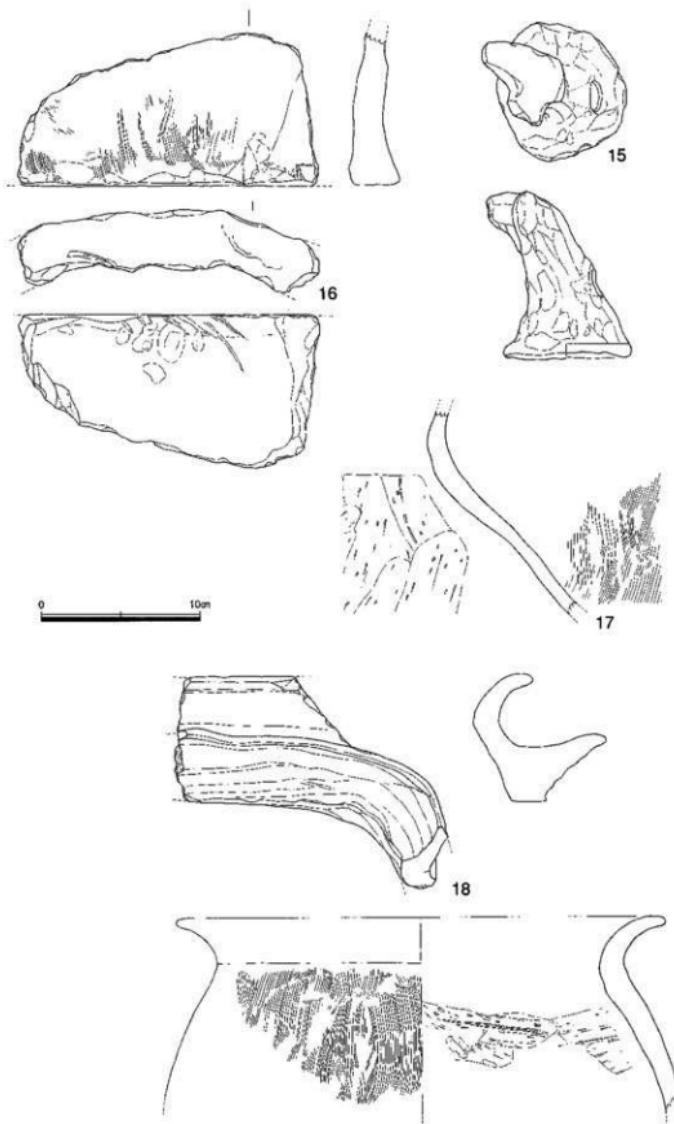
5は口・受部径が推定13.0・15.0cmを測る。口縁端部は欠損しているものの立ち上がりは垂直である。壺部はやや扁平で、底部は平底を呈する。底部には回転ヘラ削りが施されている。全体的に焼き重んでおり、底部の一部に自然釉が付着している。6は口・受部径が推定10.8・14.2cmを測る。立ち上がりは内傾し、受部は斜め上方に短く伸びる。壺部は扁平で、底部は丸底になると思われる。

**土師器：甕（第72-7～14図、図版72・73）**

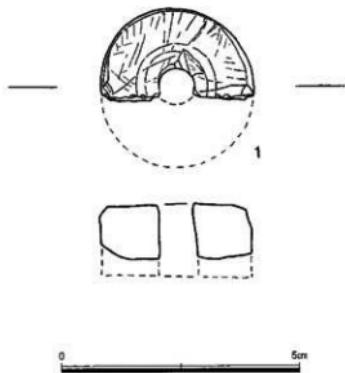
7は推定口径15.4cmを測る口縁部片である。口縁部は短く外反し、端部は平坦面を持つ。口縁部外面は縦ハケ目、内面は横ハケ目・ヘラ削りで調整されている。8は推定口径15.0cmを測る口縁部片である。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚し丸い。口縁部外面に縦ハケ目、内面は部分的に横ハケ目が見られる。9は推定口径16.0cmを測る、口縁～肩部の破片である。口縁部は緩やかに外反し、肩部



第72図 谷状地形出土土器実測図（2）



第73図 谷状地形出土土器実測図（3）

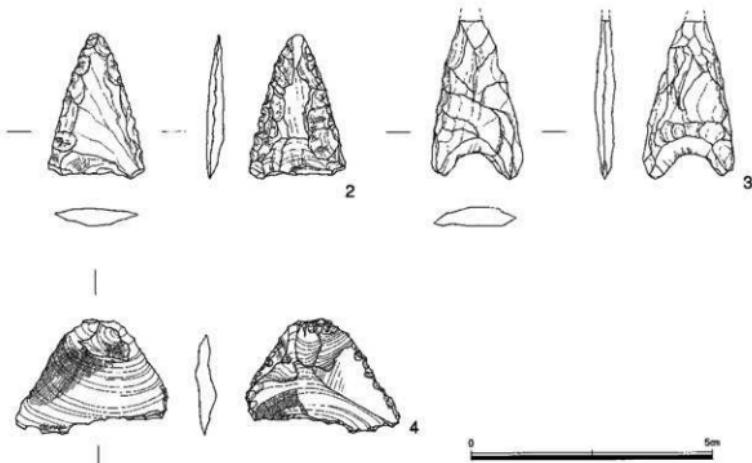


第74図 谷状地形出土石器実測図（1）

は張り出している。肩部外面は部分的なハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。10は推定口径15.8cmを測る口縁～肩部片である。口縁部は外反し、頸部は鋭く屈曲する。口縁部内面に横ハケ目が見られる。11は推定口径15.6cmを測る、口縁～胴部にかけての破片である。口縁部は直線的に外反し、肩部から胴部にかけて丸く張り下がる。胴部外面は継ハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。12は推定口径22.6cmを測る口縁部片である。口縁部は直線的に外反し、わずかに屈曲する。13は推定口径20.8cmを測る、口縁～胴部にかけての破片である。口縁部は直線的に外に広き、胴部はやや張り出しながら下がる。胴部外面はナデ、内面はヘラ削りで調整されている。14は推定口径14.0cmを測る口縁～胴部にかけての破片である。口縁部はかなり短く、口唇部は段を有する。頸部は「く」字状に屈曲し、胴部は丸く張り出しながら下がる。胴部外面は横ハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。

#### 土師器：土製支脚（第73-15図、図版73）

底径8.1cm、器高10.5cmを測るもので、指頭圧痕が見られる。



第75図 谷状地形出土石器実測図（2）

**土師器：壺？（第73-17、図版73）**

壺の頸部か？外面は縦ハケ目、内面はヘラ削りで調整されている。

**土師器：甕（第73-16・18図、図版73）**

16は底径片で、指頭圧痕やハケ目が見られる。18は底部片で、ヘラ削りで調整されている。

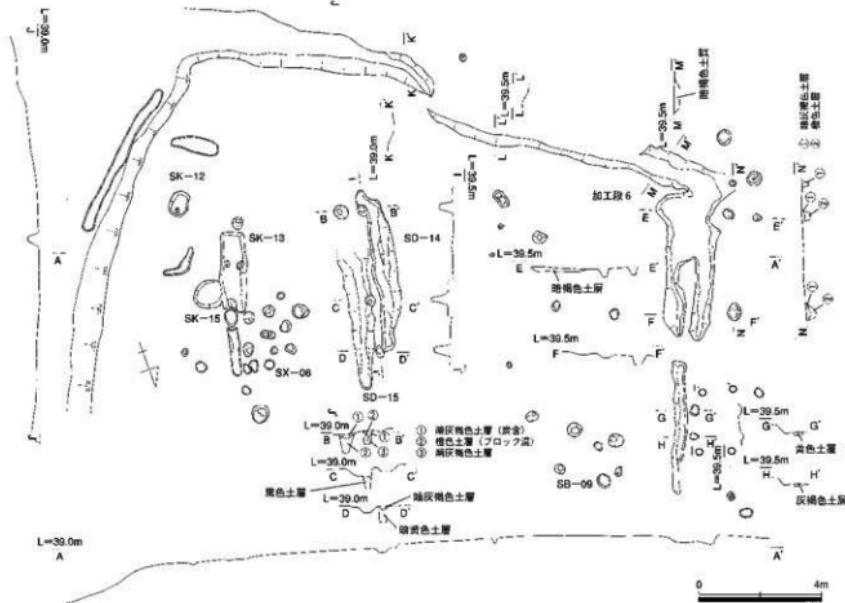
**石器（第74-1図 75-2～4図、図版73）**

1は滑石製の筋鉢車で直径3.2cm、孔径0.7cmを測る。表面に擦痕のようなキズが見られる。2は、長さ2.9cm、幅2.0cm、平基式、サスカイト製の石鏃である。3は先端部が欠損している凹基式の石鏃で、サスカイト製で残存長、3.25cm、幅1.9cmを計る。4は黒曜石の剥片である。

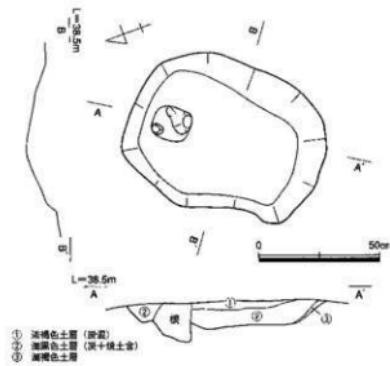
○丘陵頂部平坦面（第76図）

丘陵頂部には東西18×南北15mの平坦面があり、そこから加工段や土壙、溝状遺構などが検出された。しかしながら掘立柱建物跡などの住居跡は検出されなかった。遺物もわずかしか出土しなかった。

頂部平坦面の東側に比較的集中して遺構が検出された。加工段6は、平坦面の南・西側を区切るように加工されたもので東側は斜面になっている。高低差は10cm程度である。SD-14・15は平坦面のほぼ中央から検出され、14は長さ5.1m、上端幅80cm、下端幅30cm、深さ10cmを測り、15は、長



第76図 丘陵頂部平坦面遺構配置図



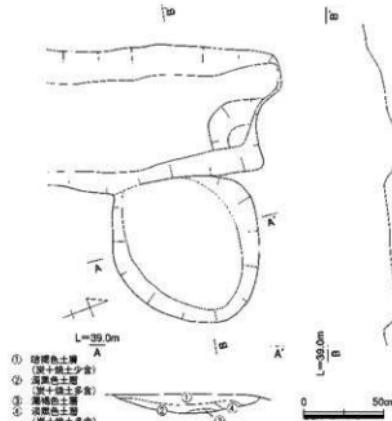
第77図 SK-13 実測図

われる。内部のピットは木の根によるものである。

14は13の北側1.3mの所から検出され、平面形は長方形を呈し、上端が長軸南北方向264cm、短軸東西方向86cm、下端が長軸南北方向250cm、短軸60cm、深さ2~12cmを測る。埋土からは何も出土せず、炭や焼土は含まれていなかった。

#### ○SK-15 (第78図)

SK-14の東側と接して検出され、平面形はほぼ円形を呈し、上端径94cm、下端径70cm、深さ10cmを測る。最下層は炭や焼土を多量に含み、上端縁辺も火を受けた痕跡が見られることから、“こ炭焼”の土壙と思われる。



第78図 SK-15 実測図

さ4.4m以上、上端幅70cm、下端幅20cm、深さ20cmを測り、平面形は共に直線状を呈する。双方の間にピット3穴が1列に並んで検出されたが、関連性や用途などはわからなかった。SX-05は大小17穴のピットが確認されたが、規則性や統一性は見られなかった。

#### ○SK-13 (第77図)

平坦面の東側から検出され、平面形は隅丸長方形を呈し、上端が長軸南北方向83cm、短軸東西方向60cm、下端が長軸南北方向65cm、短軸東西方向43cm、深さ3~10cmを測る。埋土は炭や焼土が多量に含まれていることから“こ炭焼”的土壙と思われる。

前述したように遺物がほとんど出土せず、遺構からは全く出土しなかったため、遺構の時期の特定はできなかった。出土した遺物も大部分が土師器の細片であり、須恵器はわずかでしかも細片であった。



第79図 丘陵頂部平坦面出土土器実測図

土器器：瓶（第79図、図版80）

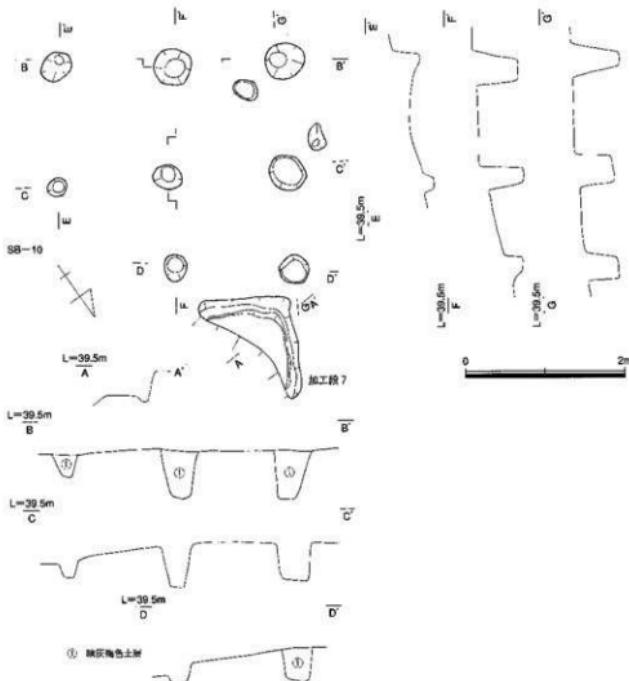
推定口径20.0cmを測るもので、わずかに外反しながら立ち上がる。外面にはハケ目がわずかに残り、内面はヘラ削りが見られる。

○SB-10、加工段7（第80図 図版20）

	形 状	上端径	下端径	深 さ	距 隅
B(1)	不 規 形	32	10	25	145
B(2)	円 形	47	25	55	130
B(3)	円 形	50	20	60	計 1275
C(1)	円 形	25	13	20	140
C(2)	円 形	37	16	54	150
C(3)	円 形	45	33	35	計 290
D(1)	円 形	30	20	22	150
D(2)	円 形	37	30	40	

	形 状	上端径	下端径	深 さ	距 隅
E(1)	円 形	23	15	13	160
E(2)	不 規 形	35	10	4	
F(1)	円 形	32	18	9	110
F(2)	円 形	30	20	44	130
F(3)	円 形	45	22	55	計 240
G(1)	円 形	36	27	37	125
G(2)	円 形	44	33	33	135
G(3)	円 形	43	20	59	計 260

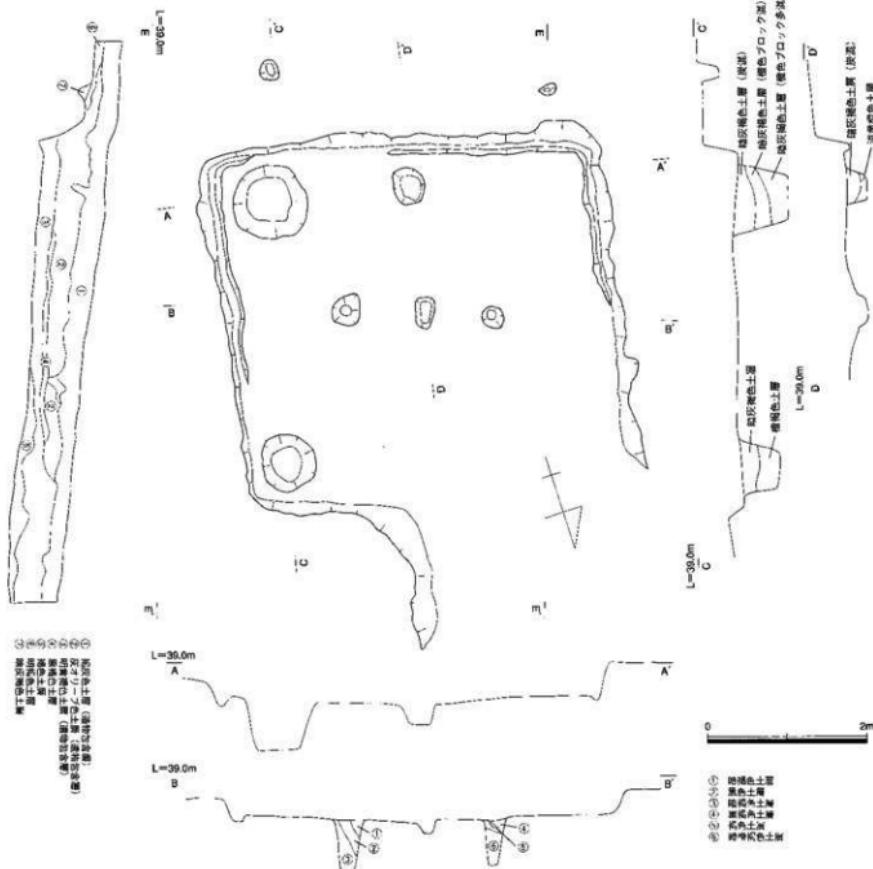
※単位はcm



第80図 SB-10、加工段7実測図

丘陵頂部平坦面の北西隅から検出された掘立柱建物跡で、東西275×南北265cmに柱穴らしきピットが8穴確認された。ピットの計測値は表3の通りである。柱穴の配置はやや歪んでいるものの、「田」字状を呈する。北東隅は北側平坦面を加工する際に頂部平坦面を削削しており、その時に消滅してしまったと思われる。遺物が出土しなかったため、時期の特定はできなかった。

加工段7は、SB-10の北隣から検出された加工段状造構で、大部分は先述したように北側平坦面造成時に消滅してしまったと思われる。現状では「田」字状に残っており、側溝を伴っている。東西1.1×南北1.2m、溝の下端部5~8cm、深さ2~4cmを測る。遺物が出土しなかったため、時期の特定はできなかった。



第81図 S I - 0 2 実測図

### ○ S I - 0 2 (第81図、図版20)

SB-08の北側、1段下がった所から検出された堅穴式住居跡である。東西5×南北4.8mのほぼ正方形を呈している。3方（南側・東側・西側）は壁があるが、北側は約2m程しかなく、口が開いたような状態である。側壁の高さは20~50cmを測り、壁に沿うように溝が掘られている。しかし溝は全周には至らず、途中で途切れる。溝の下端幅は約5cm、深さも5cm程度である。

東側の壁からは大型の土壙が2基検出された（SK-01・02）。01は南側で検出され、平面形は円形を呈し、上端径90cm、下端径55cm、深さ65cmを測る。02は北側で検出され、平面形は円形を呈し、上端径70cm、下端径45cm、深さ50cmを測る。01からは遺物が出土しなかった。02の橙褐色土からは土師器が出土したが、風化が激しく図化には至らなかった。

ほぼ中央から直径70cm程の円状に焼土が検出され、それを挟むように柱穴と思われるピットが2穴検出された。西側のピットは上端径35cm、下端径15cm、深さ65cmを測り、東側のピットで、上端径30cm、下端径12cm、深さ60cmを測る。焼土を取り除いた下からもピットが検出され、平面形は楕円形、上端が長軸南北方向40cm、短軸東西方向25cm、下端が長軸南北方向27cm、短軸東西方向12cm、深さ15cmを測る。おそらく2本柱の建物が想定され、中央のピットは支柱跡ではないかと思われる。

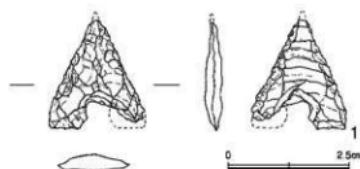
堅穴式住居跡は、床面から石器のみが出土し、土師器や須恵器は①~④層から出土したため、この遺構の時期は特定には至らなかった。①・②層から出土した須恵器が6世紀末~7世紀初頭のものと思われるため、それ以前の遺構ではないかと思われる。

### 石器：石鎌（第82-1図、図版74）

サヌカイト製の石鎌。先端部と脚部の一部がわずかに欠損している。脚部が平らになっており、鎌形式と呼ばれるものである。残存長2.2cm、幅1.95cmを測る。

### ○ S B - 1 1 (第83図、図版21)

SI-01の西東10m地点から検出された掘立柱建物跡である。地山を約5mにわたって掘削・加工したもので、その壁に沿って溝状遺構が2条検出された。側壁は高さ30cm程度を測り、U字を呈する。それに伴う溝状遺構は下端幅5~10cm、深さ3~10cmを測る。それよりも30cm北側外に、上端幅35cm、下端幅8cm、深さ4~9cmの溝状遺構が検出された。検出時に東隅から大量の炭が東西2.8×南北1.2mにわたって確認された。特に東壁には火を受けた痕跡（図版22）が明確に残っており、その周辺の炭層は厚く堆積していた。土層断面A-A'を見ると約5cm程度の炭層（第③層）が堆積していた。この土層断面から、壁際の溝は炭層である第③層の下に④層の暗灰褐色土が堆積していることや、北側の溝が壁際の溝の一部を削平していることから、壁際の溝の方が古いと思われる。



第82図 S I - 0 2 出土石器実測図

しかしながら、遺構全体に炭や焼土が散らばっているわけではなく、一部にのみ確認できた。また北側2m付近にも径50cm程度の焼土跡が確認されたが、土壌等は伴っていなかった。東隅は火災にあった可能性が考えられるが、確証は得られなかった。

柱穴と思われるピットは北側の溝から80cm、更に北側から2穴検出された。東側のピットは上端径25cm、下端径17cm、深さ30cmを測り、西側のピットは、上端径30cm、下端径10cm、深さ20cmを測り、ピット間の距離は230cmを測る。しかし行け行けが検出できなかったため、建物の復元はできなかった。

遺物は床面から出土しなかったが、北側の溝から石器（第84図）が出土し、埋土から須恵器の蓋・坏身等が出土した。埋土から出土した須恵器から、この遺構は7世紀よりも以前のものと思われる。

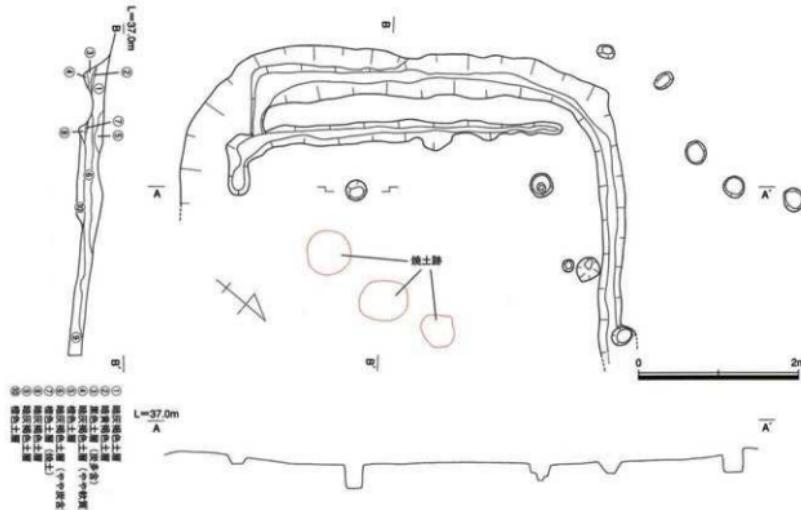
#### 石器：玉類（第84-1図、図版74）

北側の溝の東隅から出土。碧玉製の玉と思われ、中央に径1.5mmの穿孔が見られる。

#### 須恵器：蓋（第85-1・2図、図版74）

1は推定口径13.1cmを測る。形状は天井部はわずかに水平だが、ほぼドーム型を呈する。天井部はやや雑な回転ヘラ削りが見られ、肩部は沈線による稜が見られるものの不明瞭である。口縁部内面や上方にも沈線によって段が付けられているが、これも不明瞭である。口縁端部は先細りする。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。

2は推定口径13.8cmを測る。天井部は丸みがあり、形状はドーム型を呈する。天井部は回転ヘラ削りが施され、一部には工具痕が残っている。肩部は沈線による稜の強調が見られ、口縁端部は明確に内傾し、端部は先細りする。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。



第83図 SB-1 1 実測図

**須恵器：壺身**（第85-3図、図版74）

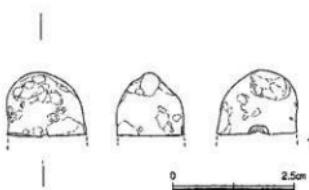
口・受部径が推定10.6・13.0cmを測る。立ち上がりは直線的でわずかに内傾し、受部はやや斜め上方に突出する。壺部は扁平な形状をなすと思われる。

**須恵器：壺**（第85-4図、図版74）

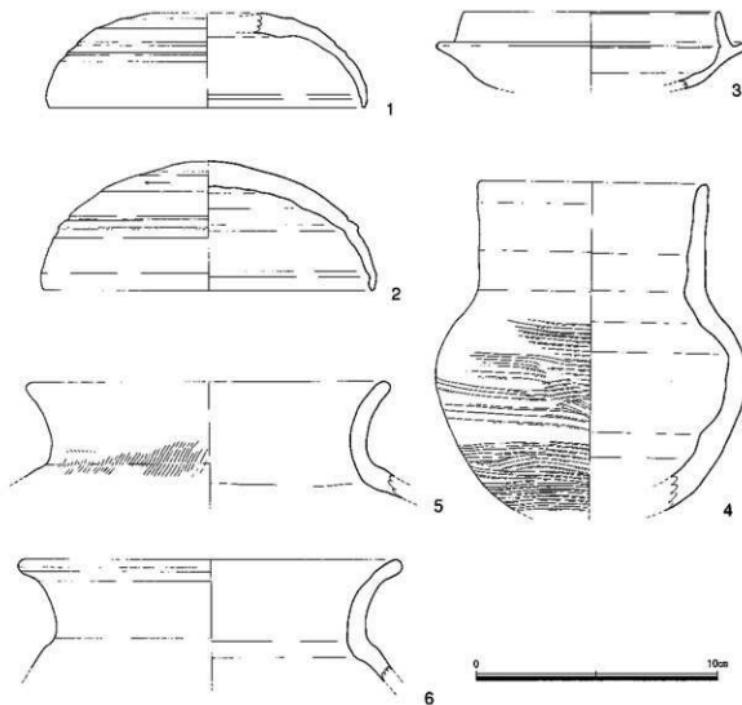
推定口径9.6cmを測る直口壺である。口縁部は垂直で直線的に立ち上がり、胴部はあまり張り出さない。口縁部から頸部にかけて回転ナデ、胴部にカキ凹が施されている。

**土師器：甕**（第85-5・6図、図版74）

5は推定口径15.2cm、6は推定口径16.0cmを測る口縁部片である。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は厚く丸く仕上げている。口縁部は内外面共に横ナデ、頭部外面はハケ目で調整されている。



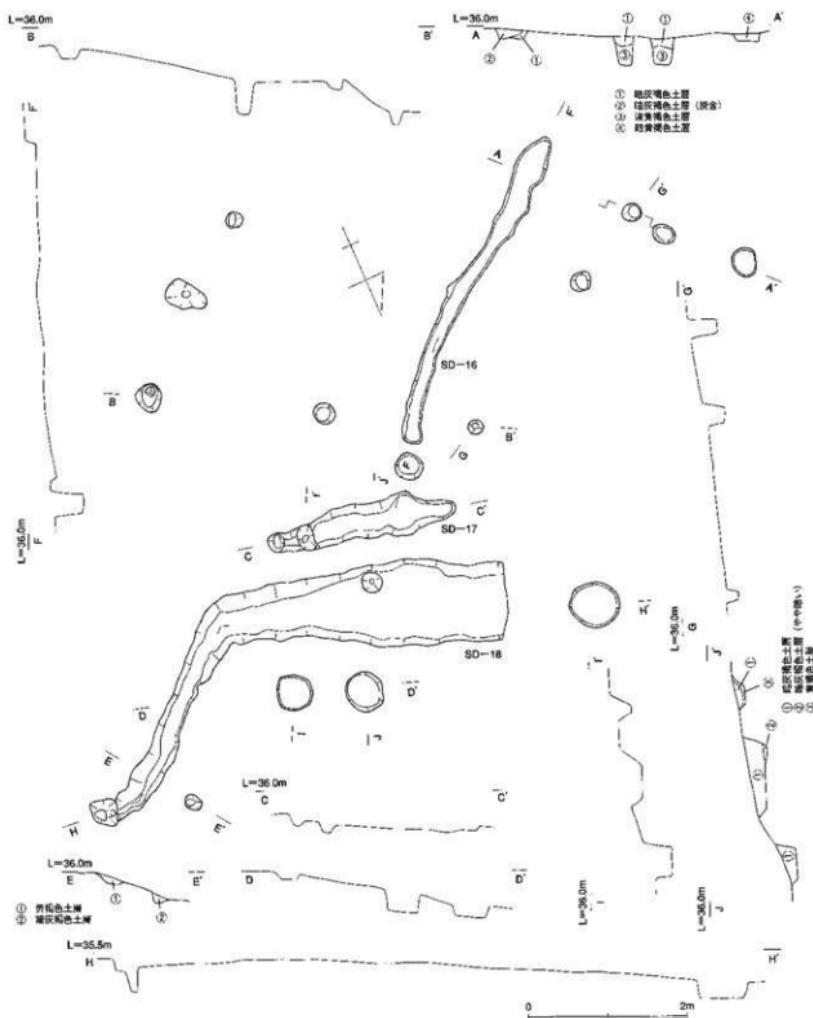
第84図 SB-11出土石器実測図



第85図 SB-11出土土器実測図

○ SD-16～18 (第86図、図版22)

SB-11から検出された3条の溝状遺構である。SD-16は、平面形が直線状で南西-北東方向に走る。全長4.2m、上端幅25cm、下端幅15cm、深さ2～15cmを測る。埋土は炭を含んだ暗灰褐色土であり、その埋土から須恵器の坏身が出土した。この坏身の特徴より、7世紀初頭の遺構と考えられる。



第86図 SD-16～18 実測図

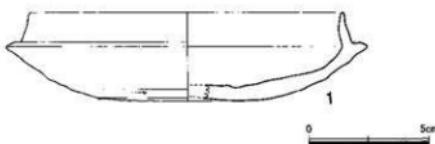
SD-17は16に直交するように北側60cmの所から検出された。平面形は直線状で東西方向に走る。全長2.4m、上端幅45cm、下端幅25cm、深さ20cmを測る。埋土からは遺物は出土しなかったため、時期の特定には至らなかつた。SD-18は16に平行するように約35cm北側から検出され、東西方向に走っていたのが

北東に向きを変えている。平面形は「状で、全長6.5m以上、西側は削平されていた。上端幅30~105cm、下端幅50~90cm、深さ5~15cmを測る。遺物は出土しなかつたため時期の特定には至らなかつた。各々の遺構の時期差や検出されたビット等の関連を含めて不明である。

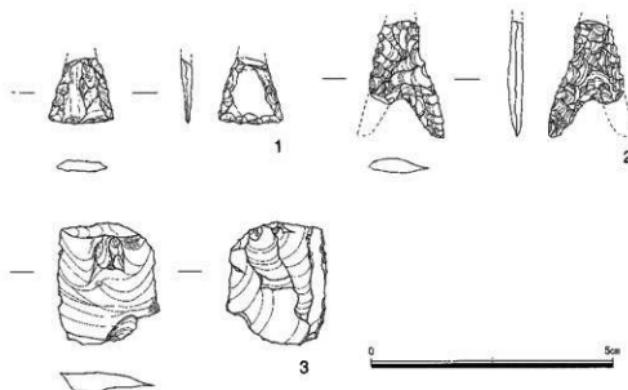
#### 須恵器：坏身（第87-1図、図版74）

口・受部径が推定13.1・15.0cmを測る。立ち上がりは直線的でわずかに内傾し、受部は水平に突出する。坏部は扁平な形状をなし、回転ヘラ削りで仕上げている。

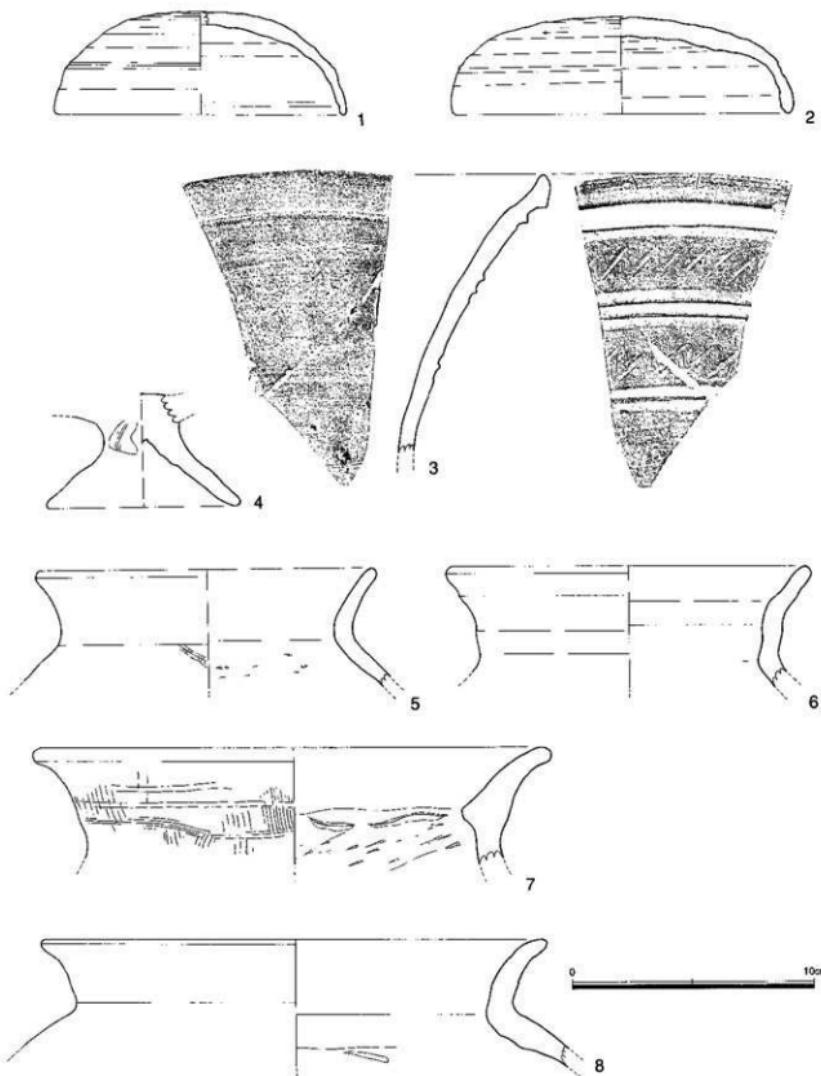
西側の緩斜面はSI-02、SD-16~18の西側にある斜面で、須恵器や土師器等が出土した。



第87図 SD-16出土土器実測図



第88図 西側緩斜面出土石器実測図



第89図 西側緩斜面出土土器実測図（1）

### 石器（第88-1～3図、図版75）

- 1は先端部が欠損したサスカイト製の平基式の石鏃である。残存長1.35cm、最大幅1.3cmを測る。  
2は先端部・脚部が欠損した黒曜石製の凹基式の石鏃である。残存長2.4cm、残存幅1.4cmを測る。3は黒曜石の剥片である。

### 須恵器：蓋（第89-1・2図、図版75）

- 1は推定口径12.1cmを測る。大井部はやや水平な部分はあるが、全体的には丸みを持つ。肩部は若干張り、口縁部は先細りする。大井部はやや雑な回転ヘラ削りが見られ、肩部は形骸化した沈線が1条巡る。6世紀末～7世紀初頭のものと思われる。

- 2は口径14.0cmを測る。大井部は水平を保ち扁平な形状で、肩は大きく張り、口縁部に向けてやや内湾気味に開く。口縁端部は肥厚し丸く仕上げている。天井部は回転ヘラ削りが施され、頂部にはヘラ起こしと思われる痕跡が見られる。肩部は形骸化した沈線が1条巡り、口縁部内面のやや上方に沈線が1条巡らされている。6世紀末～7世紀初頭のものである。

### 須恵器：甕（第89-3図、図版75）

口縁部片で、2段にわたって波状文・凹線が施されている。

### 土師器：脚（第89-4図、図版75）

推定底径8.0cmを測る脚部片である。調整は風化しているため不明である。

### 土師器：甕（第89-5～8図、

第90-9・10図、図版75）

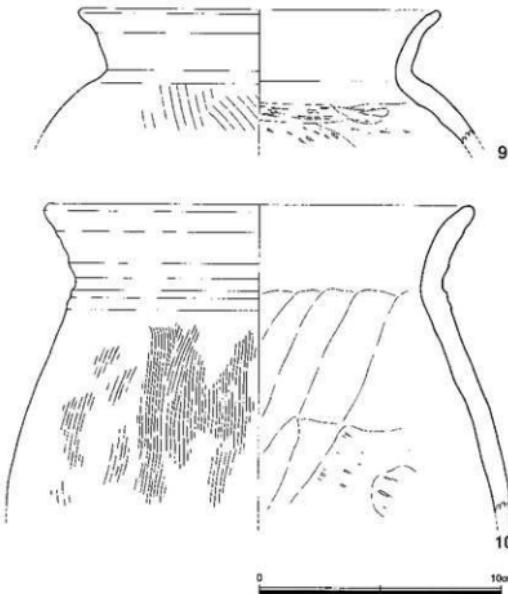
- 5は推定口径14.2cmを測る口

縁～肩部片である。口縁部は直線的に外傾し、端部は先細り丸く仕上げている。6は推定口径15.2cmを測る口縁部片である。

口縁部は若干外に開きながら立ち上がる。内外面共に横ナデで調整されている。7は推定口径21.6cmを測る口縁部片である。

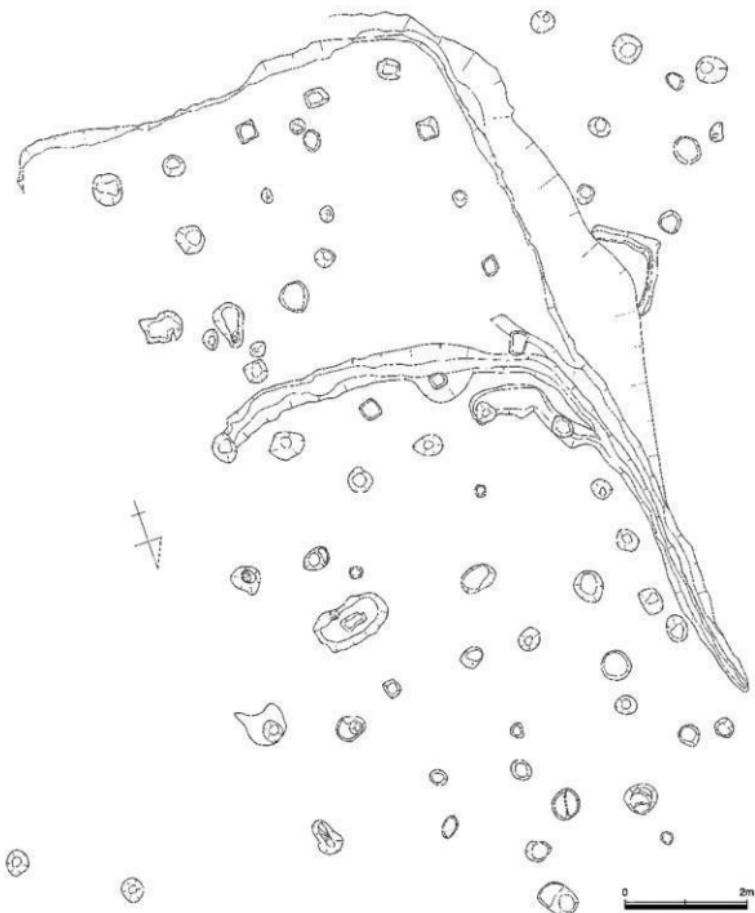
口縁部は大きく外反し、頸部は鋭く屈曲する。口縁部外面はハケ目、内面は横ナデ、頸部はヘラ削りで調整されている。8は推定口径21.0cmを測る口縁～肩部にかけての破片である。口縁部は外反しながら立ち上がる。

頸部より下はヘラ削りが見られ



第90図 西側緩斜面出土土器実測図（2）

る。9は推定口径15.0cmを測る、口縁～肩部にかけての破片である。口縁部は外反しながら立ち上がり、胴部はやや膨らむ。胴部外面はハケ凹、内面はヘラ削りで調整されている。10は推定口径17.8cmを測る口縁～胴部の破片である。口縁部は短く外反しながら立ち上がる。胴部は張らずに直線的に下がる。胴部外面は継ハケ凹、内面にはヘラ削りで調整されている。



第91図 SB-12・13実測図

### ○SB-12・13 (第91図、図版23・24)

SB-12・13は小丘陵の北側を「」状に東西約11.6m、南北約24.4mにわたって削平し高低差約1mを測る平坦面を作り、そこに造構を配置していた。側壁は南西隅を最高所に高さ65cmを測り、東西長7.8m、南北長12.5mを測り、徐々に低くなり最終的には消失する。調査の結果、側壁に沿うように2棟の掘立柱建物跡が検出された。

### ○SB-12 (第92図、図版23・24)

造成された平坦面の北側に作られた掘立柱建物跡で、4×5mの範囲に桁行き3間、梁行き4間を数える。最外周の柱穴だけが検出され、内側には柱穴やその他の造構は検出されず。最東端の柱穴列でも中央のピットが検出されなかった。

柱穴の掘り方の形状は大半が隅丸方形を呈し、四隅の柱穴が内側を向いている。それぞれのピット間の距離は以下の通りである。

- ・ A-A'のピット間の距離（東から）135cm-130cm-135cm：400cm
- ・ E-E'のピット間の距離（東から）155cm-125cm-150cm：430cm
- ・ J-J'のピット間の距離（南から）120cm-120cm-120cm-135cm：495cm
- ・ G-G'のピット間の距離（南から）125cm-240cm-130cm：490cm

※ G-G'間の240cmを測るのは、間のピットが検出されなかつたため、距離が長くなった。

造構はほぼ方形を呈するが、北側に向けてやや広がる形状である。

遺物は南側の壁際から須恵器の壺身や土師器の壺・甕類、竈などが出土地した。出土した須恵器の特徴から6世紀後半の造構と考えられる。

### ○SB-13 (第93図、図版24)

SB-12の北隣から検出された掘立柱建物跡で、12とは異なり溝によって区画された造構である。溝は全長11.8m、上端幅30~50cm、下端幅5~35cm、深さ5cmを測り、平面形は「」状を呈する。

建物は桁行き4間、梁行き4間が想定できるが、南西隅と南東隅の柱穴は検出することができず、平面形は不整六角形を呈する。柱穴は12と同じく最外周の柱穴だけが検出されたが、配列などに規則性はあまり見られない。また内側にはいくつかの柱穴が検出されたが、その他の造構は検出されなかつた。柱穴の掘り方の形状は、西側の柱穴が隅丸方形を呈している。それぞれのピット間の距離は以下の通りである。

- ・ A-A'のピット間の距離（東から）130cm-115cm：240cm
- ・ E-E'のピット間の距離（東から）145cm-95cm-135cm-93cm：468cm
- ・ F-F'のピット間の距離（南から）155cm-200cm-120cm：475cm
- ・ H-H'のピット間の距離（南から）125cm-90cm-105cm-65cm：385cm
- ・ L-L'のピット間の距離（南から）115cm-125cm-165cm：405cm

以上のようにピット間の距離においても均一ではなく、12と比べて雑な柱穴の配置であった。

西側の塙際から須恵器の坏身が出土しており、その特徴から6世紀後半の遺構と考えられる。12との時期差だが、出土遺物では同じ時期のものが出土しており、土層断面からも判断できなかったが、13の溝検出面の直下から12の柱穴が検出されたため、12がやや古いと考えられる。建て替えられたのか、それとも拡張されたのか、不明な点が多い。

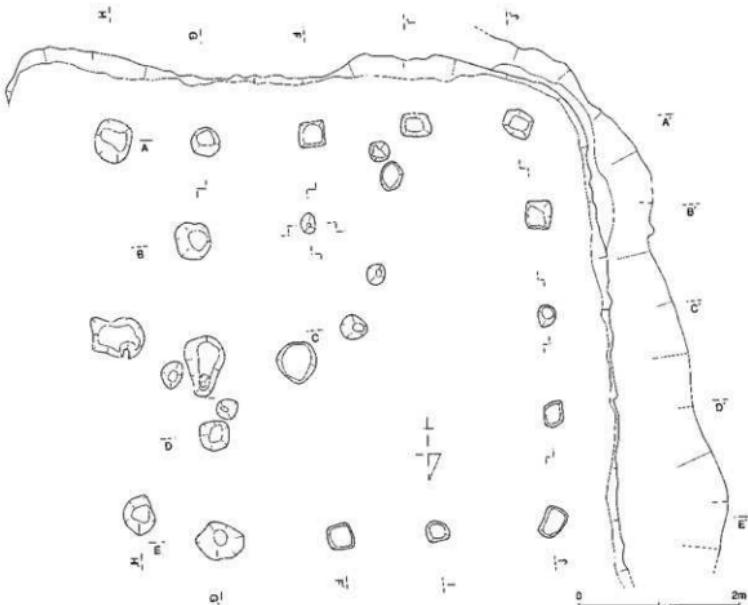
これらの建物跡は本遺跡で検出された他の掘立柱建物跡と比べて一回り大きく、しかも柱穴の掘り方は隅丸方形を呈する。何か特殊な建物が建っていた可能性も考えられる。

以下はSB-12から出土した遺物である。

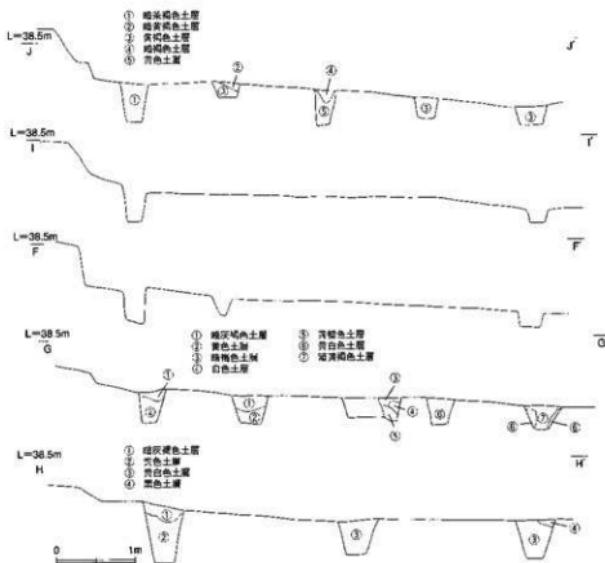
須恵器：坏身（第98-1～4図、図版76）

1は口・受部径いずれも推定で12.4・15.0cmを測る。立ち上がりはわずかに外反しつつ内傾し、受部は丸くおさめ、斜め上方に伸びる。坏部は張らずに直線的に下りる。内外面共に回転ナデで調整し、外面の一部には自然釉が付着している。

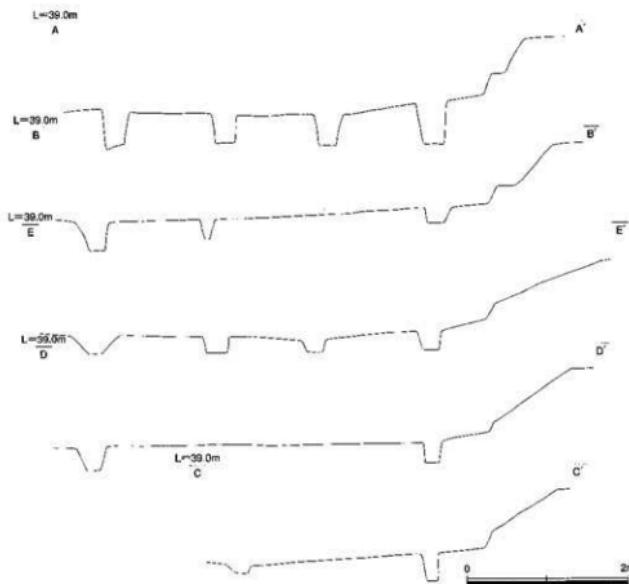
2は口・受部径いずれも推定で径10.2・13.0cmを測る。立ち上がりは薄手で直線的に内傾し、受部は短く肥厚し、丸くおさめる。坏部は直線的に下りるが平底で、内面に不定方向のナデ調整がなされ



第92図 SB-12実測図



第93図  
SB-1 2  
柱穴土層断面図

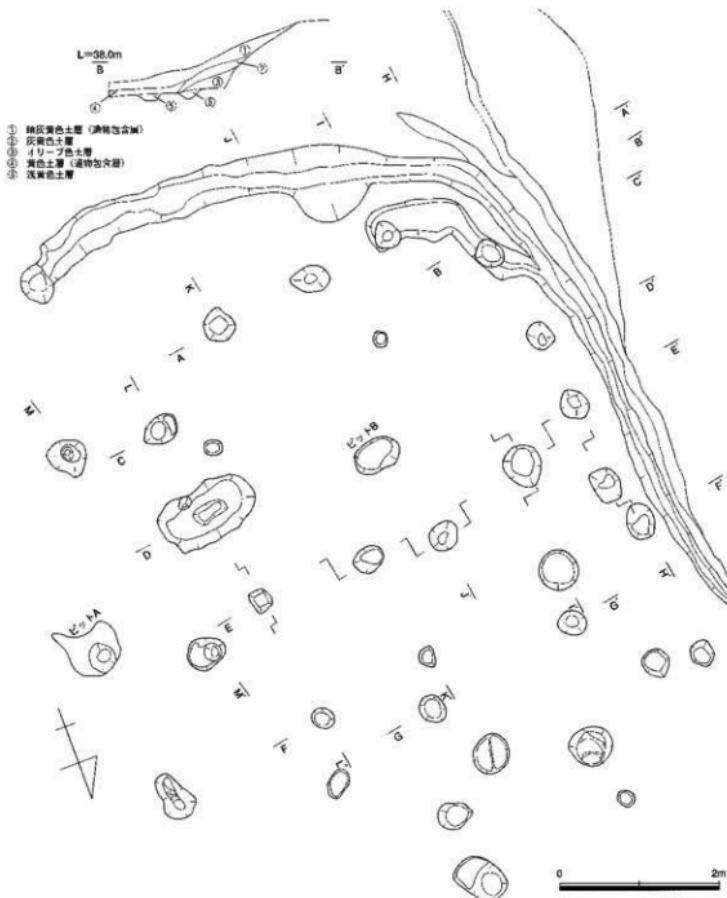


第94図  
SB-1 2柱穴  
エレベーション図

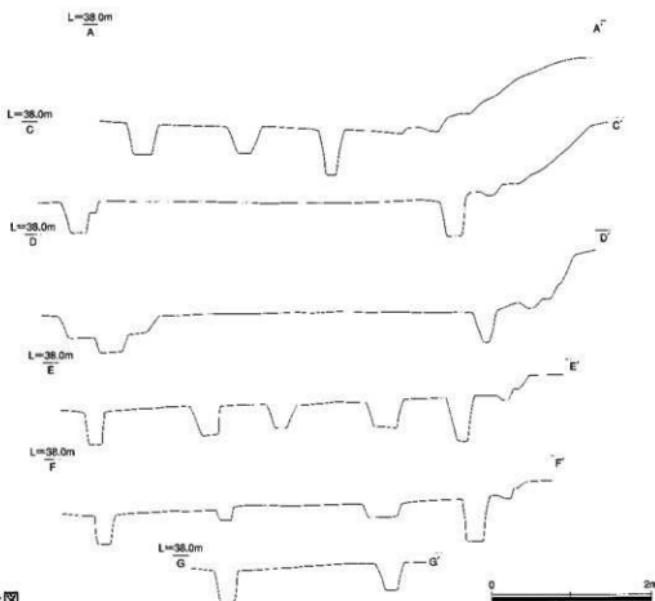
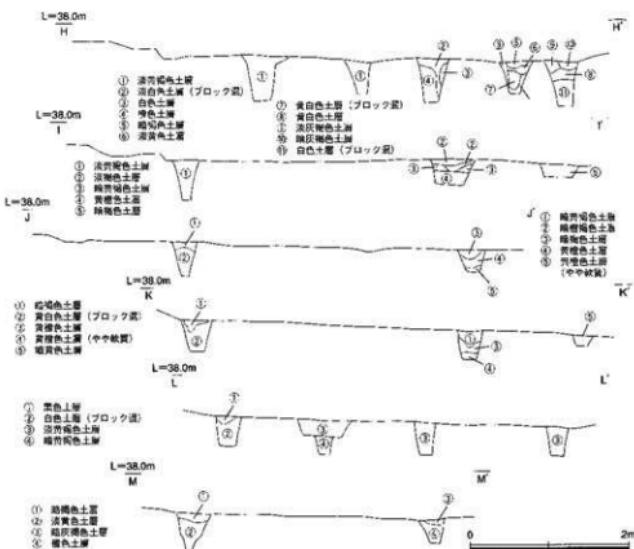
ている。また底部外面には工具痕と思われる痕跡が見られる。

3は口径11.4cm、受部径14.1cmを測る壺身の完形品である。立ち上がりはやや短く内傾して尖り、受部は丸く肥厚し、ほぼ水平に突出する。壺部は張らないが丸味を帯び、底部も若干丸底と判断できる。底部内面は、不定方向のナデで調整されている。

4は口・受部径いずれも推定で12.0・14.4cmを測る。立ち上がりはかなり短く直線的に内傾し、受部は肥厚し斜め上方に突出する。壺部の形状は3と酷似しているが、若干底部が平底気味である。回転ヘラ削り後にナデで調整していると思われる。



第95図 SB-13 実測図



### 土師器：甕（第98-5～8図、図版76）

5は頸～肩部片で、頸部径は推定13.6cmを測る。外面にはハケ目が部分的に薄く見られ、胴部内面はヘラ削りで調整されている。

6は推定口径15.6cmを測る、口縁～胴部にかけての破片である。口縁部は緩く外反し、端部は肥厚し丸くおさめる。胴部にかけては肩部があまり張り出さずに、緩やかに下がる。外面は部分的な縦ハケ目、胴部内面はヘラ削りが見られる。焼成はやや不良で、軟質である。

7は推定口径18.4cmを測る、口縁～頸部にかけての破片である。口縁部は緩やかかつ直線的に外反し、端部はやや先細り気味である。焼成が不良で軟質のため摩滅が激しく、調整痕は不明である。

8は推定口径21.0cmを測る、口縁部片である。口縁部は大きく湾曲して外反し、端部は肥厚し丸く仕上げている。

### 土師器：竈（第99-9～13図、図版76）

9は残存高21.8cmを測る竈の焚口部の破片である。内外面共にヘラ削り・指標圧痕で調整されている。部分的にハケ目も見られる。

10は推定口径23.8cmを測る竈片である。口縁部は短く直線的に外傾し、端部はわずかに肥厚する。肩部以下はほとんど張り出さず垂直に下りる。胴部外面は強い縦方向のナデ、内面はヘラ削りで調整されている。

11は推定口径30.0cmを測る竈片である。口縁部は短く直線的に開き、端部付近は肥厚し、わずかに外に折れ曲がる。口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は強い縦方向のナデ調整と縦ハケ目が、内面にはヘラ削りが見られる。

12は推定口径30.6cmを測る竈の底部片で、内面にはヘラ削りが見られるが、外面は風化のために調整痕が不明瞭である。

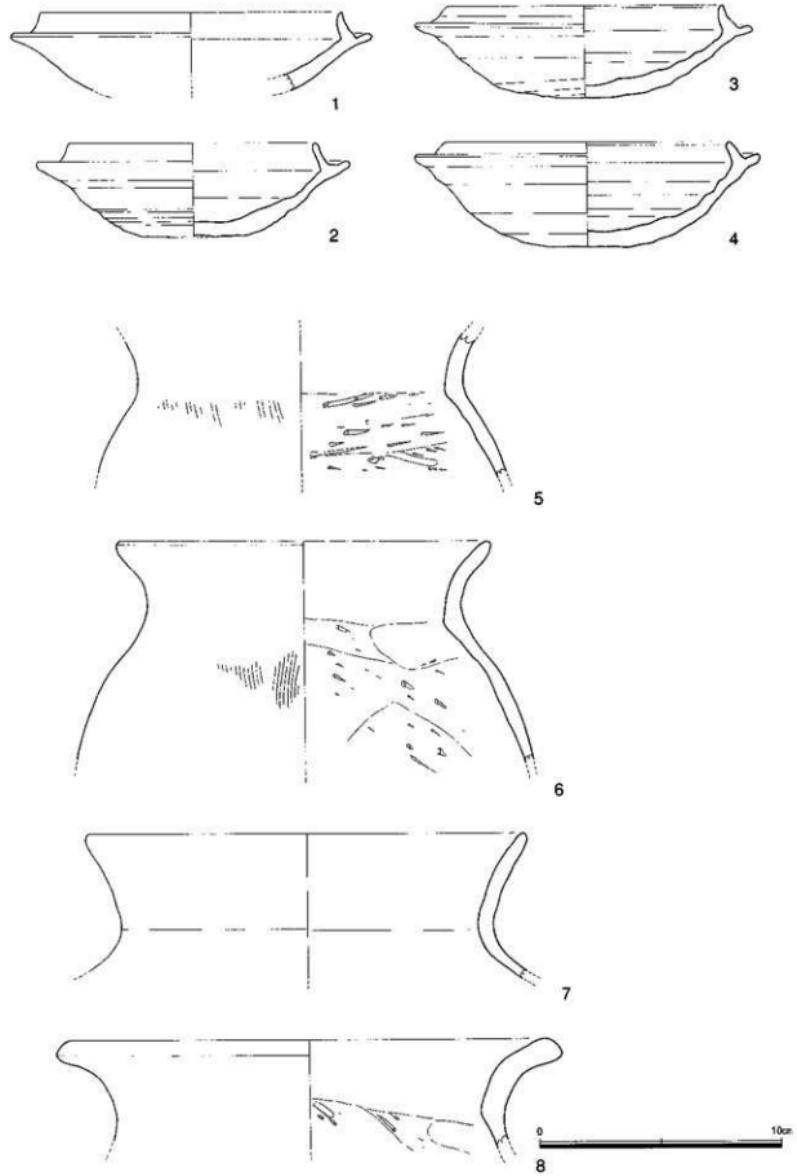
13は残存高33.5cmを測る竈片で、約2/3程度残存している。外面は上部に横ナデ、それ以下は縦・斜め方向にハケ目が、内面上部に横ナデ、それ以下は強いナデもしくはヘラ削りが見られる。

以下はSB-13から出土した遺物である。

### 須恵器：坏身（第100-1・2図、図版77）

1は口径10.7cm、受部径13.6cmを測り、一部が欠損し、焼き歪みが見られるもののほぼ完形品である。立ち上がりはやや強めに内傾し、受部は丸く肥厚し、わずかに斜め上方に向く。坏部は張るが扁平な形状を呈し、底部は平底に近い。底部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向のナデで調整されている。

2は口縁端部が欠損しているため口径は不明、受部径は14.0cmを測る。口縁部はほぼ直線状に立ち上がると思われる。受部は肥厚し斜め上方に伸びる。底部は平底に近くやや扁平な形状を呈する。底部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向のナデが見られ、それ以上は内外面共に回転ナデで調整されている。



第98図 SB-1 2 出土土器実測図 (1)

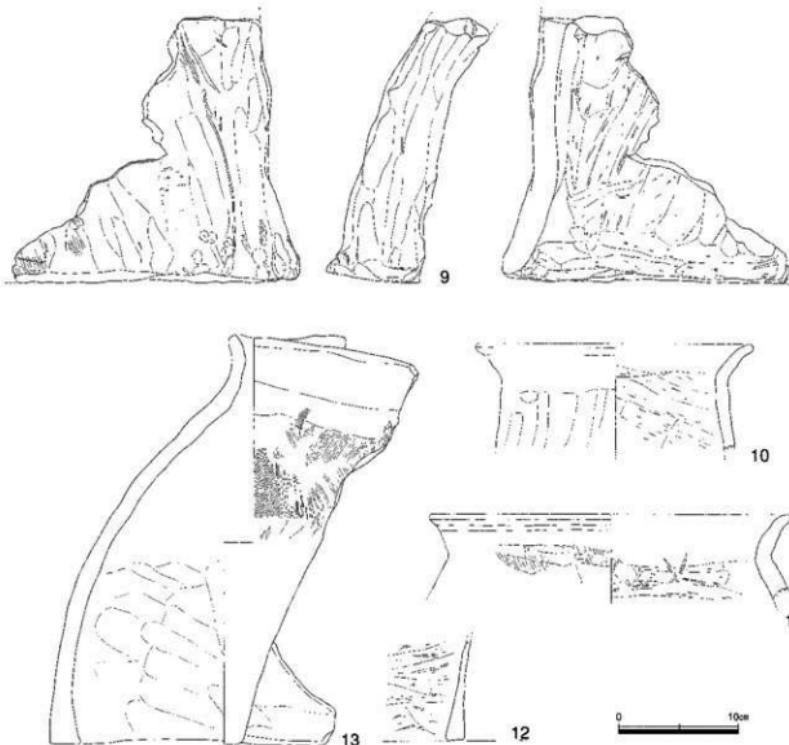
石器：剥片（第101-1図）

黒曜石製の剥片である。残存長1.95cm、残存幅2.1cmを測る。

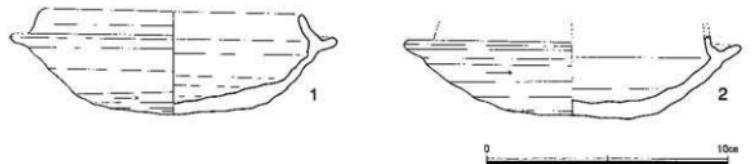
SB-13の内側で検出されたピットの中から出土した遺物である。Bと直接関係があるかは不明である。

須恵器：高坏（第102-1図、図版77）

SB-13東側外のピットAから出土したもので、ほぼ完形品である。口径14.1cm、底径11.9cm、器高11.45cmを測る。坏部は底部と体部の境で明確に屈曲し、その後はほぼ直線的に立ち上がり、端部にかけて先細る。脚部は外反しながら開き、端部で更に開く。坏部の底部外面には回転ヘラ削りが、体部には浅い沈線が2条施される。脚端部にも浅い沈線が1条巡らされ、1段三角形の透かしが3方向に見られる。



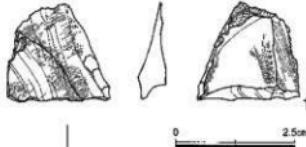
第99図 SB-12出土土器実測図(2)



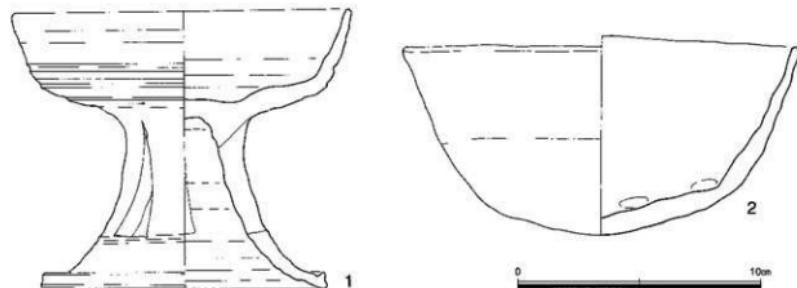
第100図 SB-13出土土器実測図

**土師器：塊（第102-2図、図版77）**

SB-13のはば中央、ピットBから出土した塊形の土師器で、ほぼ完形品である。口径は16.5cm、器高は8.2cmを測り、底部は丸底だが途中から直線的に立ち上がり、端部にかけて先細る。底部内面に指頭圧痕が一部見られる他はナデで調整されている。



第101図 SB-13出土石器実測図



第102図 SB-13ピット内出土土器実測図

○SD-19・20、SX-05・06（第103図、図版22）

小丘陵を削平して作られた平坦面の北側、SB-12・13の北側に作られた遺構である。

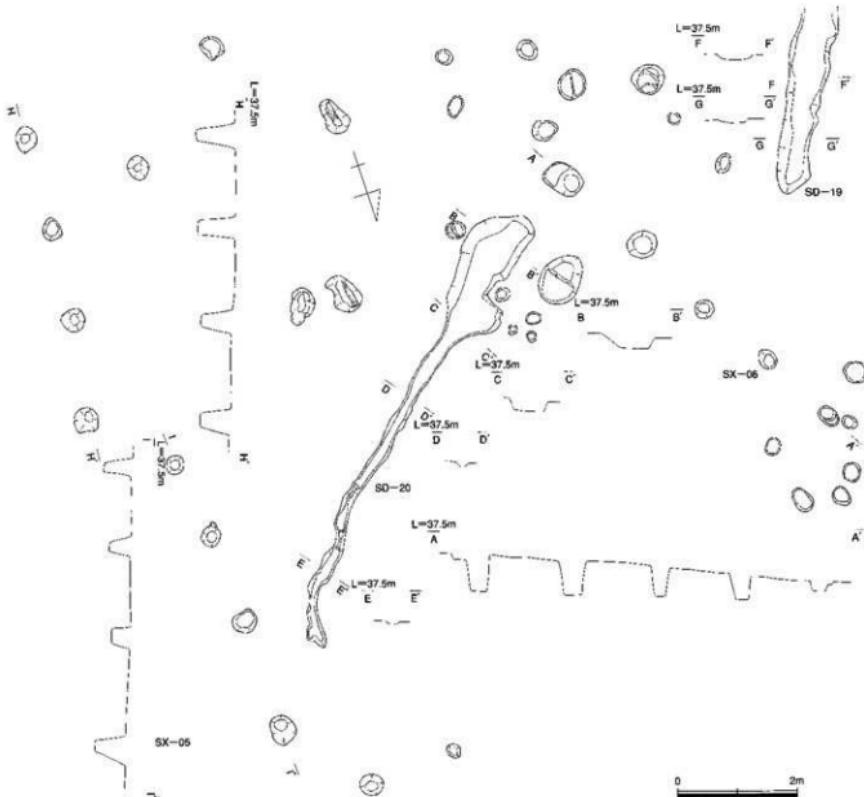
SD-19は南側が消失てしまっているため、正確な規模は不明である。検出長3m、上端幅50~70cm、下端幅25~55cm、深さ2~9cmを測り、平面径はほぼ直線状に南北に走る。埋土は暗褐色土1層で遺物は出土しなかった。1m南側にSB-13の溝があり、関連があるかもしれないが詳細は不明である。

SD-20は途中で途切れる部分があるものの、全長7.9m、上端幅15~92cm、下端幅5~60cm、深さ5~23cmを測り、平面形は南側が幅広く、北側に向かって細くなっているが、全体としてはほぼ直線

形で、南西—北東方向に走る。埋土は暗褐色上1層で遺物は出土しなかった。

SX-05・06はほぼ等間隔に1列になって検出された4~5穴のビット列である。05は平坦面の東端から検出され、ビット間の距離は南側から155cm~150cm~150cm、西に80cm程ずれて130cm~140cm~160cmと、こちらはやや等間隔と言えず、北側に行くほど間隔が広くなっている。06はSD-19の北側から検出され、ビット間の距離は150cm~150cm~140cm~140cmを測る。用途は不明である。

いずれの遺構も土層的にはSB-12・13と同じ層から掘り込まれており、何らかの関連があるかも知れない。



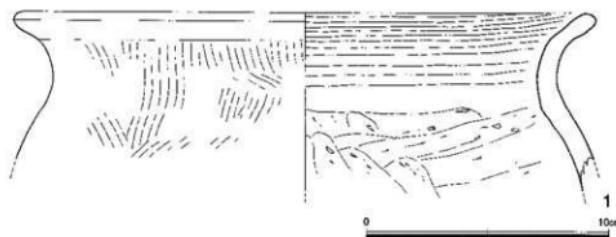
第103図 SD-19・20、SX-05・06実測図

### 土師器：甕(第104)

-1図、図版77)

推定口径20.4cmを測る口縁～上胴部にかけての破片である。口縁部は短く外反しながら立ち上がり、端部はわずかに肥厚し丸く仕上げている。

肩部はあまり張り出さない。外面は口縁部付近で横ナデ、それ以下は縦ハケ目、口縁部内面は横ハケ目、胴部はヘラ削りで調整されている。



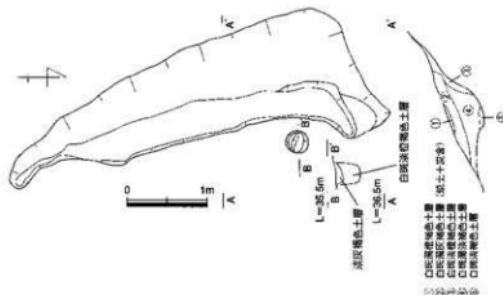
第104図 平坦面出土土器実測図

### 加工段8(第105)

図)

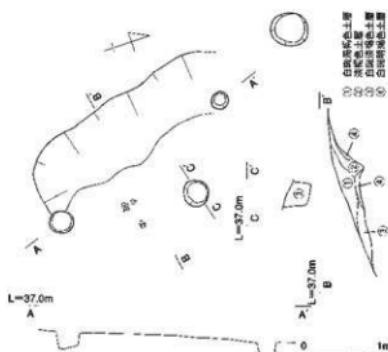
小丘陵北東の急傾斜地から検出された加工段状遺構で、等高線37m付近を南北4.6mにわたって『状に削平・加工して作られたものである。壁の高さは最高で77cmを測る。壁に沿って作られた溝が掘られており、深さは5cm未満を測る。平坦面は幅50～70cmしか残っておらず、大半が流失してしまったと思われる。ピットは北側で1穴のみ検出された。遺物は土師器の細片が出土したが、取り上げができるほど細片・小片のため、遺構の時期について不明である。

第105図 加工段8実測図

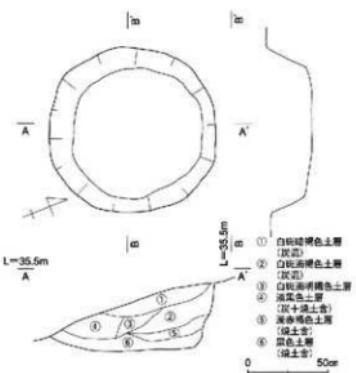


### 加工段9(第106)

加工段8の北側3m地点から検出された加工段状遺構で、小丘陵の急傾斜地、等高線38m付近を削平・加工して作られたが、大半が流失してしまったと思われるため正確な規模は不明である。残存幅は約3m、壁の高低差は最高で32cmを測る。ピットは3穴検出され、配列に規則性や統一性が見られたが、建物の復元には至らなかった。遺物は石や土師器などが出土したが、



第106図 加工段9実測図



第107図 SK-16 実測図

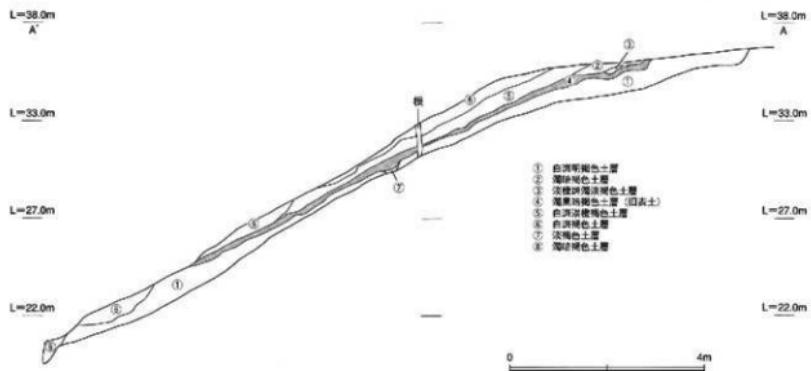
取り上げることができず、遺構の時期については不明である。

#### ○SK-16 (第107図)

加工段9の西隣で検出された土壌で、東側は削平もしくは流失のため、浅くなっている。上端径1m、下端径80cm、深さ40cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。最下層には焼土を含む炭層(黒色土)が堆積し、それ以外にも焼土や炭を含む層が堆積していることから“こ炭焼”用の土壌と思われる。遺物が出土しなかったために遺構の時期については明である。

東側斜面は小丘陵を削平して平坦面を作った際に出土した砂を平坦面を東側に拡張したと考えられ、設定したトレンチの土層断面(第108図)から、旧表土の上に50~150cm程度の盛土が認められた。この盛土の下から1号窯の被熱帶やSX-01が検出されていることから、1号窯・SX-01を埋めて平坦面を拡張したと考えられる。

この旧表土から須恵器や土師器が出土し、それ以外に東側斜面からも須恵器や土師器などが出土し



第108図 小丘陵東側斜面トレンチ土層断面図

た。

旧表土から出土した主な遺物である。

**須恵器：坏身** (第109-1図、図版77)

口・受部径いずれも推定で12.2・14.7cmを測る。やや丸みを帯びた形状で、立ち上がりは直線的でわずかに内傾し、端部は肥厚し、受部はつまみ出したように短く水平に突出する。坏部は丸く内湾し、回転ヘラ削りで仕上げられている。

**須恵器：高坏（第109-2・3図、図版77）**

2は坏部のみの破片で、推定口径13.0cmを測る。底部外面には回転ヘラ削り後回転ナデで調整され、底部内面には不定方向のナデが見られる。3は脚端部が欠損した有蓋高坏で、口・受部径いずれも推定で12.0・14.8cmを測る。坏部は底部に沈線を1条、脚部にも1条巡らし、2段三角形の透かしが3方向に見られる。

**須恵器：罐（第109-4図、図版77）**

4は罐の頸部片で、外面上部に波状文、下部にカキ目を施し、内面は回転ナデで調整されている。

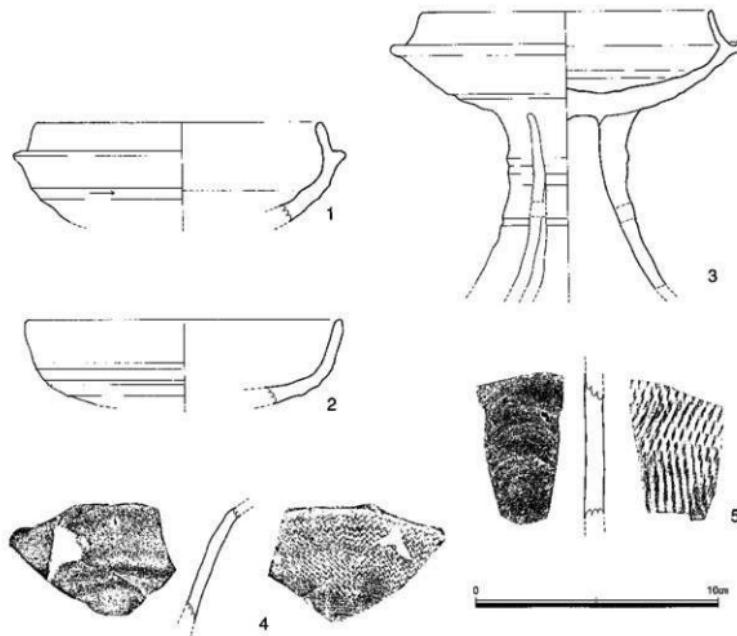
**須恵器：甕（第109-5図、図版77）**

甕の胴部片で、外側は平行叩き文、内面は同心円状の当て具痕を若干ナデ消している。

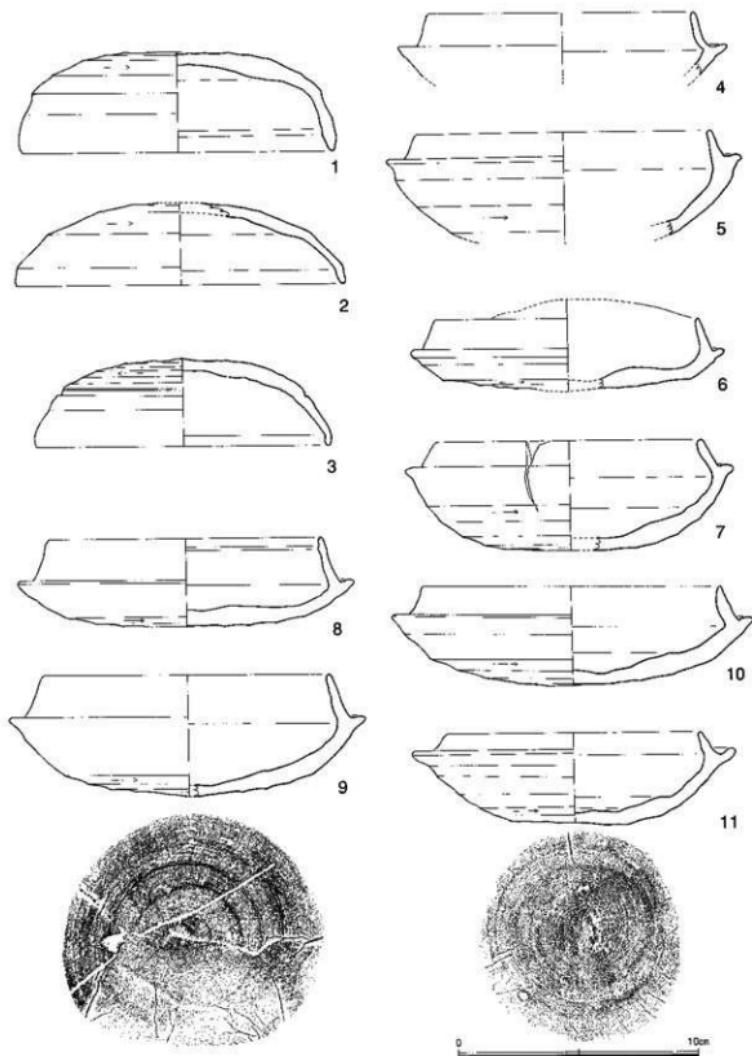
小丘陵の東側斜面から出土した主な遺物である。

**須恵器：坏蓋（第110-1～3図、図版78）**

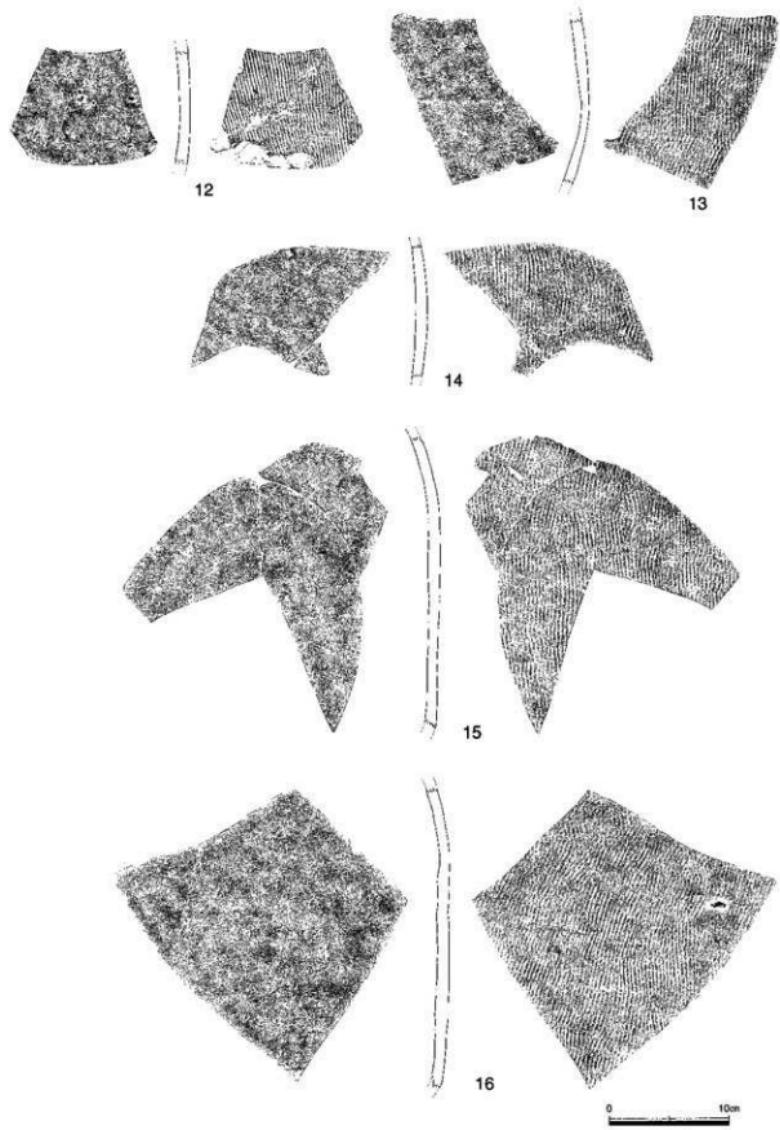
1は推定口径13.0cmを測る。大井部はやや水平を保ちながら肩部まで下りてやや張り、口縁部に向けてほぼ垂直に下りる。全体的には丸みを帯びたプロポーションである。口縁部は肥厚するが、端部にかけて尖り気味の形状をなす。口縁部内面上方に浅い沈線が1条巡らされている。天井部外面は回



第109図 小丘陵東側斜面旧表土内出土土器実測図



第110図 小丘陵東側斜面出土土器実測図（1）



第111図 小丘陵東側斜面出土土器実測図（2）

転ヘラ削り、内面は回転ナデ後静止ナデで仕上げられている。

2は推定口径13.5cmを測る。非常に扁平な形状を呈する。口縁部付近で垂直に屈曲し、端部は丸く仕上げている。なだらかな天井部は回転ヘラ削りで仕上げられている。

3は口径12.4cmを測るほぼ完形品である。天井部はやや水平を保ちながら肩部まで下り、そこから口縁部に向けて斜めに下りる。口縁部は明確に屈曲し、端部はわずかに内傾する。肩部は2条の沈線によって後の強調が見られ、口縁部内面上方も屈曲によって境目が明瞭になっている。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデの後、静止ナデで仕上げられている。

#### 須恵器：坏身（第110-4～11図、図版78）

4は口・受部径いずれも推定で11.0・13.7cmを測る口縁部片である。立ち上がりは直線的に内傾し、受部は薄く尖ってほぼ水平に突出する。

5は口・受部径いずれも推定で11.9・13.8cmを測る。やや丸みを帯びた形状で、立ち上がりはやや短く直線的に内傾し、受部は短くつまみ出すように伸びる。坏部は張らずに下り、回転ヘラ削りで仕上げている。

6は焼き窪みが激しく楕円形を呈する。口・受部径いずれも推定で11.0・13.0cmを測る破片である。底部は平底で、扁平な形状を呈する。立ち上がりは直線的に内傾し、端部はやや先細る。受部は短く横方向に伸びる。坏部は回転ヘラ削りが見られるが、原形とは程遠い形状をなす。

7は口・受部径いずれも推定で11.2・13.6cmを測る破片である。立ち上がりは直線的でやや強く内傾し、端部は肥厚する。受部は短くつまみ出すように横方向に伸びる。坏部は丸味を帯び、回転ヘラ削りの範囲が広い。一部ひび割れが見られる。

8は口・受部径いずれも推定で11.4・14.0cmを測る破片である。立ち上がりは長く、直線的に伸び、端部はやや先細り浅い沈線によって段になっている。受部は短く尖り、斜め上方に伸びる。坏部はかなり扁平な形状を呈し平底で、回転ヘラ削りで調整されている。

9は口・受部径推定で12.0・14.8cmを測る破片である。底部は丸底で丸みを帯びた形状を呈する。立ち上がりは長く直線的で、やや強めに内傾し、端部は先細る。受部は短く尖り、水平に突出する。外面は坏部中央付近まで回転ヘラ削りで、底部にヘラ記号「ノ」が見られる。

10は口径12.5cm、受部径15.0cmを測るほぼ完形品である。底部は平底気味で、扁平な形状を呈する。立ち上がりは厚く端部にかけて尖り、やや強めに内傾する。受部は短く横方向に伸びる。底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデの後一定方向のナデで調整している。

11は口径10.6cm、受部径13.4cmを測るほぼ完形品である。立ち上がりは低く直線的に内傾し、受部は内湾して斜め上方に伸びる。坏部は扁平気味だが丸味も帯び、回転ヘラ削りで仕上げている。

#### 須恵器：甕（第111-12～16図、図版79）

いずれも胴部片で、外面は平行叩き文、内面は同心円状の当て具痕をナデによって消している。

#### 土師器：甕（第112-17図、図版79）

推定口径12.4cmを測る、口縁～胴部にかけての破片である。口縁部は短いが強く外反し、端部は丸く仕上げている。胴部はあまり張り出さずに緩やかに下りる。外面に主だった調整は見られず、内

面はヘラ削りで調整されている。

**土師器：瓶**（第112-18図、図版79）

瓶の把手部分で、削り痕が残る。

小丘陵の北側急斜面からも遺物が出上している。

**須恵器：壺蓋**（第113-1図、図版80）

推定口径12.1cmを測る。天井部はやや水平を保ちながら肩部まで下り、肩部は張り出し、そこから口縁部に向けてほぼ垂直に下りる。全体的には丸みを帯びたプロポーションである。口縁部はやや太くなるものの、端部では先細り、丸く仕上げている。肩部には沈線による後の強調が見られ、口縁部内面上方にも浅い沈線が1条巡らされている。焼成はあまり良くななく色調は白っぽいため、調整痕はやや不明瞭である。外面の大井部は回転ヘラ削り、口縁部の内外面は回転ナデで調整されている。

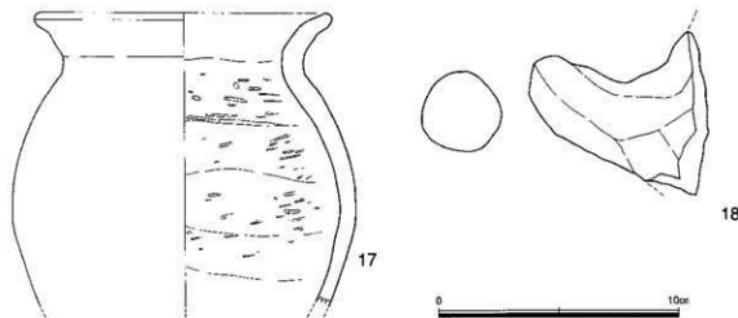
**土師器：碗**（第113-2図、図版80）

推定口径9.8cmを測る破片で、底部が丸底で丸みを帯びる。口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。底部外面はハケ目、内面は不定方向のナデで仕上げている。

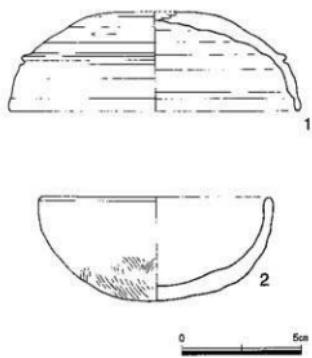
○ S D - 2 1 （第114図、図版25）

小丘陵北側斜面に掘られた溝状遺構で、標高34mラインに平行するように作られている。全長8.4m、上端幅48~70cm、下端幅13~22cm、深さ2~17cmを測り、平面形は直線形を呈し、東西方向に走る。溝から約70cm地点からピットが4穴1列になって検出されたが、いずれも小規模で、ピット間の距離は東から35cm~310cm~305cmと間が広くなっている。溝から北側は斜度もきつく、本來は平坦な床面のような形状を呈していた可能性もある。

溝の中からは遺物は出土しなかったが、やや上層の暗茶褐色土から須恵器や土師器が出土した。しかしこの遺構のものかどうかは疑わしく、上方の小丘陵平坦面から流れ落ちてきた可能性も考えられる。



第112図 小丘陵東側斜面出土土器実測図（3）



第113図 小丘陵北側斜面出土土器実測図

#### 須恵器：壺蓋（第115-1・2図、図版80）

1は口径13.7cmを測る完形品である。天井部は中央部分がへこんでいるが、水平を保ちつつ肩部で張り出し、口縁部にむけてほぼ垂直に下りる。天井部から肩部にかけて回転ヘラ削りが施され、肩部にはナデによる後の強調が、口縁端部は沈線による段がつけられている。天井部内面には一定方向の仕上げナデ、それ以外は回転ナデで調整されている。

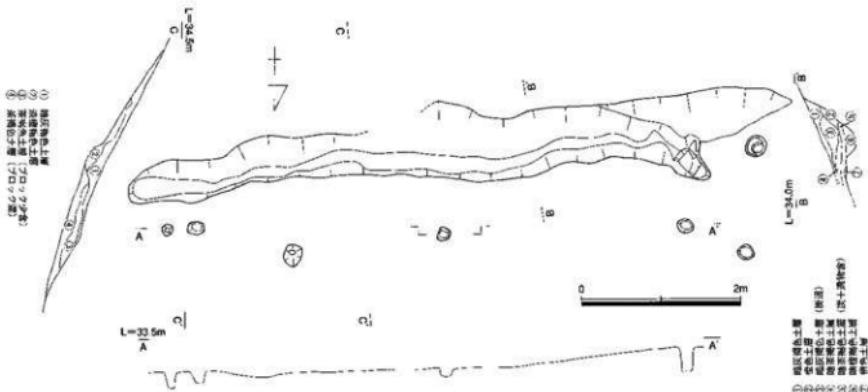
2は口径13.7cmを測る完形品である。天井部は水平を保ちつつ肩部で張り出し、口縁部にむけてほぼ垂直に下りる。天井部から肩部にかけて回転ヘラ削りが施され、肩部には

2条の沈線が巡らされ、それによって稜が強調されており、

#### 須恵器：壺身（第115-3～5図、図版80）

3は口・受部径いずれも推定で10.3・13.1cmを測る破片である。立ち上がりは直線的で強めに内傾し、受部は肥厚しほ水平に突出する。壺部はわずかに丸みを帯び、回転ヘラ削りで仕上げている。

4は口・受部径いずれも推定で10.7・13.0cmを測る破片である。焼き歪みが激しい。底部は平底で、体部はやや丸みを帯びて立ちあがる。立ち上がりは直線的でやや内傾し、受部はやや肥厚し横方向に伸びる。底部から体部下まで回転ヘラ削りが施され、それ以外は回転ナデが施されている。底部内面はその後に静止ナデによって仕上げている。



第114図 SD-21実測図

5は口・受部径いずれも推定で12.4・15.0cmを測る破片である。底部は平底でやや扁平な形状を呈する。立ち上がりは長く直線的でわずかに内傾し、受部は短く尖り横方向に伸びる。底部から体部中央まで回転ヘラ削りが施され、それ以外は回転ナデで調整されている。

土師器：甕（第115-6・7図、図版80）

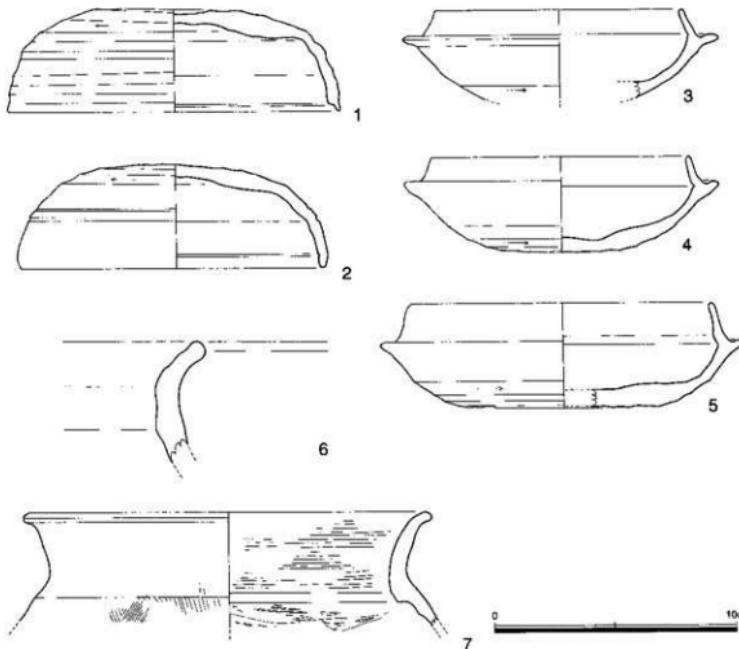
6は口縁部小片である。端部付近で外に開き、端部は肥厚し丸くおさめる。外面は横ナデ調整だが、内面の口縁部より下は風化により調整痕は不明である。

7は推定口径17.0cmを測る口縁部片である。口縁部はわずかに外に開き端部付近で更に外反する。端部は屈曲し丸く仕上げている。口縁部内面は横ハケ日、頸部内面はヘラ削りで調整されている。

小丘陵の北側下に南北9m、東西28mの長方形状に平坦面が存在し、そこに加工段状造構や掘立柱建物跡、土壙などが検出された。

○加工段10（第116図、図版25）

平坦面の西端から検出された加工段状造構で、溝が「」状に掘られ、北端は土壤によって削平されているため正確な規模は不明である。検出長は2.75m、上端幅22~32cm、下端幅5~20cm、深さ3~5



第115図 SD-21 出土土器実測図

cmを測る。土壌は上端径60~70cm、下端径35~45cm、深さ22~32cmを測り、平面径はやや楕円形を呈する。周辺からいくつかピットが検出されたが、関連性はないと思われる。遺物が出土しなかったため時期などは不明である。

#### ○SB-14 (第117図、図版25)

加工段10の西11m地点から検出された掘立柱建物跡である。溝が「」状に掘られており、全長5m、上端幅18~46cm、下端幅6~33cm、深さ8~10cmを測る。溝に開まれた内部には柱穴と思われるピットが120cm間隔で検出され、その間に37×50cmの範囲で焼土も検出された。それ以外には柱穴と思しきピットは検出されなかった。遺物が出土しなかったため時期なども不明である。

これらの遺構以外にも北側斜面の際や平垣面からピット等が検出されたが、遺構と判断できなかつた。SK-17は“こ炭焼”的土壌と思われる。

以下は北側平坦面の遺構外から出土した遺物である。

#### 石器：石鏃（第119-1図、図版81）

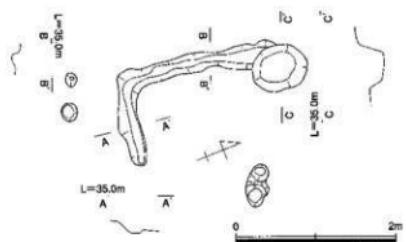
長さ2.7cm、幅2.8cmを測る黒曜石製の凹基式の石鏃である。

#### 鉄製品：鉄砲玉（第120-1図、図版81）

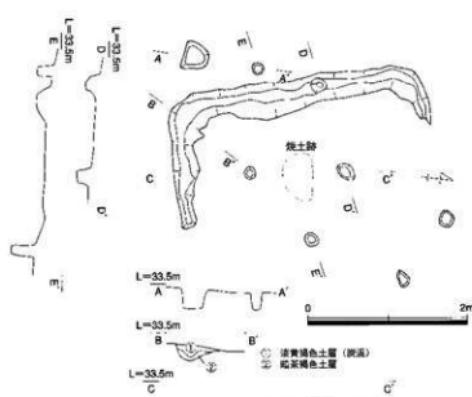
直徑4.0cm、重量355.17gを測る鉛製の鉄砲玉である。戦国期の匁数で換算すると94.7匁になり、直徑と合わせて考えると、かなり大型の火縄銃の玉と思われる。火縄銃の分類だと大筒クラスのものと想定され、一般に獣銃として使用するものとは大きく異なる。また使用痕も見られないことから落としたものかもしれない。

#### 須恵器：壺身（第121-1図、図版81）

口・受部径いずれも推定で9.8・12.4cmを測る破片である。焼き歪みが激しい。立ち上がりは直線的に内傾し、受部は長くほぼ水平に突出する。壺部は全く張らず、扁平な形状を呈するが丸底気味である。底部外面は回転ヘラ削り、内面は中央を不定方向ナデで仕上げている。



第116図 加工段10実測図



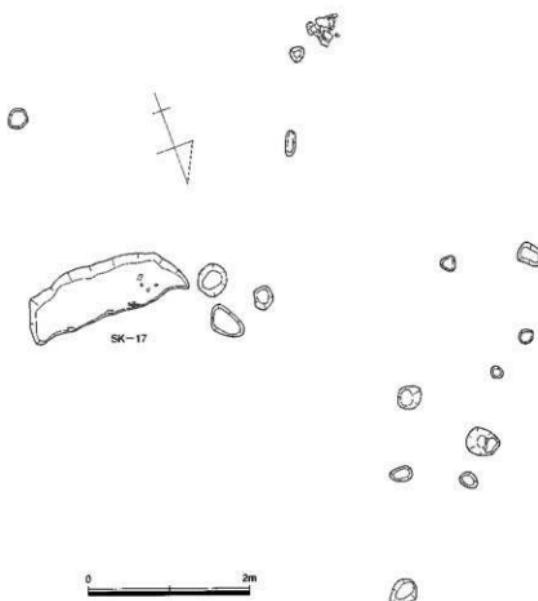
第117図 SB-14実測図

須恵器：壺蓋（第121-2図、図版81）

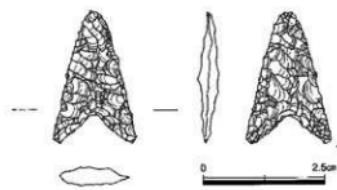
推定口径11.0cmを測る  
破片である。天井部は水  
平を保ちつつ丸みを帯び  
ながら口縁部にむけて下  
りる。口縁端部はわずか  
に屈曲し丸く仕上げてい  
る。天井部から肩部にかけ  
て回転ヘラ削りが施さ  
れ、肩部には2条の沈線  
が巡らされ、それによっ  
て稜が強調されており、  
内面の口縁部やや上方に  
も沈線が1条巡らされて  
いる。天井部の内面には  
一定方向の仕上げのナデ  
調整が、それ以外は回転  
ナデ調整で仕上げている。

土師器：甕（第121-3  
図、図版81）

推定口径18.6cmを測る、  
口縁～胴部にかけての破片である。口縁部  
は内湾するよう立ち上がり、端部は肥厚  
し丸く仕上げている。肩部はあまり張り出  
さずに下りる。口縁部内外面は横ナデ、胴  
部外面はハケ目、内面はヘラ削りで調整さ  
れている。



第118図 SK-17・周辺ピット群実測図

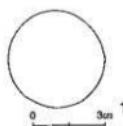


第119図 北平坦面出土石器実測図

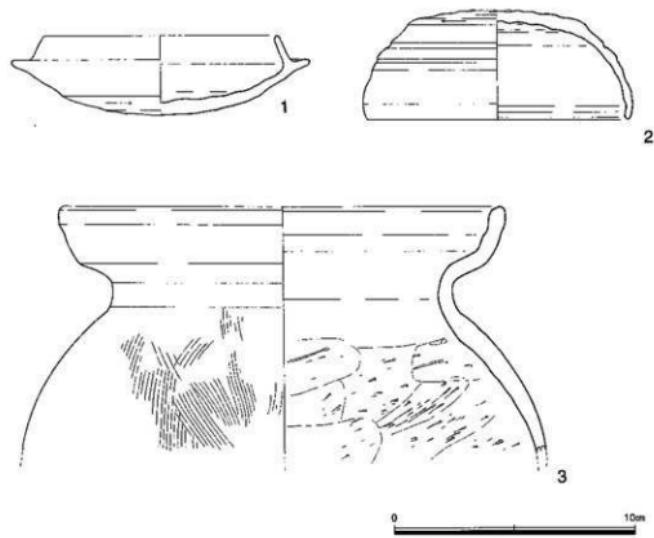
以下は遺跡内の出土ではあるが、出土土地  
点不明の石器である。

石器（第122-1・2図、図版81）

1は一部が欠損した黒曜石製のスクレイ  
パーで、残存長5.1cm、残存幅3.8cmを測る。  
2はサスカイト製の円基式の石鏃で、長さ



第120図 北平坦面出土鉄製品実測図



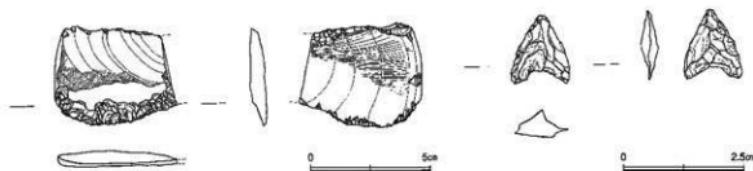
第121図 北平坦面出土土器実測図

1.4cm、幅1.2cmを測る。

#### ＜小結＞

本遺跡の調査の結果、掘立柱建物跡14棟、竪穴式住居跡2棟、加工段状遺構10、不明遺構9、土壙9基、溝状遺構21条が確認された。時期別に見ると、6世紀初頭（1号窓）、6世紀前半（SX-01・SB-01・SI-01）、6世紀後半（SX-05・SB-12・SB-13）、6世紀末～7世紀初頭（SD-11・加工段4・SI-02・SB-11）、8世紀前半（SK-12）である。

これら以外の遺構に関しては時期の特定には至らなかった。これらから東側の斜面、谷部は6世紀初頭～前半にかけての遺構が集中する。SB-01以外の02～05なども地形的な条件から考えて同時期に存在した可能性がある。それに対して西側から検出された遺構は6世紀後半以降のものが集中して



第122図 遺跡内出土地不明石器実測図

いる。

調査中は小丘陵の平坦面が1号窯と何らかの関係があると思われたが、丘陵斜面のトレンチや出土した須恵器などから丘陵を掘削した土砂で平坦面を拡張した際に、1号窯・SX-01を埋めたことが確認された。

西側では6世紀後半以前の遺構は確認できなかつたが、SB-07~10が検出された地点は6世紀後半以降のSB-12・13の地点よりも高台で、上層の遺物が6世紀後半の遺物が多く、それよりも下層から検出された07~10は6世紀後半以前の可能性が高い。また小丘陵南側下の谷状地形からも6世紀前半頃と思われる須恵器などが出土していることからも伺える。

小丘陵の頂上部平坦面から検出されたSB-07・08・10は9本の総柱掘立柱建物跡であった(10に関しては削平されてしまったと考えた)。またSB-12・13も大型で、四隅の柱が内側を向いている、何か特殊性を表すのではないかと思われたが、その根拠を得ることはできなかつた。

以上のことから、本遺跡はSK-12のように8世紀代の遺構も検出されたが、これ以外には検出されなかつたため、6世紀代を中心とした集落遺跡として考えてもよいのではないだろうか。今後、1号窯・SX-01との関連を含めて包括的な検討をする必要がある。

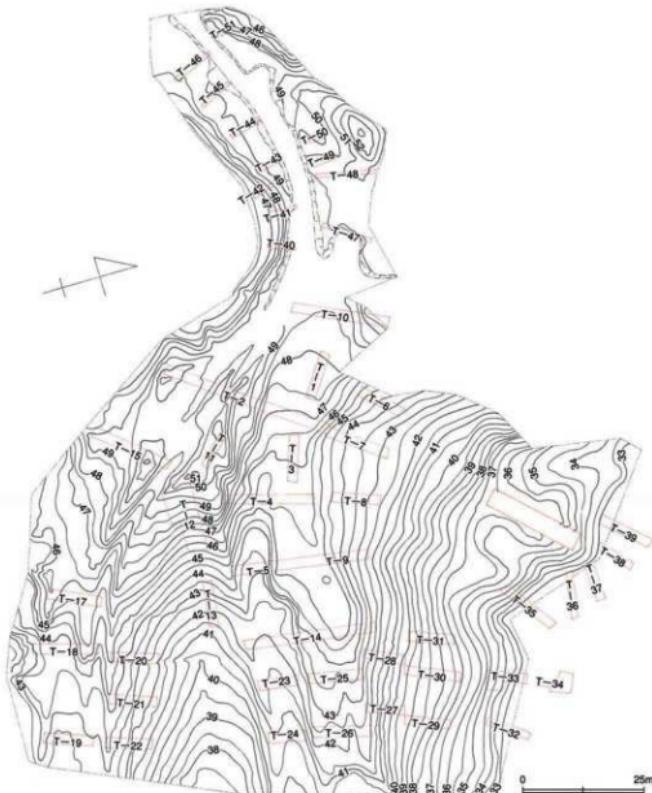
(石川 崇)

### 3. 指松遺跡

本遺跡は公園内の3つの丘陵のうち、南端丘陵に位置する。南側丘陵は標高51mを最高点とし東側に緩やかに傾斜しながら伸びている。丘陵の地形は北側に溜池、中央に幅約10m、南側に幅約4~7mを測る頂部平坦面を持つ小丘陵とその間に挟まれた小規模の谷からなる。

平成13年度は約4ヶ月間にわたって試掘調査が行われ、計14本のトレンチを設定した。その結果、上端幅約7m、下端幅0.3~0.5m、深さ1.5~1.8mを測る断面V字形の溝状遺構（SD-26）が検出され、その南側に連続ピット、更に南側丘陵頂部平坦面から布志名焼や古銭（寛永通宝）を伴う道路状遺構を検出した。古道の下層からも断面U字形の溝状遺構（SD-22）を検出した。

平成14年度は約4ヶ月間にわたって調査し、調査区の一部の全面調査と、南東側斜面・中央丘陵頂部平坦面に計12本のトレンチを設定し試掘調査を行った。試掘調査の結果、昨年度検出された道路状



第123図 調査前地形測量図及びトレンチ設置図

遺構の統一が確認され、南東側斜面から溝状遺構（SD-04～06）が検出された。

平成15年度は5ヶ月間にわたって、南側丘陵・中央丘陵部の頂部平坦面と谷部、南東側斜面の全面調査と中央丘陵北側斜面・溜池南側斜面の試掘調査を行った（T-23～39）。試掘調査の結果、遺構は確認されず遺物も出土しなかった。

平成16年度はSD-26の延長を確認するため調査区を西側に拡張し、調査を行った。西側には平成5年度に調査した勝負谷跡があり、いくつかの溝状遺構が検出された。

調査の結果、溝状遺構36条が確認され、溝の底部にピットを掘り込んだ溝状遺構は10条、“こ炭焼”跡が6基、用途不明土壙が2基、ピット列が3列確認された。遺物は須恵器をはじめ、石器や鉄製品などが出土地した。

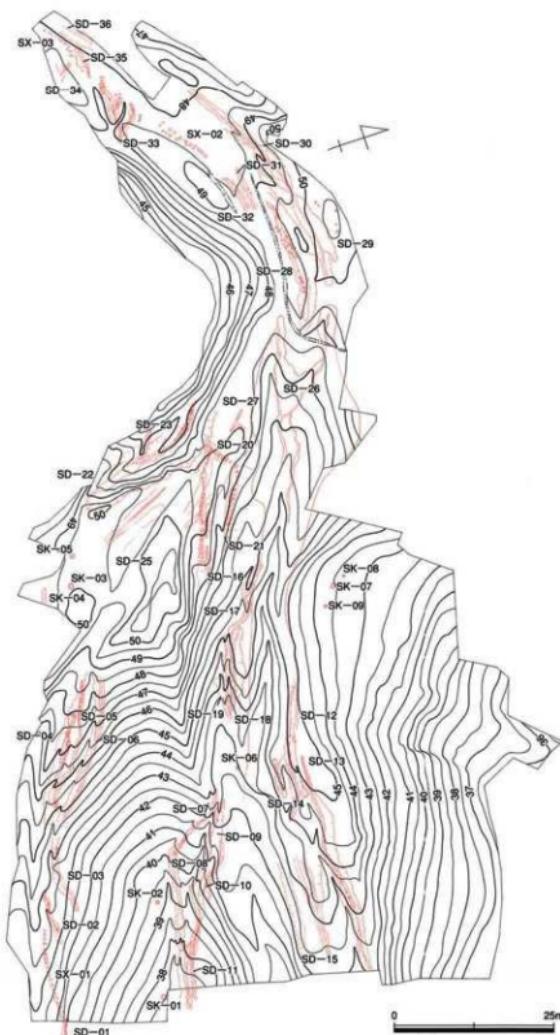
本遺跡の東側には深田遺跡、西側には勝負谷遺跡が存在し、本遺跡はその中間に位置する。

南側丘陵の南東側斜面上方から溝が7条、ピット列が1基検出された。

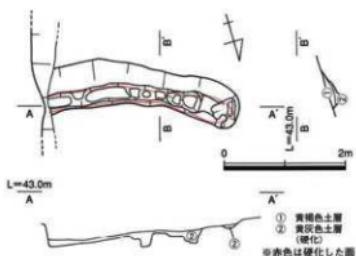
#### ○ S D - 0 1

（第125図、図版28）

南東側斜面、調査区



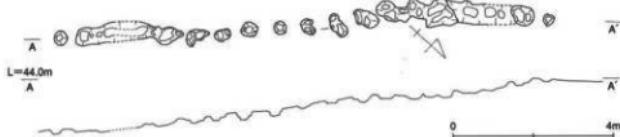
第124図 調査成果図及び地形測量図



第125図 SD-01 実測図

○ SX-01 (第126図、図版28)

SD-01と02に挟まれるように検出された、連続ピット列である。検出長は20mを測り、その間にピットが20穴確認された。そのピットは30~70cm、深さ5~15cmを測りピット間の距離は60~72cmを測る。埋土の最下層は硬化した橙灰色土である。しかし溝上端の肩部分が削平されていたため溝としての規模は不明である。また掘り込みはやや雑で、やや柔らかい茶褐色土を加工しているため、風化して崩れてしまったのではないだろうか。埋土から須恵器の細片が出土したが、時期の特定には至らなかった。



第126図 SX-01 実測図

○ SD-02・03 (第127図、図版28)

SD-02はSX-01のすぐ北隣から検出された溝状遺構である。全長8.7m、上端幅0.5~1.03m、深さ8~17cmを測り、断面形はU字型を呈する。溝底から全面ではないものの、ピットが5穴検出され、それを埋めるように硬化した層が所々見られた。埋土から須恵器の細片が出土したが時期の特定には至らなかった。

SD-03は02のすぐ北隣から検出された溝状遺構である。全長12.07m、上端幅0.7~1.4m、深さ13~30cmを測り、断面形はU字型を呈する。最下層には硬化した浅黄褐色土が所々見られる。埋土から須恵器の細片が出土したが時期の特定には至らなかった。

○ SD-04~06 (第128図、図版28)

SD-04は3つの中では最高所に位置する。全長10.88m、上端幅0.47~1.12m、深さ10~40cmを測り、

平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。溝底からピットが11穴確認され、それらのピット間の距離は60~65cmを測る。埋土は硬化した橙灰色土である。埋土から須恵器の細片が出土したが時期の特定には至らなかった。

SD-05は3つの中で中央に位置する。全長20.86m、上端幅0.30~1.54m、深さ13~27cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。溝底からピットが10穴確認され、それらのピット間の距離は60~65cmを測る。埋土の最下層は硬化した橙灰色土である。埋土から須恵器の細片が出土したが時期の特定には至らなかった。

SD-06は3つの中で低い所に位置する。全長26.00m、上端幅0.80~1.18m、深さ15~55cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。東隣には03があり、おそらく繋がっていくものと思われる。埋土の最下層は硬化した橙灰色土である。埋土から須恵器の高台付壺の底部片が出土した。遺構の使用時期のものではないものの、8世紀頃に埋没したものと思われる。

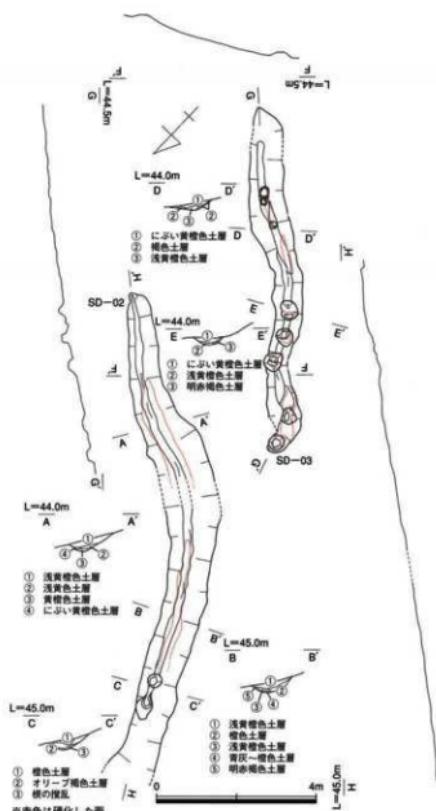
土層断面から新旧関係はわからなかったが、平面的な観察から04を05が、05を06がそれぞれ削平するように作られているため、04→05→06・03という関係になると思われる。また06の検出面から布志名焼の碗片が出土している。

丘陵南東側斜面、SD-04の周辺から出土した遺物である。いずれも遺構とは関係ない所から出土したものである。

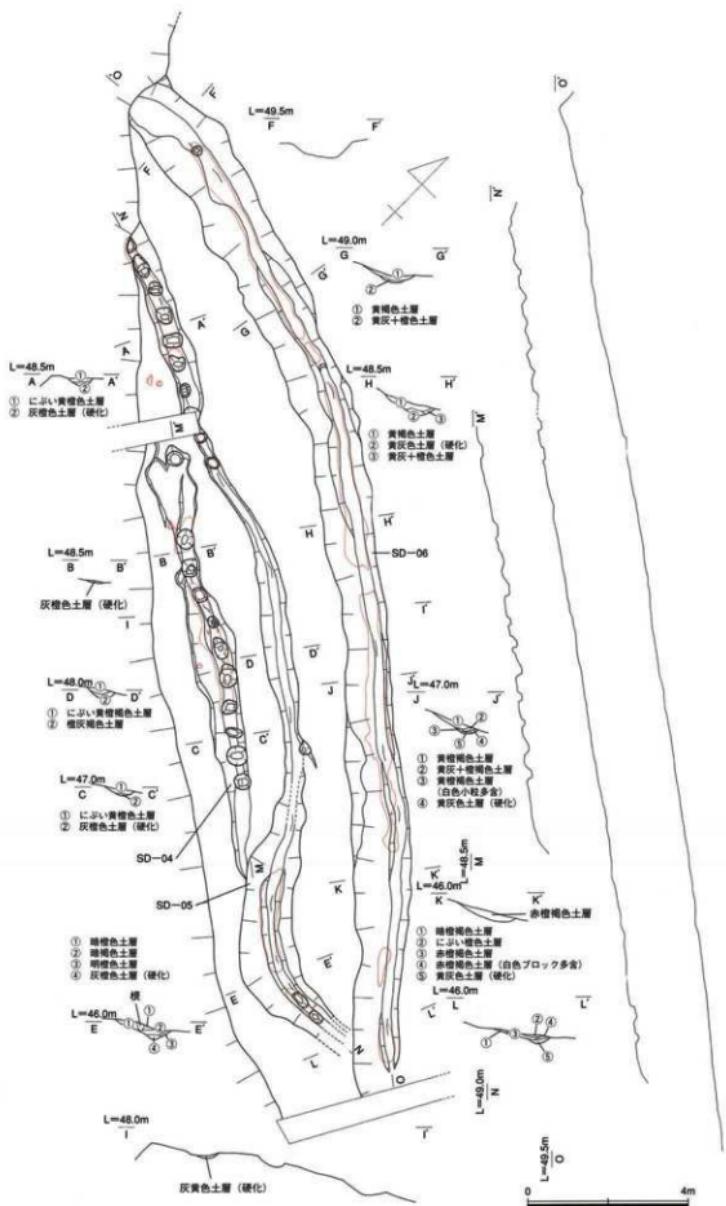
#### 須恵器：蓋（第129-1・2図、図版82）

1は輪状つまみを持つ蓋の天井部片で、つまみの径は5.1cmを測る。外面の一部に回転ヘラ削り痕が残っており、それ以外は回転ナデ調整を、内面は回転ナデ調整の後に不定方向のナデで仕上げている。8世紀前半のものと思われる。

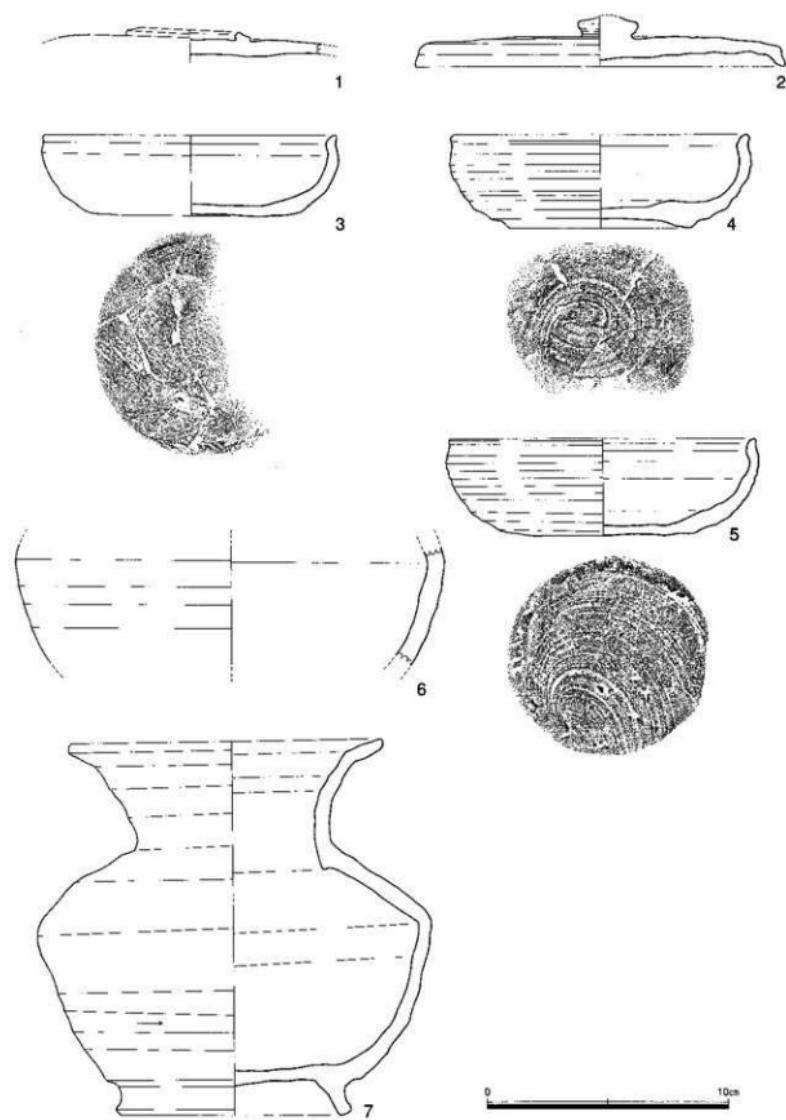
2は擬宝珠形のつまみを持つ蓋で、口径は15.4cmを測る。天井部は水平で、口縁部はわずかに外に開きながら垂直に屈曲し、端部の断面は三角形に近い。全面回転ナデで調整し、内面は回転ナデ調整の後に不定方向のナデで仕上げている。8世紀前半のものと思われる。



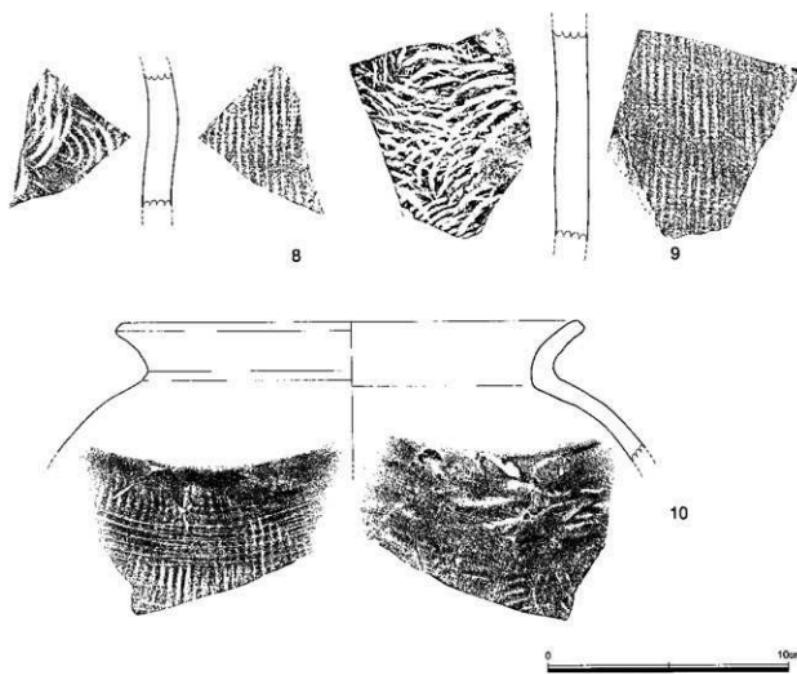
第127図 SD-02・03実測図



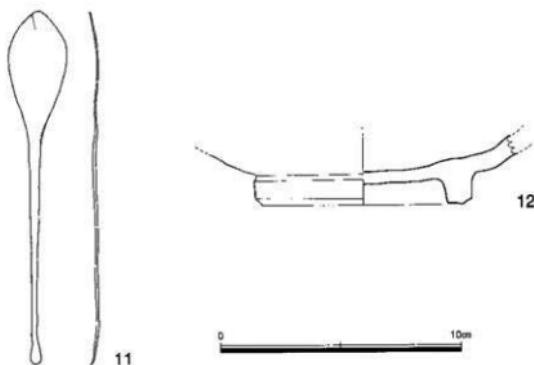
第128図 SD-04～06実測図



第129図 SD-04周辺斜面出土土器実測図（1）



第130図 SD-04周辺斜面出土土器実測図（2）



第131図 SD-04周辺斜面出土遺物実測図（3）

#### 須恵器：壺（第129-3～5図、図版82）

3は口径12.1cm、底径8.8cm、器高3.3cmを測る。底部は平底で中央部がわずかにへこみ、回転糸切り痕が残る。体部はやや丸く張り、口縁端部はくびれわずかに外反し、丸く仕上げている。口縁部外面は回転ナデ、底部内面は多方向ナデで調整されている。8世紀後半のものと思われる。

4は口径12.4cm、底径7.6cm、器高3.75cmを測る。底部は平底で回転糸切り痕が残る。体部はやや丸く張り、口縁端部はくびれが明確でわずかに外反し、丸く仕上げている。口縁部外面は回転ナデ、底部内面は多方向ナデで調整されている。8世紀後半のものと思われる。

5は口径12.5cm、底径6.5cm、器高4.0cmを測る。底部は平底で回転糸切り痕が残るが、周辺が少々ナデ消されている。体部は丸く張り、口縁端部はわずかにくびれ外反し、丸く仕上げている。口縁部外面は回転ナデ、底部内面は多方向ナデで調整されている。8世紀後半のものと思われる。

#### 須恵器：壺（第129-6・7図、図版82）

6は長頸壺の胴部片である。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデで調整されている。

7は高台付の広口壺である。口径15.2cm、底径9.8cm、器高15.2cmを測る。口縁部は外に開き、端部付近で更に大きく聞く。肩～胴部の境は明瞭で、胴部は張り出し高台部に向かって下りる。高台の内部はヘラ切りの後ナデで調整され、高台が貼り付けられている。胴部の下方は回転ヘラ削り後、回転ナデで調整されている。

#### 須恵器：甕（第130-8～10図、図版82）

8・9は胴部片で、外面に平行叩き文、内面には同心円状の當て具痕が残る。

10は推定口径18.9cmを測る口縁～肩部片で、胴部外に平行叩き文・カキ目、内面には同心円状の當て具痕が残る。

#### 金属製品：匙（第131-11図、図版83）

長さ14.5cm、幅2.4cmを測る金屬製の匙である。把手部分も小さな匙状になっている。

#### 陶器：碗（第131-12図、第132-13図、図版83）

12は底径2.8cmを測る底部片である。壺部は外に開きながら立ち上がる形状と思われる。

13は推定底径4.6cmを測る、壺～底部にかけての破片である。高台は貼り付けた後、削って形を整えている。胴部にかけて丸く立ち上がる丸味を帯びた形状である。青緑色の釉薬が胴部下まで施されている。布志名焼の碗と思われ、近代以降のものと思われる。

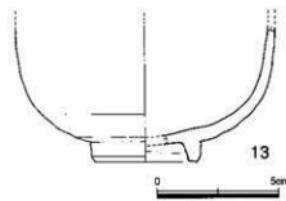
#### 石器：石鎌（第133-1～6図、図版83）

1・2は黒曜石製で、先端部と脚部の一部が欠損しているが、基部の中央にやや快りが見れる凹基式と思われる。残存長1.6cm、残存幅1.1cmを測る。

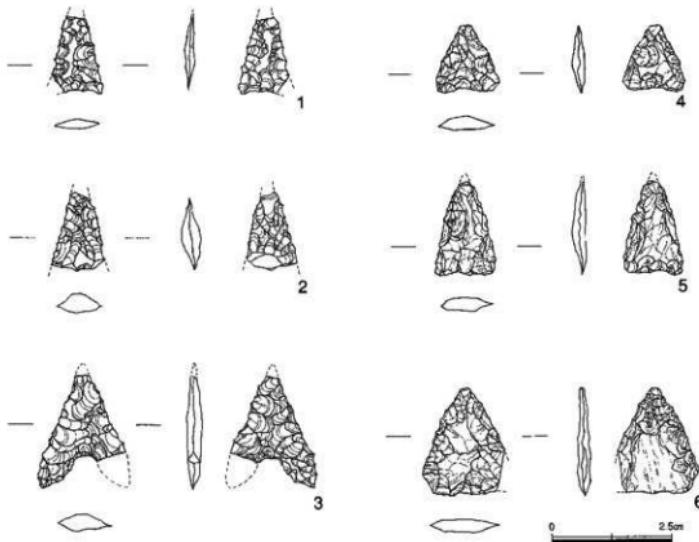
3は黒曜石製で、先端部と脚部の一部が欠損しているが、凹基式の石鎌である。残存長2.3cm、残存幅1.8cmを測る。

4はサスカイト製で、先端部の一部が欠損しているが、平基式の石鎌である。残存長1.4cm、残存幅1.3cmを測る。

5はサスカイト製で、先端部の一部が欠損しているが、平基式の石鎌である。残存長1.9cm、残存



第132図 SD-04周辺斜面出土土器実測図(4)



第133図 SD-04周辺斜面出土石器実測図

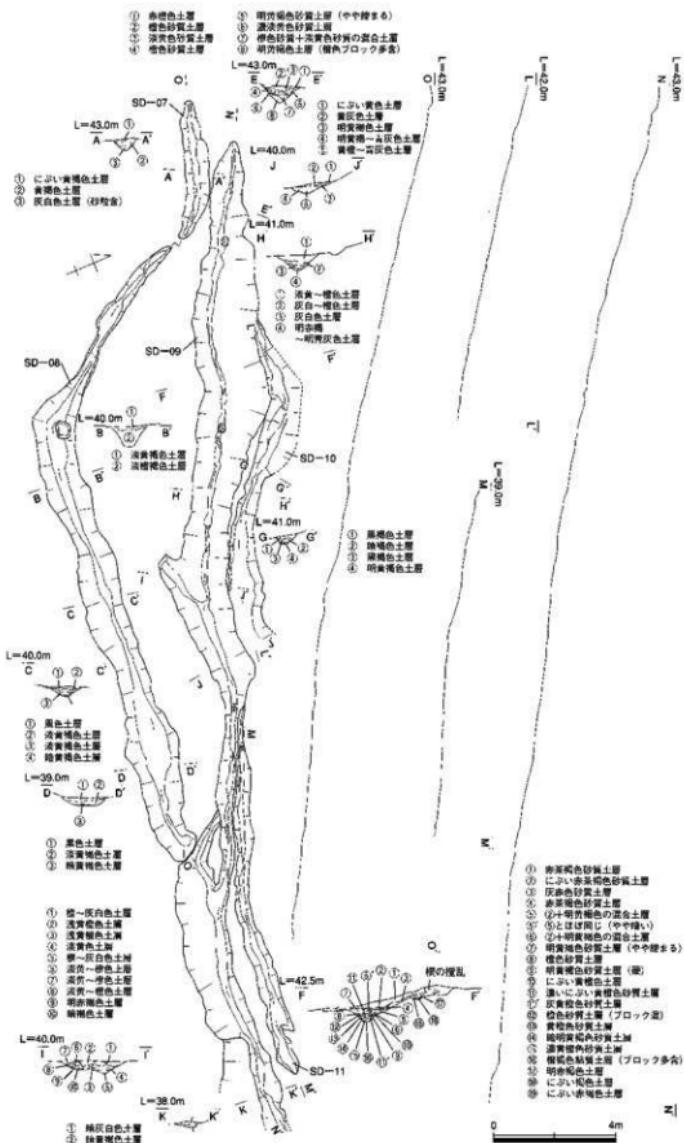
幅1.2cmを測る。

6はサヌカイト製で、脚部の一部が欠損しているが、平基式の石鎌である。残存長2.2cm、残存幅1.6cmを測る。

#### ○SD-07~11 (第134図、図版28)

本遺跡には南北両側の小丘陵に挟まれるように谷状地形が存在し、その谷状地形から溝状遺構が5条検出された。

SD-07は5条の溝状遺構のうち、西端、最高所から検出された遺構である。全長4.60m、上端幅0.40~0.78m、深さ20~30cmを測り、平面形はやや弧を描くような形状で、断面形はV字に近い形を



第134図 SD-07~11 実測図

呈する。最下層は砂粒を含んだ灰白色土が堆積しているが、硬化した層は検出されなかった。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

SD-08は07の西下から検出された溝状遺構である。全長21.93m、上端幅1.00~1.90m、深さ15~45cmを測り、平面形は弧を描く形状で、断面形は高い位置ではJ字状を呈し、低くなると丸底状を呈する。埋土は水平堆積だが、硬化した層は検出されなかった。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

SD-09は07の北隣から検出された溝状遺構である。全長32.66m、上端幅0.98~2.10m、深さ12~52cmを測り、平面形は途中で曲がるもの、ほぼ直線形で、断面形はV字状に近い形を呈する。埋土は水平堆積だが、硬化した層は検出されなかった。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

SD-10は09の北隣から検出された溝状遺構である。全長10.88m、上端幅0.72~1.12m、深さ12~26cmを測り、平面形はやや弧を描くが直線形で、断面形はV字状に近い形を呈する。埋土は水平堆積だが、硬化した層は検出されなかった。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

SD-11は09の西隣から検出された溝状遺構である。全長9.96m、上端幅0.18~0.80m、深さ10~20cmを測り、平面形はほぼ直線形で、断面形はU字状を呈する。西側になると浅くなり、最後には消滅する。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

07と08は一連の遺構と考えられる。07は東側では断面V字形を呈するものの08となり、東に伸びるにつれて断面はU字形と呈するようになる。09は谷部の溝状遺構の中では最も長く、明確な作りをしている。10は調査段階で削平してしまったため正確な規模がわからず、途中で消滅してしまった。土層断面から08・10は09によって削平されている。11も同様に09によって削平されていた。10と一緒にであったかもしれない。

いずれの溝状遺構も斜面の上から下へ掘られている。検出時には下端は非常に細く、当初は水の流れた跡とも考えられたが、斜面であることから、使用時には下端はある程度の幅を持ち、廃絶後に水の流れによって削られ、幅が狭くなったと思われる。

以下はSD-09の周辺、西側で出土した遺物だが、遺構には関係ないと思われる。

#### 須恵器：壺蓋（第135-1図、図版83）

天井部の破片で、天井部は水平を保ち、肩部は張り出し口縁部に向けて斜めに下りる。体部には1条の沈線によって稜が強調されている。天井部から肩部にかけて回転ヘラ削り、それ以外は回転ナデで調整されている。6世紀末~7世紀初めにかけてのものと思われる。

#### 須恵器：壺（第135-2図、図版83）

推定底径7.2cmを測る高台壺の底部片で、高台は「ハ」字状に開き、端部は丸く仕上げている。外面は回転ナデ、内面は仕上げナデで調整されている。

#### ○SK-01（第136図、図版29）

SD-08の南側の斜面から検出された土壙で、上端径0.8m、下端径0.58m、深さ12cmを測り、平面

形は楕円形を呈する。北側は流れ落ちたか、上端が消滅している。北側に最下層の炭層が堆積し、その上層には焼土を含む暗赤褐色土が堆積しているため、“こ炭焼”的土壌と思われる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

#### ○ SK-02 (第137図、図版29)

SD-11の南側の斜面から検出された土壌で、上端径1.46m、下端径1.06m、深さ24cmを測り、平面形は楕円形を呈する。北側は01と同様流れ落ちたか、上端が消滅している。大半が炭を含んだ層が堆積し、上端縁辺は焼けた痕跡が見られることから、“こ炭焼”的土壌と思われる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

北側の尾根の頂部平坦面からは溝状遺構が3条、道路状遺構が1本検出された。

#### ○ SD-12 (第138図、図版29)

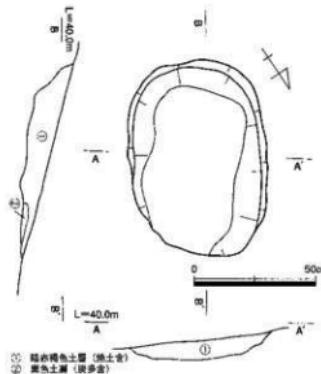
尾根の平坦面の西端から検出された溝状遺構で、26によつて西側部分が削平されている。全長20.94m、上端幅0.76~2.10m、深さ22~48cmを測り、平面形はほぼ直線形、断面形はV字型からU字型を呈する。砂質の層が水平堆積しており、硬化した層は検出されなかった。埋土から底部に回転糸切り痕を持つ高台付环の底部片が出土していることから、8世紀代に埋没したと思われる。

#### 須恵器：高台付环（第139-1図、図版83）

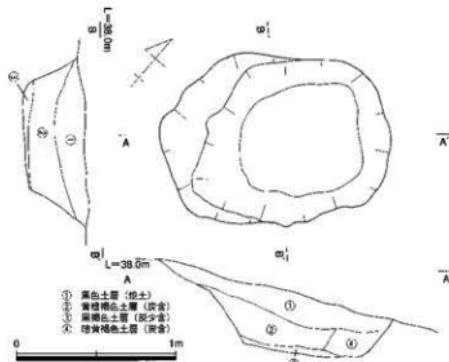
推定底径15.6cmを測る高台付环の底部片で、底部は回転糸切りの後、ナデ調整後に高台を張り付けた。高台は垂直に下り、全体に回転ナデで調整されている。8世紀以降のものと思われる。



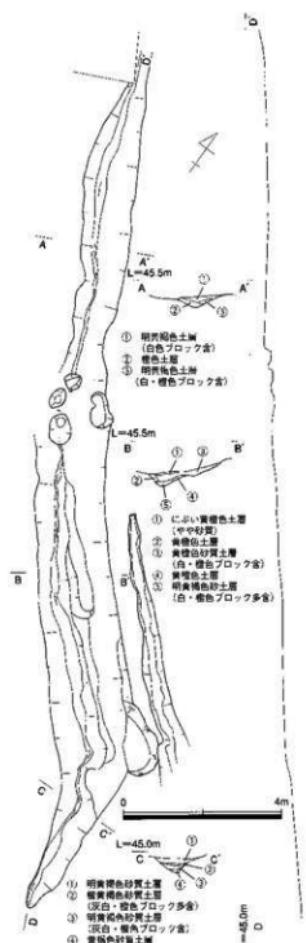
第135図 SD-09周辺出土土器実測図



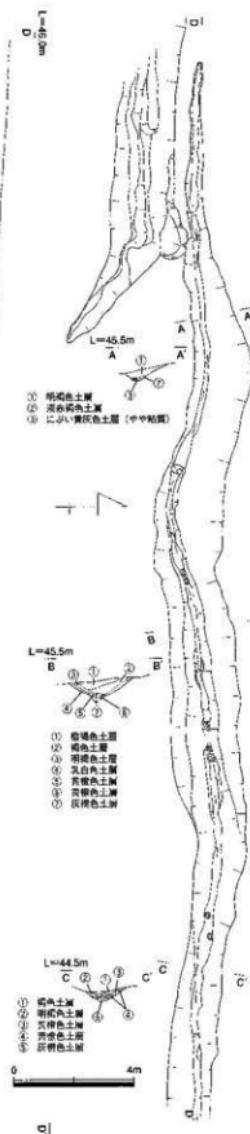
第136図 SK-01実測図



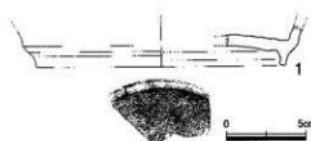
第137図 SK-02実測図



第138図 SD-1 2 実測図



第140図 SD-1 3 実測図



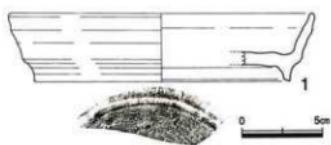
第139図 SD-1 2 出土器実測図

○ S D - 1 3 (第140図、図版29)

12の最後尾付近の北隣から検出された溝状遺構である。西側は消滅していて正確な規模は不明である。全長34.52m、上端幅1.20~2.28m、深さ30~66cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はV字型を呈する。最下層には硬化した層が所々見られ、それ以外は粘質の層が多く見られた。埋土中からはこぶし大の石が数点、須恵器などが出土したが、時期の特定には至らなかった。

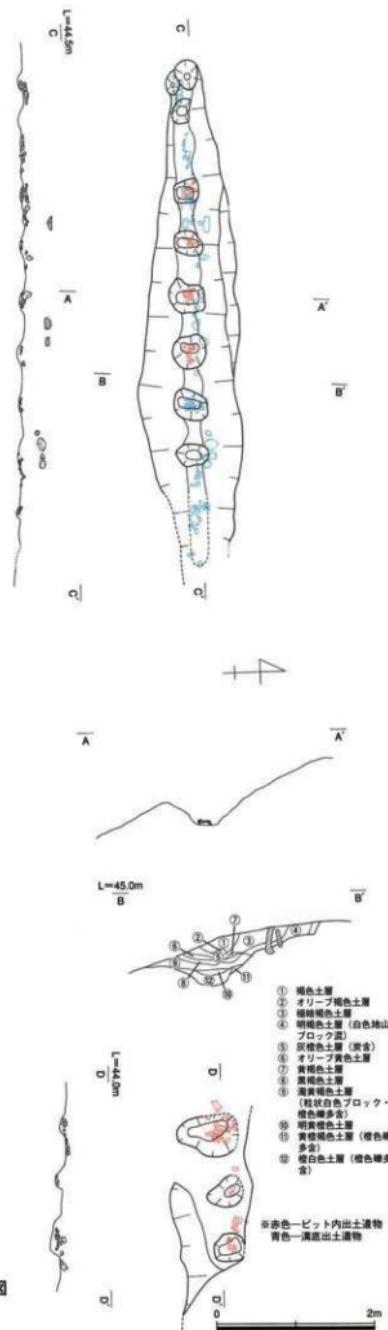
○ S D - 1 4 (第141図、図版29)

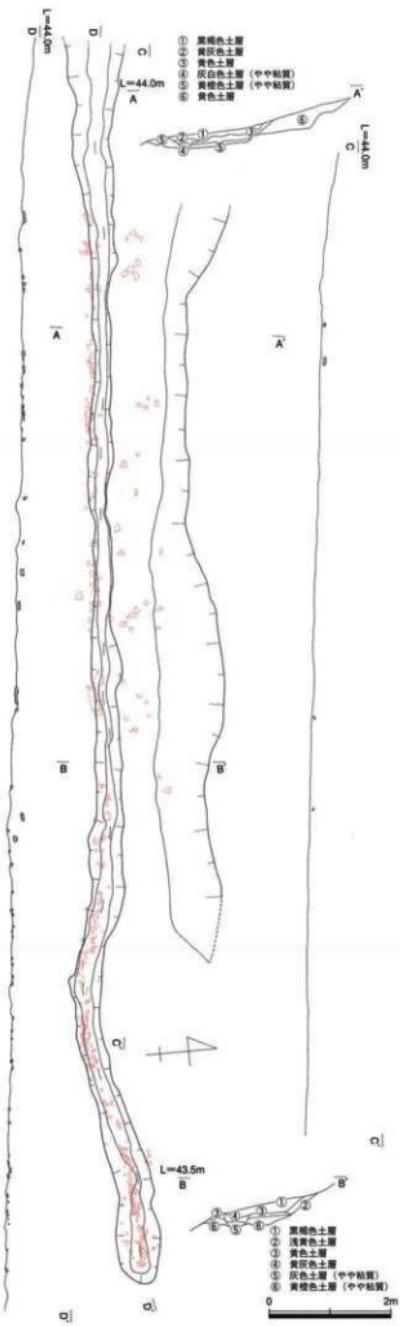
12の南隣から検出された溝状遺構である。西側は26によって削平され、東側部分では地滑りと思われる崩落で削平されているため、正確な規模は不明である。残存長6.42m、上端幅0.48~1.18m、深さ24~35cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はV字型を呈する。溝底にはピット状の掘り込みが見られるが、東側部分が削平されているため、全面に掘り込みがあったかは不明である。ピットの埋土は硬化した橙灰色土が堆積しており、埋土からは5cm前後の石が出土し、溝の埋土から底部に回転糸切り痕を持つ高台付近の破片が出土していることから、8世紀代に埋没したと思われる。



第142図 SD-14 出土土器実測図

第141図 SD-14 実測図





須恵器：高台付坏（第142-1図、図版83）

口・底径いずれも推定で19.2・16.0cmを測る高台付坏の破片で、底部は回転糸切りの後ナデ調整が施された後に高台を張り付け、口縁部に向けて斜めに立ち上がり、端部はやや先細りながら丸く仕上げる。高台は垂直に下り、全体に回転ナデで調整されている。8世紀以降のものと思われる。

○SD-15 (第143図、図版30)

14の南側、一段下がった位置から検出された溝を作った道路遺構と思われる。15は全長20.40m、上端幅0.75~2.10m、深さ10~20cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。最下層には粘質の層が多く見られ、埋土中からは5cm大の石が大量に出土したが、土器は見られなかった。

この溝を作った北側に幅約2mの平坦面を持つ道路状遺構が検出され、15はその側溝と考えられる。道路の埋土からもこぶし大の石が出土したが、その出土状況はまばらであった。15からはかなりの量の石が出土したが、流れ込んだものとは思えず、人工的に置いたか、もしくは敷き詰めたものではないかと推測する。道路状遺構は黄褐色土を基盤として造られていたが、それを立ち割ってみると土層内から再び石が出土したため、黄褐色土を取り除くと地山を加工して平坦面を作っていることがわかった。

まず地山を加工して平坦面を作り、その後黄褐色土を作り直している。土層断面から黄褐色土の面が南側にも続いている可能性があり、その後ある一定期間の後に南側が削平され、最終的に15が作られたと考えられる。

15の南側からも溝状遺構が検出された。削平されて作られた平坦面で、26の東端から続いて平坦部分の中央あたりから始まっているが、人工的に掘られた溝ではなく、水の流れなどによって削られて溝状になった可能性が高い。

#### ○SD-16・17 (第144図、図版31)

SD-26の南側から検出された2条の溝状遺構である。

16は全長6.00m、上端幅1.05~1.40m、深さ10~35cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。埋土は砂質土が堆積しており、最下層は小礫や地山ブロックも含まれている。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

17は16の東隣から検出された溝状遺構で、東側が18によって削平されているため、正確な規模は不明である。残存長7.94m、上端幅1.20m、下端幅0.43m、深さ12~16cmを測り、平面形は曲がりつつもほぼ直線形を、断面形は丸底を呈する。埋土は砂質土が堆積しており、最下層は小礫も含まれている。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

#### ○SD-18・19 (第145図、図版31)

16・17の西側から検出された溝状遺構で並行している。18は途中で削平されてしまったのか、消滅しているため、正確な規模は不明である。残存長13.20m、上端幅1.10~2.25m、深さ24~43cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。埋土は砂質土が堆積しており、最下層は地山のブロックも含まれている。遺物は埋土中から須恵器の甕の細片が出上したが図化には至らなかった。

19は18の南隣から検出された。18と同様に途中で削平されてしまったのか消滅しているため、正確な規模は不明である。残存長12.85m、上端幅0.95~2.60m、深さ22~48cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。埋土は砂質土が堆積しており、最下層は地山のブロックも含まれている。おそらく南側斜面の地山が風化して堆積したと考えられる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

いずれもは地山を成形して作られ、土層堆



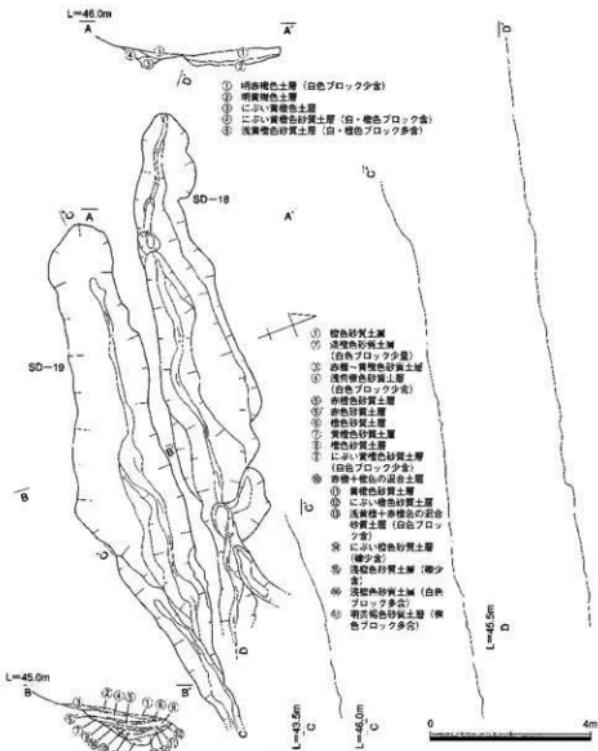
第144図 SD-16・17 実測図

積状況から北側にあるSD-26と同様の状況が観察されたが、関連性については不明である。同時期に埋没した可能性があると思われる。土層断面から18が17を削平して作られているため、17の方が新しいと思われる。

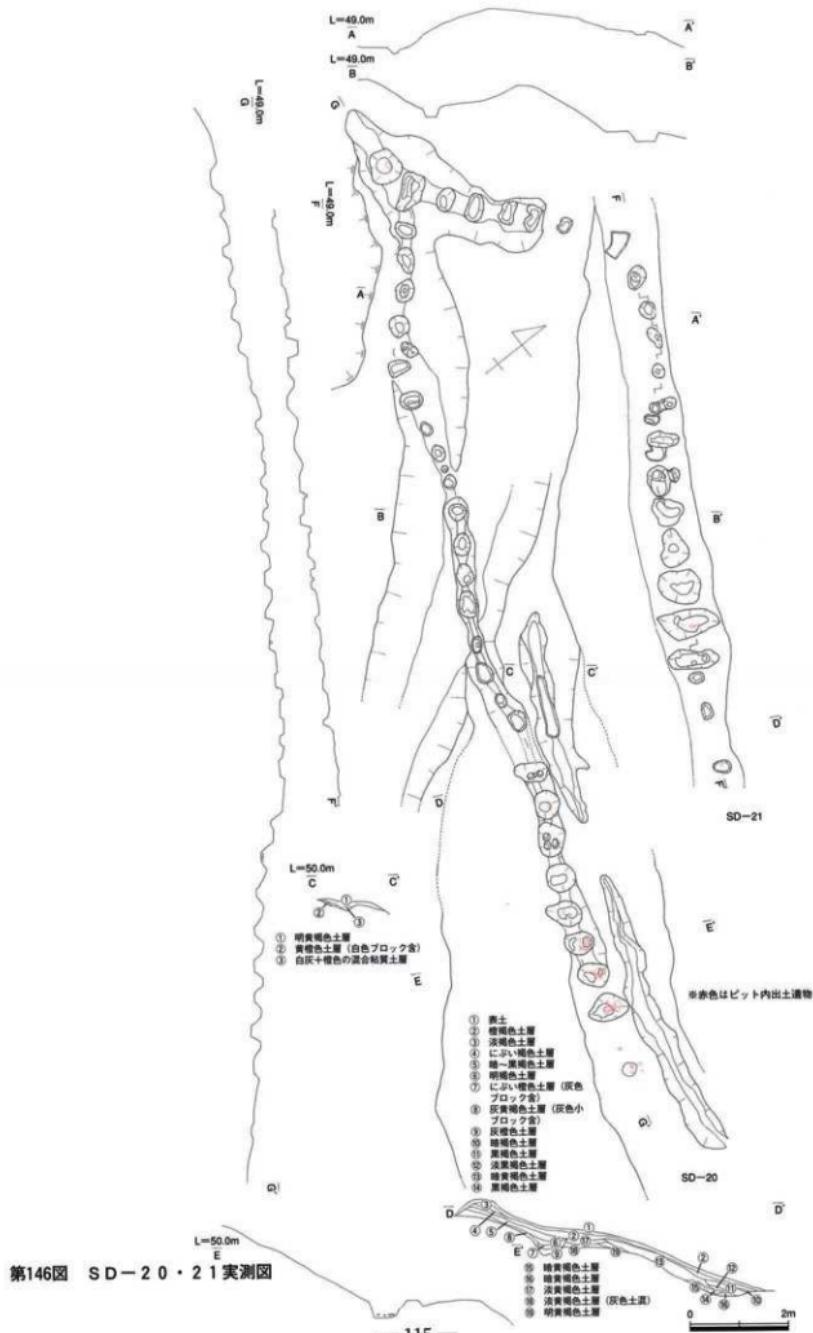
#### ○ SD-20・21 (第146図、図版32・33)

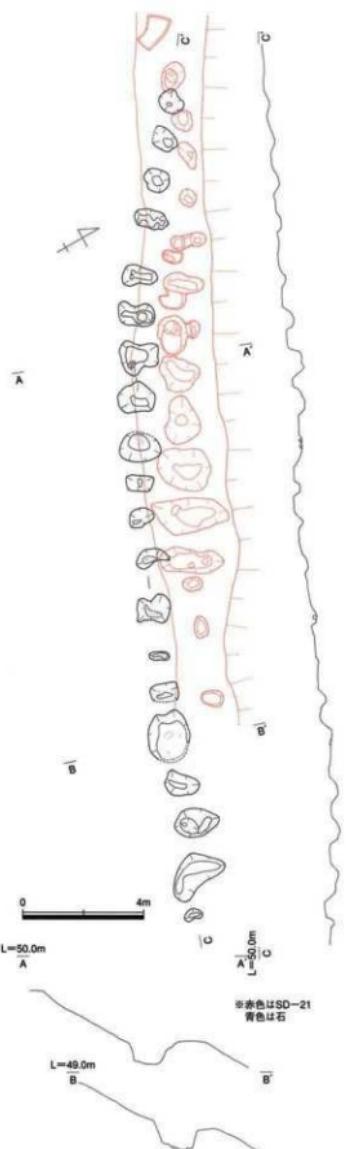
南側の尾根頂上平坦面から斜面にかけて検出された溝状遺構である。20は南側に位置し、全長19.00m、上端幅1.10~2.9m、深さ6~20cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形は逆台形を呈する。溝底からピットが17穴確認され、それらのピットは直径25~75cm、深さ5~15cm、間の距離は60~70cmを測る。ピットの埋土は硬化した橙灰色土である。埋土から須恵器の細片が出土したが時期の特定には至らなかった。

21は20の北側に位置し、全長12.40m、下端幅1.30m、平面形はほぼ直線形を、断面形は逆台形を



第145図 SD-18・19 実測図





第147図 SD-21下層、SD-21' 実測図

呈する。上端らしきものが見当らなかった。溝底からピットが37穴確認され、それらのピットは直径30~90cm、深さ5~15cm、ピット間の距離は60~71cmを測る。ピットの埋土は硬化した橙灰色土である。埋土から須恵器の細片が出土したが時期の特定には至らなかった。

#### ○SD-21' (第147図)

21の更に下層から検出された遺構で、全長27.2m、上端ではなく、下端幅0.80m、を測り、平面形はほぼ直線形を、断面形は逆台形を呈する。溝底からピットが20穴確認され、それらのピットは直径40~100cm、深さ10~17cm、ピット間の距離は60~90cmを測る。ピットの埋土は硬化した橙灰色土である。埋土から須恵器の細片が出土したが時期の特定には至らなかった。

20・21・21'はいずれのピットも円形を基本としているものの不整形なものが多く、埋土は硬化した橙灰色土が堆積している。埋土中から5~10cm大の石や須恵器の壊片が出土した。20はやや蛇行しながらもほぼ直線形で、21は直線に走るもの途中向きを変えて20に合流するようになる。21のピットは土層断面から21'を掘り直して21が作られたと思われる。

#### 須恵器：甕 (第148-1~3図、図版84)

いずれも胴部片である。外面には平行叩き文、内面には同心円状の當て具痕が残る。

#### 陶器：碗 (第148-4図、図版84)

底径5.4cmを測る陶器の碗の底部片である。灰黄色の下地に青緑色の釉薬を施している。近代以降の布志名焼と思われる。

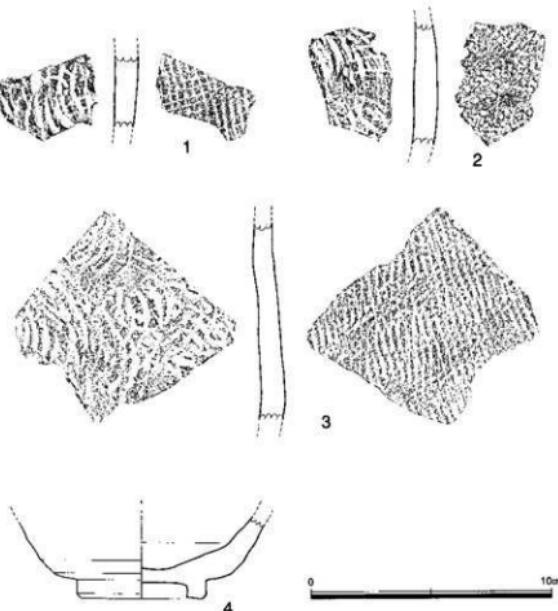
○SD-22 (第149図、図版34)

20・21の南側、丘陵の反対側の斜面から検出された溝状遺構である。西側は調査区外になるため正確な規模は不明である。残存長24.45m、上端幅2.46~3.72m、深さ66~75cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。溝底からピットが14穴確認され、ピット間の距離は一定しないが、およそ60~65cmを測る。ピットの埋土は硬化した橙灰色土であり、埋土から遺物は出土しなかった。溝の埋土は下層に砂質土が堆積している。

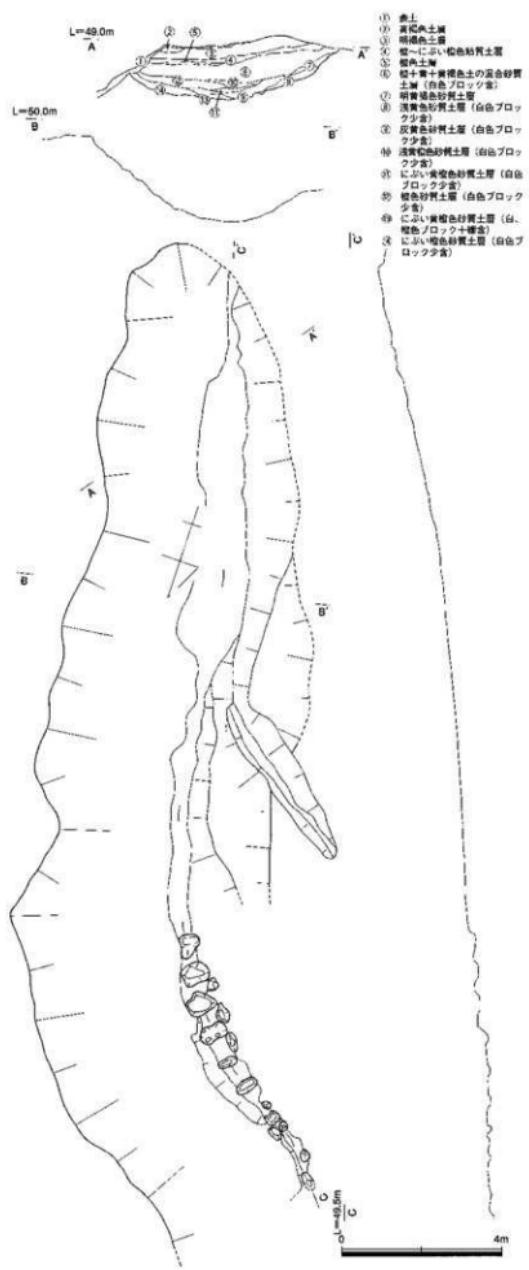
○SD-23 (第150図、図版34)

22の側壁を削平するように検出された溝状遺構で、これも南側が調査区外になるため正確な規模は不明である。残存長4.70m、上端幅0.8m、深さ26~30cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形はU字型を呈する。最下層は硬化した灰橙色土が堆積し、その上層は砂質土が水平堆積していた。埋土中から須恵器の壺片が出土したが、時期の特定には至らなかった。

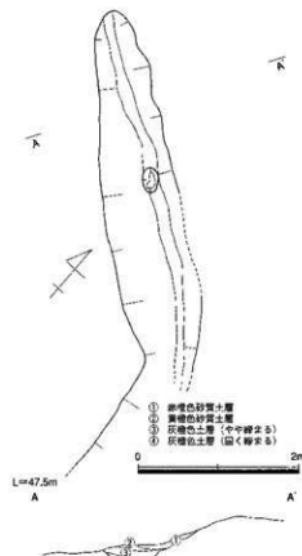
22・23は、土層断面から前後関係は判断できなかったが、22の側壁を削平するように23が造成されていることから、23の方が新しいと思われる。本遺跡群から検出された溝状遺構は西から東に向かって傾斜しながら流れいくのに対して、22・23は逆方向に傾斜しながら流れている。



第148図 SD-20 出土土器実測図



第149図 SD-22実測図



第150図 SD-2-3実測図

### ○ S D - 24・25

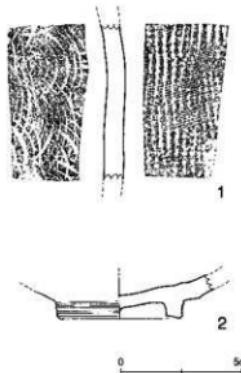
(第151・154図、図版35)

南側尾根の頂上部平坦面から検出された溝状造構である。

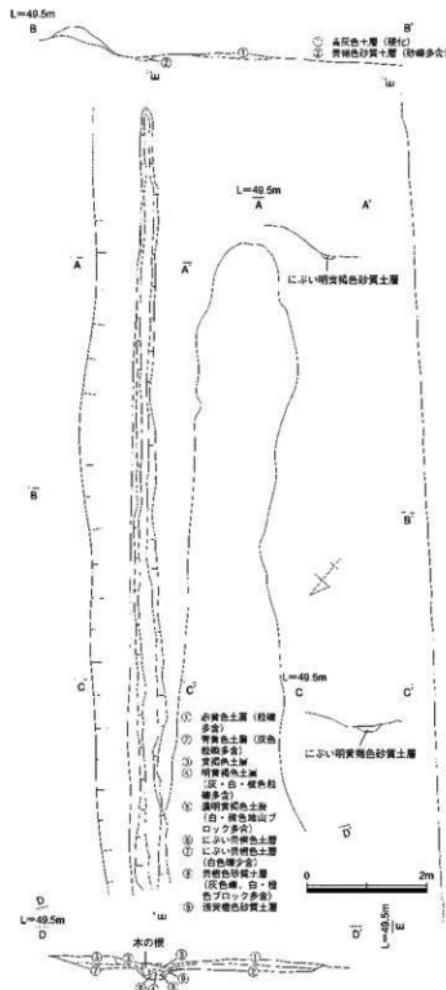
24は検出長12.8m、上端幅0.24m、下端幅0.16m、深さ5~10cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形は逆台形を呈する。南側には幅約1.5mの平坦面を有する。

25は全長12.74m、上端幅0.5m、下端幅0.2m、深さ4~10cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形は丸底形を呈し、南側に幅約1.7mの平坦面を持つ。しかし東側に行くにつれて浅くなり、途中で消滅してしまっているため、側溝であったかは不明である。

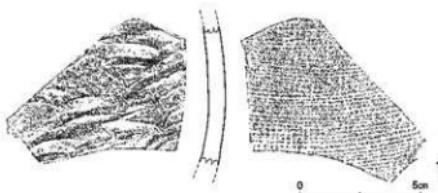
土層断面から24が24の埋土を削平して造成していることがわかる。24の埋土からは布志名焼の小片が出土しており、25は近代以降に使用されていたと考えられる。



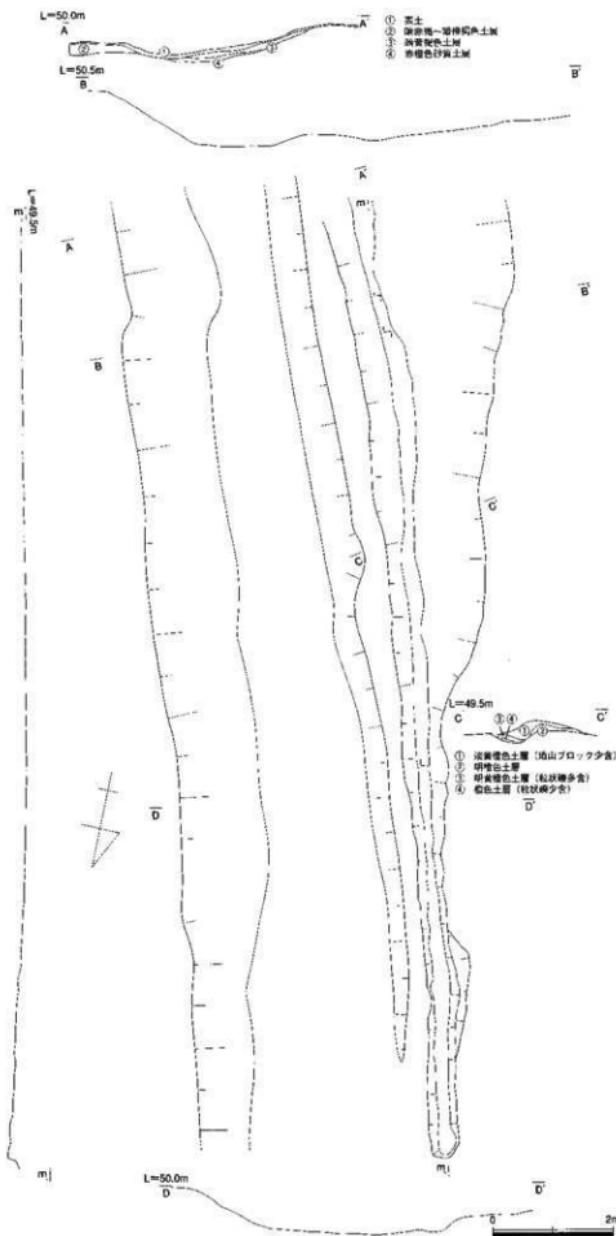
第152図 SD-24 出土土器実測図



第151図 SD-24 実測図



第153図 古道1出土土器実測図



第154図 SD-25 実測図

以下はSD-24から出土した遺物である。

須恵器：甕（第152-1図、図版84）

胴部片で、外面には平行叩き文、内面には同心円状の当て具痕が残る。

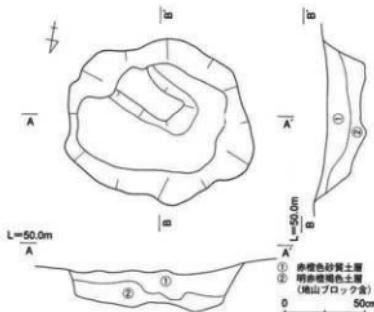
陶器：碗（第152-2図、図版84）

底径5.2cmを測る陶器の碗の底部片である。灰黄色の下地に青緑色の釉薬を施している。近代以降の布志名焼と思われる。

以下はSD-24の平坦面から出土した遺物である。

須恵器：甕（第153-1図、図版84）

胴部片で、外面には平行叩き文、内面には同心円状の当て具痕が残る。



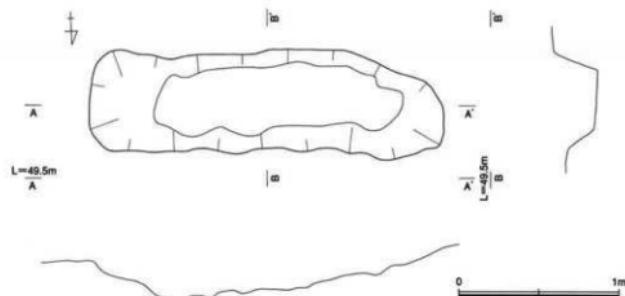
第155図 SK-03 実測図

○SK-03

（第155図、図版36）

南側尾根の平坦面から検出された土壙で、上端径1.18m、下端径1.03m、深さ26cmを測り、平面形は不整円形を呈する。炭層は見られないものの、上端縁辺に火を受けた痕跡が残っていることから

“こ炭焼”的土壙と思われる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

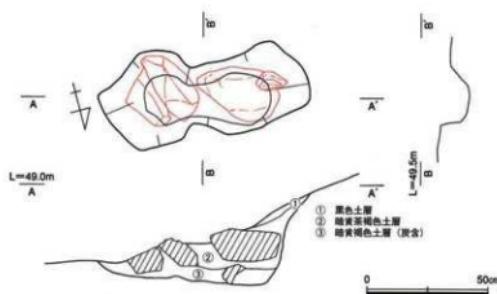


第156図 SK-04 実測図

○SK-04

（第156図、図版36）

南側尾根の平坦面から検出された土壙で、上端径2.20m、下端径0.64m、深さ25cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。最下層には一面に炭が残っており、上端縁



第157図 SK-05 実測図

邊にも火を受けた痕跡が残っていることから“こ炭焼”的土壌と思われる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

#### ○SK-05 (第157図、図版36)

南側尾根の平坦面から検出された土壙で、上端が長軸東西方向88cm、短軸南北方向32cm、下端が長軸東西方向52cm、短軸南北方向20cm、深さ40cmを測り、平面形は不整長方形を呈する。内部から30~50cm大の石が出土したが、土器などは出土しなかった。時期を含めて用途など詳細については不明である。

#### ○SD-26 (第158~160図、図版37)

南北の尾根の間を走るように検出された溝状遺構である。全長は58mを測り、上端は最大で16.5m、深さは最大で1.8mを測る。下端は西側では底面がなだらかで碗底状を呈するが、東側に行くにつれて幅30~50cmのV字状を呈する。東端では下端がやや広くなり断面逆台形を呈する。途中2段に分かれ、双方とも斜面を上りきった所で消滅する。埋土中からは須恵器の壺片やつまみが付くと思われる蓋の口縁部片が出土した。

26の土層断面からは、“水つき”と呼ばれる水の流れによってできる砂質土の水平堆積層が見られた。地質学的には上流に大量の土砂があって、大水などによって土砂が流されて、また堤のようなものがない場合、このような堆積の仕方はしないのではないかと思われる。考古学的には上流の土砂の存在や、堤のようなものがないと土砂が堆積しないのではないかという不明な点もあり、検討を要する。

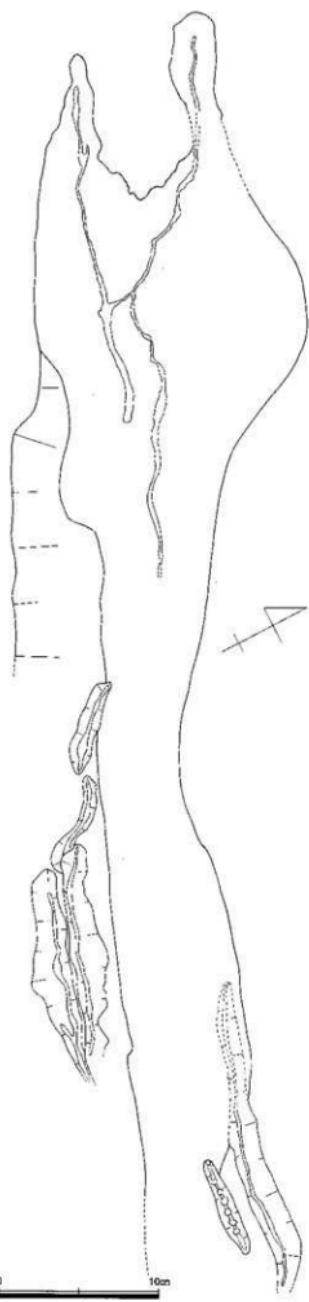
また非常に硬く締まった砂質土層がある程度の広がりを見せた。当初は道路状遺構の硬化面と考えられたが、地質学的には水分を含んだ砂質土が堆積した後、砂質土の水分が失われると急速に固決するため硬くなったのではないかとの指摘を受け、人工的なものか自然的なものか結論は出なかった。またどの土層断面からも有機物を含んだ黒色土が見られなかった。

26は結論的に“道路”として使用していたと思われる。東端に残る平坦面の下端幅(約1.5m程度)が道路幅と考えられ、その幅で使用されていたと考えられるのだろう。底面がV字状になっているのは道路が廃棄された後に水が流れてV字状にえぐれてしまったと思われる。また底部に見られるピット状の土壙は“水かめ”と呼ばれる水によってえぐられたものと思われる。しかしどの土層断面からも有機物を含んだ黒色土が見られなかった。

#### 須恵器：壺 (第161-1~3図、図版84)

1は推定口径8.2cmを測る高台付壺の底部片である。高台は斜め方向に下がり、端部は丸く仕上げている。底部は回転ヘラ削り後に高台が張り付けられている。外面は回転ナデ内面は不定方向のナデで調整されている。8世紀前半のものと思われる。

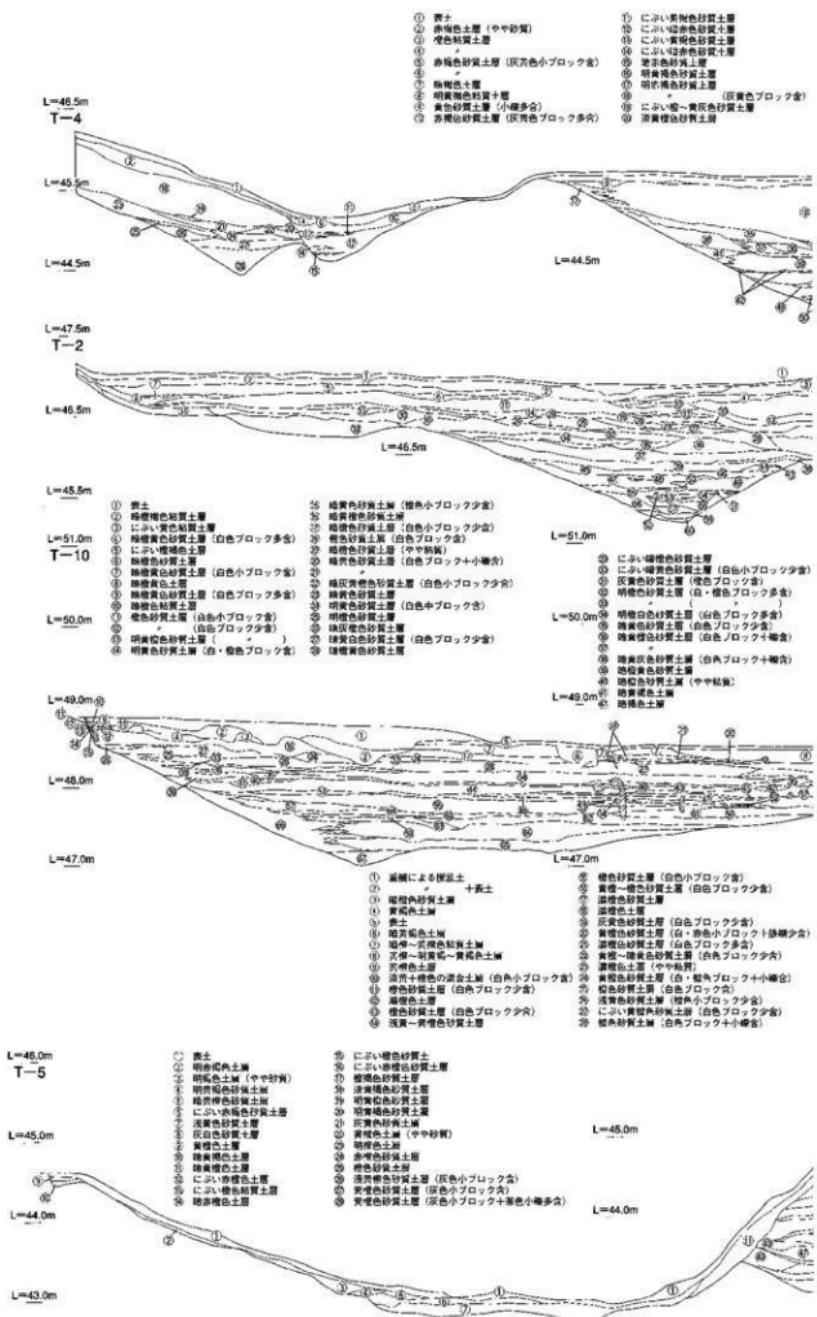
2は推定口径9.0cmを測る高台付壺の底部片である。高台は垂直に付き、途中屈曲しながら下がり、端部の断面形は三角形を呈する。底部には回転糸切り痕は見られず、外面は回転ナデ内面は不定方向



第158図 SD-2 6 上端実測図(左)

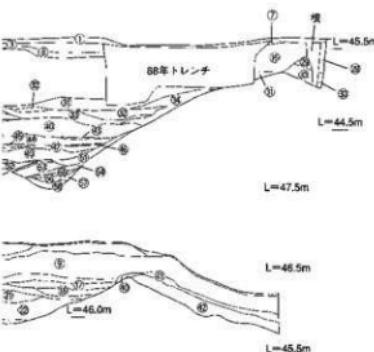
第159図 SD-2 6 下端実測図(右)





- ① にぶい角砂質土層  
 明黄褐色砂質土層  
 淡黃褐色砂質土層  
 淡黃褐色砂質土層  
 淡黃褐色砂質土層  
 淡灰黃色砂質土層 (灰色小ブロック多含)  
 青褐色砂質土層  
 淡黃褐色砂質土層 (灰色小ブロック含)  
 青褐色砂質土層  
 地色土層

L=46.5m



- 青褐色土層 (ヤナギ葉)  
 にぶい黃褐色土層  
 (灰色小ブロック+茶色小礫多含)  
 淡黃褐色土層 (ヤナギ葉)  
 明黃褐色土層  
 にぶい淡黃褐色土層  
 (灰色小ブロック+茶色小礫多含)  
 にぶい黃褐色砂質土層  
 (灰色小ブロック+茶色小礫多含)  
 淡黃褐色砂質土層  
 にぶい淡黃褐色砂質土層  
 (灰色小ブロック+茶色小礫多含)  
 青褐色砂質土層  
 にぶい黃褐色砂質土層  
 (灰色小ブロック+茶色小礫多含)  
 淡黃褐色砂質土層  
 にぶい黃褐色砂質土層  
 (灰色小ブロック+茶色小礫多含)  
 淡黃褐色土層 (灰色小ブロック赤褐色土層)  
 淡黃褐色砂質土層 (灰色小ブロック+茶色小礫赤褐色土層)  
 にぶい淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック含)  
 淡黃褐色土層 (白色小ブロック+茶色小礫土層)  
 淡黃褐色土層 (白色小ブロック+茶色小礫土層)  
 にぶい黃褐色砂質土層 (灰色小ブロック含)  
 にぶい淡黃褐色砂質土層 (ヤナギ葉)  
 にぶい淡黃褐色砂質土層 (赤褐色土層)  
 にぶい淡黃褐色砂質土層 (ヤナギ葉)

- ① 淡黃褐色砂質土層  
 ② 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ③ 淡黃褐色砂質土層  
 ④ 淡黃褐色砂質土層  
 ⑤ 淡黃褐色砂質土層  
 ⑥ 淡黃褐色砂質土層  
 ⑦ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ⑧ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ⑨ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ⑩ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)

L=51.0m

L=51.0m

- ⑪ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ⑫ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ⑬ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)

L=50.0m

L=50.0m

- ⑭ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ⑮ 淡黃褐色砂質土層  
 ⑯ 淡黃褐色砂質土層  
 ⑰ 淡黃褐色砂質土層  
 ⑱ 淡黃褐色砂質土層  
 ⑲ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)

L=49.0m

L=49.0m

- ⑳ 淡黃褐色砂質土層 (赤褐色少含)  
 ㉑ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉒ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉓ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉔ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉕ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉖ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)

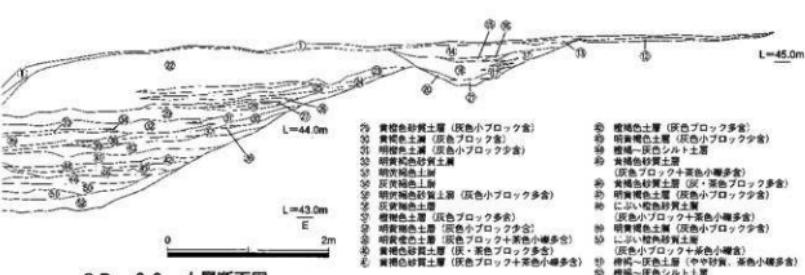
L=47.0m

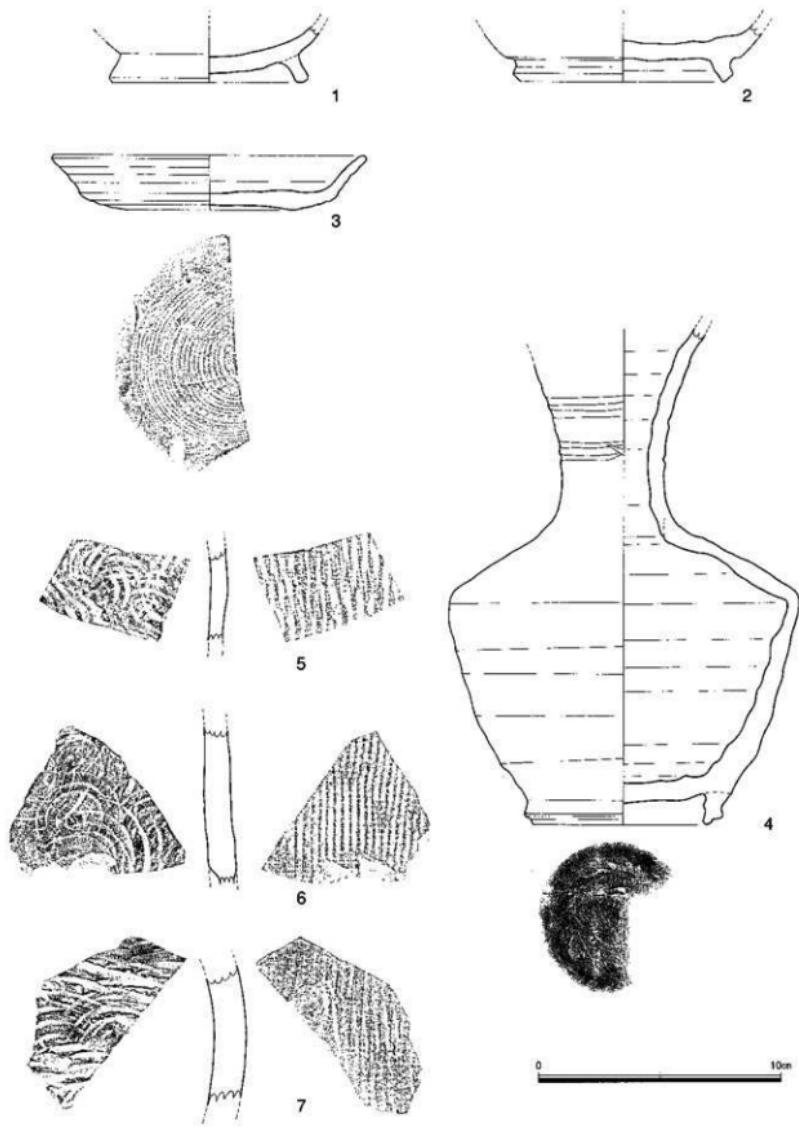
L=47.0m

- ㉗ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉘ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉙ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉚ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉛ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉜ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉝ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉞ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉟ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉟ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)

- ㉛ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉜ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉝ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉞ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉟ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉟ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉟ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)  
 ㉟ 淡黃褐色砂質土層 (白色小ブロック少含)

L=46.0m





第161図 SD-26出土土器実測図

のナデで調整されている。8世紀前半のものと思われる。

3は推定口径12.9cm、推定底径7.6cmを測る破片である。底部から口縁部にかけて斜め方向に立ちあがり、端部は丸く仕上げている。底部外面には回転糸切り痕が見られる。8世紀後半のものと思われる。

須恵器：壺（第161-4図、図版84）

底径8.2cmを測る高台付の長頸壺で、口縁部分が欠損している。口縁部から頸部、肩部にかけて反り返るように下がり、肩部は張り出し底部にかけてやや斜め内側に下りる。頸部には沈線らしきものが2条巡らされ、底部は静止糸切り後、高台が貼り付けられている。高台部端部にも沈線が巡らされ、段になっている。外面は横ナデで調整されている。

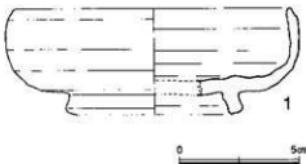
須恵器：甕（第161-5～7図、図版84）

いずれも胴部片である。外面には平行叩き文、内面には同心円状の当て具痕が残る。

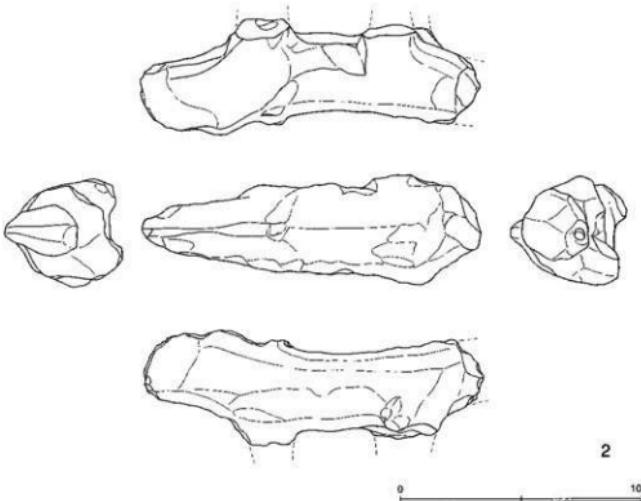
以下はSD-26周辺から出土した遺物である。

須恵器：壺（第162図-1、図版85）

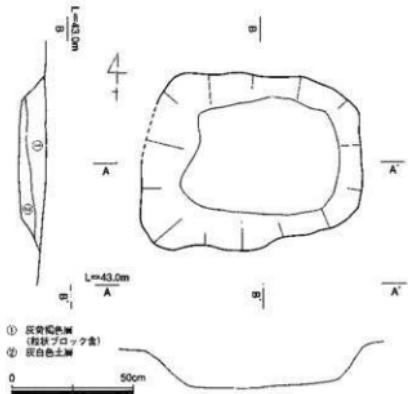
口・底径いずれも推定で11.6・7.4cmを測る破片である。底部から体部にかけて丸く湾曲し、口縁部にかけては垂直に立ち上がる。端部はやや先細るもの丸く仕上げている。内外面は回転ナデ、底部内面は仕上げナデで調整されている。8世紀前半のものと思われる。



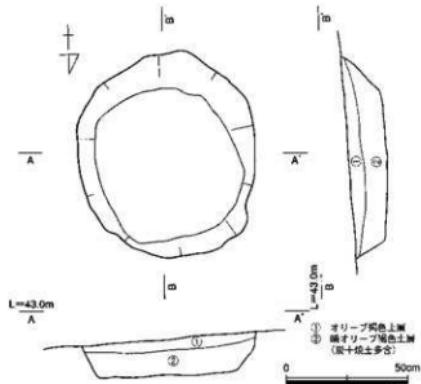
第162図 SD-26周辺出土土器  
実測図(1)



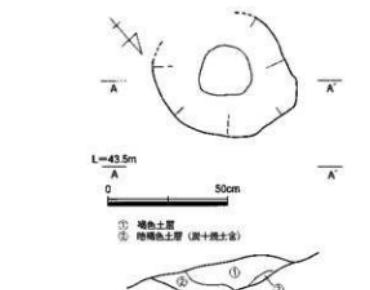
第163図 SD-26周辺出土遺物実測図(2)



第164図 SK-06 実測図



第165図 SK-07 実測図



第166図 SK-08 実測図

土器：土馬（第163-2図、図版85）

残存長14.1cm、残存幅4.2cmを測る土器質の土馬である。脚と首が欠損している。

#### ○SK-06 (第164図、図版39)

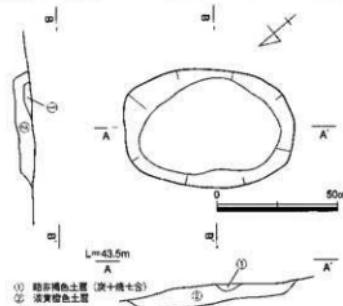
上端は長軸0.91cm、短軸0.76cm、下端は長軸62cm、短軸48cm、深さ16cmを測り、平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土せず、時期や用途など詳細については不明である。

#### ○SK-07 (第165図、図版39)

SD-26の北側緩斜面から検出された土器で、上端径0.84m、下端径0.73m、深さ16cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。最下層には炭や焼土を多量に含んだ層が20cm程度堆積しており、上端縁辺にも火を受けた痕跡が残っていることから“こ炭焼”的土器と思われる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

#### ○SK-08 (第166図、図版39)

SD-26の北側緩斜面から検出された土器で、上端径0.60m、下端径0.48m、深さ13cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。下端縁



第167図 SK-09 実測図

辺には炭や焼土を含んだ層が堆積しており、上端縁にも火を受けた痕跡が残っていることから“こ炭焼”の土壤と思われる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

○SK-09 (第167図、図版39)

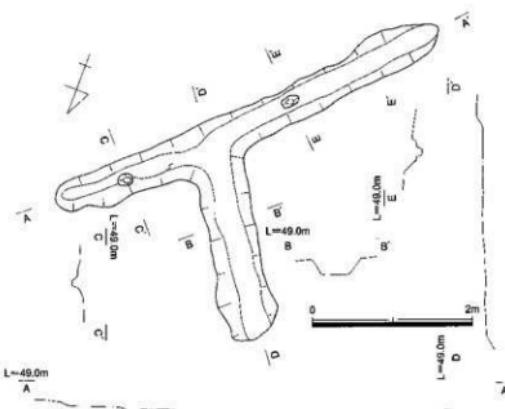
SD-26の北側斜面から検出された土壤で、上端径0.70m、下端径0.48m、深さ7cmを測り、平面形は梢円形を呈する。最下層は炭や焼土を含んだ層が見られないが、上端縁にも火を受けた痕跡が残っていることから“こ炭焼”の土壤と思われる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

○SD-27 (第168図、図版40)

平面形がカタカナの「ト」字状を呈する。北西～南北に走る溝は全長10.5m、上端幅0.9m、下端幅0.36m、深さ0.30mを測り、直行する北東～南西に走る溝は全長4.80m、上端幅1.20m、下端幅0.60m、深さ35mを測る。この溝が26によって削平されるような形になっているため、26以前の溝状遺構と考えられる。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

○SD-28 (第169図、図版40)

SD-26が消滅した位置から西に3.8mの地点から検出されたもので、全長15.4m、上端幅1.45～3.00m、下端幅0.30m、深さ0.35mを測る東西方向に走る溝状遺構で、途中2段に分かれている。東側ではピットが見られなかつたが、西側では浅いピットが検出された。北側の肩の部分は残っているものの、南側は削平されているために残っていない部分もあった。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。



第168図 SD-27 実測図

### ○SD-29 (第170図、図版41)

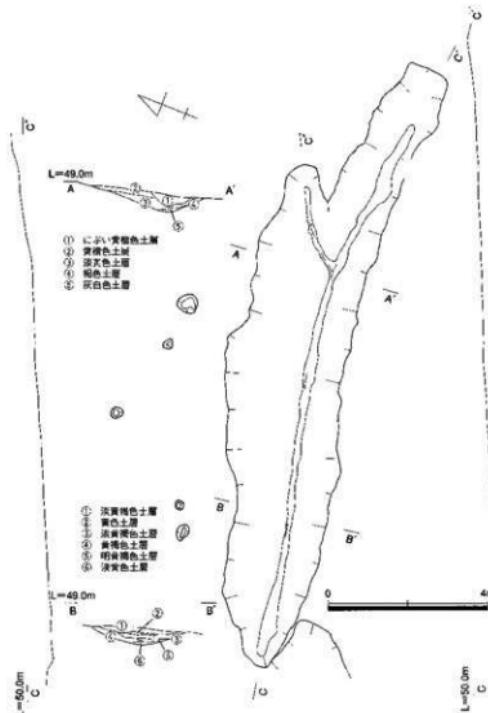
28の南隣りに位置し、全長22.75m、上端幅1.8~6.25m、下端幅1.50m、深さ12~37mを測る東西方向に走る溝状遺構である。東側ではピットが見られないものの、西側では浅いピットが検出された。北側の肩の部分は残っているものの、南側は削平されているために残っていない部分もあった。遺物は出土せず、時期の特定には至らなかった。

### ○SD-30 (第171図)

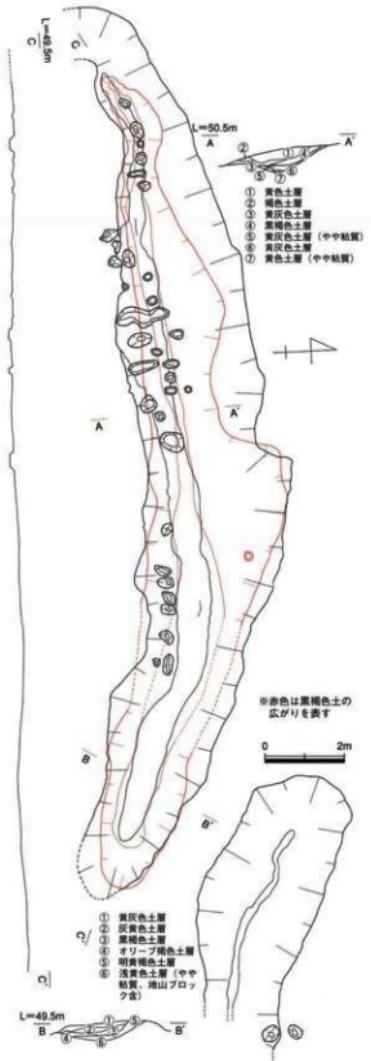
29の西隣、全長22.0m、上端幅1.38~4.50m、下端幅0.24m、深さ10~24mを測る東西方向に走る溝状遺構で、この遺構は後述する勝負谷遺跡のSD-01にあたるとと思われる。

### ○SD-31・32 (第172図)

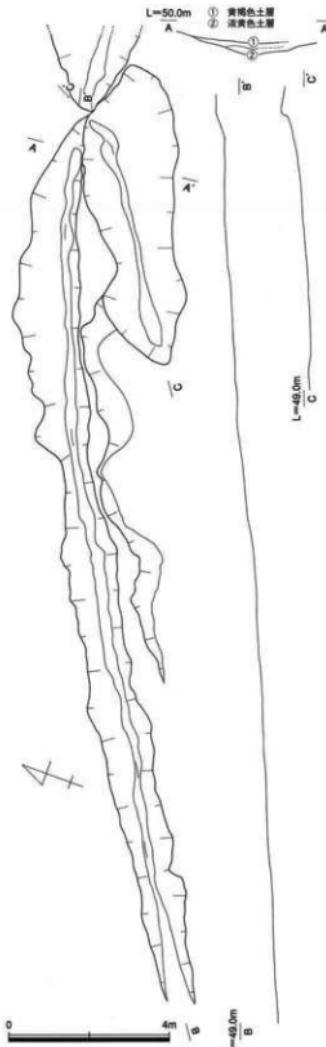
SD-28・30の南側は表土掘削・廃土除去のための重機の搬入路として、調査の開始段階で既に掘削されていた。そのため検出段階で上部が削平されているため、正確な規模などは不明である。31は



第169図 SD-28実測図



第170図 SD-29実測図



第171図 SD-30実測図

残存長13.8m、上端幅1.25m、下端幅0.6m、深さ5~10cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形は逆台形を呈し、32は残存長12.5m、上端幅1.25m、下端幅0.6m、深さ3~8cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形は逆台形を呈する。埋土からは遺物は出土しなかった。

### ○ S X - 0 2 (第173図、図版42)

SD-30と重機道を挟んで対岸から検出されたピット列で、東西長17.7mの間に20穴が掘り込まれている。ピットは直径70~120cm、深さ12~36cm、を測り、約140cm間隔で掘られていた。地山をオーブンカットして平坦面を作り、ほぼ等間隔にピットを掘りこみ、規則性が見られる。しかしながらド肩から検出されたピット列は、不規則で等間隔ではなかった。遺物は出土しなかったため、時期などについては不明である。

### ○ S D - 3 3 (第174図、図版43)

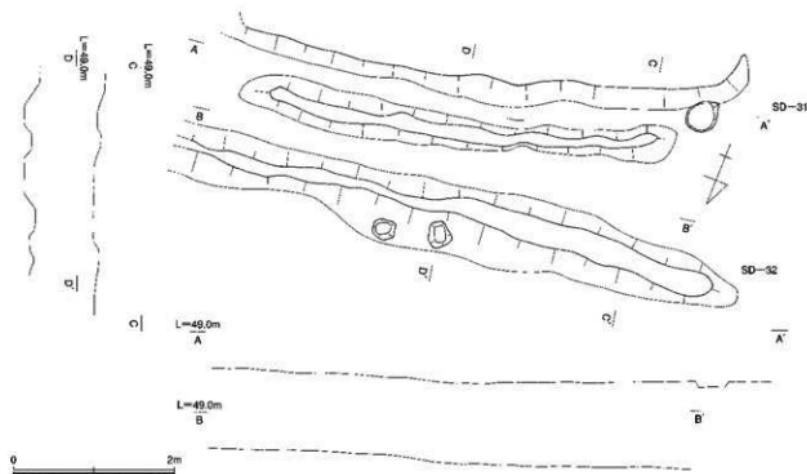
SX-02の西隣から検出された溝状遺構である。平面形はY字状を呈し、南側は全長23.75m、上端幅3.70m、下端幅1.0m、深さ15mを測り、断面形は逆台形を呈し、北側は全長16.6m、上端幅1.9m、下端幅50m、深さ15mを測り、断面形は逆台形を呈する。溝底には直径60~120cm、深さ5~30cmを測るピットが22穴、約100~150cm間隔で掘られていた。ピットの埋土の最下層は粘質土が堆積していた。

溝は南東隅が溝底のレベルが最も低く、北西に行くにつれてレベルが高くなり、ピットもしっかりと掘られている。頂上平坦面になると溝が次第に浅くなり、ピットだけになり最後にはピットもなくなる。この溝状遺構は、“波板凹凸面”と呼ばれる道路遺構の一種であると思われる。

埋土からは石などが出土したが、土器などは出土しなかったため、時期については不明である。

### ○ S D - 3 4・3 5、S X - 0 3 (第175図)

SD-34は調査区の西端から検出され、削平されたのか東西両側が消失してしまっているため、正

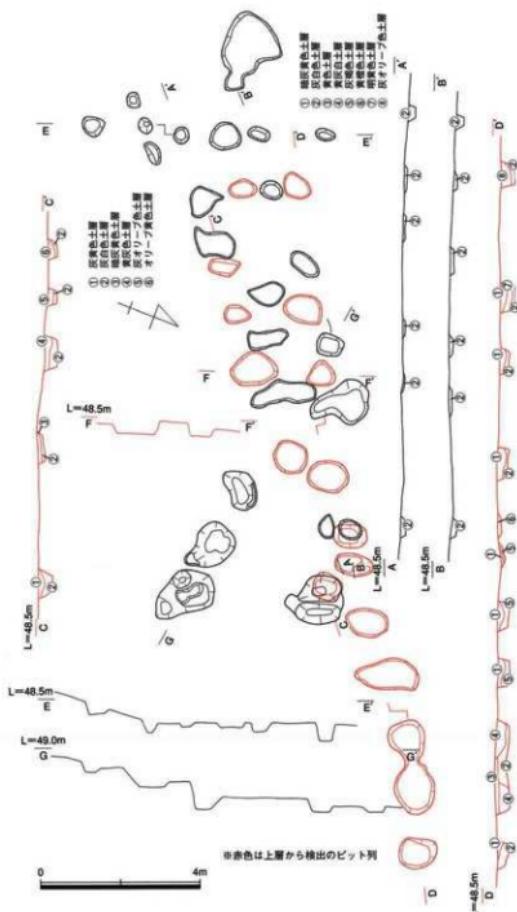


第172図 SD-31・32実測図

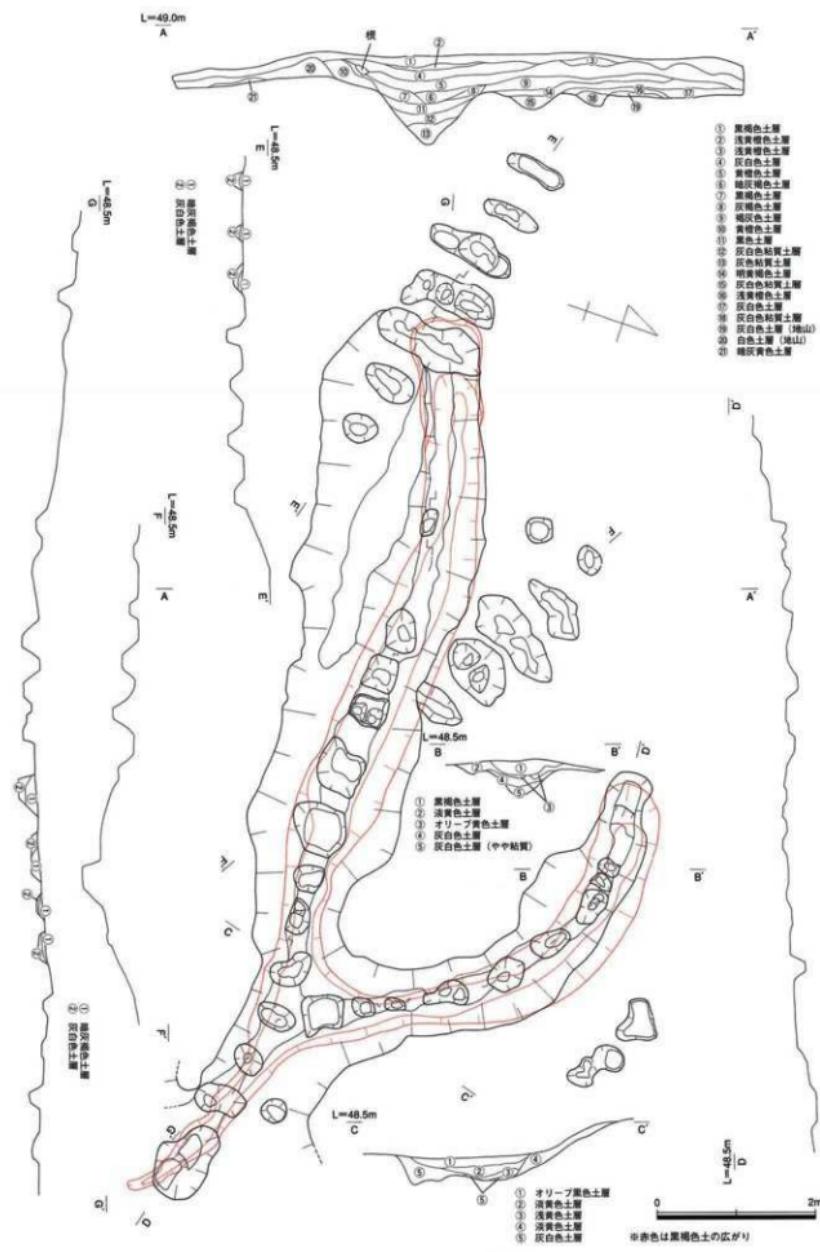
確な規模は不明である。残存長10.7m、上端幅4.75m、下端幅0.75m、深さ3～5cmを測る浅い溝状遺構で、遺物が出土しなかったため時期などの詳細については不明である。

SD-35は34の南側から検出された溝状遺構で、36によって北側が削平されているため正確な規模は不明である。残存長11.2m、上端幅1.2m、下端幅0.7m、深さ3～5cmを測る。遺物が出土しなかったため時期などの詳細については不明である。

SX-03は調査区の西端、SD-35の北隣から検出されたピット列である。東西長12.5mの間に12穴が掘り込まれていた。ピットは直径48～110cm、深さ3～8cmを測り、約150cm間隔で掘られていた。



第173図 SX-02実測図

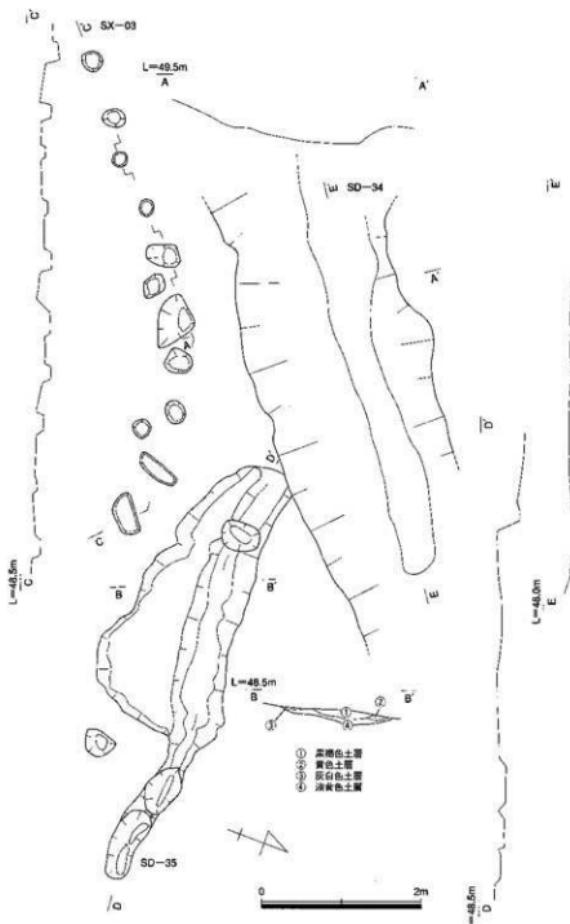


第174図 SD-33 実測図

地山に平坦面を作り、ほぼ等間隔にピットを掘りこみ、規則性が見られる。遺物は出土しなかったため時期についてなどは不明である。

### ○ S D - 3 6 (第176図)

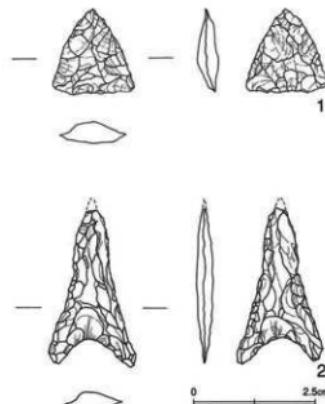
調査区の南端から検出された溝状造構で、南側は調査区外のため正確な規模は不明だが、残存長2.5m、上端幅0.88m、下端幅35m、深さ10~58cmを測り、平面形はほぼ直線形を、断面形は逆台形を呈する。南側に行くにつれて深くなる。溝底からはピットが4穴検出され、埋土の最下層には粘質



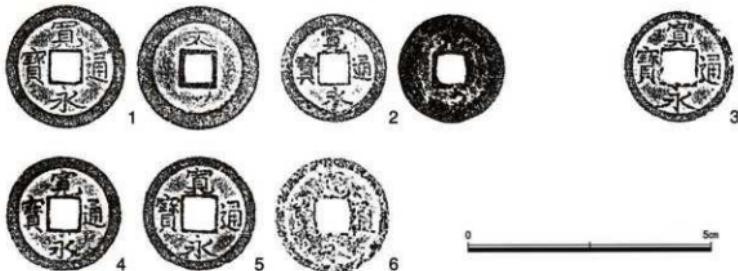
第175図 SD-34・35、SX-03実測図



第176図 SD-36 実測図



第177図 南側斜面出土石器実測図



第178図 出土銭貨拓影図

土が堆積していた。先述した33と同じく道路遺構と思われる。遺物は須恵器が出土したが、時期を判別するには至らなかった。

以下は重機道の南側斜面から出土したものである。

#### 石器：石鎚（第177-1・2図、図版85）

1はサスカイト製の平基式の石鎚で、最大長1.7cm、最大幅1.7cmを測る。2はサスカイト製の凹基式の石鎚で先端部はやや欠損している。残存長3.2cm、最大幅1.75cmを測る。

以下はSD-30付近から出土した銭貨である。おそらくは後述する勝負谷遺跡の“さいの神”に奉納されたものと思われる。

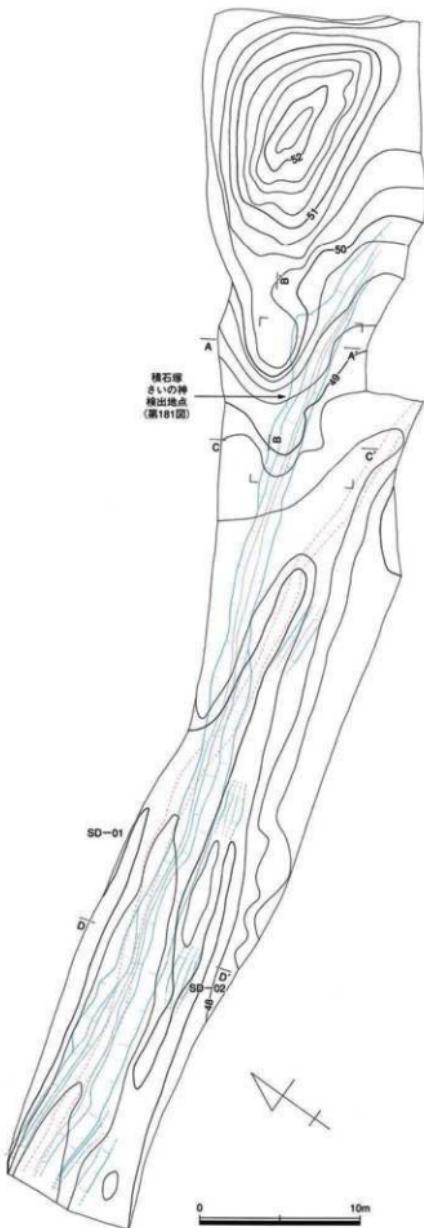
#### 銭貨（第178-1～6図、図版85）

1・2は背面に文字が刻まれ、1は「文」（初鑄1668年）、2は「元」（初鑄1741年）であり、3～6は新寛永通寶である。

（石川 崇）

名 称	断面形状	長さ(m)	上端幅(m)	深さ(m)	土 層 地 状 況	出土 通 物	備 考
SD-01	U字形	3.15	0.55~0.80	0.11~0.23	最下層：礫化	頸椎器片	
SX-01		20.00	-	-	ピット掘土は固結した橙灰色土	頸椎器片	ピット20穴 (径30~270cm、深さ5~15cm) 心身距離60~72cm
SD-02	U字形	12.07	0.70~1.40	0.13~0.30	最下層：礫化	頸椎器片	06の続き
SD-03	U字形	8.70	0.50~1.03	0.08~0.17	最下層：礫化	頸椎器片	
SD-04	U字形	10.88	0.40~1.12	0.10~0.40	ピット埋土は四線した橙灰色土	頸椎器片	ピット11穴 (径25~36cm、深さ8~13cm) 心身距離60~66cm
SD-05	U字形	20.86	0.30~1.54	0.13~0.27	ピット埋土は固結した橙灰色土	頸椎器片	ピット10穴 (径24~32cm、深さ5~8cm) 心身距離60~65cm
SD-06	U字形	26.90	0.80~1.18	0.15~0.55	最下層：礫化	頸椎器片	
SD-07	U字形	4.60	0.40~0.78	0.20~0.30	水平堆積	-	
SD-08	U字形	21.93	1.00~1.90	0.15~0.45	水平堆積	-	
SD-09	V字形	32.66	0.98~2.10	0.12~0.52	水平堆積	-	
SD-10	V字形	10.88	0.72~1.12	0.10~0.26	水平堆積	-	
SD-11	U字形	9.96	0.18~0.80	0.10~0.20		-	
SD-12	U字形	20.94	0.76~2.10	0.13~0.37	砂質土の水平堆積	高台付近底部 (底部凹凸系切)	
SD-13	V字形	34.52	1.20~2.28	0.30~0.66	最下層：礫化層	頸椎器片	
SD-14	U字形	6.42	0.48~1.18	0.24~0.35	ピット埋土は固結した橙灰色土	高台付近底部	ピット11穴 (径70~80cm、深さ3~10cm) 心身距離120~150cm
SD-15	U字形	20.40	0.24~0.63	0.10~0.20	最下層は粘質土	小石群	
SD-16	U字形	6.00	1.05~1.40	0.10~0.35	砂質土の水平堆積	-	
SD-17	U字形	7.94	0.43~1.20	0.12~0.16	砂質土の水平堆積	-	
SD-18	U字形	13.29	1.10~2.25	0.24~0.43	砂質土の水平堆積	頸椎器片 (壊片)	
SD-19	V字形～ U字形	12.85	0.95~2.60	0.22~0.48	砂質土の水平堆積	-	
SD-20	逆台形	19.00	1.10~2.90	6~20	ピット埋土は固結した橙灰色土	頸椎器片	ピット17穴 (径25~75cm、深さ3~15cm) 心身距離60~70cm
SD-21	逆台形	12.40	?	?	ピット埋土は固結した橙灰色土	-	ピット37穴 (径30~90cm、深さ3~15cm) 心身距離60~71cm
SD-21'	逆台形	27.2	?	?	ピット底から石が出土	-	ピット20穴 (径40~100cm、深さ10~17cm) 心身距離60~90cm F堆積0.80m
SD-22	U字形	24.45	2.46~3.72	0.65~0.75	最下層：礫化	頸椎器片	
SD-23	U字形	12.74	0.20~0.50	0.04~0.10	砂質土の水平堆積	-	
SD-24	U字形	4.70	-0.80	0.26	水平堆積 最下層：礫化	頸椎器 (壊片など)	古道の側溝 途中消滅
SD-25	丸底形	12.74	0.24	5~10		頸椎器 (壊片)	古道の側溝 途中消滅
SD-26	V字形～ 逆台形	58.00	~18.0	~1.8	砂質土の水平堆積	頸椎器 (壊片など)	
SD-27	逆台形	10.50	0.9	0.30		-	ピット2穴 (径30cm、深さ10cm)
SD-28	丸底形	4.89	1.2	0.35		-	
SD-29	U字形	15.4	1.45~3.00	0.35	最下層の一部に粘質土	-	
SD-30	V字形～ 近い	22.0	1.38~4.50	0.10~0.24	最下層の一部に粘質土	-	勝負谷遺跡のSD-01か?
SD-31	逆台形	12.5	1.25	0.03~0.08		-	
SD-32	逆台形	13.8	1.25	0.05~0.10		-	
SD-33	逆台形	23.75	3.70	0.15	ピットの最下層は粘質土	-	ピット22穴 (径60~120cm、深さ3~60cm) 心身距離100~130cm
SD-34	逆台形	16.60	1.90			-	
SD-35	逆台形	10.7	4.75	0.03~0.05		-	
SD-36	逆台形	11.2	1.20	0.03~0.05		-	
SD-37	逆台形	2.5	0.88	0.10~0.58		-	ピット4穴 (径37~88cm、深さ31.5~36cm) 心身距離48~60cm
SX-02	-	17.7	-	-		-	ピット20穴 (径70~120cm、深さ12~36cm) 心身距離140cm
SX-03	-	12.5	-	-		-	ピット12穴 (径48~110cm、深さ3~8cm) 心身距離150cm

表5 指松遺跡構造一覧表



#### 4. 勝負谷遺跡

本遺跡は総合運動公園の南東に隣接する3つの丘陵のうち、最南の丘陵に位置し、丘陵下の深田遺跡から措松遺跡に続く尾根筋とその北斜面に位置している。標高は48~52mである。調査区域は尾根筋が南東から南西寄りにカーブする地点より西側の部分であり、昭和63年度の（仮称）南新設中学校新設事業に伴う分布調査と試掘調査により、近接する古墳推定地2ヶ所と、尾根筋に沿って岩盤をV字状に加工した溝状遺構が点々と確認されていた。

古墳推定地のうち、西側の1基は近年まで“さいの神”が祀られていた場所で、柳の大木が生い茂り、その下に石の祠が見られ、不用になつた土壠が寄せてあつた。変形が著しく、平面プランは不明であるが、約5×4m、高さ0.3mを測る。

東側の1基は8×7.5m、高さ1.5mの円墳状を呈しており、南東側の地表面には拳大の石が多く見られた。試掘時に溝状遺構が検出されたトレンチを結ぶ尾根筋沿いには、現在も使われている山道が通っている。

調査の結果、古墳推定地1号は“さいの神”が祀られていたのみで、古墳ではなかつた。古墳推定地2号についても古墳ではなく、“さいの神”と一続きのものと考えられる積石塚であった。積石塚の方が古くから祀られていたと考えられる。

また古墳推定地1号の直下と2号の東裾にはSD-01が検出され、試掘時の溝状遺構とつながつた。このSD-01の更に東にはSD-02も発見された。

第179図 調査前地形測量図及び成果図

○SD-01 (第179図、図版47・50)

調査区のほぼ西端から東端まで検出され、東西共に調査区外に続いている。灰白色の地山をU字状から逆台形状に加工したもので、上端幅1.3~3.7m、下端幅0.2~1.5m、深さ0.4~0.6m、検出全長60mを測る。埋土は黄褐色系の土層である。さいの神直下から東西20m程の範囲の底面には縮まりのある灰黄色土が薄く堆積し、3cm前後の砂利がまばらではあるが地山面まで埋まり込んでいた。

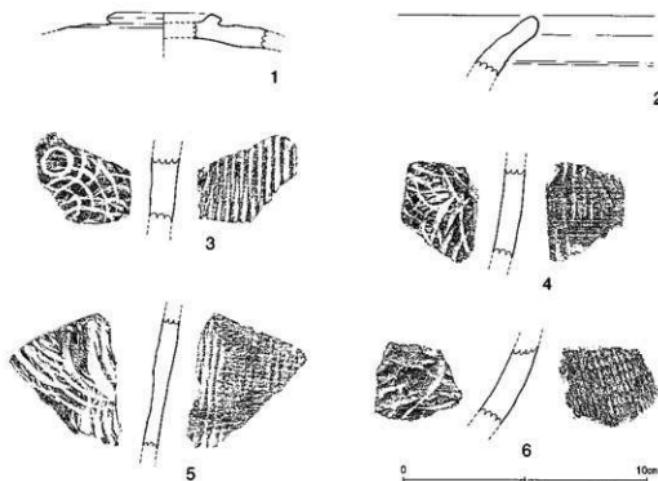
遺物は壺を中心とした須恵器の破片ばかりが埋土中や地山上から出土しており、時期のわかるものとしては輪状つまみの蓋があり、その形態的特徴から8世紀代の遺構と思われる。

須恵器 (第180-1~6図、図版85)

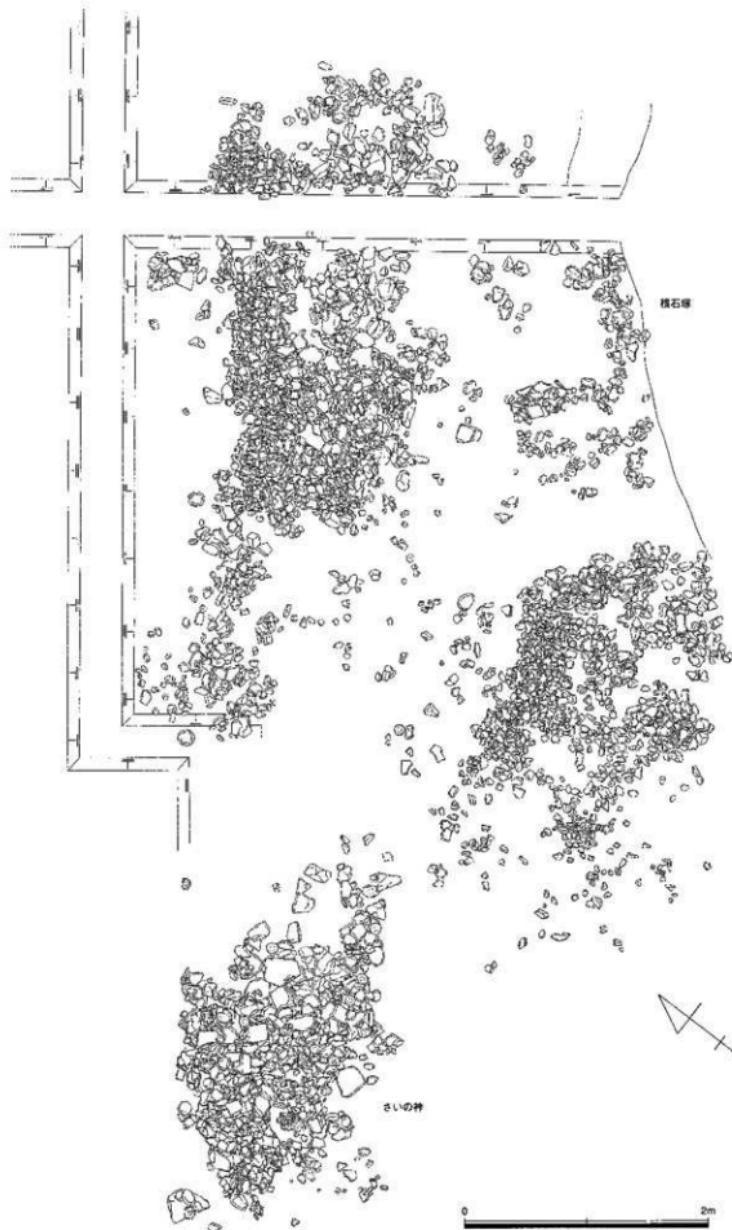
1は輪状のつまみを持つ蓋で、直径4.7cmを測るつまみ部分のみの破片である。外面は回転ナデ、内面はナデで調整されている。形態的特徴から8世紀代のものと思われる。2は残存長1.5cmを測る壺の口縁部片である。極小片のため口径の復元はできなかった。内外面共に回転ナデで調整されている。3~6はいずれも残存長5cm未満の壺の胴部片で、外面に平行叩き、内面に同心円状の当て具痕が見られる。

○SD-02 (第179図、図版51・52)

SD-01のすぐ東隣から検出された。上端幅1~2m、下端幅0.3~0.9m、深さ0.1~0.2mを測り、北端は01から次第に東にそれで現在の道の下に重なっていくようである。断面形は浅いU字状である。



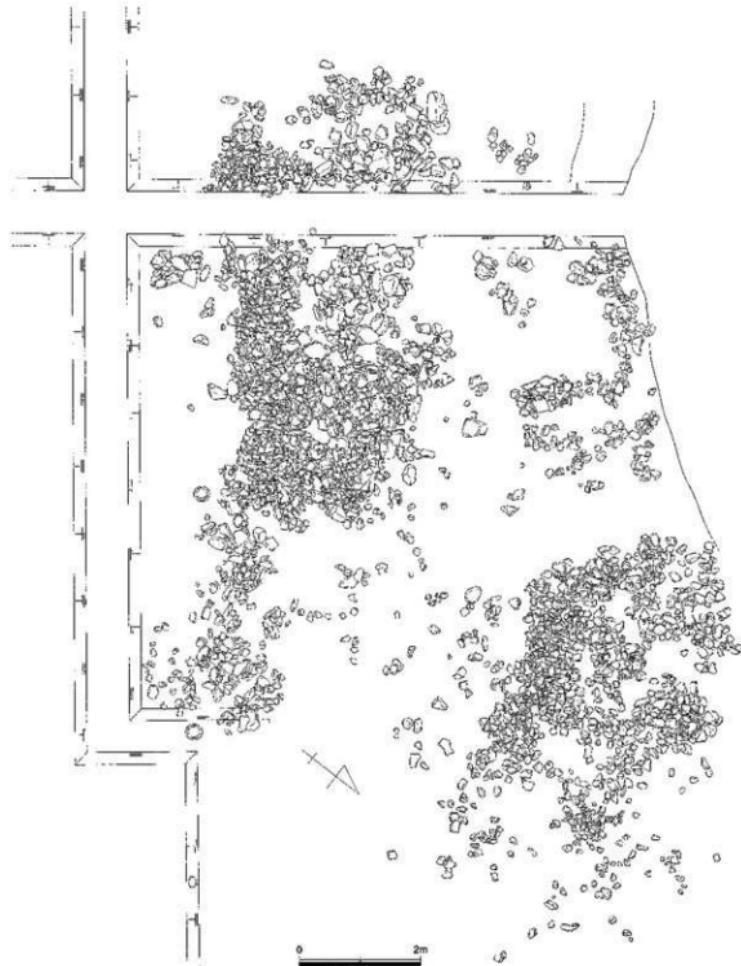
第180図 SD-01 出土土器実測図



第181図 積石塚、さいの神実測図

底面には2～3cm大の砂利がかなりの密度で分布していた。01との新旧関係は土層から見ると01がほぼ埋没したところに掘削されたものと判断される。

遺物は出土しておらず、遺構の正確な時期は不明である。



第182図 積石塚検出状況実測図

### ○積石塚（第181～183図、図版45）

調査前には $8 \times 7.5\text{m}$ 、高さ1.5mを測る円墳ではないかと思われていた。表土中に寄せられた石は東西約6m（東斜面に片寄る）、南北約7mの範囲に分布していた。拳大から手のひら大の石に混じって寛永通寶数枚、須恵器甕片、陶器片（備前焼壺、肥前系碗）、土師質土器皿（かわらけ）などが出土している。近代以降の蓋付き壺は東南傾斜面に正立状態で据えられていた。

第②層以下⑦層までは黄褐色土系の土層であるが、そのうち第⑥層まで表土と同様の石が多量に含まれていた。前述した奈良時代以降の須恵器だけが出土するSD-01内の埋土が第⑥～⑦層であることから、第⑥層から検出された石はSD-01が埋まり始めてからやや後の時点で寄せられたものではないかと考えられる。

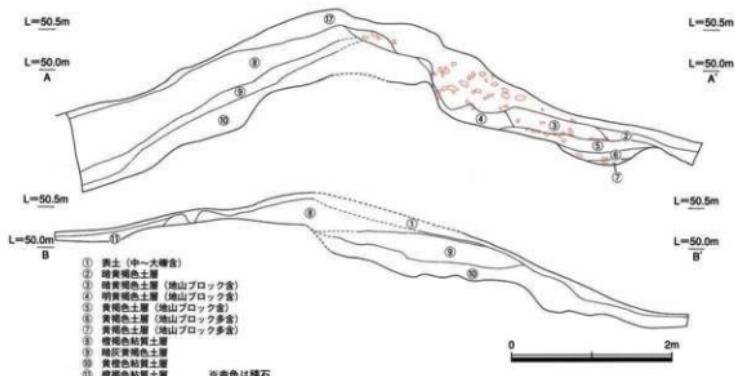
このことは後述する“さいの神”付近の石が表土中だけから発見され、それ以下の土層中には全くなかった状況とは随分様相が異なっており、“さいの神”より古くから祀られていたものと思われる。

第⑧～⑩層は西側斜面の堆積である。第⑨層は旧表土と見られるが、この土層からもその上層にある第⑧層中からも、石・遺物共に全く発見されなかつた。土層の切り合いからみると第⑧層は01掘削時等の廃土が積み上げられたものと考えられる。

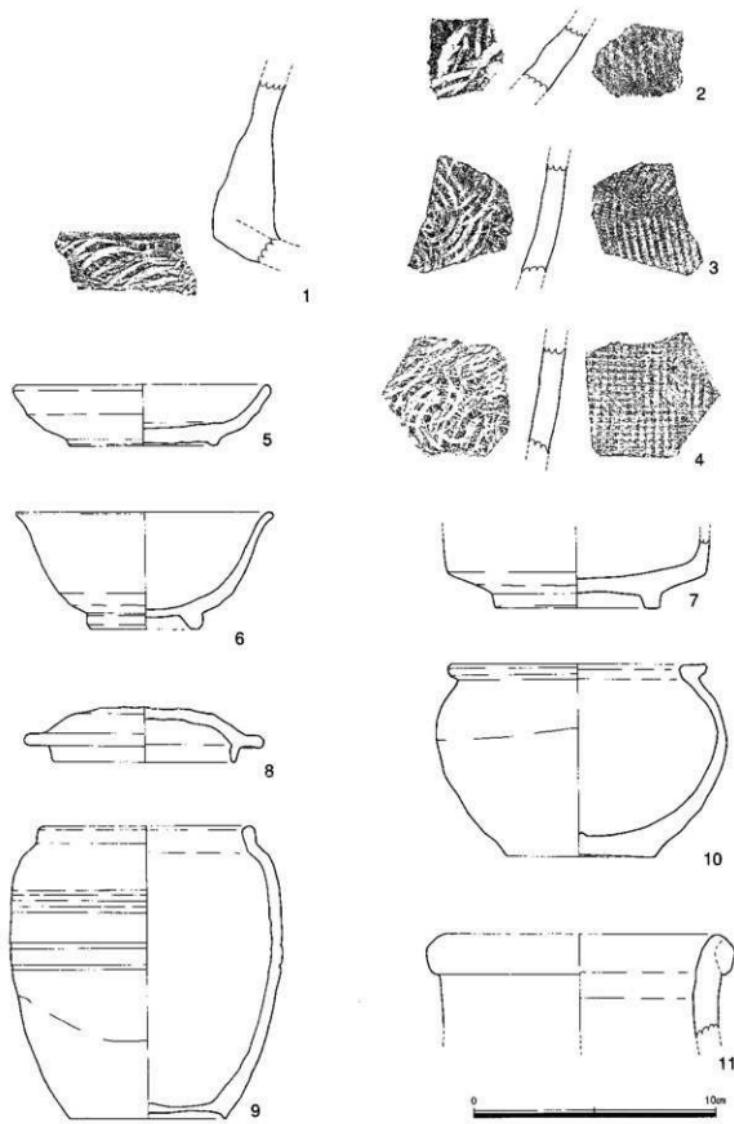
表土中以外の遺物は1層下から瀬戸焼の皿と碗の破片が出ているのみである。陶器片はいずれも近世以降のものと思われる。

### 須恵器：甕（第184-1～4図、図版86）

1～4は残存長2～7cmの甕の破片で、1は頸部片で外面に自然釉が付着している。2～4は胴部片で、外面に平行叩き、内面に同心円状の當て具痕が見られる。



第183図 積石塚、SD-01 土層断面図



第184図 積石塚出土土器実測図

#### 陶器：皿（第184-5図、図版86）

口径10.8cm、底径6.2cm、器高2.5cmを測る瀬戸・美濃系の施釉陶器と思われる高台付の皿である。高台部から胴部にかけてはやや膨らみながら口縁部に向けて立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられている。回転ナデで調整され、胎土は乳黄白色でやや緑がかった透明釉が施され、貫入が見られる。釉薬は高台裏や見込み部分が剥がれていますが、重ね焼きの部分だと思われる。

#### 陶器：碗（第184-6図、図版86）

口径10.8cm、底径5.0cm、器高4.9cmを測る瀬戸・美濃系の施釉陶器と思われる高台付の端反碗である。高台は貼り付けの後に削利で整えられ、高台部分から胴部にかけてやや膨らみながら口縁部に向けて立ち上がる。口縁端部外側に反りかえる。回転ナデで調整され、灰黄色の釉薬で高台付近まで施釉されている。

#### 陶器：鉢（第184-7図、図版86）

底部径が推定で7.0cmを測る陶器の鉢の底部片である。高台は貼り付け後に削利で整えられ、形状は高台から外側に直線的に開き、その後垂直に立ち上がる。回転ナデで調整され、胎土は乳黄白色でやや緑がかった透明釉が高台付近まで施釉されている。

#### 陶器：壺蓋・壺（第184-8・9図、図版86）

1セットで使われていたものと思われる。8は口径7.6cm、かえり径10.0cm、器高2.3cmを測る壺蓋で、天井部はやや膨らんでおり、かえりは丸く太く仕上がっている。口縁端部はやや先細る。内外面共に回転ナデで調整され、赤褐色の下地に暗赤褐色の釉薬で外面全域に施釉されている。

9は口径9.0cm、底径7.4cm、器高12.0cmを測る陶器の壺で、底部からわざかに膨らみながら立ち上がる寸胴形を呈する。胴部に2本の条線が施され、内外面共に回転ナデで調整され、赤褐色の下地に暗赤褐色の釉薬で胴部下まで施釉されている。内面は透明釉で下塗りされている。双方とも布志名焼で、近世末～近代にかけてのものと思われる。

#### 陶器：壺（第184-10図、図版86）

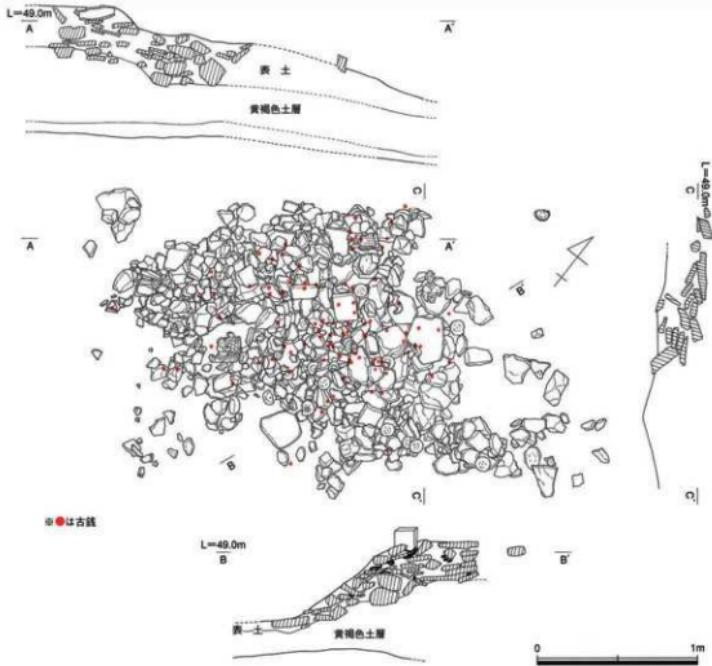
10は口径10.8cm、底径6.2cm、器高8.0cmを測る短頸壺で、底部から胴部にかけて丸く膨らみながら口縁部に向けて立ち上がる。口縁部は外側に開きながら、端部は平坦面を持つ。内外面は回転ナデで調整され、灰黄色の釉薬で高台付近まで施釉されている。赤褐色の下地に暗赤褐色の釉薬で胴部下まで施釉されている。内面は透明釉で下塗りされている。布志名焼で、近世末～近代にかけてのものと思われる。

11は推定口径12.8cmを測る壺の口縁部片で、口縁端部は丸く太い玉縁状を呈し、頸部から胴部にかけてはやや外に開く形状である。内外面共に回転ナデで調整されている。釉薬は見られず、焼き縮められた陶器である。

#### ○さいの神（第185・186図、図版46）

桟の木の東南側の表土中には3×2m程の範囲に石が集中して積まれており、その厚みは頂部で30cmに及んだ。石は5～30cm大、厚み1～5cmの板状のものがほとんどである。

石積みの間からは土器、陶器、古銭（元豊通寶・紹聖通寶の宋銭、寛永通寶、一錢、半錢、五厘など）



第185図　さいの神実測図



第186図　さいの神・SD-01 土層断面図

ど) 130数枚、土師質土器皿(かわらけ)、陶器の馬、炭、荒砂、サザエなどが入り乱れて出土し、「女〇〇」と3文字が掘り込まれた米特石製と考えられる15cm角、高さ30cmの石碑が石に埋もれて立てられていた。石、遺物、石碑全て表土中からの出土であり、第2層以下からは出でていない。

さいの神の直下には前述したSD-01が検出されているが、01の幅以外の部分は地山である。地山面即ち01検出面においてこれ以外の遺構はなく、古墳ではないことがわかった。

#### 土師質土器：皿（第187-1～22図、図版87）

さいの神の遺構からは大量の土師質土器皿が出土した。全てさいの神に献納されたものと思われる。1～14は底部中央に穿孔があるので、口径7.8～8.8cm、底径3.5～5.3cm、器高1.4～2.0cmを測る。上げ底状の底部に穿孔時の剥離痕が見られるもの（1～6、11）や、口縁端部が先細りするもの（5～9、12・13）、太く丸く仕上げるもの（3、10、11）など様々であるが、底部には全て回転糸切り痕が見られる。

15～20は底部に穿孔がないもので、口径7.5～9.1cm、底径3.0～4.5cm、器高1.2～1.8cmを測る。穿孔されているものと比べても形状の違いはほとんどなく、口縁端部が先細りするもの（16）、太く丸く仕上げるもの（17～19）という程度の違いである。底部には全て回転糸切り痕が見られる。

21・22は白色を呈するもので、1～20と異なり底部内面中央に印花文のスタンプが押されており、底部には回転糸切り痕が見られない。この2点はおそらく近現代に作られたものではないかと思われる。

#### 陶器：馬（第189-23・24図、図版88）

長さ11.3・11.5cm、幅3.5cm、高さ9.5・9.6cmを測る陶器製の馬の置物で、23は白黄灰色、24は黒褐色の釉薬が全面にわたって施釉されている。同様に埴物が何体か出土している。

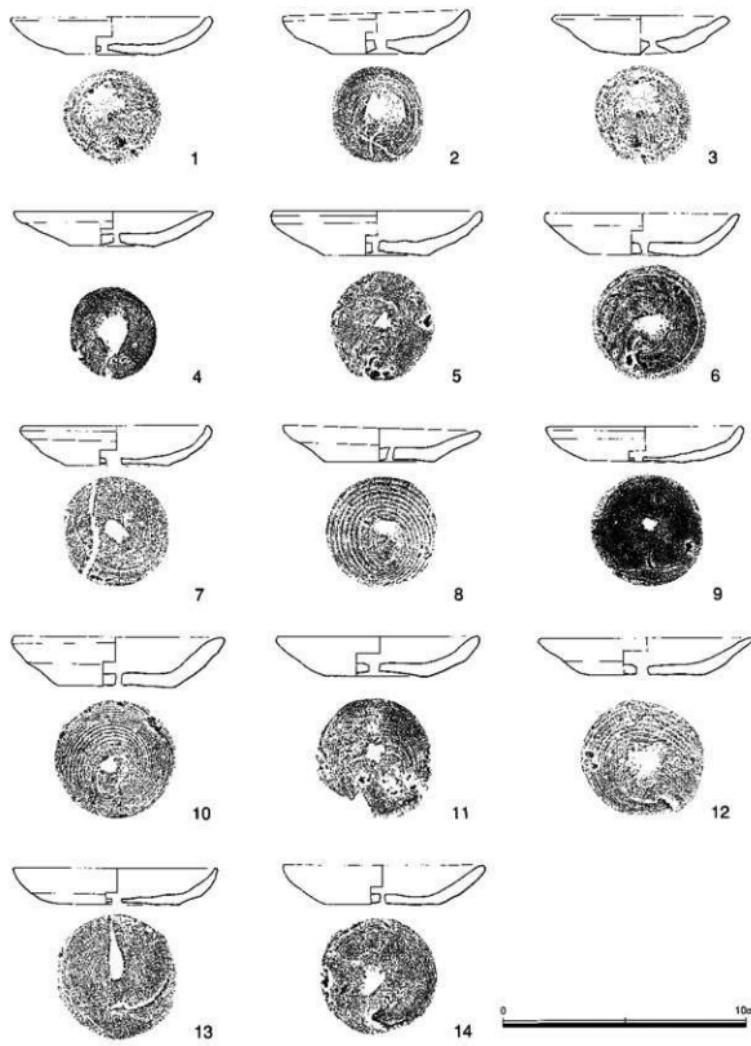
#### 土師器：人形（第190-25～27図、図版88）

25は成人女性を形取った人形の上半身で、残存長18.5cm、残存幅12.5cm、残存の奥行き6.3cmを測る。頭は髪を結い、着物・帯を着け、手袋を後手に持っている。26は子供の女の子の人形で高さ26.0cm、幅9.6cm、奥行き6.0cmを測る。頭には花飾りを付け、髪は後ろで結んでいる。左手には傘を、右手には肩掛け鞄のようなものを持っており、着物は袴を着けている。27は力士のような男性と亀の人形で、高さ17.0cm、幅17.7cm、奥行き7.1cmを測る。頭にはハチマキのようなものを巻いており、腰には化粧回しのようなものをつけ、両手で亀を抱えているような形をしている。亀には尻尾が見られる。

いずれも素焼きで内面は空洞になっており、指頭圧痕が見られる。外面に纖維痕と思われる痕跡があることから、型枠で作られていることが考えられる。

#### 錢貨：宋錢（第191-1～6図、図版89）

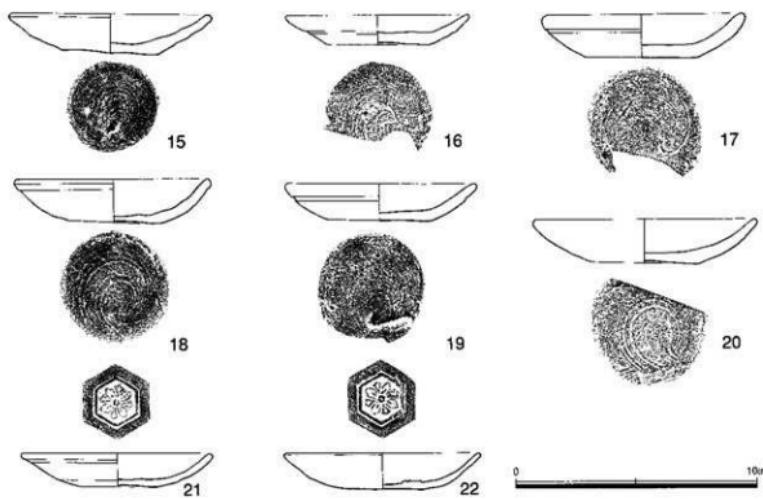
1は大祐通寶（初鑄1017年）、2は熙寧元寶（初鑄1068年）、3・4は元豐通寶（初鑄1078年）、5・6は紹聖元寶（初鑄1094年）である。



第187図　さいの神出土遺物実測図（1）

錢貨：寛永通宝（古寛永）（第191-7～20図、図版89）

古寛永に分類されるものである。古寛永は寛永16年（1639年）から寛文8年（1668年）に鋳造されたものである。



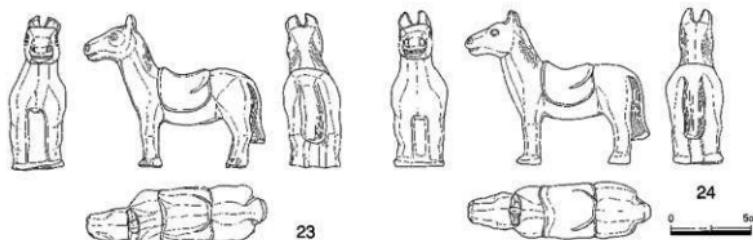
第188図　さいの神出土遺物実測図（2）

**錢貨：寛永通宝（新寛永）（第191-21～28図、図版90）**

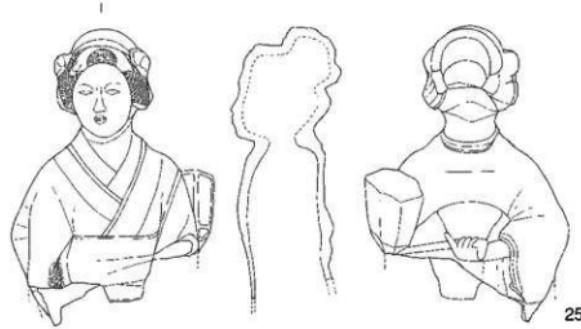
新寛永に分類されるもので、背面に文字・模様があるものである。21～23は背面に「文」が刻まれている。これは寛文8年（1668年）に鋳造されたものである。24～26は背面に「元」が刻まれている。これは寛保元年（1741年）に鋳造されたもので、27・28は背面に「青海波」が刻まれている。11波が刻まれ、明和6年（1769年）に鋳造されたものである。径がひと周り大きく、「四文銭」と呼ばれるものである。

**錢貨：寛永通宝（新寛永）（第191・192図、図版90）**

新寛永のうち、背面に文字や模様がないものである。径は23mm前後を測る。字体など多種多様であり、鋳造場によって異なると思われるが、詳細は不明である。



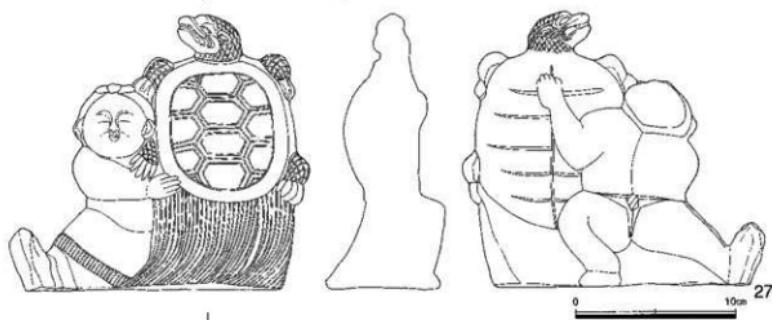
第189図　さいの神出土遺物実測図（3）



25

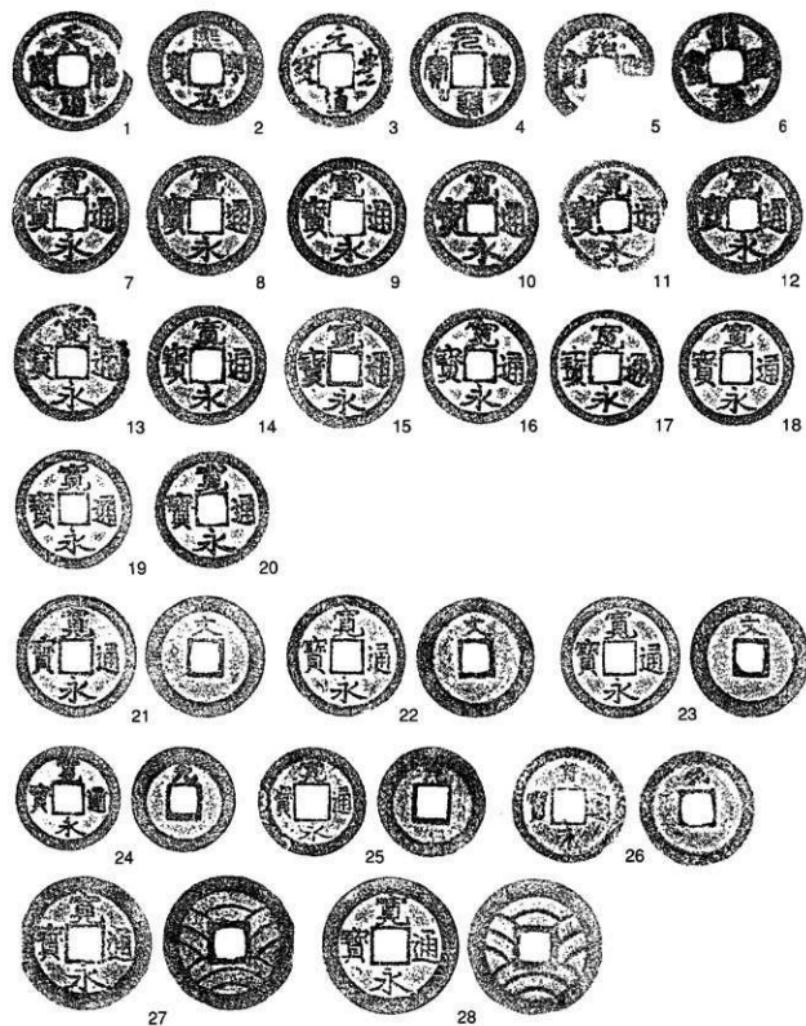


26

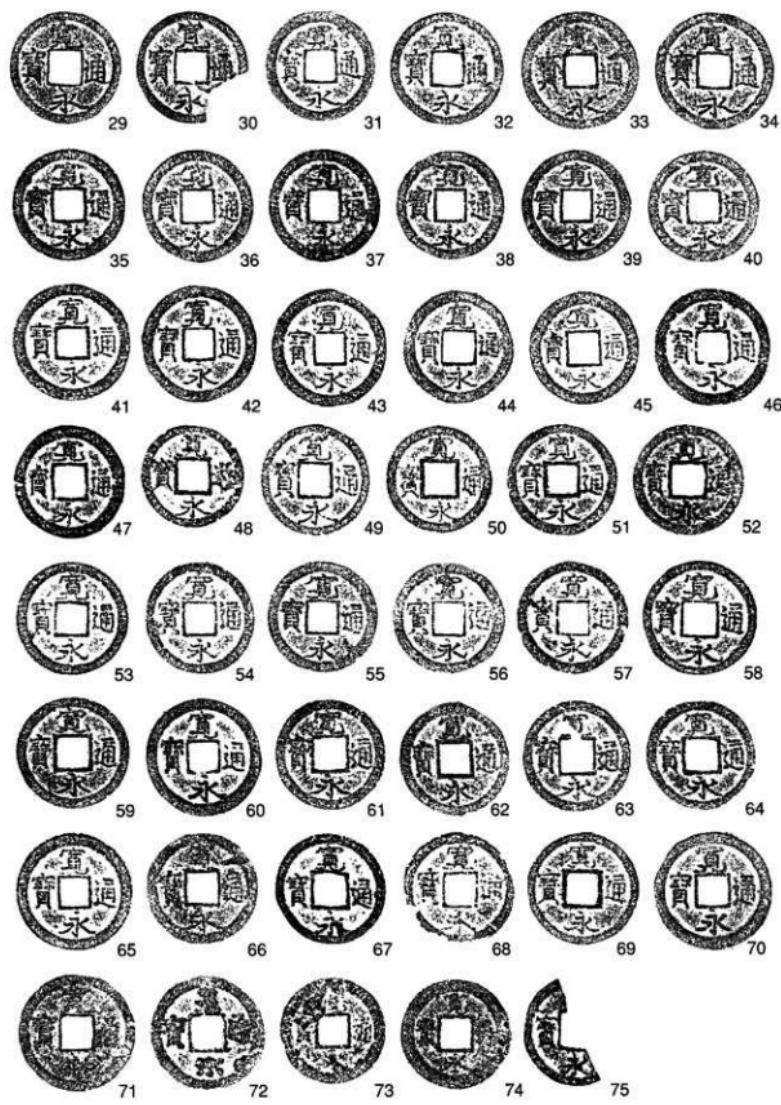


0 10cm 27

第190図 さいの神出土遺物実測図（4）



第191図 さいの神出土錢貨拓影図（1）



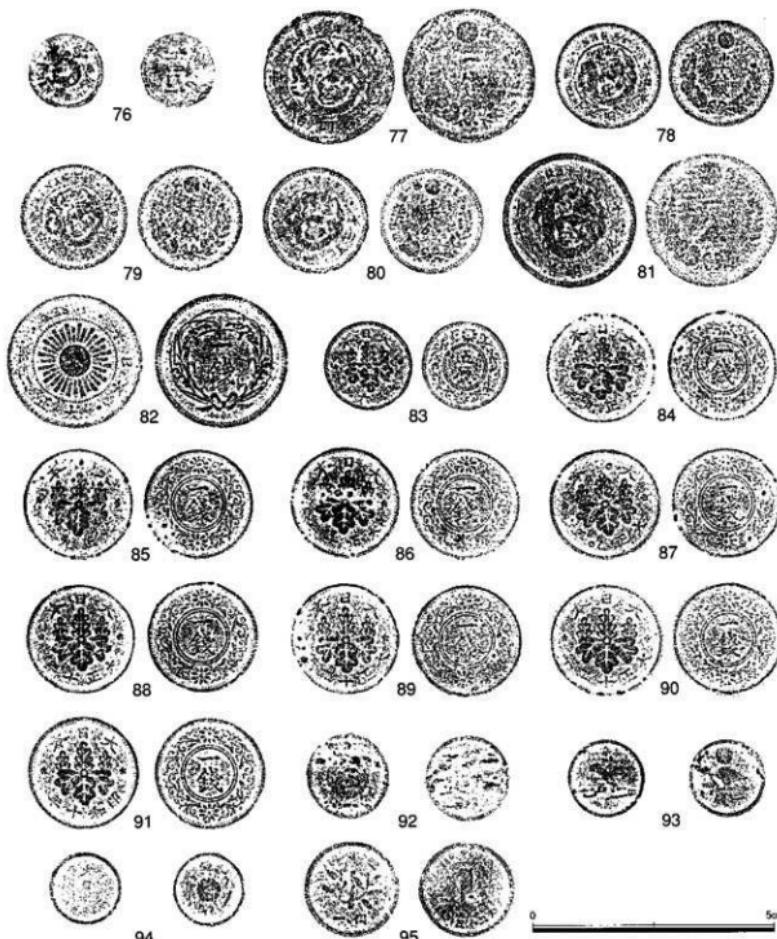
第192図 さいの神出土錢貨拓影図（2）

錢貨：近代から現代の貨幣（第193図、図版90）

76～81は明治時代の貨幣で、1厘（76）、1銭（77）、半銭（78～80）、1銭（81）である。82～95は大正時代に鋳造された貨幣で、1銭のみである。91～95は昭和時代に鋳造された貨幣で、1銭（91・93・94）、1円（92・95）である。

石碑（第194図）

米待石製と思われ、「女〇〇」と3文字が掘り込まれた石碑である。15cm角、高さ30cmを測る。



第193図　さいの神出土錢貨拓影図（3）

銭貨：寛永通宝（第195図、図版91）

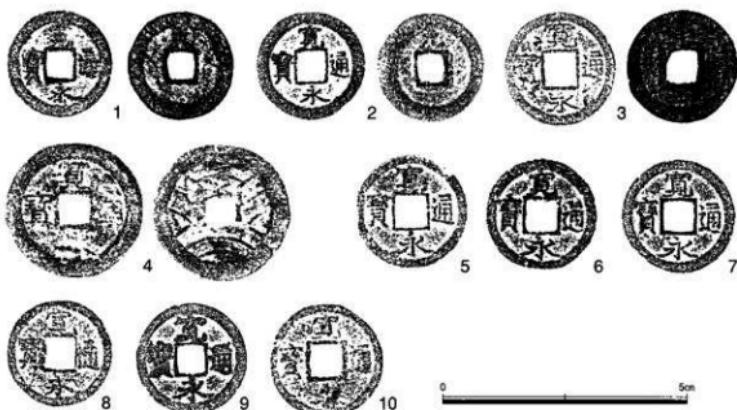
さいの神以外で出土した古銭である。

調査の結果、古墳推定地2ヶ所は古墳ではなく、さいの神と積石塚であった。この2つは本来分けるべきものではなく、境の神を祀る積石が、後年になってその前面にお祀りの中心が移っていき、石碑が置かれたり祠が設けられたりすることによって、こちらの方がさいの神として意識されるに至ったと考えられる。

さいの神は峠や村境にある場合が多く、行路の安全祈願の神、耳の神、男女の縁結びの神などといわれ、様々な願掛けが行われてきたようであるが、本遺跡の場合は出土品からすると少なくとも耳（穿孔のあるかわらけ）と縁結び（馬一大抵は薙馬なのであるが、本遺跡では陶器である）の祈願が行われていたと解釈できる。（石川 崇）

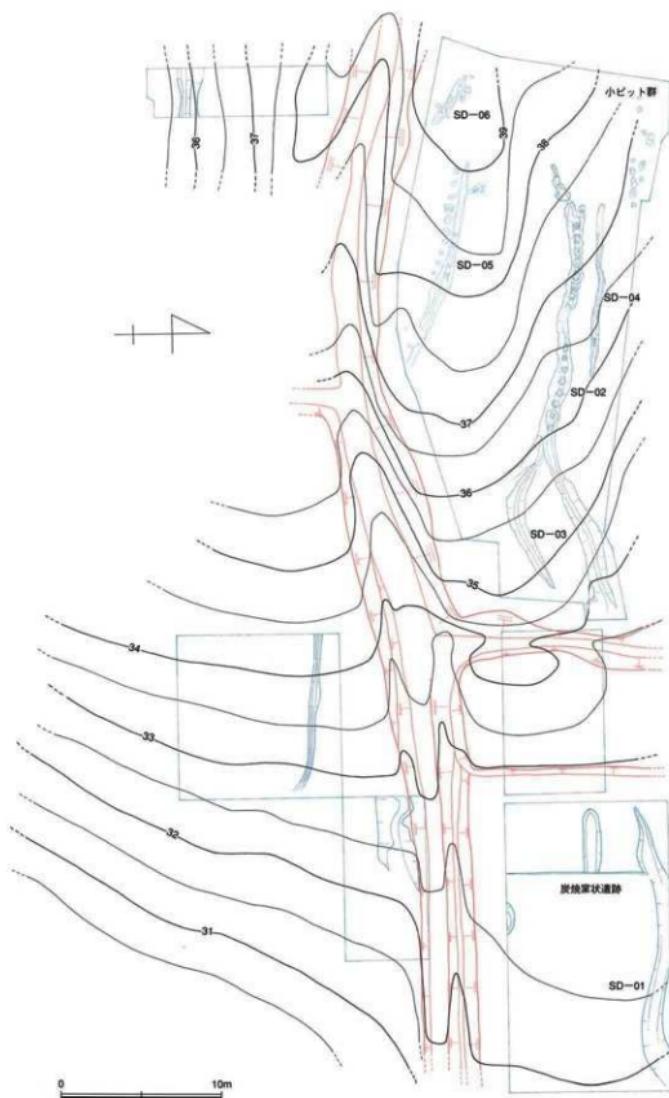


第194図 さいの神出土  
石碑拓影図



第195図 遺構外出土銭貨拓影図

## 5. 深田遺跡



第196図 調査前地形測量図及び成果図

本遺跡は総合運動公園南東に隣接する3つの丘陵のうち、最南の丘陵上の東寄りに位置する。標高は約32~38mであり、東方に広がる水田との比高差は15~20mある。昭和63年度の分布調査と試掘調査によって、近世の生産址の可能性のある窯状遺構1、遺物包含層（須恵器）、古墳推定地1が発見されており、古墳時代から近世にかけての遺構があるものと考えられた。

古墳推定地の頂部を基点として調査区全体に10mのグリッドを設定し、東からA、B、C…、北から1、2、3…とした。調査の結果、古墳推定地は盛り土・主体部等全く検出されず、古墳ではないことがわかった。検出した遺構は溝状遺構6、円形土壙列1、小ピット群、炭焼き窯状遺構1である。

#### ○ SD-01 (第196図、図版50)

調査区の東北隅で検出された溝状遺構である。東端は調査区外に伸びており、西端は削平されて消滅しているため正確な規模はわからない。検出長は15mで、最も残りの良い部分で上端幅1.2m、下端幅0.55m、深さ0.35mを測り、断面形は緩やかなU字状を呈する。埋土の下層はよく締まった黄灰色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### ○ 窯状遺構 (第189図、図版50・51)

SD-01の南隣で検出された溝状遺構である。畑の耕作により東端は削平されているため正確な規模はわからないが、復元長約4.5m、最大幅1.1mを測り、深さは現存0.15~0.2mであるが、上部は削平されているものと思われ、平面形は長円形を呈する。

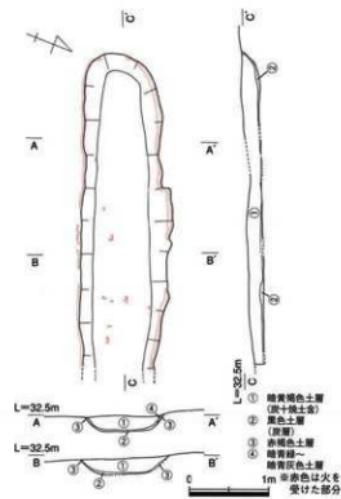
断面は緩やかなU字状を呈し、底面は平らで傾斜はほとんど見られない。周囲の壁と床面の一部は青灰色に焼けており、青灰色の外側と青灰色に焼けていない部分は赤色に焼けている。

床面直上には木炭塊を含み炭土が一面に残っていた。藁灰のような形状を示す部分も見られた。埋土には炭土の上層にやや暗い黄褐色土1層のみが見られ、鉄製の角釘数本を含んでいたが他の遺物はなく、一気に埋められたものではないかと思われる。

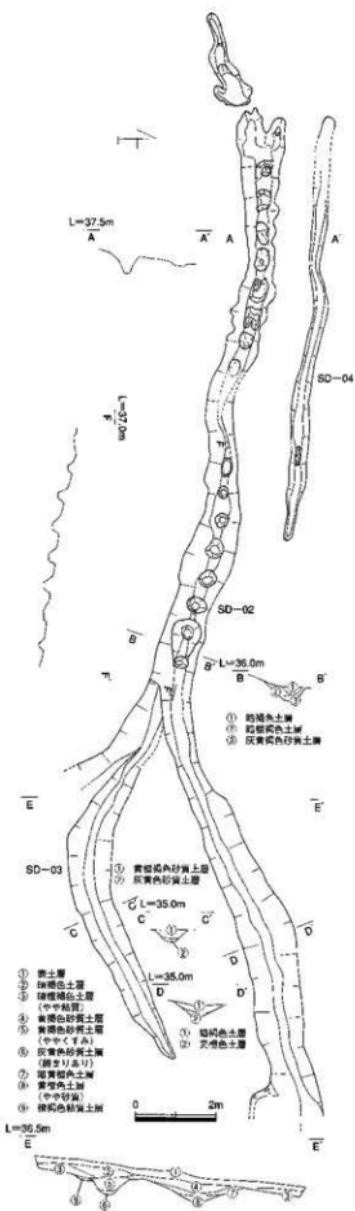
周辺の畑耕作土からは近世以降（江戸時代を中心とする）の陶磁器片が出土している。江戸時代以降の炭焼き窯と思われる。

#### ○ SD-02~04 (第198図、図版51・52)

SD-02は調査区の北部で検出された溝状遺構である。北東側は墓地によって削平されており、墓地の先は調査区外になっていたため正確な規模はわからない。検出長24.5m、上端幅0.55~1.4m、下端幅0.2~0.45m、深さ



第197図 窯状遺構実測図



第198図 SD-02~04実測図

0.2~0.3mを測る。西側3分の2は直線的に伸び、03との交差地点からやや弧を描くような形状である。断面形はJ字状から逆台形を呈す。

西側部分の溝底には径0.25~0.45m、深さ0.2~0.45mのピット上の窪みが0.15~0.3mの間隔で並んで17穴確認された。溝底からピット中にかけては均一の灰黄色土(やや砂質)が埋まっていた。

遺物は須恵器片が大部分溝底から浮いた状態で出土しており、ピット状の窪みからの出土はなかったため、溝の埋没中に入り込んだものと思われる。

遺物は全て須恵器で、壺蓋擬宝珠状つまみ、三角状の口縁端部を持つ蓋片、糸切り痕跡のある底部片、甕片などが出ている。出土した遺物の特徴から平安初期以降に埋没したと思われる。

03は02の南側から検出された溝状遺構で、中央やや東側で02と交差しており、土層の切り合い関係からすると02よりも新しいと思われる。交差地点より西側は耕作により削平され消滅したものと考えられるため、正確な規模はわからない。

現存長約9m、上端幅0.6~1.1m、下端幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.4mを測り、平面形はやや弧を描きながら南北に走り、断面形は逆台形を呈する。

埋土の最下層の灰黄色砂質土は硬く締まっており、踏み固められたのではないかと思われる。遺物は須恵器小片が溝底よりやや浮いた状態で出土しているが、小片のため時期の判別はできなかった。

04は02の北側で検出された。上部は削平されているものと見られ、正確な規模はわからない。残存長約10m、上端幅約0.35m、下端幅約0.15m、深さ0.05~0.1mを測り、断面形は緩やかな逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第199図は全てSD-02から出土した遺物である。

**須恵器：蓋**（第199図-1~3、図版91）

1は擬宝珠状のつまみを持つ蓋で、つまみは全体的に

丸味を帯びる。2・3は蓋の端部で、2の端部は断面三角形状、3の端部は先細りする形状である。双方とも回転ナデで調整されている。

須恵器：坏（第199図-4・5、図版91）

共に回転糸切り痕を持つ坏の底部片で、5は推定底径8.6cmを測り、双方とも体部は回転ナデで調整されている。

須恵器：甕（第199図-6～8、図版91）

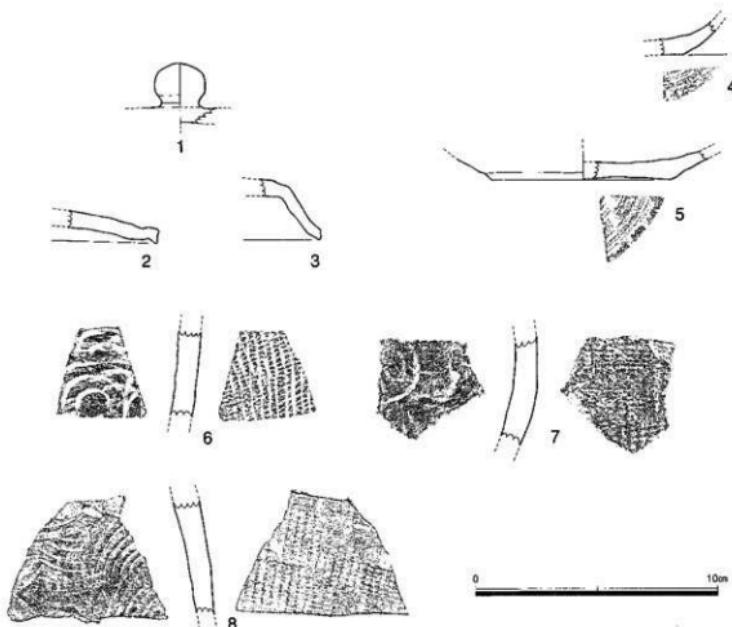
いずれも甕の胴部片で、外面には平行叩き、内面には同心円状の当て具痕が残る。

○SD-05・円形土壙列（第200図、図版53）

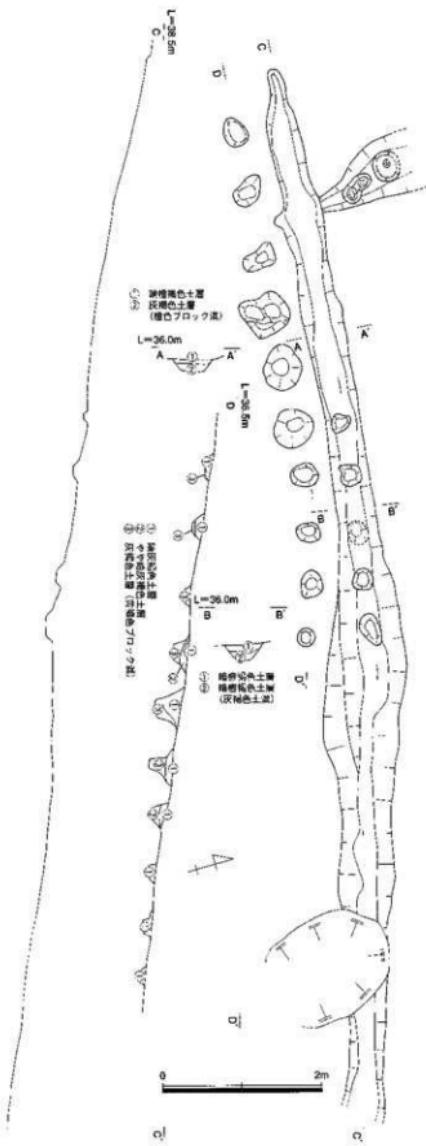
SD-05は調査区の西寄りで検出された溝状遺構である。02の南側6.6mに位置し、東端は現在の道で切られているため正確な規模は不明である。現存長は12.5m、上端幅0.45～0.95m、下端幅約0.2～0.3m、深さ0.1～0.4mを測る。平面はほぼ直線状に伸び、断面形はU字状を呈する。

溝底には更に0.25～0.4m、深さ0.1m前後の浅い窪みが連なる部分が見られた。

遺物は、遺構検出面より10cmの深さで鉄製の角釘1本が出土したのみである。



第199図 SD-02出土土器実測図



第200図 S D - 0 5・円形土壙列実測図

円形土壙列は05の南隣から検出された。尾根筋よりやや南に下がった地点で、東西約6.5mにわたって直径0.2~0.5m前後、深さ0.1~0.3mの円形土壙が10穴連なっていた。

内部からは須恵器片（糸切りの底部片と06で出土した鍋形土器の破片を含む）が出土している。この土壙列は05にほぼ平行しているが、埋土の違いにより05より新しい可能性がある。

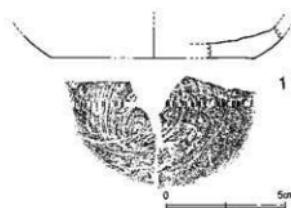
#### 須恵器：坏（第201-1図、図版91）

推定底径7.4cmを測る底部片で、回転糸切り痕が見られる。8世紀以降のものと思われる。

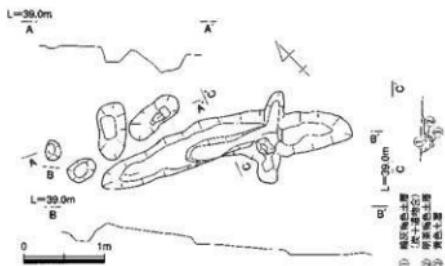
#### ○ S D - 0 6（第202図）

調査区の西端部で検出された溝状遺構である。削平と木の根による搅乱によつて遺存状態が悪く、他の溝状遺構に比べても不整形で、正確な規模はわからない。残存長約3m、上端幅約0.5m、下端幅約0.2~0.3m、深さ約0.05~0.1mを測る。それ以外にもピットが4穴検出されたが、不整形で規則性・統一性も見られず、関連があるかどうかかも不明である。

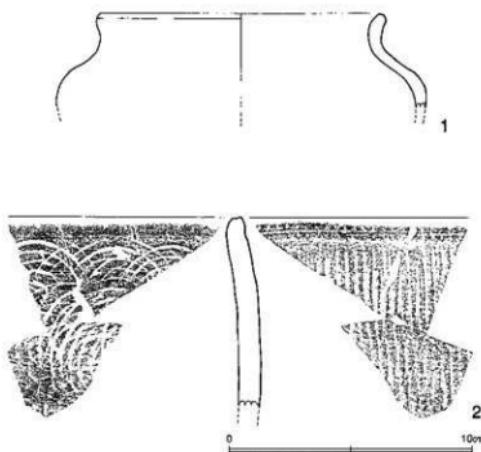
上層から須恵器の鍋形土器、短頸壺片



第201図 円形土壙列出土土器実測図



第202図 SD-06実測図



第203図 SD-06出土遺物実測図

が出土している。

#### 須恵器：壺

(第203-1図、図版91)

推定口径12.0cmを測る短頸壺の口縁～肩部片である。内外面共に回転ナデで調整されている。

#### 須恵器：鍋形土器

(第203-2図、図版91)

推定口径7.8cmを測る鍋形土器の口縁部で、口縁端部はナデで調整し、それ以下は外面に平行叩き、内面に同心円状の当て具痕が残る。

#### ○小ピット群

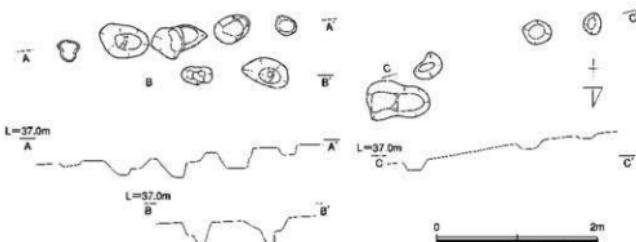
(第204図、図版53)

調査区の北西隅で9穴検出した。

円形土壤列が2列あると考えてもよいかもしれないが、前述した円形土壤列よりはピット間の距離や形状など規則性・統一性があまり見られない。

埋土はやや暗い灰黄色土1層であった。内部より須恵器の小片（時期不明）が出土している。

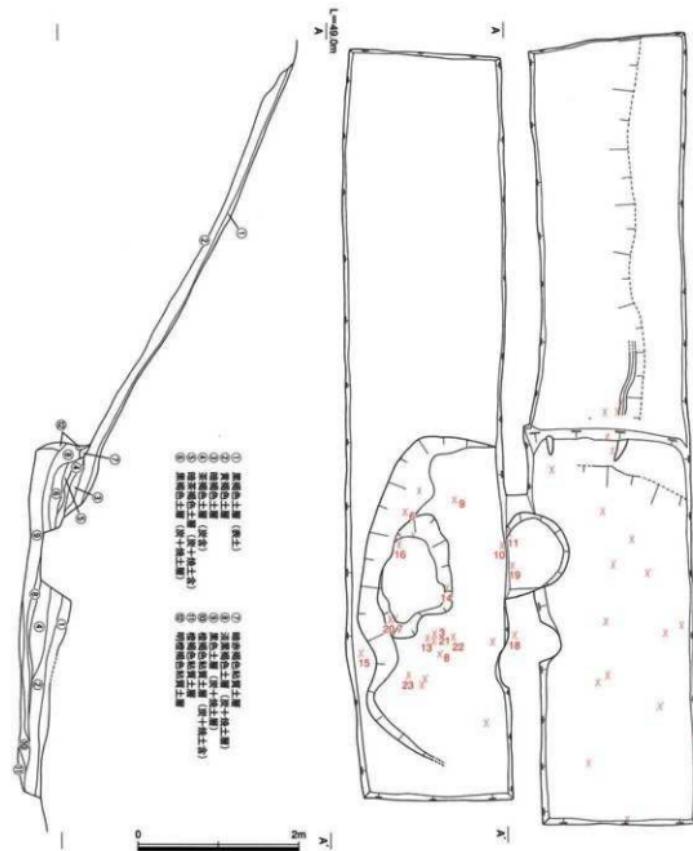
(石川 崇)



第204図 小ピット群実測図

## 6. 渋ヶ谷2号窯跡

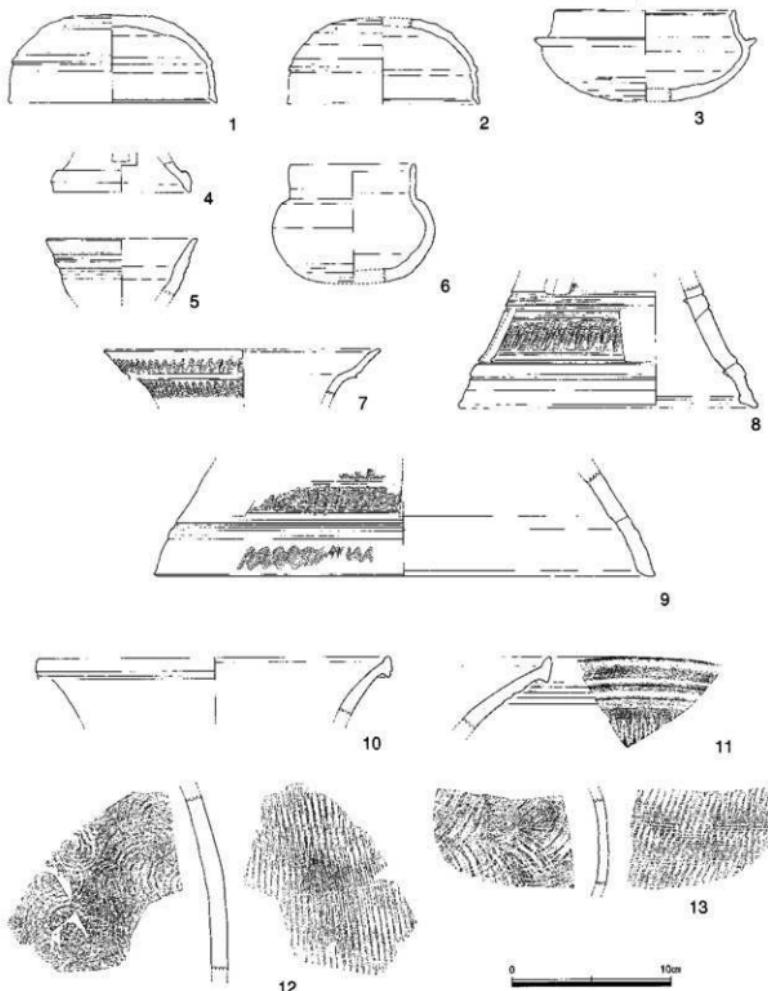
渋ヶ谷 2 号窯跡は総合運動公園の南側に隣接する 3 つの低丘陵のうち、中央の丘陵の南向き斜面に位置している。平成 2 年度松江市都市整備部が公園整備計画を策定した本地域に、平成 4 年度に至り新たに県立水泳プール等を移転する緊急性を生じたことから、発掘調査が行われた。その結果、範囲確認トレンチで須恵器窯 1 基が発見されたものである。トレンチ内で灰原を検出したので、調査区を拡張して窯体の一部を確認するところまで調査を行い、現状のまま保存となっている。



第205図 2号窯灰原遺物出土地点及び土層断面図

○窯体について

焚口から奥へ1.4mの地点まで側壁の一部を確認した。檻の内側は青色に硬く焼け締まり、その外側は赤変していた。焚口の幅は約80cmを測る。天井は削平されたのか残存していない。窯体内に落ち込んで堆積した黄褐色粘質土を側壁検出面から10~15cm掘り下げた位置で、須恵器の甕片が数点出土



第206図 灰原出土土器実測図

した。甕片の下には細かい窯壁塊と焼土の混ざった層が薄く堆積しているのが見られた。この層は床面に敷かれたものではないかと思われ、甕片の出土レベルからすると、焚口から奥へ1m地点付近までの窯の傾斜は非常に緩やかなようである。

窯は赤褐色粘質土の地山を掘り込んで築成されたものである。地下式か半地下式については、地下式とすれば窯周辺のかなり大規模な削平があったものと見なければならないが、現地形を見る限りではそういう印象は受けなかったので、半地下式ではなかったかと思う。

窯の長さについては、基盤の赤褐色粘質土と窯体内又は窯体上に落ち込んだ黄褐色粘質土の範囲がトレチ端の5.3m地点まで及んでいることがわかり、更にトレチの続きの現地表に3~4mにわたる緩い溝状の起伏が見られることから、少なくとも全長8~9mはあるものと推定される。

### ○灰原について

焚き口の前面は推定4m四方が窯築成当初の作業空間として地山をL字に削られており、そこに灰原が形成されたもので、灰原の堆積は第3図の5層以下である。

灰原の堆積土中からは壺蓋、高坏、廐、壺、器台等の須恵器と若干の土師器片、窯壁塊がコンテナ約1箱分出土した。大部分は甕の破片であった。

### ○出土遺物

#### 須恵器：壺蓋（第206図-1・2、図版92）

1は口径13cm、器高5.5cmを測る。口縁部は垂直気味に比較的高く立ち、天井部との境の突帯は扁状ではあるが、鈍い。口縁端部内面には明瞭な段を持ち、外面は外方に少し反っている。天井部外面の回転ヘラ削りは1/2より少し広い範囲に見られる。胎上には1mm前後の白色砂粒を多く含み、焼成は良好で表面は暗灰色、断面は茶灰色を呈する。

2は口径12.1cm、推定器高5.4cmを測る。口縁部は1ほど高くはないが垂直気味に立ち、天井部との境の突帯はつまみ出したような丸く鈍いものとなっている。口縁端部内面には明瞭な段を持ち、外面は反り気味である。天井部外面の回転ヘラ削りは2/3程度に見られるが、外周の部分はナデ消されている。口径に比較して器高が高く、非常に丸みを帯びた形をしている。焼成は良好で、表面は淡青灰色、断面は一部茶灰色を呈する。

#### 須恵器：壺身（第206図-3、図版92）

3は口径11.3cm、推定器高5.7cmを測る。体～底部は深く、受部の直下に張りがあり、丸みを帯びた器形をしている。口縁部がやや内傾しつつ高く立ち上がり、口唇内面に明瞭な段を持つ。底部外面の回転ヘラ削りは1/2強見られる。焼成は良好で、表面は青灰色、断面は一部茶褐色を呈する。

#### 須恵器：高坏（第206図-4、図版92）

4は脚部の小片で、推定底径8.4cmを測る。脚端部の段は上半が丸みを帯びるが、下半には平坦な面を持つ。下端幅1.1cmの透かしの痕跡が残る。

#### 須恵器：壺（第206図-5、図版92）

5は壺の口縁部で、推定口径9.2cmを測る。口縁部は直線的に外に開き、端部は先細る。焼成は良好で、表面・断面ともに灰色を呈する。

#### 須恵器：短頸壺（第206図-6、図版92）

6は口径7.8～8cm、推定高7.5cmを測る。口縁部は直立し、体部は丸い。底部は回転ヘラ削りが見られる。焼成は不良でもろく、淡灰色を呈する。

#### 須恵器：甌（第207図-7、図版92）

7は口縁部の小片で、推定口径17.4cmを測る。口縁端部内面は緩やかな盤刃状を呈し、口縁下端の稜は鋭い。口縁部と頸部の外面には櫛描波状文が施されている。焼成は良好で灰色を呈する。

#### 須恵器：器台（第206図-8・9、図版92）

8は高環形器台の脚部と思われるもので、底径18.6cmを測る。円線と鈍い突線によって区画された3段が存在し、最下段は無文、2段目と3段目はカキ日の後、振幅の狭い櫛描波状文が1段施され、長方形透かしが3ヶ所以上開けられている。焼成は甘く、灰白色を呈する。

9は筒形器台の脚部と思われるもので、底径31.6cmを測る。わずかに内溝しつスカート状に聞く残存部分の外面は2段に区画され、下段には1段の、上段には2段の櫛描波状文が施され、上段には更に長方形の透かしが2ヶ所以上開けられている。焼成は良好で暗灰色を呈する。

#### 須恵器：甌（第206図-10～13、図版92）

10は小型甌で、推定口径22cmを測る。口縁端部は上方、下方に屈曲している。頸部は無文である。11は口径50cmほどの大型甌になるものである。口縁端部は上方、下方に屈曲し外面は丸みを帯びている。頸部外面には鋭い突線によって構成された波状文からなる文様帯が巡る。12・13は甌の胴部で、外面は平行叩き、内面は同心円状の当て具痕が見られる。一部磨り消しを行う破片を含む。

これらの出土遺物の特徴、特に环蓋や环身の特徴から5世紀末の遺物と思われ、2号窯は同時期の窯と判断される。大井古窯跡群と同様に1号窯も同様の時期の窯であり、この大庭地区周辺でも初期須恵器の生産が行われていたことが明らかになった。これら以外の窯跡が存在する可能性が高く、今後の調査の拡大が期待される。

（石川 崇）

※ 濑吉諒子「松江・渋ヶ谷窯跡について」『松江考古』9号（2001年3月）収録されているものに、加筆・修正を加えた。

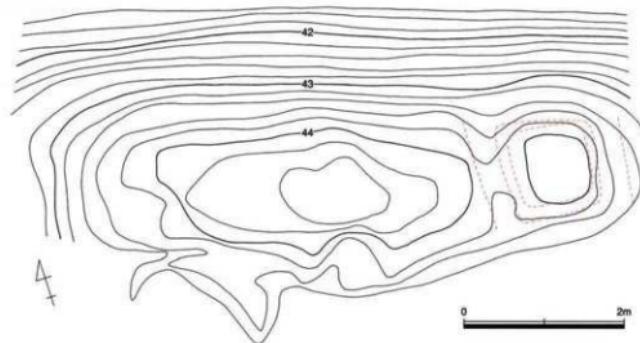
## 7. 渋ヶ谷古墳

渋ヶ谷古墳は第2丘陵の頂上部平坦面の突端部付近に位置する。第2丘陵は過去の範囲確認調査において、「渋ヶ谷遺跡」「渋ヶ谷2号窯」などが確認されていた。

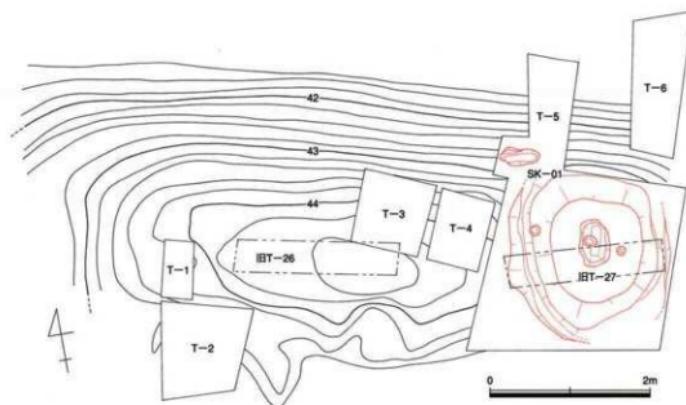
昭和63年度の試掘調査の結果、内部主体が木棺直葬で墳丘の東西方に溝を持ち、1辺約8m、高さ約1mの墳丘規模を有する方墳であると思われた。

### ○墳丘について

調査の結果、上端辺約6.3m、下端辺約7.7m、高さ75cmの略方形の墳丘基盤を残して自然の丘陵を切削加工し、その上に厚さ70cm程の茶褐色・赤褐色・黄褐色土を盛って墳形を整え、墳丘の東西方には幅約1.8m、深さ約50cmの溝を掘って区画していたことが分かった。墳丘上では埴輪・葺石は見当たらなかったが、墳丘東西斜面より須恵器と土師器の細片が数片出土した。



第207図 調査前地形測量図



第208図 調査成果図

### ○主体部について

主体部は南北長約2.8

m、東西長約1.9m、深さ50cmを測る略長方形の墓壙を旧表土上より掘り込んであり、墓壙内には暗赤褐色土が流れ込んだ状態で堆積していた。遺物は床面に密着して北側で鉄鋲が、南側で刀子が、また浮いた状態で須恵器の壺蓋が出土した。これらのことから被葬者は頭を北向きにして安置されていたものと思われる。

### ○SK-01

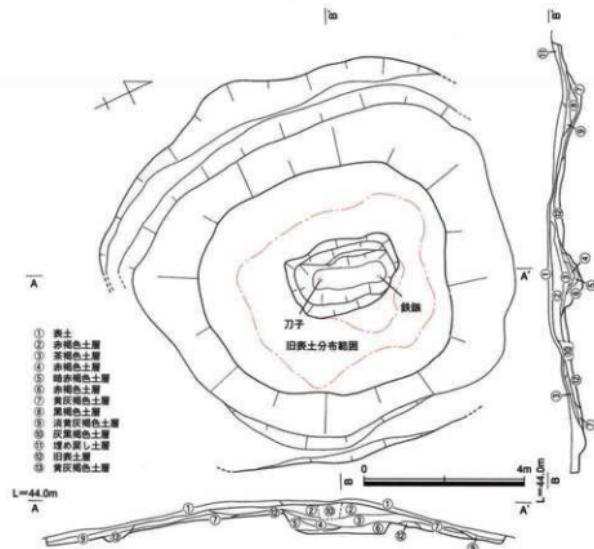
(第210図、図版60)

遺跡の範囲確認に伴い検出された土壙である。長径約2.4m、短径約1m、深さ約50cmを測り、平面形は橢円形を呈する。1・2層目(表土・褐色土)から土師器の壺と須恵器の壺の細片が、3層目(黒褐色土)から土師器の壺の細片と須恵器の壺身が1個体完形で、数片の鉄滓と思われるスラッグ片と共に、4層目(黄褐色土)から須恵器壺蓋が底に密着した状態で、各々出土した。

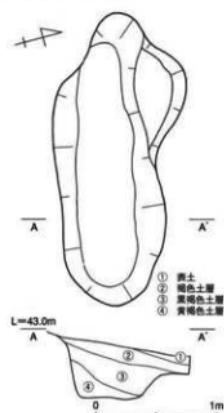
これら以外にも、墳頂部を中心として東西方向に径約70cmを測るピットを3穴検出したが、これらの柱心距離は3.5mと2mを図り一定していないこと、含土は綺麗のない灰褐色土を呈すること、ピットは3穴のみであること、などからこのピットは掘立柱建物跡に関係する柱穴や柵列の杭になるとは思われず、今のところ性格不明と言わざるを得ない。

### 須恵器：壺蓋 (第211-1図)

主体部から出土したもので、推定口径13.7cmを測る。口縁部はやや外傾気味に下がり、端部は堅い齒状を呈している。口縁部と天井部との境にまだ退化していない稜を造り出している。天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデで調整されている。焼成は甘く、白灰色を



第209図 1号墳実測図



第210図 SK-01実測図

呈する。形態的・技法的特徴より6世紀初頭頃のものと思われる。

須恵器：蓋（第211-2図、図版93）

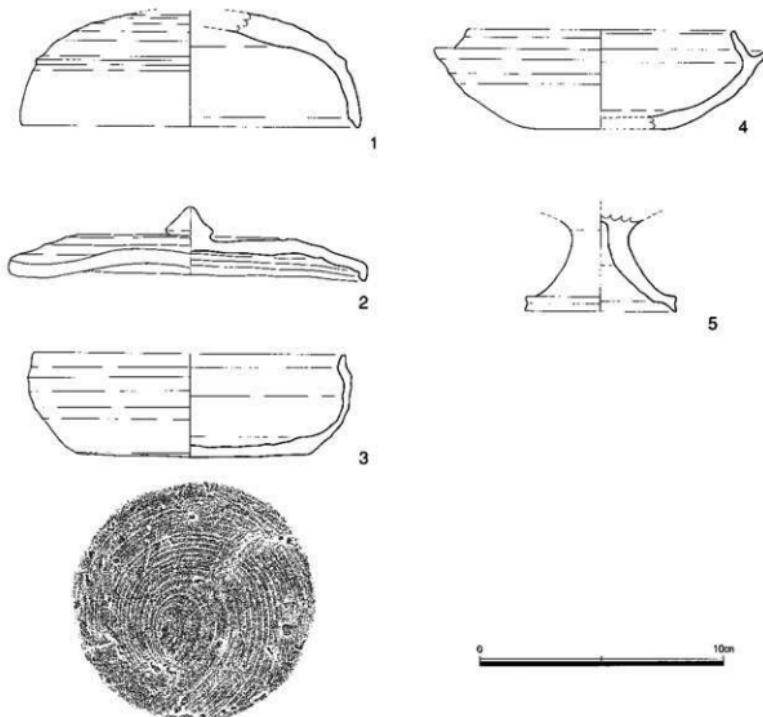
01の4層目（黄褐色土）から出土したもので、口径14.5cm、天井部径8.9cm、器高3cmを測る。天井部を輶轆回転による糸切りで切離し、中央に擬宝珠状つまみを付け、口縁端部は真下方向に屈曲させる。焼成は良好で青灰色を呈する。形態的・技法的特徴より8世紀後半～末頃のものと思われる。

須恵器：坏（第211-3図、図版93）

SK-01の3層目（黒褐色土）から出土したもので、口径12.8cm、底径9.7cm、器高4.2cmを測る。輶轆回転右方向の糸切り痕で認められる底部から内湾しながら立ち上がり、口縁下部で外方に屈曲するもので、焼成は良好で青灰色を呈する。

須恵器：坏身（第211-4図、図版93）

T-2の地山直上から出土した須恵器の坏身で、推定口径11cmを測る。受部は斜め上方向に伸び、立ち上がりは内傾しその端部は平坦で基部に重ね焼き痕が認められる。焼成は良好で緑色～青灰色を



第211図 浪ヶ谷古墳出土土器実測図

呈し、自然釉が付着している。形態的・技法的特徴より6世紀末頃のものと思われる。

**須恵器：高坏（第211-5図、図版93）**

T-6の地山直上から出土した須恵器の小型の高坏の脚部で、脚部径6.2cmを測る。脚部は外反しながら下がり端部で真下方向に屈曲するが、透かしは見られない。脚部と坏部との接合部に指ナデ痕が認められる他は回転ナデで仕上げており、焼成は良好で青灰色を呈する。形態的・技法的特徴により7世紀前半頃のものと思われる。

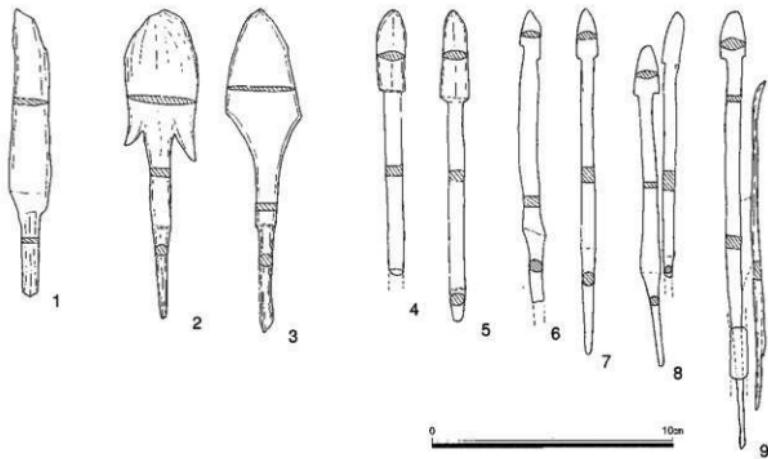
**鉄製品：刀子（第212-1図、図版93）**

全長11.8cm、身の長さ7.9cm、背の厚み0.4cm、茎の長さ3.9cm、茎の厚み0.6cmを測る。身・茎の一部に鞘と木柄と思われる木質部を遺存する。

**鉄製品：鉄鎌（第212-2～9図、図版93）**

2は全長13cm、頭長6cmを測り柳葉形平根鎌と呼ばれるものである。3は全長13.5cm、頭長4cmを測り、鰐刃平根鎌と呼ばれる。4・5は頭長が長い長頸鎌で、残存長11～13cm、頭長3.5～4cmを測るものである。6～9は頭長が短い長頸鎌で、残存長13～18cm、頭長2cmを測るものである。

(石川 崇)



第212図 渋ヶ谷古墳出土鉄器実測図

# まとめ

## 「さいの神」について

### 1. 表記・読み方について

「サイの神」という民俗的信仰の対象を語るに当たって、まずこの言葉を多方向から説明及び検討しなければならない。「サイの神」とは、一般的に「塞の神」または「才の神」と表記される例が多い。この2つに限られているわけではなく「幸」「賽」「妻」という漢字も使われる。他にも「サイ」と音読する様々な漢字が当てられていたことが知られている。「祭」「西」「際」「最」「災」「幸」「菜」「鞘」などその数は多いが、1つずつに明確な意味が込められていたという確証はない。ただ単に同音であるという理由で当て字として使用したもの、信仰に伴う意味合いが含まれている字を使用したものなど、その用途については深く追求できないのが現状である。

読み方は「サイノカミ」「サエノカミ」を基本として「ヤヤノカミ」「セイノカミ」など、近似しているが異なる。漢字の当て字と同様の状況が考えられるが、呼び名は言葉として存在し、人々の口伝によって伝えられることから、より地域性と正確さを伴っていると言える。

また「道祖神」「道祿神」とも言い、「道祖神（ドウソジン）」は信州地方を、「道祿神（ドウロクジン）」は関東地方を中心に発したものと思われる。「道祖」とは元来、古代中国社会において信仰されていた行路の神のことと言う。渡来文化と共に日本に入るが、日本にも行路神と言われるような古来からの信仰対象があり<sup>⑩</sup>、「道祖」と習合した結果、日本独自の「サイの神」を作り上げた。東日本では「ドウソ」とそのまま音読するのに対し、西日本では「道祖神」を「サイの神」に置き換え「サヘノカミ」と読んでいた。

### 2. 信仰の形態と変遷

「サイの神」は時代の変遷と共に、信仰形態を様々に変化させてきた。現代では千差万別の意味を持ち、地域によって多種多様の信仰が確認されている。この大きな流れの根本を考えた時、古代の人々の神に対する純粋な祈りや願いが信仰という形になった、ということが言える。「サイの神」の原形を文献から知るためにには、まず『古事記』に触れてみる。

——国土を形成し神々を生み終えた後、女神・伊邪那美命は、最後の御子神・火乃迦具上神を生んだ折、火の神であることから火傷を負い、命を落とす。死した伊邪那美命は黄泉の国へ下り、男神・伊邪那岐命がこれを追いかけるが、黄泉の国にて、伊邪那美命の腐敗した肉体、そして8つの雷神<sup>⑪</sup>がついているところを見てしまう。伊邪那美命は怒り、黄泉醜女<sup>⑫</sup>に伊邪那岐命を追わせる。黄泉比良坂まで来た伊邪那岐命は、「千引の石」によって黄泉の国と繋がっている道を塞ぐ。——<sup>⑬</sup>

黄泉比良坂の「坂」は通常の坂ではなく、黄泉の国と現世との「境」のことだとと思われる。その「境」において「千引の石」という巨岩で道を塞ぐという行為こそが、「サイの神」の原形であると考えるのは自然の流れである。道を塞ぐということは、即ち死者（伊邪那美命。穢れ・恐れを表す）の世界と現世とを明確に分ける、象徴的な行為に他ならない。「千引の石」は、黄泉の国と現世との「境」

を明確にする物体である。その物体を「境」に据え置くことで、「境」の内側に悪・穢れを入り込ませないという役目を果たす。「塞り坐ス黄泉戸ノ大神」と記載があるが、ここでの「黄泉戸ノ大神」とは「千引の石」を示す。塞ぐ役目をする岩を神格化していることから、日本の原始宗教であるアニミズム、自然崇拜などの信仰背景も窺える。

アニミズムの考え方とは「サイの神」の成り立ちに大きく関わっていると思われる。「千引の石」を神格化したように、日本には巨岩を祀って神とする例が非常に多い。その石または岩を「イワクラ」と呼び、「磐座」「石座」「岩倉」などと表記する。岩そのものに神が宿るとされる。岩の例に限らず、古代の人々はアニミズム的観念から、森羅万象の全てに神が宿るとした。それらを神格化することによって、生きていく上で必要な「信じる対象」を手にした。伊邪那岐命・伊邪那美命の記載に表現されているように、人は自らが住まう場所・地域、そしてそこに生きる人々を、悪や穢れ・恐れをなす存在から守る。守らなければ安穏な日々を過ごせないゆえに、その外側との境界を定め、自分達が生きていく範囲を確保する。

その後6世紀から8世紀の間に大和朝廷が成立・形成され、それと同時に中国から渡来してきた道教・仏教の思想が、日本に多人なる影響を及ぼしたことは明らかである。その歴史の中で『古事記』『日本書紀』が誕生し、ある程度の政治的な統一・習合があったことは否定できない。万物の神格化は必ずしも自然発生的なものではなかったが、それをきっかけとして土着の素朴な祈りが信仰へと発展し、「サイの神」にも繋がっていく。

### 3. 「サイの神」の場所について

「サイの神」の依代（または憑代）は、神木、石積み、石祠、石像が主に見られる。それらが祀られる場所は、道の分岐点、平地から山への境、山の峠、川の渡し場など、全て「境」をなす所に設置される。これは前述したように、外敵・魔・病から自分達の集落・村を守るためにある。土地という上地全てを完全に守ることは不可能であり、それゆえにそれぞれの集落で生活範囲に伴って、守る範囲も決まってくる。この範囲を決定付けるのに「境」「境界」という場所は、絶好の区切りであったと考えられる。「境」に存在し、外敵から守ってくれる神を信じるために、「サイの神」というものを具象化し、不動のものとして配置せねばならなかった。

また道の分岐点や峠、川の渡し場に祀られている「サイの神」については、村・集落防衛機能とともに、村から外に出る者の道中安全の意味合いも含まれていたと考えられる。交通状況が良かったとは決して言えない時代に、死を覚悟で旅をしなければならなかった人々の支えは、自らの体力と運、そして神に祈ることであった。道中命を落とした者への冥福を祈る想いが「サイの神」の依代を設置する行為に至り、自然発生的に「サイの神」信仰が育つといったことも考えられる。

### 4. 「サイの神」信仰

時代、人間、世間の状況の変化につれて、そもそもその村・集落防衛機能から飛躍して違う意味を持つようになるのが「サイの神」の最大の特徴でもある。しかし全ての考え方の根底にあるのはやはり「境」であり、最終的にそこに行き着く。現在「サイの神」は神木、石積み、石祠の他に、石像または地蔵の形で残るものも多くある。

仏教から発祥した地蔵が「サイの神」として祀られているのは、奈良時代からの神仏習合によるものである。仏教では、人間は地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上・天上（六道）の6つの世界を繰り返す（六道輪廻）とされ、六道の分かれ道を「六道の辻」という。この辻にいるのが地蔵菩薩（六地蔵ともい）であり、六道衆生の苦しみから救済してくれるとして祀られている。これが「サイの神」の行路神的部分と合わさり、「サイの神」の1つの形として「境」「境界」「辻」に置かれるようになった。神仏習合によって、地蔵信仰は急速に広まっていたと思われる。神木、石積み、石祠に比べ、視覚的に明確で理解しやすいことも地蔵信仰が普及した大きな要因であったと言える。それに加え、地蔵という形があることによって、守られる側の心の安寧よりも大きなものとなり、外側からの見えない圧力に怯える傾向も減少したのであろう。「六道」から「道六」に転じ、「道祖神」「道陸神」とも呼ばれるようになった。

仏教との習合により新たな形を生み出したが、中世以降「サイの神」信仰は、性神的な信仰の道を辿る。この信仰で祀られている神は猿田彦<sup>さるたひこ</sup>命と天鏡女<sup>あめのきょうめ</sup>命であり、「記紀」の天孫降臨の場面に登場する。猿田彦命は天孫降臨の際、遯々芸<sup>にぎのひとこと</sup>命を先導した神である。猿田彦命が天孫を迎えた場所は「天の八衢」、即ち8つの道の分かれの所であり、ここから道の神、境の神、「サイの神」に結びついたと思われる。遯々芸命の供をして天鏡女命が、猿田彦命と共に「道の神」として祀られるようになり、その信仰は縁結び、または夫婦和合という形を取って発展していった。

「道の神」と性神化の習合の背景には、様々な要因がある。古代から男女の性器崇拜は、子孫繁栄・種の保存を祈る祀りとして行われてきた。これは村・集落の繁栄に繋がる。これに猿田彦命と天鏡女命を重ねることは、男女信仰の代表的対象に据えたということを意味する。それに加え、猿田彦命が所在する「天の八衢」は「境」「辻」という観念からも考えられる。「境」よりこちら側と向こう側、正と負、陽と陰。これは男性と女性の本質的な違いを示し、性器を具現化する祀りと一致する。普遍的かつ絶対的な一対として存在する男性と女性に両神を当て、このような信仰が普及したことは、至極自然な流れだったと言える。男女並立の石像も「サイの神」として多く見られる。

猿田彦命に関連して、古代中国の道教思想に基づく、庚申信仰というものがある。これは61日ごとに巡ってくる庚申（かのえさる）の夜には、人間の体内にいる三戸（3匹の虫）が、天に登って天帝にその人の悪行を告げる為に、この晩は眠ってはならないとする俗信である。そのための祭礼である徹宵<sup>てつしやう</sup>の行を行なう際に、祭禮を司るものは様々であるが、神式では猿田彦命である。これは、庚申の「さる」と猿田彦命の「サル」とを結びつけたものと考えられる。

冒頭で「サイの神」は、時代の変遷と共に信仰形態を様々に変化させ、千差万別の意味を持ち、地域によって多種多様の信仰が確認されている、と記述した。外敵から内を守るという根本的な考え方から派生して、疫病よけ、道中安全、夫婦和合、縁結び、下の病など、様々な信仰が存在する。地域別によっても特色があるが、山陰地方ではどのような信仰が受け継がれているか。

## 5. 山陰での「サイの神」

山陰では、主に疫病よけ関連の信仰が多い。信仰の違いによって、出雲・因幡・伯耆・隠岐の4地域に分けられる。出雲地方では主に神木を代々とし、耳の神、百日咳の神を祀る。全国的にも耳の

神を祀るというのは珍しい。奉賽物として置かれるカワラケやサザエには穿孔が施され、また穴の開いた貨幣も共に供えられることから、耳の通りがよくなるように、という願いが込められていたと思われる。因幡地方に入ると、神木に加え石像が多く見られる。足の神・旅行安全の神を祀る。伯耆地方では前述したように、縁結び信仰が強く、男女並立の石像が多い。出雲・因幡・伯耆地方とはやや一線を画し、隠岐地方では子供の守り神として祀られている。神木の下に小石を積むと、死んだ子供が浮かび上がるという説があり、いわゆる「賽の河原」<sup>①</sup>の伝承と習合したものと思われる。

本遺跡群内の勝負谷遺跡において検出した「さいの神」遺構は、石積み状遺構である。県内の石積み状遺構としては、布志名才の神遺跡<sup>②</sup>、小久白遺跡<sup>③</sup>などがある。本遺跡ではこの石積み状遺構の直下より、道路の痕跡を示す遺構を検出した。これは前述の両遺跡にも共通する。かつて道路であったと思われる場所の真上に、奉賽物として小石を積み上げ、カワラケ（ほとんどのものに中央穿孔あり）、古銭、人形、陶器製土馬などが出土している。「サイの神」が祀られる場所として、道の分岐点に多く置かれる傾向だが、道路の真上に築くということは、何らかの別の意味も含まれているのではないかと考える。

現代社会の中で神・仏を信じ、真摯な信仰心を持っている日本人は多くはない。それは日本人が、時代と共に宗教へ傾倒する、強く信仰するという心と行動を置き忘れてきた結果である。しかし「サイの神」は、生活範囲の境となる場所に、山へと入る道の途中に、道路の辻に、六地蔵や石像、祠、神木という形で今もなおひっそりと存在している。それらを定期的に祀り、その存在を頭の片隅に置いておくことを忘れないという意識が、日本人の中にはある。日本人の根底に脈々と受け継がれる、自然・万物を畏怖すると同時に信仰の対象とする心理によって、「サイの神」信仰は築き上げられたものだと言える。

（秦 愛子）

### 【引用・参考文献】

- (1) 来名戸之祖神（くなとのさへのかみ）『日本書紀』、佐都之加美（さへのかみ）『和名類聚鈔』。両方とも「サイの神」としての機能を果たすような記載である。
- (2) 丸山林平『校注 古事記』武藏野書院（1970）より引用した。
- (3) 地蔵信仰と「サイの神」信仰の習合により、賽の河原の概念は生まれたと思われる。
- (4) 「布志名大谷」遺跡 布志名大谷II遺跡 布志名才の神遺跡 烏根県教育委員会（1997）
- (5) 「小久白墳墓群」～サエ（サイ）ノカミ信仰遺跡の発掘報告～建設省松江工事事務所 烏根県教育委員会（1999）  
石塚尊俊「サエの神研究発表」山陰民俗15 山陰民俗学会（1952）
- 加藤義成校注『出雲國風土記』今井書店（1965）
- 石塚尊俊「日本の民俗 烏根」（1973）
- 桜井健太郎「民間信仰辞典」東京堂出版（1980）
- 森 納「寒神考－因伯のサイノカミと各地の道祖神－」総合印刷出版（1990）
- 井塚 忠「出雲伯太町赤屋のサエの神」山陰民俗55 山陰民俗学会（1991）
- 石塚尊俊「山陰の祭祀伝承」山陰民俗学会（1997）
- 「山陰民俗叢書6 家の神・才の神」山陰民俗学会（1998）
- 石塚尊俊「山陰民俗一団事典」今井書店（2000）
- 青木周平「古事記がわかる事典」日本実業出版社（2005）

## 指松遺跡・勝負谷遺跡・深田遺跡の溝状遺構について

南側丘陵から多くの溝状遺構が検出された。特に深田遺跡のSD-02・05や指松遺跡のSD-20・21・33のように溝底に連続したピットが検出され、最下層は硬化した層や粘質土が見られた。連続ピットを伴う溝状遺構は“波板凹凸面”と呼ばれる道路遺構の一種であると思われる。この波板凹凸面の用途は、

- ① 路床構築痕跡（作道に伴う工法）
- ② 枕木等の痕跡（道路の利用形態に関わる痕跡）
- ③ 通行痕跡（自然発生的なもの）などが上げられる。

本遺跡の場合は地盤の状況から路床構築痕跡と考えられる。②は様々な調査事例から、凹凸の形状は梢円形が多く、道路使用面と思われる部分は硬化しているものが多い。しかし本遺跡の場合、凹凸面の形状は、梢円形はあるものの、大半が円形であり、硬化面もあまり見られない。③は牛馬などが歩行した際に同様の痕跡が残る場合があるが、本遺跡の場合は痕跡が残るような地盤ではなかった。

固い地盤に道路を作った場合、人が通行する部分が次第に凹み、その凹んだ部分に雨水などが流れて削られ、底面がV字状になっていく。そうなると道幅が狭くなり通行しにくくなる。

その対策として波板凹凸面が作られたと考えられる。溝底にピットを掘り、ピットの底に透水性のある土や砂を埋めることによって水が急激に下に流れるのを防ぐ役目を負う。その上に柔らかい土を盛って道路として使用する。

波板凹凸面は道路が水（雨水）の流れによって削られるのを防いだり、補強するという側面を持つ。本遺跡の波板凹凸面は斜面途中では凹凸面の底が深く、頂上部に上るにつれて底が浅くなり、頂上では完全に消失する。これは坂道を上りきった時点で波板凹凸面としての用途・目的がなくなるため消滅してしまうが、道はその後も続いている。

本遺跡の場合、数多くの溝状遺構が検出されたが、遺物の出土はほとんどなく、各遺構の時期差などはわからなかった。おそらくこの周辺が道路として使用されたのならば、同時期、もしくは時期をそれほど空けずに存在していたのではないだろうか。本道として1本使用し、残りは本道が通行できなかった場合、そちらを使用すると考えられる。そのために多くの溝状遺構が存在することになる。

平成5年度の勝負谷・深田遺跡の調査時より、“古代山陰道”に当たる遺構ではないかと思われていたが、今回の調査ではそのような痕跡は見られなかった。全国の官道の発掘事例から、官道と呼ばれる遺構は、形状が直線的であることや道幅が7～8m以上のものが多い。本遺跡の場合、直線的な部分は少なく、道幅が最大で1.5m程度である。

古代山陰道の可能性が考えられる、松江市乃木福富町の松本古墳群から検出された道路遺構は、同様に丘陵部に存在するが、8～10mの道幅があり、丘陵をオーブンカットした大規模に作られている（註1：第213図）。この付近は古代山陰道の「正西道」の推定ルート上に当たるといわれている（註2）。

国府跡からこの松本古墳群まで、地図上を直線で結ぶと本遺跡の周辺を通過することになる（第214図）。



第213図 松本古墳群検出道路遺構図

今回の調査結果より、道幅や形状の点から考古学的に“山陰道”として立証しづらいが、同様の事例が増えれば、今後再検討を要すると思われる。

検出された溝状遺構は、出土遺物の点から古代以降の道路の可能性が高い。これらの遺構は現在の山道とほぼ同じようなルートを尾根筋に沿って続き、地山をしっかりと加工して作られている。埋土の最下層は部分的ではあるがかなり締まっており、しかもその中に含まれている砂利が地山までめり込んでいて、踏み固められた結果ではないかと思われた。

江戸時代、文政年間に作られた「出雲国十郡絵図」によれば、大庭村・砂草村から乃木村へ通じる道は1本しかないが、それが本遺跡に重なる位置に当たるので、これがそのまま古代にも適用できるとは限らないが、有力な手掛かりになると思われる。（石川 崇）

#### 引用文献

- (1) 「松本古墳群」鳥取県教育委員会 1997年
- (2) 中村太一「[出雲風土記]の方位・里程記載と古代道路―意宇郡を中心として」『出雲古代史研究』第2号 出雲古代史研究会 1992年

#### 参考文献

- 木下 良輔 「古代を考える 古代道路」吉川弘文館 1996年  
 武部 健一 「ものと人間の文化史 道 I」法政大学出版 2003年  
 木本 雅康 「出雲国西部の古代道路」『出雲古代史研究』第11号 出雲古代史研究会 2001年  
 近江 俊秀 「古代道路遺構の形態から見たその性格」『古代交通研究』第7号 古代交通研究会 1997年  
 近江 俊秀 「道路遺構の変遷」『古代交通研究』第10号 古代交通研究会 2000年  
 山村 信義 「古代道路の構造」『古代交通研究』第10号 古代交通研究会 2000年



第214図 松本古墳群・渋ヶ谷遺跡群・出雲國庁跡位置図

## 渋ヶ谷1号窯出土の炭化材の放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

渋ヶ谷1号窯より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

### 2. 試料と方法

試料は、1号窯5R区壁Aから出土した登り窯構築材の外側部分より採取した炭化材（アカガシ亜属）1点である。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定した<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

### 3. 結果

表1に、試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C年代は、AD1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。なお、<sup>14</sup>C年代値（yrBP）の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68.2%であることを意味する。

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

#### 曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代概知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代の算出にOxCal v3.9（較正曲線データ：INTCAL98）を使用した。

表1. 放射性炭素年代測定および曆年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP ± 1 $\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を曆年代に較正した年代	
				1 $\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲
PLD-3144 (AMS)	炭化材 (アカガシ亜属) 1号窯 5R区 壁A 登り窯構築材	-26.4	1,600 ± 25	cal AD 420 - 470 (29.6%) cal AD 480 - 540 (38.6%)	cal AD 410 - 540 (95.4%)

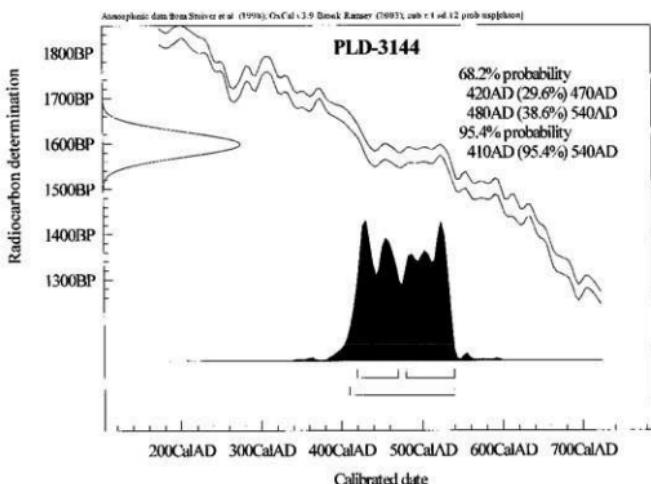
なお、 $1\sigma$  历年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する、68.2%信頼限界の歴年代範囲であり、 $2\sigma$ 歴年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差の2倍に相当する、95.4%信頼限界の歴年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその $1\sigma$ 歴年代範囲および $2\sigma$ 歴年代範囲の確からしさを示す確率である。 $1\sigma$ 歴年代範囲および $2\sigma$ 歴年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に影付け部分で示した。

#### 4. 考察

試料は、同位体分別効果の補正および歴年代校正を行った。歴年代校正した $1\sigma$ 歴年代範囲および $2\sigma$ 歴年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、1号窓5RⅣ壁△から出土した登り窓構築材の外側部分より採取した炭化材（アカガシ亞属）の年代は $1\sigma$ 歴年代範囲で cal AD 480–540年、 $2\sigma$ 歴年代範囲で cal AD 410–540年が、より確かな年代値の範囲として示された。

#### 引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代. p. 3–20.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000 0 cal BP. Radiocarbon, 40, p. 1041–1083



## 渋ヶ谷1号窯構築材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

ここでは、渋ヶ谷1号窯の構築材の骨組みに使用されていた構築材1点の、樹種同定結果を報告する。この窯跡は登り窯で、須恵器を焼成していたものである。構築材は直径約3.5cmの芯持ち丸木で、完全に炭化しており、一部外側は削り落とした加工痕が明瞭に見られる。樹皮は残存していないが、加工痕が無く樹皮のすぐ内側と思われる部分から、年代測定用に必要な量の材を採取し、加速器質量分析法で放射性炭素年代測定が実施されている（別報参照）。

### 2. 樹種同定の方法

構築材は炭化しているので、切片作成法は適応できないため、破損部分から一部破片を取り、この破片から炭化材の3方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）を作成し、3断面を走査電子顕微鏡で拡大し、立体的に構成されている材組織の特徴を観察した。横断面（木口と同義）は材の伸長方向に垂直な断面であり、接線断面（板目と同義）は年輪線に平行な垂直断面であり、放射断面（栓目と同義）は材の樹芯部を通り年輪に直交する垂直断面である。

まず横断面（木口）を手で削り平滑な面を出し、接線断面と放射断面は片刃の剃刀を各方向に軽く当て彈くように割る。この3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子株式 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

### 3. 結果

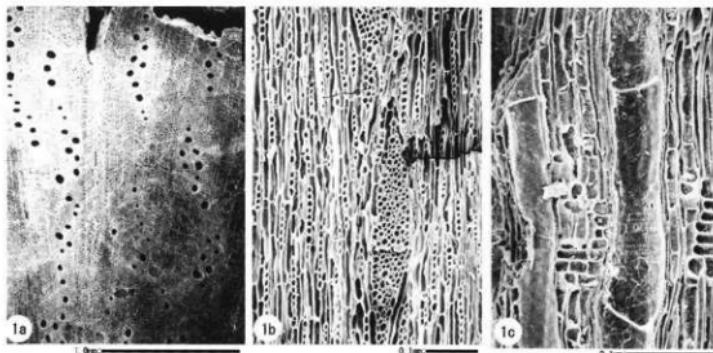
同定結果、構築材はブナ科アカガシ亜属であった。

分類学的表記のアカガシ亜属は、常緑性でドングリをつけるカシ類の仲間であり、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがあるが、いずれも材組織は類似しているので、材組織から種類を特定することは出来ない。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具や工具の柄としての利用がよく知られている。このような材質から、窯構築材としても利用されたものと思われる。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示する。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版I 1a-1c (窯構築材)

集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材である（写真1a）。道管の壁孔は小さく交が状、穿孔は單穿孔である（写真1c）。放射組織はほぼ同形の細胞からなる同性、單列のものと広放射組織があり、道管との壁孔は孔口が大きく、横状・交互状のものがある（写真1b）。



図版1 渋ヶ谷1号窯出土炭化材（構築材）材組織の走査電子顕微鏡写真  
1a-1c：アカガシ亜属（窯構築材）a：横断面 b：接線断面 c：放射断面

## 1 地磁気年代測定法の仕組

### 1-1 地磁気永年変化と熱残留磁気

地磁気は強度と方向（伏角、偏角）で表現できるが、それらはすべて変動している。これらの変動には、変化速度の速いものから遅いものまで様々な成分があるが、10年以上経過して初めて変化したことが分かるような緩慢な変動を地磁気永年変化と呼んでいる。地磁気年代法で時計の働きをするのは、地磁気の方向の永年変化であり、過去の地磁気の方向と年代の関係を表す変動曲線を利用して、地磁気の方向から年代を読みとろうとする。しかし、ある焼土が焼けた年代を知るためには、焼けたときの地磁気の方向が何かに記録されており、それを測定できなくては目的を果たせない。焼けたときの地磁気の方向は焼土の熱残留磁気として記録され、保存されている。

### 1-2 地磁気年代を求める手順

焼土の熱残留磁気の測定によって、焼土の被熱時の地磁気の方向を求め、次に、焼土のある地域の地磁気永年変化曲線上で、求めた方向に近い点を決定し、その点の年代目盛りを読みとる。

土壤、粘土、砂、岩石等は、地磁気のなかで焼けると、熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の扱い手は、磁鉄鉱等の磁性粒子であり、熱残留磁気の方向は、焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも、物理・化学的擾乱に対して非常に安定であり、磁性粒子のキュリー温度（磁鉄鉱では575°C）以上に再加熱されないかぎり、数万年以上時間が経過しても変化しない。焼土がキュリー温度以上に再加熱されたときには、それまで保持されていた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、再加熱時の地磁気の方向を向いた新しい残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気の方向を熱残留磁気の方向として正しく記憶することになる。それゆえ、年代既知の焼土の熱残留磁気を利用して、過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかをあらかじめ測定してグラフを作成しておけば、このグラフを時計の目盛りとして、焼土の最終焼成年代を推定することになる。この時計では地磁気の方向が“針”に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の“針の位置”を記憶していることになる。日本では、西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線が広岡によってかなり詳しく測定されているので、ここで説明した方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代法の詳細については広岡、および、中島等による解説<sup>1,2</sup>が参考になる。

## 2 地磁気年代測定法の特徴と問題点

### 2-1 地磁気年代法の特徴

地磁気年代測定法は、(1)原理が簡単で比較的容易に測定できる。(2)地磁気を媒介とする対比のおかげで、焼土跡に遺物がない場合でも有効である。(3)相互に隔離した土器編年を対比できる。という点で独自の性格をもっている。

## 2-2 地磁気の地域差

地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所の標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違する場合がある。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土のある地域の標準曲線を使用しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方向を比較する必要がある。今までの中岡地域の調査では、西南日本の標準曲線から求めた地磁気年代は、ほとんどの場合、遺物の考古学年代と整合する。したがって、中岡地域では、西南日本の標準曲線を使用して地磁気年代を決定しても問題はない。

## 2-3 土器編年の影響

地磁気年代測定法は地磁気変動という物理現象を利用しているので、地磁気年代は土器編年に左右されないと思われるが、実際には、地磁気年代と土器編年の間には密接な関係がある。すなわち、少數の年代定点を除くと、標準曲線上のほとんどの年代目盛りは土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から遠く離れた地磁気年代は土器編年の影響を強く受けており、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代も訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代はこのような相互依存から独立できるが、現状では年代定点が少ないのでやむをえない。

## 3. 造構と試料

鳥取県松江市総合運動公園で検出された洪ヶ谷1号窯から地磁気年代測定用の定方位試料を採取した。焼成度は窯奥が最も良く、全面が赤く焼け、一部が青灰色を呈している。中央部では赤く焼けているが青灰色の部分はない。また、焚き口近辺は赤変の程度は弱く低焼成度である。試料は、窯奥から20ヶ、中央部から2ヶ、焚き口近辺から2ヶを採取した。このように窯の広い範囲に渡って試料を採取するのは、窯の変形に伴う年代誤差を防止するためである。窯の考古学年代については、出土した約20点の瓶の破片から5C末～6C初頭と推定されている。また、1号窯と同じ丘陵にある別の試掘窯からは5C末～6C初頭の土器が出土している。

## 4. 測定結果

試料の自然残留磁気の測定はスピナー磁力計 (Schonstedt社Model SSM-1A) で行っている。残留磁気の方向の集中度を高めるために100Oeの交流消磁を行った。交流消磁というのは、試料を交流磁場中で回転させながら、磁場強度を適当な設定値から零になるまで滑らかに減少させて、抗磁力が磁場の設定値よりも弱い磁気成分を消去する方法である。図1に交流消磁(100Oe)後の残留磁気の方向を示す。データが一つの方向に集中しているのが認められるが、この方向は焼土が焼けたときの地磁気の方向を表している。図1のデータの中から、飛び離れたデータを省略して平均方向を計算すると次の結果を得る。

表1 年代測定用の定方位試料採取状況

窯奥の床面	20ヶ	赤変・一部青灰色
窯中央部の床面	2ヶ	赤変
焚口近辺の床面	2ヶ	褐赤変・低焼成度

## 須恵器窯1号の残留磁気の平均方向

Im(度)	Dm(度E)	k	$\alpha_95$ (度)	n/N	消磁磁场
47.93	-8.97	1157	1.22	13/24	1000e

Im: 平均伏角 k: Fisherの信頼度係数 n/N: 採用試料数/採取試料数 Dm: 平均偏角  $\alpha_{95}$ : 95%誤差角

## 5. 渋ヶ谷1号窯の地磁気年代

図2は須恵器窯1号の残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の楕円)および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線<sup>①</sup>の一部である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向に近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとる。地磁気永年変化曲線の重なり合いのために、2つの年代値(AD515±20、および、AD11±30)が可能となるが、出土した約20点の瓶の破片から5C末～6C初頭の年代が推定されており、また、1号窯と同じ丘陵にある別の試掘窯からは5C末～6C初頭の土器が出土していることから、渋ヶ谷遺跡の須恵器窯1号の地磁気年代として、AD515±20を選択する。

## 渋ヶ谷1号窯の地磁気年代

AD515±20

註①)広岡公夫(1995) 「考古資料分析法」、考古学ライブラリー、65、

田口勇、齊藤努編、ニュー・サイエンス社、100-101

(2)中島正志、夏原信義 「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9 ニュー・サイエンス社

(3)広岡公夫(1978) 考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向

第4紀研究 15、200-203

図1 渋ヶ谷遺跡の須恵器窯1号の交流消磁（100Oe）後の残留時期の方向

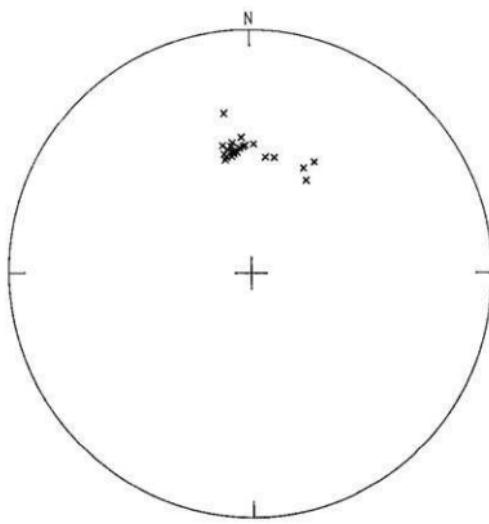
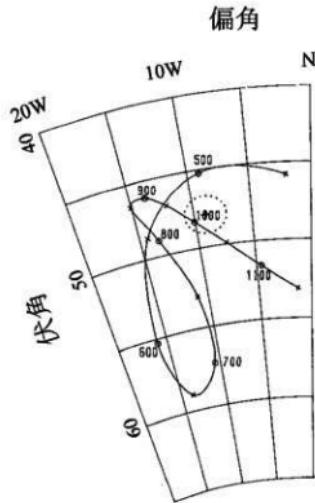


図2 渋ヶ谷遺跡の須恵器窯1号の残留磁気の平均方向（十印）と誤差の範囲（点線の精円）  
および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線の一部



掲載番号	写真版	種別	器種	残存	法量(cm)						色調(外面)	(内面)	
					口径	受部径	底径	器高	最大長	最大幅	最大厚		
第7-1回	61	須恵器	壺	2/3以上	12.4			3.95				黒灰・淡灰色	淡灰黄色
第7-2回	61	須恵器	环身	口縁部小片	(10.8)	(13.6)		(3.2)				暗灰色	暗灰色
第7-3回	61	須恵器	高壺	2/3以上	14.3		10.8	10.75				暗灰・青灰色	淡青灰・青灰色
第13-1回	62	須恵器	壺	腹部小片				7.1	8.0	1.0		灰色	灰色
第13-2回	62	須恵器	壺	腹部小片				4.9	9.0	0.5		灰色	灰色
第13-3回	62	須恵器	壺	腹部小片				13.0	10.2	0.8		灰色	灰色
第13-4回	62	須恵器	壺	腹部小片				6.5	9.2	0.9		灰色	灰色
第13-5回	62	須恵器	壺	腹部小片				2.8	3.3	0.6		灰色	灰色
第13-6回	62	須恵器	壺	腹部小片				4.7	6.7	0.4		淡灰色	淡灰色
第13-7回	62	須恵器	壺	腹部小片				5.3	3.0	0.4		灰色	灰色
第13-8回	62	須恵器	壺	腹部小片				2.1	4.8	0.8		淡灰色	淡灰色
第13-9回	62	須恵器	壺	腹部小片				6.6	7.4	0.7		灰色	灰色
第13-10回	62	須恵器	壺	腹部小片				3.2	10.3	0.7		灰色	灰色
第15-1回	63	須恵器	壺	1/2以下	(13.2)			3.7				灰色	灰色
第15-2回	63	須恵器	壺	1/2以上	(12.8)			4.9				灰色	灰色
第15-3回	64	須恵器	壺	1/4以下	(14.0)			(4.5)				黒灰・淡灰色	淡灰色
第15-4回	64	須恵器	壺	1/4以下	(12.9)			4.5				灰色	灰色
第15-5回	63	須恵器	壺	1/4以下	(12.0)			(4.4)				灰色	灰色
第15-6回	63	須恵器	壺	1/2以下	(14.3)			(4.3)				灰色	灰色
第15-7回	63	須恵器	壺	1/3以下	(15.0)			3.4				淡灰色	淡灰色
第15-8回	64	須恵器	环身	口縁部小片	(12.3)	(15.2)		(3.9)				淡褐色	淡褐色
第15-9回	63	須恵器	环身	2/3以上	(12.2)	(14.6)		(5.25)				淡灰白色	淡灰白色
第15-10回	64	須恵器	环身	口縁部小片	(12.5)	(14.2)		(4.0)				灰色	灰色
第15-11回	63	須恵器	环身	1/2以下		(13.4)		(3.9)				淡灰色	淡灰色
第15-12回	64	須恵器	环身	1/5以下	(11.3)	(13.8)		5.2				灰色	灰色
第15-13回	63	須恵器	环身	1/3以下	(12.0)	(14.0)		4.7				灰色	灰色
第15-14回	63	須恵器	环身	1/2以下	(10.8)	(13.6)		4.1				灰色	灰色
第15-15回	63	須恵器	环身	1/4以下	(11.5)	(13.6)		4.1				淡灰色	灰色
第15-16回	64	須恵器	环身	口縁部小片	(11.0)	(13.0)		(3.9)				淡灰・淡灰色	淡灰・淡灰色
第15-17回	64	須恵器	壺	口縁部小片	(12.9)			(2.8)				灰色	灰色
第15-18回	64	須恵器	壺	口縁部小片					2.7	7.3	0.4	灰色	灰色
第15-19回	61	須恵器	壺	腹部小片				7.1	13.0	0.7		灰色	灰色
第15-20回	64	土師器	壺	口縁～肩部小片	(12.0)			(4.5)				明赤褐色	明赤褐色
第15-21回	64	土師器	壺	口縁～肩部小片	(14.0)			(4.8)				褐色	にぶい黄褐色
第15-22回	64	土師器	壺	1/3以下	(14.4)			(14.2)				明黄褐色	にぶい黄褐色
第15-23回	64	土師器	壺	口縁部小片	(15.0)			(4.5)				にぶい褐色	にぶい褐色
第16-24回	64	土師器	壺	口縁部小片	(16.0)			(3.1)				褐色	にぶい褐色
第16-25回	64	土師器	壺	口縁～肩部小片	(16.2)			(6.0)				明赤褐色	にぶい黄褐色
第16-26回	64	土師器	壺	口縁～肩部小片	(16.4)			(5.2)				にぶい褐色	にぶい黄褐色
第16-27回	64	土師器	壺	口縁～肩部小片	(17.0)			(8.4)				明黄褐色	明黄褐色
第16-28回	64	土師器	壺	口縁部小片	(17.6)			(3.0)				にぶい褐色	にぶい褐色
第16-29回	64	土師器	壺	口縁部小片	(18.0)			(3.7)				褐色	にぶい黄褐色
第16-30回	64	土師器	壺	口縁～肩部小片	(19.4)			(3.5)				にぶい褐色	にぶい黄褐色

粒上 (mm)	焼成	調整 (外面)	(内面)	備考
2.0以下白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
1.0以下石英、白・灰・黑色砂粒少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
2.0以下石英、白・灰・黑色砂粒多含	良好	回転ナデ	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	輪部3方向に運び (三角形) 輪部内面に自然輪付着
長石微粒含	良好	平行叩き文	ナデ	内面に別の窓部小片付着
長石微粒含	不良	平行叩き文	ナデ	
長石微粒含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒少含	良好	平行叩き文	ナデ	
長石微粒少含	良好	平行叩き文	ナデ	
長石微粒含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ消し	
長石微粒多含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ消し	
長石微粒少含	良好	平行叩き文	ナデ	
長石微粒多含	普通	平行叩き文	ナデ	
長石微粒多含	良好	平行叩き文	破損している為調査不明	
長石微粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	天井部外面中央に軸上盛り上がり
長石微粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	天井部外面にヘラ記号「×」
長石粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
1.0以下長石含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石微粒極少含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	天井部外面にヘラ記号か?
長石微粒極少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央一定方向ナデ	
長石少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)	回転ナデ	
長石微粒少含	普通	回転ナデ	回転ナデ	
長石粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	底部外面にヘラ記号「一」
長石少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
長石少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石微粒極少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石微粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	口縁端部静止削りか?
石英、長石粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	受部内に蓋口縁端部付着
0.5以下長石含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	口縁端部外側:波状文
長石少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	口縁端部外側:波状文 大きめ立ち
長石微粒少含	普通	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
1.0以下石英含	良好	横ナデ ナデ	横ナデ ヘラ削り	口縁端部や風化気味
1.0以下石英、長石多含	普通	横ナデ 縦ハケ目(部分的)	横ナデ ナデ	全体的に風化気味
2.0以下石英、長石含	普通	横ナデ 縦ハケ目(部分的) ナデ	横ナデ ヘラ削り	外面風化気味
2.0以下石英、長石含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下石英、長石含	良好	横ナデ	横ナデ	
1.0以下石英、長石多含	良好	横ナデ 縦ハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下石英、長石多含	良好	横ナデ 縦ハケ目	横ナデ ヘラ削り	外面部スッズ着
2.0以下石英、長石多含	普通	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	外向風化の為調査不明解
2.0以下石英含	良好	横ナデ	横ナデ	
1.0以下石英、長石含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下石英含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	

揮因番号	写真 図版	種別	器種	残存	法量(cm)						色調(外面)	(内面)	
					口径	受部径	底径	器高	最大長	最大幅	最大厚		
第16-31回	64	上部器	壺	口縁部小片	(20.0)			(3.2)				にぶい橙色	褐色
第16-32回	65	土師器	壺	ほぼ完形	11.3			6.9				明褐色	明褐色
第16-33回	65	土師器	壺	口縁~胴部小片	(13.6)			(6.0)				橙色	橙色
第16-34回	65	上部器	小型壺	口縁~胴部小片	(7.5)			(4.3)				橙色	橙色
第16-35回	65	土師器	瓶	口縁部極小片				(4.8)				褐灰色	にぶい褐色
第16-36回	65	土師器	瓶	口縁~胴部小片	(25.6)			(12.2)				明黄褐色	橙色
第16-37回	65	上部器	瓶	口縁~胴部小片	(26.3)			(12.2)				浅黄橙色	浅黄橙色
第16-38回	65	土師器	甕	口縁部極小片				(6.5)				浅黄橙色	浅黄橙色
第16-39回	65	土師器	甕	底部小片				(10.5)				にぶい黃褐色	橙色
第16-40回	65	上部器	瓶	把手					4.4	5.0	2.8	橙色	
第16-41回	65	土師器	瓶	把手					4.1	4.4	2.8	明黄褐色	
第16-42回	65	土師器	瓶	把手					6.3	4.5	3.2	橙色	
第16-43回	65	上部器	彷彿車	1/2以上				4.8	2.1			棕~淡褐色	
第19-1回	65	土師器	甕	2/3以上	(18.2)			(22.3)				暗褐色	暗褐色
第29-1回	65	須恵器	环身	口縁部極小片				(3.2)				淡灰色	淡灰色
第32-1回	66	須恵器	蓋	ほぼ完形	18.0×15.4			5.8				灰色	灰色
第32-2回	66	須恵器	蓋	1/3以下	(13.4)			(4.3)				淡灰色	淡灰色
第32-3回	66	須恵器	蓋	1/4以下	(11.7)			4.0				灰色	灰色
第32-4回	66	須恵器	蓋	1/2以上	(13.0)			4.5				淡灰色	淡灰色
第32-5回	66	須恵器	环身	1/4以下	(10.7) (13.2)			(2.8)				灰色	灰色
第32-6回	66	須恵器	环身	1/2以上	(10.8) (13.8)			3.8				灰色	淡灰色
第32-7回	66	須恵器	甕	口縁部極小片					3.3	2.9	0.5	灰色	淡褐色
第32-8回	66	須恵器	甕	口縁部極小片					3.4	1.5	0.3	灰色	淡灰色
第32-9回	66	須恵器	甕	胴部極小片					4.5	2.8	0.6	灰色	淡灰色
第32-10回	66	須恵器	甕	口縁部極小片					4.8	2.4	0.5	灰色	灰色
第33-11回	67	須恵器	甕	口縁部片				(11.2)	13.5	10.2	0.8	灰色	灰色
第33-12回	67	須恵器	甕	口縁部片					12.5	14.7	1.1	灰色	灰色
第33-13回	67	須恵器	甕	口縁部片				(9.0)	11.5	21.0	0.8	灰色	灰色
第33-14回	67	須恵器	甕	胴部小片					8.2	7.3	0.9	灰色	灰色
第33-15回	67	須恵器	甕	胴部小片					10.3	7.5	0.9	灰色	灰色
第33-16回	67	須恵器	甕	胴部小片					5.3	5.1	0.9	黑灰色	灰色
第33-17回	67	須恵器	甕	胴部小片					9.8	12.8	0.9	灰色	灰色
第33-18回	67	須恵器	甕	胴部小片					7.6	5.0	0.5	灰色	灰色
第34-19回	67	上部器	瓶	口縁~胴部片	(29.0)			(19.5)				橙色	明褐色
第37-1回	68	土師器	瓦脚环	1/2以上	(14.0)			8.6	8.9			白褐色	白褐色
第37-2回	68	土師器	甕	口縁部小片	(18.8)			(5.0)				明黄褐色	明黄褐色
第40-1回	68	須恵器	蓋	1/2以下	(14.2)			4.6				淡青灰色	淡青灰色
第49-1回	68	須恵器	蓋	ほぼ完形	12.6			3.7				青灰色	青灰色
第49-2回	68	須恵器	蓋	1/2以上	(13.2)			4.2				淡灰色	灰色
第49-3回	68	須恵器	环身	1/3以下	(11.2) (14.0)			(3.1)				淡灰色	淡灰色
第49-4回	68	須恵器	环身	1/3以下	(11.6) (13.8)			4.2				灰褐色	灰色
第49-5回	68	須恵器	环身	2/3以上	(10.7) (13.5)			4.2				浅黄色	灰褐色
第50-1回	68	上部器	甕	口縁~肩部片	(14.2)			(7.7)				棕·明褐色	褐色

粒度 (mm)	焼成	調整 (外側)	(内面)	備考
1.0以下長石・雲母含	良好	横ナデ 縦ハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	
石英・長石微粒多含	良好	横ナデ 横・縦ハケ目	横ナデ 不定方向ナデ	やや重む
1.0以下石英含	良好	横ナデ	横ナデ	
1.0以下石英・長石多含	良好	横ナデ	横ナデ	
1.0以下石英多含	良好	横ナデ	横ナデ	
1.0以下石英・長石含	普通	風化の為調整不明	風化の為調整不明	
2.0以下石英・長石含	良好	横ナデ 縦・斜めハケ目	横ナデ ヘラ削り	全体的にやや風化気味
1.0以下石英・長石含	普通	風化の為調整不明	風化の為調整不明	
1.0以下石英・長石含	普通	斜めハケ目(部分的)	ヘラ削り ナデ	全体的に風化
1.0以下石英多含	普通	横ナデ		0.4×1.0cmの穿孔(貫通せず)
1.0以下石英・長石多含	普通	ナデ 指ナデ		0.3×1.7cmの穿孔(貫通せず)
1.0以下石英・長石多含	普通	ナデ 指ナデ		
長石微粒少含	普通	手捏ね		中央に穿孔(0.8cm)
2.0以下石英・金・黒雲母・白・灰・褐色砂粒含	良好	横ナデ 縦・斜めハケ目 ナデ	横ナデ ヘラ削り	
長石少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右?)	回転ナデ	
長石微粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	格円形に重む
長石較多含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石微粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
長石較少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
長石微粒極少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
長石微粒多含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
1.5以下長石少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外面: 波状文
0.5以下長石含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外面: 披枚文 内面に刷毛型小片付着
0.5以下長石含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外面: 連續刷毛文
長石微粒少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外面: 波状文
長石微粒少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外面: 披枚文 2段 外面に自然剥付着
長石微粒含	良好	平行叩き文後回転ナデ	回転ナデ	外面: 披枚文 2段 外面に自然剥付着
長石微粒多含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外面: 波状文 2段
長石微粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒多含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒多含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
2.0以下石英含	やや不良	横ナデ ヘラ削り	横ナデ ヘラ削り	全体的に風化、外側スス付着
長石・石英較少含	普通	横ナデ 横ハケ目(部分的) ナデ	ナデ	
1.0以下石英・長石含	普通	横ナデ 縦ハケ目	横ハケ目 ヘラ削り	
石英・長石微粒極少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)	回転ナデ後中央一定方向ナデ	
1.0以下石英・白・灰・褐色砂粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向ナデ	天井部外側にヘラ記せ「」 やや重む
長石少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
長石微粒少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
長石少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石極少含	良好	回転ナデ 縦・斜めハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	外面やや風化気味

辨別番号	写真 版	種別	器種	残存部	法量(cm)						色調(外面)	(内面)	
					口径	受部径	底径	器高	最大長	最大幅	最大厚		
第50-2 図	68	土師器	壺	口縁~肩部片	(25.4)			(6.1)				灰橙・橙色	橙色
第51図		土師器	壺	底部小片				(7.5)		11.3	2.9	橙・明橙色	明橙色
第51図		土師器	壺	底部小片				(7.9)		8.8	2.7	明黃白色	透灰茶・淡褐色
第55-1 図	68	土師器	壺	底部小片				(11.3)		14.0	5.3	明橙色	暗褐色
第58-1 図	69	土師器	壺	1/2以下	(21.8)			(13.3)				黃褐色	黃褐色
第58-1 図	69	土師器	壺	口縁~肩部小片	(19.2)			(5.3)				黃褐色	黃褐色
第59-2 図	69	土師器	壺	底部小片				(11.9)		15.6	3.2	明橙色	暗褐色
第61-1 図	69	土師器	壺	ほぼ完形	(4.0)			5.1				橙・暗灰褐色	褐色
第61-2 図	69	土師器	壺	1/2以上	(7.8)			8.8				暗褐色	暗褐色
第61-3 図	69	土師器	壺	1/3以下	(12.4)			(8.8)				透白・黃褐色	明黃色
第61-4 図	69	須恵器	环身	ほぼ完形	12.3	14.5		5.2				灰黃色	灰黃色
第64-1 図	70	須恵器	壺	1/2以上	(13.8)			4.05				淡灰茶・淡茶色	淡灰黃色
第64-2 図	70	須恵器	环身	2/3以上	9.9	12.6		4.4				暗青灰色	暗青灰色
第64-3 図	70	須恵器	环身	1/3以下	(12.4)	(14.6)		4.5				暗青灰色	灰茶色
第64-4 図	70	須恵器	环身	2/3以上	(12.1)	(14.2)		4.45				淡灰黃色	淡黃灰色
第64-5 図	70	土師器	小型片	ほぼ完形	9.2		7.6	9.3				明橙色	明黃色
第64-6 図	70	土師器	壺	2/3以上	(14.2)			6.7				橙・明橙色	橙・明橙色
第64-7 図	70	土師器	壺?	2/3以上				(12.7)				明黃灰色	明黃灰色
第65図		土師器	壺	口縁部小片	(18.8)			(5.2)				明橙・橙色	橙色
第65図		土師器	壺	口縁~肩部小片	(17.6)			(5.95)				黃褐色	黃褐色
第65-10図	70	土師器	壺	口縁~肩部片	(18.2)			(6.65)				明橙・橙色	茶・橙色
第65図		土師器	壺	口縁~肩部小片	(20.8)			(7.55)				黃褐色	黃褐色
第65-12図	70	土師器	壺	1/3以下	(27.0)			(14.3)				橙・暗橙・暗褐色	暗・暗褐色
第67-1 図	71	土師器	壺	小片	(12.4)			(4.2)				明橙色	明橙色
第67-2 図	71	土師器	壺	1/3以下	(13.0)			4.7				橙赤・暗茶褐色	橙赤色
第67-3 図	71	土師器	壺	1/3以下	(13.7)			5.4				明橙色	明橙色
第67-4 図	71	土師器	壺	口縁~肩部小片	(19.6)			(5.3)				黃褐色	黃褐色
第67-5 図	71	土師器	壺	口縁~肩部小片	(19.6)			(6.3)				黃褐色・黒褐色	黃褐色
第69-1 図	71	須恵器	蓋(偏状)	完形	16.0	5.1		2.1				暗青灰色	暗青灰色
第69-2 図	71	須恵器	高台付耳	完形	14.5		9.5	4.4				淡青灰色	淡青灰色
第69-3 図	71	土師器	壺	口縁~肩部小片	(21.0)			(8.9)				明橙・橙色	明橙・橙色
第71-1 図	72	須恵器	蓋	1/3以下	(14.6)			4.5				暗青灰色	淡灰白色
第71-2 図	72	須恵器	蓋	1/4以下	(16.0)			3.85				灰茶色	暗褐色
第71-3 図	72	須恵器	蓋	1/3以下	(13.0)			3.3				暗青灰色	暗青灰色
第71-4 図	72	須恵器	蓋	ほぼ完形	12.4			4.3				暗青灰・赤褐色	暗青灰・暗褐色
第71-5 図	72	須恵器	环身	1/3以下	(13.0)	(15.0)		4.1				灰黄・灰褐色	淡灰黄色
第71-6 図	72	須恵器	环身	1/4以下	(10.8)	(14.2)		(3.8)				淡灰色	淡灰色
第72-7 図	72	土師器	壺	口縁~肩部小片	(15.4)			(5.5)				橙色	橙・明橙色
第72-8 図	72	土師器	壺	口縁部小片	(15.0)			(5.3)				橙・明橙色	橙色
第72-9 図	72	土師器	壺	口縁~肩部小片	(16.0)			(7.3)				橙色	橙色
第72-10図	72	土師器	壺	口縁~肩部片	(15.8)			(4.95)				橙・明橙色	茶灰色
第72-11図	72	土師器	壺	口縁~肩部片	(15.6)			(10.35)				橙・褐色	橙色
第72-12図	72	土師器	壺	口縁部小片	(22.6)			(4.3)				橙色	橙色

駆士 (mm)	焼成	調整 (外面)	(内面)	備考
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
4.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・灰色砂粒多含 やや不均		縦ハケ目(部分的)	ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含 やや不均	良好	ヘラ削り	ヘラ削り	
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	ナデ ハケ目 縦ハケ目	ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目(部分的)	横ナデ 工具痕 ヘラ削り	肩部外面やや風化気味
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	斜めハケ目 ナデ	ヘラ削り 指痕直痕	底部に縦方向の溝
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含	良好	縦ハケ目(部分的) ナデ	ヘラ削り ナデ	外面部風化気味
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含	良好	ナデ 横・斜めハケ目	ナデ ヘラ削り ナデ	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含	良好	横ナデ 縦・横ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
7.5以下石英、白・灰・黄・黑色砂粒多含 やや不均	不良	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
1.0以下石英、白・灰・黄・黑色砂粒多含 やや不均		回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	口縫部外間に暗緑色自然釉付着 大きく歪む
3.0以下石英、白・灰・黒・黄色砂粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	大きく歪む
2.0以下石英、白・灰・黒・黄色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	大きく歪む
2.0以下石英、白・灰・黒・黄色砂粒多含 不均		回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含	良好	ナデ 斜めハケ目(部分的) ナデ	ナデ	脚部外端部分的にミガキか 脚部内面や風化気味
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒少含	良好	横ナデ 斜めハケ目(部分的) ナデ	横ナデ 不定方向ナデ	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含 良好	良好	斜めハケ目(部分的) ナデ	横ナデ ヘラ削り後ナデ	口縫部全欠損
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目(部分的)	横ナデ 横ハケ目 ヘラ削り	肩部外西やや風化気味
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・灰色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目	横ナデ 横ハケ目 ヘラ削り	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・灰色砂粒多含	良好	横ナデ 縦・横ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
1.5以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含 やや不均	良好	ナデ 指痕直痕(等間隔) ナデ	回転ナデ	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	回転ナデ	回転ナデ ナデ	
2.5以下石英、金・黒雲母、白・灰・褐色砂粒含	良好	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
4.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含 やや不均		横ナデ	横ナデ ヘラ削り	全体的に風化顯著
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含 良好	良好	横ナデ 横ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
1.5以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含 普通		回転ナデ 静止系切り後ナデ	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	天井部静止系切り
4.0以下石英、白・灰・黑色砂粒少含	普通	回転ナデ 静止系切り後ナデ	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	底部静止系切り
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
3.5以下石英、白・灰・黑色砂粒含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	外面部全体的に自然釉付着
0.5以下灰・黒・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
3.0以下白・灰・黄色砂粒含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	天井部内面に指痕直痕
3.0以下石英、白・灰・赤・黑色砂粒多含 やや不均		回転ナデ 回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
1.5以下石英、白・灰・赤・黑色砂粒多含 普通		回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	外面部外端部分的に練黄色自然釉付着
4.0以下白・灰・黄色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	底面部外間にヘラ印記,—
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目	横ナデ 縦ハケ目 ヘラ削り	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目	横ナデ 縦ハケ目 ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	
3.5以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	ナデ 斜めハケ目(部分的)	ナデ 横ハケ目 ヘラ削り	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 縦ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒少含	良好	横ナデ	横ナデ	

博覧番号	写真 版画	種別	器種	残存	法量(cm)						色調(外向)	(内面)	
					口径	支脚群	底	径	器高	最大長	底幅	底厚	
第72-12回	73	土師器	壺	口縁~肩部片	(20.8)				(12.8)				暗棕·明橙色 棕色
第72-14回	73	土師器	壺	口縁~肩部片	(14.0)				(7.1)				棕·黑色 明褐色
第73-15回	73	土師器	土著文陶	2/3以上				8.1	10.5				明棕·棕色
第73-16回	73	土師器	壺	底部小片					(9.5)	18.9	3.0		棕·明棕色
第73-17回	73	土師器	壺?	肩部小片					(12.7)				棕·明棕色 棕·明棕色
第73-18回	73	土師器	壺	肩部片	(30.8)				(13.3)				棕·黄棕色 棕·明棕色
第79-1回	74	土師器	壺	口縁部小片	(20.0)				(5.2)				暗紫·棕色 暗棕·明棕色
第85-1回	74	須恵器	壺	1/4以下	(13.1)				3.9				灰赤色 灰棕色
第85-2回	74	須恵器	壺	2/3以上	(13.8)				5.3				暗青灰·淡青灰色 灰色
第85-3回	74	須恵器	壺身	小片	(10.6)	(13.0)			(3.2)				明灰白色 明灰棕色
第85-4回	74	須恵器	壺口蓋	1/2以上	(9.6)				(13.5)				灰黑色 灰棕色
第85-5回	74	土師器	壺	口縁~肩部小片	(15.2)				(4.8)				棕色 棕色
第85-6回	74	土師器	壺	口縁~肩部少片	(16.0)				(5.0)				棕色 棕色
第87-1回	74	須恵器	壺身	1/4以下	(13.1)	(15.0)			3.7				灰色 灰色
第89-1回	75	須恵器	壺	1/3以下	(12.1)				4.25				灰色 灰色
第89-2回	75	須恵器	壺	2/3以上	14.0				4.0				灰黃·黑灰色 灰褐色
第89-3回	75	須恵器	壺	1/2縁部小片					(11.5)	9.0	0.8		灰褐色 灰色
第89-4回	75	土師器	低脚环	脚部片				(8.0)	(4.7)				明棕·棕色 黃灰·棕·灰褐色
第89-5回	75	土師器	壺	口縁~肩部片	(14.2)				(4.9)				明黃棕色 明青棕·黑褐色
第89-6回	75	土師器	壺	口縁部小片	(15.2)				(5.0)				棕色 棕色
第89-7回	75	土師器	壺?	口縁部小片	(21.6)				(4.8)				棕色 棕色
第89-8回	75	土師器	壺	口縁~肩部小片	(21.0)				(5.25)				棕·黄色 棕·黄色
第90-9回	75	土師器	壺	口縁~肩部小片	(15.0)				(5.5)				明棕色 棕黄色
第90-10回	75	土師器	壺?	口縁~肩部小片	(17.8)				(12.6)				明黃棕色 明黃棕色
第98-1回	76	須恵器	壺身	口縁部小片	(12.4)	(15.0)			(3.2)				灰褐色 灰白色
第98-2回	76	須恵器	壺身	1/4以下	(10.2)	(13.0)			3.9				暗青灰色 暗青灰色
第98-3回	76	須恵器	壺身	完形	11.4	14.1			3.8				青灰色 暗灰色
第98-4回	76	須恵器	壺身	2/3以上	(12.0)	(14.4)			4.3				灰色 灰色
第98-5回	76	土師器	壺	頸~肩部小片					(5.95)				暗赤褐色·暗茶色 棕·暗棕色
第98-6回	76	土師器	壺	1/2縁~肩部小片	(15.6)				(9.2)				明綠·棕色 明棕·棕色
第98-7回	76	土師器	壺	口縁~肩部小片	(18.4)				(6.0)				明棕色 明棕·黃白色
第98-8回	76	土師器	壺	口縁部小片	(21.0)				(4.5)				淡棕色 棕色
第99-9回	76	土師器	壺	底					(21.8)	23.9	7.3		棕·黃模·明棕色 壕·黃模·明棕色
第99-10回	76	土師器	壺	口縁~肩部小片	(23.0)				(8.8)				棕·黑色 棕色
第99回	76	土師器	壺	口縁部片	(30.0)				(7.1)				黃棕色 黃棕·棕褐色
第99-13回	76	土師器	壺	2/3以上					33.5				淡黃灰色 淡黃灰色
第100-1回	77	須恵器	壺身	2/3以上	10.7	13.6			4.2				暗灰色 青灰色
第100-2回	77	須恵器	壺身	2/3以上		14.0			(3.5)				暗灰色 青灰·黃灰色
第102-1回	77	須恵器	高环	ほぼ完形	14.1			11.9	11.45				灰·青灰色 灰·黃棕色
第102-2回	77	土師器	壺	ほぼ完形	16.5				8.2				明棕色 明棕色
第104-1回	77	土師器	壺	口縁~肩部片	(24.0)				(7.3)				棕色 棕色
第109-1回	77	須恵器	壺身	1/4以下	(12.2)	(14.7)			(4.3)				灰色 灰色

胎土 (mm)	焼成	調整 (外面)	(内面)	備考
6.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・灰色砂粒多含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・灰色砂粒少含	やや不良	横ナデ 横ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	指ナデ		
4.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ハケ目(部分的) 指面圧痕 ナデ	指面圧痕	全体的に風化
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 緩ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ ナデ 緩ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
4.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 横ハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	外面風化気味
1.0以下石英、白・灰・灰色砂粒少含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	天井部外側:工具痕
1.0以下石英、白・灰・黄色砂粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
3.0以下石英、白・灰・灰色砂粒少含	不良	回転ナデ 回転ヘラ削りか	回転ナデ	外表面風化気味
0.5以下白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 横カキ目	回転ナデ	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒少含	良好	横ナデ 緩ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒少含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下長石含	良好	回転ナデ 同軸ヘラ削り(右)	回転ナデ	
1.5以下白・灰・黑色砂粒少含	良好	回転ナデ 同軸ヘラ削り(左)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
2.0以下白・灰・灰色砂粒少含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
長石微粒多含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外側:波状文2段
1.5以下石英、金・黒雲母、白・灰色砂粒少含	やや不良	ナデ	ナデ	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒多含	不良	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒少含	良好	横ナデ	横ナデ	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒少含	良好	横ナデ 横・緩ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒少含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黑色砂粒少含	良好	横ナデ 緩ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
0.5以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	やや不良	横ナデ 緩ハケ目	横ナデ ヘラ削り	
1.0以下長石少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外側に自然輪付着
2.0以下石英、白・灰・黄色砂粒少含	良好	回転ナデ ヘラ切り後ナデ	回転ナデ後中央仕上げナデ	底部外側:工具痕
4.0以下石英、白・灰・黑色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	底部外側:工具痕
1.0以下石英、白・灰・黑色砂粒多含	やや不良	回転ナデ 同軸ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 緩ハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 緩ハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	
3.0以下石英、金・黑雲母、白・灰・黄色砂粒少含	不良	風化の為調整不明瞭	風化の為調整不明瞭	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ	横ナデ ヘラ削り	
4.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 指面圧痕 緩ハケ目(部分的)	ヘラ削り	
1.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 緩ナデ	横ナデ ヘラ削り	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 緩ハケ目(部分的)	横ナデ ヘラ削り	
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	風化の為調整不明瞭	ヘラ削り	
3.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ 緩・斜めハケ目	横ナデ ナデ	
3.5以下石英、白・灰・黄色砂粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
1.5以下石英、白・灰・黄色砂粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)	回転ナデ後中央仕上げナデ	立ち上がり部分全面欠損
2.0以下石英、白・灰・灰色砂粒多含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	脚部3方向に達し(三角形) 全体的に歪む
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ ナデ	横ナデ 不定方向ナデ	底部内面:浅い指紋圧痕 指円形に大きく歪む
2.0以下石英、金・黒雲母、白・灰・黄色砂粒少含	良好	横ナデ 緩ハケ目	横ナデ 横ハケ目 ヘラ削り	
長石微粒少含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	

博物番号	写真 図版	種別	器種	残存	法 直(cm)						色調(外面)	(内面)		
					口 径	受部深	底 径	器 高	最大長	最大幅	最大厚			
第109回		須恵器	壺	環部小片	(13.0)			(3.5)				濃灰色	灰色	
第109-3回	77	須恵器	壺	1/2以上	(12.0)	(14.8)		(11.4)				灰色	淡灰色	
第109-4回	77	須恵器	壺	頭部小片					4.7	7.2	0.5	灰色	灰色	
第109-5回	77	須恵器	壺	胴部少片					6.0	3.8	0.8	黒灰色	灰色	
第110-1回	78	須恵器	壺	1/3以下	(13.0)			4.1				濃灰色	褐色	
第110-2回	78	須恵器	壺	1/4以下	(13.75)			3.4				黒灰色	灰色	
第110-3回	78	須恵器	壺	ほぼ完形	12.4			3.6				灰色	淡灰色	
第110回		須恵器	壺身	小片	(11.0)	(13.7)		(2.6)				灰色	灰色	
第110-5回	78	須恵器	壺身	1/3以下	(11.9)	(13.8)		(4.1)				淡灰色	淡灰色	
第110-6回	78	須恵器	壺身	1/2以上	(11.0)	(13.0)		(3.8)				灰色	灰色	
第110-7回	78	須恵器	壺身	1/4以下	(11.2)	(13.6)		4.5				灰色	灰色	
第110-8回	78	須恵器	壺身	1/2以上	(11.4)	(14.0)		3.6				灰色	灰色	
第110-9回	78	須恵器	壺身	1/2以上	(12.0)	(14.8)		5.0				灰色	灰色	
第110-10回	78	須恵器	壺身	ほぼ完形	12.5	15.0		4.15				青灰色	淡青灰色	
第110-11回	78	須恵器	壺身	完形	10.6	13.4		3.8				黄灰色	黄灰色	
第111-12回	79	須恵器	壺	胴部小片				9.6	11.4	0.9		濃灰色	濃灰色	
第111-13回	79	須恵器	壺	胴部小片				13.9	10.0	1.0		灰色	灰色	
第111-14回	79	須恵器	壺	胴部小片				11.1	16.5	1.0		灰色	灰色	
第111-15回	79	須恵器	壺	胴部片				24.2	19.3	1.1		灰色	灰色	
第111-16回	79	須恵器	壺	胴部片				24.6	25.0	1.1		灰色	灰色	
第112-17回	79	土師器	壺	2/3以上	(12.4)			(12.0)				明黄褐色	明黄褐色	
第112-18回	79	土師器	壺	把手					7.4	6.7	3.3		明黄褐色	
第113-1回	80	須恵器	壺	1/3以下	(12.1)			4.15				灰白色	灰白色	
第113-2回	80	土師器	壺	1/3以下	(9.8)			4.3				褐・茶色	褐・茶色	
第115-1回	80	須恵器	壺	2/3以上	13.7			4.25				淡灰色	白黄灰色	
第115-2回	80	須恵器	壺	2/3以上	12.6			4.25				淡褐色~灰色	灰色	
第115-3回	80	須恵器	壺身	1/4以下	(10.3)	(13.1)		(3.6)				灰色	灰色	
第115-4回	80	須恵器	壺身	1/2以上	(10.7)	(13.0)		3.9				灰色	灰色	
第115-5回	80	須恵器	壺身	1/3以下	(12.4)	(15.0)		4.3				淡灰色	淡灰色	
第115-6回	80	土師器	壺	口縁部小片				(5.0)				暗黄灰色	暗黄灰色	
第115-7回	80	土師器	壺	口縁~肩部片	(17.0)			(4.7)				暗黄灰色	暗黄灰色	
第121-1回	81	須恵器	壺身	1/3以下	(9.8)	(12.4)		3.3				黄灰色	淡綠灰色	
第121-2回	81	須恵器	壺	1/2以下	(11.0)			4.5				淡灰・灰茶色	灰色	
第121-3回	81	土師器	壺	口縁~肩部片	(18.6)			(10.2)				黃白色	燈・附橙色	
第129-1回	82	須恵器	壺(輪状)	大井部片		5.1 (輪状)		(1.2)				淡銀灰色	灰色	
第129-2回	82	須恵器	壺(輪状)	ほぼ完形	15.4	2.5 (輪状)		(2.0)				暗青灰色	灰色	
第129-3回	82	須恵器	壺	1/2以上	12.1			8.8	3.3			暗青灰色	暗青灰色	
第129-4回	82	須恵器	壺	ほぼ完形	12.4			7.6	3.75			暗青灰色	暗青灰色	
第129-5回	82	須恵器	壺	ほぼ完形	12.5			6.5	4.0			灰色	灰色	
第129-6回	82	須恵器	長颈壺	胴部小片					(4.85)			暗青灰色	淡青灰色	
第129-7回	82	須恵器	広口壺	ほぼ完形	13.1			9.8	15.45			暗青灰色	暗青灰色	
第130-8回	82	須恵器	壺	胴部小片						5.5	4.3	1.2	暗褐色	黑灰色
第130-9回	82	須恵器	壺	胴部小片						8.6	7.1	1.4	暗褐色	暗灰色

胎土 (mm)	焼成	調査 (外観)	(内 面)	備 考
1.0以下長石少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
1.0以下長石含	良好	回転ナデ	回転ナデ	脚部3方向に2段造し(長三脚形)
長石微粒含	良好	回転ナデ カキ目	回転ナデ	外面: 波状文
長石微粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
石英、長石微粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
長石微粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)	回転ナデ	
長石微粒極少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
1.0以下長石少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
0.5以下白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石微粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	大きく歪む
長石微粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	焼成時のひび割れ
長石微粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
石英、長石微粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
石英、長石較多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央・定方向ナデ	坏部外面に自然釉付着
5.5以下石英、白・灰・黒・黄色砂粒多含	不良	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	底部外面: 工具痕
長石微粒多含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒多含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
長石微粒合	良好	平行叩き文	同心円当て具痕後ナデ	
1.0以下石英、白・灰・黒・黄色砂粒多含	良好	横ナデ ナデ	横ナデ ヘラ削り	
長石微粒多含	普通	ナデ		
1.0以下石英、白・灰・黑色砂粒少含	やや不良	回転ナデ 回転ヘラ削り(?)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
2.5以下白石英、金・黒雲母・白・灰・灰色砂粒多含	良好	横ナデ 斜めハケ目	横ナデ 中央仕上げナデ	
2.0以下石英、白・灰・灰色砂粒合	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
長石微粒少含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
0.5以下白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
長石微粒極少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
1.0以下長石含	不良	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
3.0以下石英、白・灰・黄色砂粒多含	良好	横ナデ	横ナデ	全体的に風化気味
2.0以下石英、金・黒雲母・白・灰・灰色砂粒多含	普通	横ナデ 縦・斜めハケ目(部分的)	横ナデ 縦ハケ目 ヘラ削り	
1.5以下石英、白・灰・黒・黄色砂粒多含	不良	回転ナデ 回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
1.0以下石英、白・灰・黑色砂粒少含	やや不良	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
3.0以下石英、金・黒雲母・白・灰・黄色砂粒多含	やや不良	横ナデ 縦・斜めハケ目	横ナデ ヘラ削り	
3.0以下石英、白・灰・黄色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	
1.0以下石英、白・灰色砂粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ ナデ	
1.0以下石英、白・灰色砂粒合	良好	回転ナデ 回転系切り	回転ナデ 不定方向ナデ	底部回転系切り
5.0以下石英、白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 亂転系切り	回転ナデ ナデ	底部回転系切り
1.0以下石英、白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転系切り	回転ナデ ナデ	底部回転系切り
1.0以下石英、灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(?)	回転ナデ	
1.0以下石英、灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
0.5以下白・灰色砂粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
0.5以下砂粒極少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	

括弧番号	写真 版画	種別	器種	残存	法量(cm)						色調(外側)	(内面)	
					口径	受部径	底径	器高	最大長	最大幅	最大厚		
第130-10回	82	須恵器	壺	口縁~肩部片	(18.9)			(5.8)				青灰~暗褐色	青灰~暗褐色
第131-12回	83	陶器	碗	底部片			9.0	(2.8)				茶褐色	青褐色
第132-13回	83	陶器	碗	1/3以下			(4.6)	(5.6)				青綠色	青綠色
第135-1回	83	須恵器	壺	1/4以下				(3.1)				淡灰·茶褐色	棕色
第135-2回	83	須恵器	高台付壺	高台部片			7.5	(2.05)				灰色	灰色
第139-1回	83	須恵器	高台付壺	高台部小片			(15.6)	(2.4)				赤褐色	赤褐色
第142-1回	83	須恵器	高台付壺	1/4以下	(19.2)		(16.0)	4.25				赤褐色	赤褐色
第148-1回	84	須恵器	壺	胸部小片					2.9	3.9	1.0	灰色	白茶色
第148-2回	84	須恵器	壺	胸部小片					4.9	3.2	1.0	灰色	白茶灰色
第148-3回	84	須恵器	壺	胸部小片					8.0	9.6	1.0	淡灰褐色	淡褐色
第148-4回	84	陶器	碗	底部小片			5.4	(3.4)				青綠·灰褐色	灰褐色
第152-1回	84	須恵器	壺	胸部小片					6.3	3.4	0.8	淡灰黄色	灰色
第152-2回	84	陶器	碗	底部片			5.2	(1.8)				黃褐色	青綠色
第153-1回	84	須恵器	壺	胸部小片					5.7	7.1	0.7	淡灰黄色	灰色
第161-1回	84	須恵器	高台付壺	底部のみ			8.2	(2.4)				青灰色	青灰色
第161-2回	84	須恵器	高台付壺	高台部小片			(9.0)	(2.4)				灰色	灰色
第161-3回	84	須恵器	壺	底部小片	(12.9)		(7.6)	2.0				暗灰色	暗灰色
第161-4回	84	須恵器	長頸壺	2/3以上			8.2	(20.3)				灰·淡灰褐色	淡青灰色
第161-5回	84	須恵器	壺	腹部小片					3.7	5.3	0.7	暗灰色	灰色
第161-6回	84	須恵器	壺	腹部小片					6.4	6.0	1.2	灰色	暗灰色
第161-7回	84	須恵器	壺	腹部小片					5.2	4.8	1.3	暗灰色	灰色
第162-1回	85	須恵器	高台付壺	1/4以下	(11.6)		(7.4)	4.35				暗灰色	灰色
第163-2回	85	土師質	上馬	腹部のみ					14.1	4.2		黃褐色	
第180-1回	85	須恵器	壺(陶)	つまみ部極小片		4.7 (細狭)		(1.5)				青灰色	青灰色
第180-2回	85	須恵器	壺	口縁部極小片				(2.5)				淡灰色	灰色
第180-3回	85	須恵器	壺	腹部極小片					3.0	4.1	1.1	灰色	暗灰色
第180-4回	85	須恵器	壺	腹部極小片					4.2	3.2	0.9	暗灰色	暗灰色
第180-5回	85	須恵器	壺	腹部小片					5.5	4.5	0.8	灰褐色	灰褐色
第180-6回	85	須恵器	壺	腹部極小片					3.3	4.1	1.0	暗茶褐色	暗茶褐色
第184-1回	86	須恵器	壺	口縁部小片				(7.5)				暗灰色	灰色
第184-2回	86	須恵器	壺	腹部極小片					2.8	3.7	1.2	灰色	灰色
第184-3回	86	須恵器	壺	腹部小片					4.6	4.2	0.9	青灰色	青灰色
第184-4回	86	須恵器	壺	腹部小片					4.4	5.4	1.0	淡灰色	淡灰色
第184-5回	86	陶器	高台付壺	1/2以下	10.8		6.2	2.5				灰黃綠色	灰黃綠·灰黃色
第184-6回	86	陶器	碗	ほぼ完形	10.8		5.0	4.9				灰桃黃色	灰桃黃色
第184-7回	86	陶器	鉢	底部小片			(7.0)	(2.9)				白綠·灰黃色	白綠·灰黃色
第184-8回	86	陶器	壺	完形	7.6	10.0 (かく)		2.3				暗赤褐色	明茶褐色
第184-9回	86	陶器	壺	完形	9.0		6.4	12.0				暗茶褐色·茶褐色	暗茶褐色·明茶色
第184-10回	86	陶器	壺	完形	10.8		6.2	8.0				暗赤褐色	暗赤褐色
第184-11回	86	陶器	壺	口縁部小片	(12.8)			(4.3)				暗黑灰色	暗黑灰色
第187-1回	87	汚乳器	かわらけ	完形	8.4		4.0	1.6				明橙色	明橙色
第187-2回	87	土壤器	かわらけ	ほぼ完形	7.8		4.0	1.75				棕灰色	棕灰色
第187-3回	87	汚乳器	かわらけ	ほぼ完形	7.4		3.8	1.6				棕灰色	棕灰色

胎土 (mm)	焼成	調整 (外面)	(内面)	備考
1.0以下石英・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 平行叩き文	回転ナデ 同心円当て具收後ナデ	
7.0以下白・灰・黒色砂粒含	良好	回転ヘラ削り?		布志名焼
	良好			布志名焼
2.0以下石英・白・灰・黄色砂粒少含	不良	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
1.0以下白・灰色砂粒少含	普通	回転ナデ	仕上げナデ	
0.5以下白色砂粒少含	普通	回転ナデ 回転糸切り後ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り
0.5以下白色砂粒少含	やや不良	回転ナデ 回転糸切り後ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り
0.5以下石英・白色砂粒少含	やや不良	平行叩き文	同心円当て具痕	
0.5以下石英・砂粒少含	やや不良	平行叩き文	同心円当て具痕	
0.5以下白色砂粒少含	不良	平行叩き文	同心円当て具痕	
	良好			布志名焼
2.0以下石英・灰・黒色砂粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
0.5以下石英・砂粒極少含	良好			布志名焼
1.0以下白・灰色砂粒少含	普通	平行叩き文後横カキ目	同心円当て具痕	
1.0以下白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ	不定方向仕上げナデ	底部回転ヘラ切り痕
2.0以下石英・白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ	不定方向仕上げナデ	
1.0以下白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ 脇糸切り	回転ナデ後仕上げナデ	底部回転糸切り
3.0以下石英・白・灰色砂粒小含	良好	回転ナデ 静止糸切り後ナデ	回転ナデ	底部静止糸切り
1.0以下石英・白色砂粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
2.0以下石英・白・灰色砂粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
0.5以下白色砂粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
1.0以下白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	
1.0以下石英・金墨雲母・白灰・黄褐色砂粒多含	普通			
白色微砂粒極少含	良好	回転ナデ	ナデ	
0.5以下白・灰色砂粒少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
0.5以下白色砂粒極少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
1.0以下白・灰色砂粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
1.0以下砂粒極少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
1.5以下白・灰・黄色砂粒含	普通	平行叩き文	同心円当て具痕	
砂粒極少含	良好	回転ナデ	ナデ 同心円当て具痕	口頭部外面に自然釉付着
0.5以下白色砂粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
微砂粒極少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
微砂粒極少含	やや不良	平行叩き文	同心円当て具痕	
	良好			窓口・类濃系?
	良好			
1.5以下白・灰色砂粒含	普通			燒結陶器
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.3cm) 底部回転糸切り
石英・砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.5cm) 底部回転糸切り
石英・砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.3cm) 底部回転糸切り

博団番号	写真 図版	種別	器種	残存	法量(cm)						色調(外面)	(内面)		
					口径	受部径	底径	器高	最大長	最大幅	最大厚			
第187-4図	87	十葉土器	かわらけ	完形	8.2		3.5	1.4				淡橙色	淡橙色	
第187-5図	87	有肩者	かわらけ	完形	8.8		4.5	1.8				明橙白色	明橙色	
第187-6図	87	上部質土器	かわらけ	完形	8.0		4.5	1.7				褐色	褐色	
第187-7図	87	土円土器	かわらけ	完形	8.0		4.3	1.65				橙色	橙色	
第187-8図	87	十葉土器	かわらけ	完形	8.2		4.6	1.5				橙色	橙色	
第187-9図	87	十葉土器	かわらけ	完形	8.2		4.8	1.5				明橙色	明橙色	
第187-10図	87	二肩质土器	かわらけ	完形	8.7		4.8	2.0				淡橙色	淡橙色	
第187-11図	87	上部質土器	かわらけ	完形	8.4		4.5	1.6				褐色	褐色	
第187-12図	87	上部質土器	かわらけ	ほぼ完形	8.8		4.5	1.5				褐色	褐色	
第187-13図	87	十葉土器	かわらけ	ほぼ完形	8.5		5.3	1.5				暗橙色	褐色	
第187-14図	87	上部質土器	かわらけ	完形	8.8		4.7	1.6				褐色	褐色	
第188-15図	87	二肩质土器	かわらけ	完形	8.4		4.0	1.65				明黄灰色	明黄灰色	
第188-16図	87	七葉土器	かわらけ	2/3以上	7.5		4.2	1.2				淡橙色	淡橙色	
第188-17図	87	十四葉谷	かわらけ	ほぼ完形	8.3		4.5	1.6				暗橙色	暗橙色	
第188-18図	87	上部質土器	かわらけ	完形	8.2		3.9	1.8				明黄色	明黄色	
第188-19図	87	上部質土器	かわらけ	2/3以上	7.9		4.3	1.5				暗橙色	暗橙色	
第188-20図	87	上部質土器	かわらけ	2/3以上	9.1		4.5	1.7				褐色	褐色	
第188-21図	87	十葉土器	かわらけ	ほぼ完形	7.8		3.0	1.4				乳白色	乳白色	
第188-22図	87	上部質土器	かわらけ	完形	8.2		3.4	1.5				明黄白色	明黄白色	
第189-23図	88	陶磁器	馬	完形				9.5	11.3	3.5		白黄灰色		
第189-24図	88	陶磁器	馬	完形				9.6	11.5	3.5		黑褐・黑茶色		
第190-25図	88	土	人形	上半身のみ					18.5	12.5	6.3		棕色	
第190-26図	88	土	人形	完形					26.0	9.6	0.6		棕色	
第190-27図	88	土	人形	完形					17.0	17.7	7.1		黄灰色	
第199-1図	91	須恵器	蓋(縦縫)	つまみ端のみ		2.6 (縦縫)		(2.5)				青灰色	青灰色	
第199-2図	91	須恵器	蓋	口縫部小片				(1.2)				淡青灰・暗青灰	淡青灰・暗青灰	
第199-3図	91	須恵器	蓋	口縫部小片				(2.5)				暗灰色	暗灰色	
第199-4図	91	須恵器	坏	底部小片				(1.3)				青灰色	青灰色	
第199-5図	91	須恵器	坏	底部小片			8.6	(1.3)				暗青灰色	暗青灰色	
第199-6図	91	須恵器	壺	胴部横小片					3.6	4.0	0.9		灰色	淡青灰色
第199-7図	91	須恵器	壺	胴部小片					4.5	4.3	1.0		暗茶黄色	暗茶黄色
第199-8図	91	須恵器	壺	胴部小片					4.6	7.1	1.0		暗青灰色	暗青灰色
第201-1図	91	須恵器	壺	底部片			7.4	(1.2)				青灰色	青灰色	
第203-1図	91	須恵器	短頸壺	口縫部小片	(12.0)			(4.0)				赤褐・青灰色	暗灰茶色	
第203-2図	91	須恵器	壺	口縫部小片				(7.8)				淡灰色	灰色	
第206-1図	92	須恵器	壺	1/4以下	(13.0)			5.5				暗灰色	暗灰色	
第206-2図	92	須恵器	壺	1/3以下	(12.1)			(5.4)				淡青灰色	淡青灰色	
第206-3図	92	須恵器	壺身	1/3以下	(11.4)	(14.0)		5.7				青灰・暗青灰色	青灰色	
第206-4図	92	須恵器	高壺	脚部小片			(8.4)	(2.0)				灰色	灰色	
第206-5図	92	須恵器	壺	口縫部小片	(9.2)			(3.7)				灰色	灰色	
第206-6図	92	須恵器	小腹口壺	1/3以下	(7.8)			(7.5)				淡灰色	淡灰色	
第206-7図	92	須恵器	壺	口縫部小片	(17.4)			(3.0)				灰色	灰色	
第206-8図	92	須恵器	脚部壺	台部片			(18.6)	(7.8)				淡灰色	淡灰色	

粒度 (mm)	焼成	調整 (外面)	(内面)	備考
石英、砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.3cm) 底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.3cm) 底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.4cm) 底部回転糸切り
石英、砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.6cm) 底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.3cm) 底部回転糸切り
石英、砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.3cm) 底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.4cm) 底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.5cm) 底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.5cm) 底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.4cm) 底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部中央に穿孔 (0.5cm) 底部回転糸切り
石英、砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	底部回転糸切り
砂粒極少含	良好	回転ナデ ナデ	ナデ	
0.5以下白・黄砂粒少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
2.0以下白・灰色砂粒含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
1.0以下白・灰・黄・黃色砂粒合	良好	回転ナデ 回転糸切り	ナデ	底部回転糸切り
0.5以下白・灰・黄・黃色砂粒多含	良好	ナデ 回転糸切り	ナデ	底部回転糸切り
微砂粒極少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
0.5以下石英・白・灰・黃色砂粒合	やや不良	平行叩き文	同心円当て具痕	
2.5以下白・灰・黃色砂粒少含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
2.0以下石英・白・灰・黃色砂粒多含	やや不良	ナデ 回転糸切り	不定方向仕上げナデ	底部回転糸切り
微砂粒少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	
1.0以下石英・白・灰・黃色砂粒合	やや不良	ナデ 平行叩き文	ナデ 同心円当て具痕	
1.0以下白色砂粒多含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
白色微砂粒含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
白色微砂粒含	普通	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央仕上げナデ	
白色微砂粒含	普通	回転ナデ	回転ナデ	脚部1方向に透し残存
白色微砂粒含	普通	回転ナデ	回転ナデ	
1.0以下白色砂粒多含	不良	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ	
1.0以下白色砂粒多含	良好	回転ナデ	回転ナデ	外面: 波状文2段 外面: 袋状文2段 2段透(長方形) 3個残存
白・暗灰色微砂粒含	やや不良	回転ナデ 横カキ目	回転ナデ	

擇國番号	写真 図版	種別	器種	残存	法量(cm)						色調(外面)	(内面)			
					口	横	受部径	底	径	高	最大長	最大幅	最大厚		
第206-9図	91	須恵器	圓形壺台	台部片			(31.6)	(6.6)						暗灰青色	灰青色
第206-10図	91	須恵器	壺	口縁部小片	(22.0)				(3.7)					暗灰色	灰褐色
第206-11図	91	須恵器	壺	口縁部小片					(4.5)					灰色	灰色
第206-12図	91	須恵器	壺	側部小片						11.0	8.8	1.1		灰褐色	青灰色
第206-13図	91	須恵器	壺	側部小片						5.6	8.5	0.6		灰色	灰色
第211-1図		須恵器	蓋	1/3以下	(13.8)			(4.6)						灰褐色	灰褐色
第211-2図	92	須恵器	环身	1/3以下	(11.0)	(13.7)			4.1					青綠・黒灰色	青灰色
第211-3図	92	須恵器	蓋	完形	14.6	2.0			3.0					灰・紫灰色	紫灰色
第211-4図	92	須恵器	环	ほぼ完形	12.7				9.7	4.7				青灰・紫灰色	紫青灰色
第211-5図	92	須恵器	高环	脚部片				(6.2)	(4.0)					灰・黒灰色	灰色

石器

擇國番号	写真 図版	石 材	種 類	残 存	法量(cm)			重量(g)	備 考
					最大長	最大幅	最大厚		
第35-1図	67	黒曜石	剥片	完形	2.6	2.6	0.8	2.96	
第35-2図	67	玉 儂	石鐵	完形	2.53	1.2	0.38	0.84	
第74-1図	73	滑 石	紡錘車	1/2以上	3.20		1.5	13.25	中央に穿孔(0.7cm)
第75-2図	73	サスカイト	石鐵	完形	2.9	2.0	0.4	2.00	
第75-3図	73	?	石鐵	一部欠損	3.25	1.9	0.4	2.23	
第75-4図	73	黒曜石	剥片	々	2.6	3.05	0.35	2.14	
第82-1図	74	サスカイト	石鐵	々	2.2	1.95	0.35	1.09	
第84-1図	74	碧玉	勾玉	1/2以上	1.3	1.7	1.4	4.00	
第88-1図	75	サスカイト	石鐵	一部欠損	1.35	1.3	0.25	0.35	
第88-2図	75	黒曜石	石鐵	々	2.4	1.4	0.3	0.80	
第88-3図	75	黒曜石	剥片	々	2.5	2.1	0.4	2.81	
第119-1図	81	黒曜石	石鐵	完形	2.7	2.8	0.4	1.24	
第122-1図	81	黒曜石	スクレイパー	一部欠損	5.1	3.8	0.7	16.65	
第122-2図	81	サスカイト	石鐵	完形	1.4	1.2	0.35	0.34	
第133-1図	83	黒曜石	石鐵	一部欠損	1.6	1.1	0.2	0.32	
第133-2図	83	黒曜石	石鐵	々	1.6	1.1	0.4	0.62	
第133-3図	83	黒曜石	石鐵	々	2.3	1.8	0.3	0.84	
第133-4図	83	サスカイト	石鐵	々	1.4	1.3	0.3	0.44	
第133-5図	83	サスカイト	石鐵	々	1.9	1.2	0.3	0.67	
第133-6図	83	サスカイト	石鐵	々	2.2	1.6	0.3	1.01	
第177-1図	85	サスカイト	石鐵	完形	1.7	1.7	0.45	1.04	
第177-2図	85	サスカイト	石鐵	ほぼ完形	3.2	1.75	0.35	1.15	

胎上 (cm)	焼成	調査 (外觀)	(内面)	備考
白色微砂粒少含	良好	回転ナデ 横カキ目	回転ナデ	外面: 波状文 2段 達し (長方形) 2個残存
1.0以下白色砂粒多含	良好	回転ナデ 平行叩き文後回転ナデ	回転ナデ	
1.0以下白色砂粒多含	良好	回転ナデ 横カキ目	回転ナデ	外面: 波状文
1.0以下白色砂粒多含	良好	平行叩き文	同心円当て具痕	
白色微砂粒少含	良好	平行叩き文後横カキ目	同心円当て具痕	
3.0以下白色砂粒少含	不良	風化が強著な為調整不明瞭	風化が強著な為調整不明瞭	
2.0以下白色砂粒極少含	良好	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	外部外面に自然輪付糸
2.0以下石英、白・灰色砂粒多含	良好	回転ナデ	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	やや含む
3.0以下石英、白色砂粒少含	良好	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ後中央不定方向仕上げナデ	底部回転糸切り
1.0以下白色砂粒極少含	良好	回転ナデ	回転ナデ	

## 窓体

## 鉄器

拂団 番号	写真 図版	法量 (cm)			重量(g)	備考
		最大長	最大幅	最大厚		
第12-1 図	62	11.3	10.1	10.0	466.46	
第12-2 図	62	12.2	9.6	6.9	502.68	
第12-3 図	62	9.7	9.5	7.7	402.91	
第12-4 図	62	9.4	9.5	7.6	346.68	
第12-5 図	62	11.5	9.2	13.9		
第12-6 図	62	7.3	9.2	3.7	189.69	
第12-7 図	62	9.7	7.1	6.3	253.65	
第12-8 図	62	8.8	8.5	6.2	326.34	
第12-9 図	62	8.9	6.5	6.7	156.41	
第12-10 図	62	6.1	7.5	4.1	118.11	
第12-11 図	62	5.6	7.9	3.9	123.68	
第12-12 図	62	5.6	7.7	5.2	128.46	
第12-13 図	62	7.5	5.7	6.7	202.65	
第12-14 図	62	8.2	8.4	5.4	291.90	
第12-15 図	62	6.4	10.7	4.4	144.77	
第12-16 図	62	8.2	7.8	5.0	196.93	
第12-17 図	62	9.1	6.4	3.7	141.11	
第12-18 図	62	3.6	5.8	2.4	92.12	

拂団 番号	写真 図版	種類	残存	法量 (cm)			重量(g)	備考
				最大長	最大幅	最小幅		
第12-11 図	83	匙	完形	14.5	2.4	—	0.15	5.57
第12-0-1 図	81	鉄砲玉	完形	4.0	4.0	—		355.17
第12-1-1 図	93	刀子	完形	11.9	1.9	1.0		16.13
第12-2-2 図	93	柳葉形 平根鑓	完形	12.70	2.8	0.3		19.68
第12-2-3 図	93	ノミ刃 平根鑓	完形	13.25	3.5	0.7		27.48
第12-2-4 図	93	長頸鑓	一部欠損	10.9	1.25	0.7		11.93
第12-2-5 図	93	長頸鑓	完形	12.9	1.2	0.7		14.94
第12-2-6 図	93	長頸鑓	一部欠損	11.9	1.1	0.4		12.28
第12-2-7 図	93	長頸鑓	一部欠損	14.0	1.05	0.3		13.05
第12-2-8 図	93	長頸鑓	完形	13.05	1.3	0.5		12.10
第12-2-8 図	93	長頸鑓	一部欠損	10.8	1.1	0.7		8.88
第12-2-9 図	93	長頸鑓	完形	18.4	1.2	0.2		29.05
第12-2-9 図	93	長頸鑓	完形	13.85	1.3	0.3		212-9 と溶着

持國國版	年號	錢名	初鑄年代 (年分)	遺存狀況	規 模 (mm)				重 量 (g)	備 考	
					錢徑(A)	錢徑(B)	內徑(C)	內徑(D)			
第191-1 四	89	天祐通寶	1017 聖天祐元	完形	25.0	25.0	6.3	6.4	1.1	3.23	渡來錢(北宋錢)
第191-2 四	89	熙寧通寶	1068 聖熙寧元	完形	24.1	24.2	6.4	6.2	1.0	3.27	渡來錢(北宋錢)
第191-3 四	89	元豐通寶	1078 聖元豐元	完形	24.2	24.1	6.6	6.7	1.0	2.34	渡來錢(北宋錢)、行書
第191-4 四	89	元豐通寶	1078 聖元豐元	完形	24.2	24.1	6.5	6.1	1.0	3.33	渡來錢(北宋錢)、篆書
第191-5 五	89	紹聖通寶	1094 聖紹聖元	1/3欠損	—	23.4	—	6.3	1.1	1.65※	渡來錢(北宋錢)、行書
第191-6 五	89	崇寧通寶	1094 <sup>2</sup> 聖崇寧元	完形	23.4	23.4	6.8	6.6	1.1	3.03	渡來錢(北宋錢)、字が歪 れていて種類しらい
第191-7 四	89	寬永通寶(古)	1639 寛永13	完形	24.6	24.4	5.8	5.8	0.9	2.97	
第191-8 四	89	寬永通寶(古)	1639 寛永13	完形	25.2	25.2	6.2	6.0	1.0	3.30	
第191-9 四	89	寬永通寶(古)	1639 寛永13	完形	25.0	25.0	6.5	6.2	1.1	3.43	
第191-10 四	89	寬永通寶(古)	1639 寛永13	完形	24.5	24.4	5.9	5.8	1.1	3.49	
第191-11 四	89	寬永通寶(古)	1639 寛永13	一部欠損率	23.7	23.5※	6.2	6.0	0.9	1.83※	
第191-12 四	89	寬永通寶(古)	1639 寛永13	完形	24.5	24.5	6.4	6.2	1.1	3.30	
第191-13 四	89	寬永通寶(古)	1639 寛永13	一部欠損率	24.6	24.2※	5.8	6.0	1.0	1.86※	
第191-14 四	89	寬永通寶(古)	1639 寛永13	完形	25.0	25.0	6.0	6.0	1.0	3.13	
第191-15 四	89	寛永通寶(古)	1639 寛永13	完形	25.0	25.0	5.5	5.6	1.0	3.21	
第191-16 四	89	寛永通寶(古)	1639 寛永13	完形	24.2	24.1	5.8	5.9	0.8	2.51	
第191-17 四	89	寛永通寶(古)	1639 寛永13	完形	24.1	23.8	5.6	5.5	1.2	3.06	
第191-18 四	89	寛永通寶(古)	1639 寛永13	完形	24.1	24.2	5.8	5.7	1.2	3.16	
第191-19 四	89	寛永通寶(古)	1639 寛永13	完形	24.7	24.6	5.9	5.5	1.1	3.15	
第191-20 四	89	寛永通寶(古)	1639 寛永13	完形	24.3	24.3	5.5	5.5	1.2	3.00	
第191-21 四	89	寛永通寶(新)	1668 寛文8	完形	25.2	25.2	6.0	6.0	1.1	3.15	背面「文」
第191-22 四	89	寛永通寶(新)	1668 寛文8	完形	25.2	25.2	6.2	6.0	1.1	3.31	背面「文」
第191-23 四	89	寛永通寶(新)	1668 寛文8	完形	25.0	25.0	5.9	5.9	1.1	3.26	背面「文」
第191-24 四	89	寛永通寶(新)	1741 寛保元	完形	21.7	21.7	5.7	6.1	1.0	2.26	背面「元」
第191-25 四	89	寛永通寶(新)	1741 寛保元	完形	22.8	22.8	6.6	6.5	0.8	1.67	背面「元」
第191-26 四	89	寛永通寶(新)	1741 寛保元	完形	24.2	21.2	6.0	6.2	1.2	3.02	背面「元」
第191-27 四	89	寛永通寶(新)	1769 明和6	完形	27.1	28.1	6.9	6.7	1.0	4.29	背面「波狀文11、4文哉
第191-28 四	89	寛永通寶(新)	1769 明和6	完形	28.5	28.2	6.5	6.8	1.2	5.01	背面「波狀文11、4文哉
第192-29 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.5	23.5	6.8	6.5	1.0	2.57	
第192-30 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.8	23.8	6.4	6.5	1.5	3.35	
第192-31 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	一部欠損率	23.2	23.2	6.1	6.0	1.0	2.17※	
第192-32 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.6	23.6	6.2	6.2	1.3	3.15	
第192-33 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	24.4	24.6	6.2	6.6	1.0	2.96	
第192-34 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	24.4	24.5	7.0	6.9	1.0	3.06	
第192-35 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.2	23.4	6.0	6.0	0.9	2.51	
第192-36 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.0	23.0	6.2	6.2	0.8	1.90	
第192-37 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.1	23.1	6.1	6.1	0.9	2.00	
第192-38 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	22.9	22.8	5.9	5.8	1.0	2.53	
第192-39 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.0	23.0	6.0	5.9	0.9	2.73	
第192-40 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.1	23.0	6.0	6.0	1.0	2.56	
第192-41 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	24.4	24.5	5.8	5.8	1.4	3.91	
第192-42 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	24.5	24.2	6.2	6.0	1.2	3.82	
第192-43 四	90	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	24.5	24.6	6.1	6.0	1.2	3.07	

辨別國版	写真 國版	錢名	初發年代 (年分)	鑄存狀況	規 模 (mm)					重 量 (g)	備 考
					錢徑(A)	錢徑(B)	內徑(C)	外徑(D)	錢厚		
第192-44國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.4	23.2	6.2	6.2	1.0	2.62	
第192-45國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.1	23.2	6.4	6.4	1.0	2.68	
第192-46國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	24.5	24.5	6.4	6.2	1.1	3.30	
第192-47國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.1	23.1	6.8	6.8	0.8	2.06	
第192-48國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	21.5	21.8	6.0	6.1	2.2	2.21	
第192-49國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.0	23.0	6.5	6.4	1.0	2.43	
第192-50國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	22.2	22.2	6.4	6.5	1.0	2.62	
第192-51國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.0	23.2	6.2	5.9	1.1	3.24	
第192-52國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.0	23.0	6.5	6.8	0.8	2.18	
第192-53國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.2	23.2	6.0	6.2	0.9	2.26	
第192-54國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.2	23.1	6.2	6.2	1.0	2.44	
第192-55國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.0	23.0	6.0	5.8	0.8	1.92	
第192-56國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.5	23.7			1.3	3.29	
第192-57國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.7	23.6	6.1	6.1	0.9	2.24	
第192-58國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.9	23.8	6.6	6.6	1.0	2.48	
第192-59國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.2	23.1	6.1	6.0	0.9	2.61	
第192-60國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	24.7	24.7	6.2	6.2	1.6	4.70	
第192-61國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.0	23.0	6.6	6.5	1.0	2.26	
第192-62國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.2	23.2	6.3	6.6	1.1	2.96	
第192-63國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.0	23.0	6.4	6.6	1.0	2.60	
第192-64國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	22.7	22.8	6.1	6.5	0.9	2.20	
第192-65國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	24.5	24.4	5.7	5.7	1.2	3.47	
第192-66國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.3	23.3	6.2	6.0	0.7	2.37	
第192-67國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.2	23.1	6.4	6.6	1.0	2.08	
第192-68國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	一部欠損者	22.8	23.2	6.2	6.2	1.0	1.84	
第192-69國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.4	23.5	6.3	6.3	1.0	2.57	
第192-70國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	24.2	24.4	6.0	6.0	1.0	3.32	
第192-71國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	24.7	24.7	6.4	6.2	1.1	3.83	
第192-72國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	23.6	24.1	6.8	6.8	0.9	2.33	
第192-73國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	14.5	14.5	6.0	6.2	0.9	1.58	
第192-74國	90	寃水通寶(新)	1668年以降 寃文8年以降	完形	22.8	22.8	6.2	6.0	1.2	2.64	
第193-76國	91	一錢	明治10	完形	15.9	15.9	—	—	0.7	0.86	
第193-77國	91	一錢	明治10	完形	28.4	28.2	—	—	1.5	6.61	
第193-78國	91	半錢	明治14	完形	22.2	22.1	—	—	1.2	3.48	
第193-79國	91	半錢	明治17	完形	22.0	22.0	—	—	1.2	3.42	
第193-80國	91	半錢	明治18	完形	22.0	22.0	—	—	1.1	3.36	
第193-81國	91	一錢?	明治20	完形	27.8	27.8	—	—	1.2	6.84	
第193-82國	91	一錢	大正2	完形	28.0	27.8	—	—	1.7	7.02	
第193-83國	91	一錢	大正9	完形	23.1	23.0	—	—	1.4	3.73	
第193-84國	91	一錢	大正9	完形	23.1	23.1	—	—	1.4	3.69	
第193-85國	91	一錢	大正10	完形	23.1	23.0	—	—	1.4	3.71	
第193-86國	91	一錢	大正11	完形	23.0	23.0	—	—	1.3	3.65	
第193-87國	91	一錢	大正12	完形	23.0	23.0	—	—	1.4	3.70	

擇國國版	年表 國版	錢名	初鑄年代 (年号)	遺存狀況	規 模 (mm)				重 量 (g)	備 考
					錢徑(A)	錢徑(B)	內徑(C)	內徑(D)		
第193-88國	90	一錢	1922 大正12	完形	23.0	23.0	-	-	1.2	3.73
第193-89國	90	一錢	1924 大正14	完形	23.4	23.0	-	-	1.2	3.70
第193-90國	90	一錢	1935 昭和10	完形	23.0	23.0	-	-	1.2	3.73
第193-91國	90	一円	1942 昭和17	完形	17.5	17.6	-	-	1.6	0.90
第193-92國	90	一錢	1944 昭和19	完形	15.9	15.9	-	-	1.6	0.64
第193-93國	90	一錢	1944 昭和19	完形	15.3	15.4	-	-	1.7	1.31
第193-94國	90	一円	1957 昭和32	完形	20.0	20.0	-	-	1.4	0.99
第195-1國	91	寛永通寶(新)	1741 寛保元	完形	21.8	22.0	5.2	5.2	1.0	2.60
第195-2國	91	寛永通寶(新)	1741 寛保元	完形	22.0	22.0	5.8	5.6	0.9	1.84
第195-3國	91	寛永通寶(新)	1739 元文4	完形	23.1	23.1	6.4	6.5	0.9	2.58
第195-4國	91	寛永通寶(新)	1769 明和6	完形	27.8	27.9	5.5	5.9	1.2	4.09
第195-5國	91	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.2	23.6	6.6	6.9	0.9	2.23
第195-6國	91	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.1	22.9	6.5	6.1	1.0	2.48
第195-7國	91	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.2	23.2	6.0	6.2	1.1	2.99
第195-8國	91	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	22.0	22.0	6.0	5.8	1.0	2.10
第195-9國	91	寛永通寶(古)	1630 寛永13	完形	22.6	22.6	5.4	5.4	1.0	2.36
第195-10國	91	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.2	23.4	6.5	6.3	1.0	2.77
第178-1國	一	寛永通寶(新)	寛文8	完形	25.4	25.3	5.8	5.8	1.1	3.51
第178-2國	一	寛永通寶(新)	1741 寛保元	完形	22.0	22.0	6.0	5.6	0.9	1.84
第178-3國	一	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	22.5	22.8	6.2	6.4	1.0	2.38
第178-4國	一	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.5	23.8	5.8	5.8	1.0	2.67
第178-5國	一	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.2	23.2	6.2	6.2	1.0	2.39
第178-6國	一	寛永通寶(新)	1668年以降 寛文8年以降	完形	23.8	24.0	6.8	6.4	1.2	2.00

# 写 真 図 版



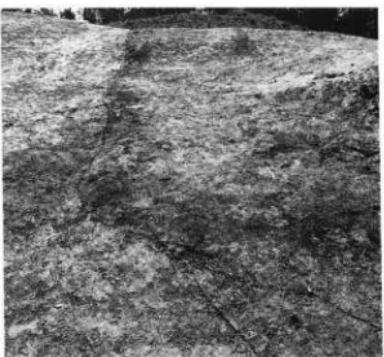
調査前全景（西側から）



調査前全景（南東側から）



1号窯検出状況



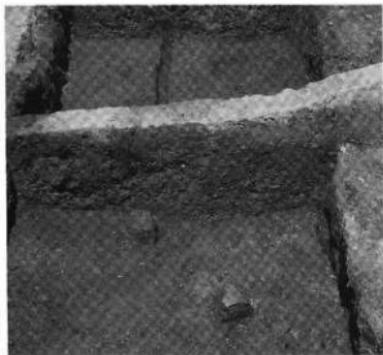
被熱帯検出状況



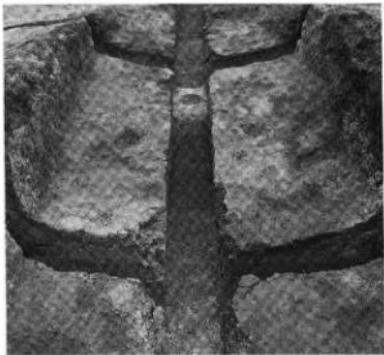
炭化構築材検出状況



還元体除去後の炭化構築材



1号窯横土層断面



杭痕検出及び断割状況